

都城市所在

ほきしま  
保木島遺跡

県道飯野松山都城線（都城志布志道路）金御岳工区道路改良工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書5

2021

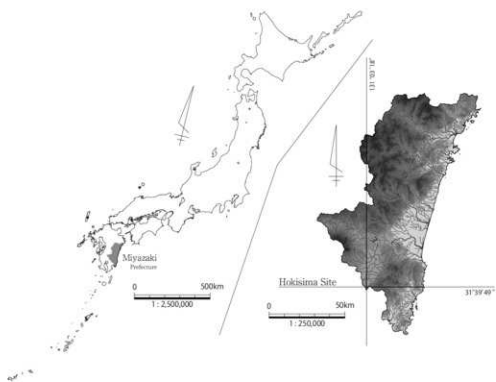
宮崎県埋蔵文化財センター

都城市所在

ほ き し ま  
保木島遺跡

hokisima Site

県道飯野松山都城線(都城志布志道路)金御岳工区道路改良工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書5



2021

## 序

宮崎県教育委員会では、地域高規格道路「都城志布志道路」の一部となる県道飯野松山都城線金御岳工区道路改良工事に伴い、平成27年度と平成29年度から平成30年度にかけて、都城市梅北町に所在する保木島遺跡の発掘調査を実施しました。本書は、その発掘調査記録を掲載した報告書です。

保木島遺跡では、縄文時代早期の竪穴建物跡や集石遺構、陥し穴状遺構などが発見されたほか、縄文時代後期～晩期の遺構や遺物、古代～中世の堀立柱建物跡や溝状遺構、道路状遺構など、複数の時代にわたる遺構や遺物の存在も確認されました。特に、都城盆地周辺では出土例の少ない特徴的な縄文時代早期の土器が出土するなど、多くの調査成果を得ることができました。

今回の調査で得られた成果は、梅北地区をはじめとする都城盆地南部の歴史を解明する上で、重要な位置を占めるものと考えられます。

また、本書や出土遺物等が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場等で活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助となることを期待してやみません。

最後になりましたが、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関、地元の方々に心より厚くお礼申し上げます。

令和3年3月

宮崎県埋蔵文化財センター  
所長 山元 高光

## 例 言

- 1 本書は、県道飯野松山都城線（都城志布志道路）金御岳工区道路改良工事に伴い宮崎県教育委員会が実施した宮崎県都城市梅北町に所在する保木鳥遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は都城土木事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり宮崎県埋蔵文化財センターが三次にわたって実施した。第一次調査は平成27年5月20日から平成27年10月7日までの81日間、第二次調査は平成29年5月8日から平成30年3月9日までの175日間、第三次調査は平成30年5月9日から8月9日までの56日間で行った。
- 3 発掘調査は、第一次調査を二方和田、徳原宏樹、第二次調査を宇和田幹彦、松浦朋彦、永山鏡太郎、第三次調査を宇和田、今塩屋毅行、永山が担当した。現地調査における図面作成及び写真撮影は調査担当者が分担して行った。
- 4 調査に際しては、世界測地系に準拠した10mグリッドを設定した。この座標グリッドにアルファベットと整数で名称を与え、この区画を基準として遺構等の図化作業を行った。また、本書中の座標値についても世界測地系に準拠した。
- 5 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行い、本書に係わる業務については、宇和田が整理作業員の補助を得て行った。
- 6 グリッド杭設置に伴う測量業務については株式会社都城技建コンサルタント、空中写真撮影は有限会社スカイサーベイ九州、自然科学分析は株式会社古環境研究センター、石器実測は株式会社九州文化財研究所・株式会社島田組にそれぞれ委託した。
- 7 本書で使用した第2図「保木鳥遺跡周辺の主要な遺跡・史跡分布図」は、国土地理院発行の電子地形図2万5000分の1『都城』『末吉』をもとに作成した。
- 8 本書で使用した土層断面及び遺物の色調等は、農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財団法人日本色彩研究所監修『新版 標準土色帖』を参考にした。
- 9 本書中の図面の方位は、座標北（G.N.）を示している。標高は海抜絶対高である。また、全体図で使用した座標は世界測地系に準拠している。
- 10 本書の執筆と編集は、基本的には宇和田がこれを行い今塩屋の補助を得たが、第三章第3節と第五章は宇和田と今塩屋による共同、第四章第3節は赤崎広志が執筆したものである。なお、第四章第1・2節の記載内容は古環境研究センターによる委託成果品の内容を宇和田が整理・編集したものである。
- 11 本書にて掲載されている遺物写真は、竹田享志の協力のもと宇和田が撮影したものである。
- 12 石材の分類は赤崎広志、石器の分類は日高広人、陶磁器の分類等は谷口晴子の監修のもと、宇和田が行った。
- 13 出土遺物・実測図・その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。
- 14 本書で使用した遺構略記号は以下のとおりである。  
SA：竪穴建物跡      SB：掘立柱建物跡      SC：土坑      SE：溝状遺構  
SG：道路状遺構      SH：単独の小穴      SI：集石遺構



# 本文目次

第I章 はじめに	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 発掘調査の方法と経過	2
第4節 整理作業及び報告書作成	3
第II章 遺跡の立地と環境	
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第III章 調査の成果	
第1節 基本層序	8
第2節 霧島御池軽石層上位(Ⅱ～Ⅵ層)の調査	12
1 古代～中世の遺構と出土遺物(Ⅱ～Ⅳ層)	12
2 縄文時代後期～晩期の遺構と出土遺物(Ⅳ・Ⅴ層)	23
3 縄文時代中期～後期の遺構(Ⅵ層)	31
4 その他の遺物	32
第3節 鬼界アカホヤ火山灰層下位(Ⅺ～Ⅼ層)の調査	33
1 縄文時代早期の遺構と出土遺物(Ⅺ～Ⅼ層)	33
第IV章 自然科学分析の結果	
第1節 放射性炭素年代測定	129
第2節 樹種同定	129
第3節 蛍光X線分析	132
第V章 総括	
第1節 縄文時代早期の遺構と遺物	135
第2節 縄文時代中期～後期の遺構	138
第3節 縄文時代後期～晩期の遺構と遺物	138
第4節 古代～中世の遺構と遺物	140
第5節 結語	140

## 挿 図 目 次

第1図 調査区及びグリッド配置図	3	第32図 12号土坑出土遺物実測図	45
第2図 保木島遺跡周辺の主要な遺跡・史跡分布図	7	第33図 縄文時代早期土器分布図	47
第3図 保木島遺跡周辺地形図	9	第34図 縄文時代早期土器実測図(1)	59
第4図 遺物包含層の残存状況	9	第35図 縄文時代早期土器実測図(2)	60
第5図 土層断面図(1)	10	第36図 縄文時代早期土器実測図(3)	61
第6図 土層断面図(2)	11	第37図 縄文時代早期土器実測図(4)	62
第7図 古代～中世遺構分布図	13	第38図 縄文時代早期土器実測図(5)	63
第8図 1・2号掘立柱建物跡実測図	15	第39図 縄文時代早期土器実測図(6)	64
第9図 3・4号掘立柱建物跡実測図	16	第40図 縄文時代早期土器実測図(7)	65
第10図 1・2号土坑実測図	17	第41図 縄文時代早期土器実測図(8)	66
第11図 3・14～18号土坑実測図	18	第42図 縄文時代早期土器実測図(9)	67
第12図 溝状・道路状遺構分布図及び 1号溝状遺構実測図	20	第43図 縄文時代早期土器実測図(10)	68
第13図 古代～中世出土遺物実測図	22	第44図 縄文時代早期土器実測図(11)	69
第14図 縄文時代後期～晩期遺構分布図	25	第45図 縄文時代早期土器実測図(12)	70
第15図 4号土坑実測図	25	第46図 縄文時代早期土器実測図(13)	71
第16図 縄文時代後期～晩期土器実測図(1)	26	第47図 縄文時代早期土器実測図(14)	72
第17図 縄文時代後期～晩期土器実測図(2)	27	第48図 縄文時代早期土器実測図(15)	73
第18図 縄文時代後期～晩期土器実測図(3)	28	第49図 縄文時代早期土器実測図(16)	74
第19図 縄文時代後期～晩期土器・土製品実測図	29	第50図 縄文時代早期土器実測図(17)	75
第20図 縄文時代後期～晩期石器実測図	30	第51図 縄文時代早期土器実測図(18)	76
第21図 縄文時代中期～後期遺構分布図	31	第52図 縄文時代早期土器実測図(19)	77
第22図 5号土坑実測図	32	第53図 縄文時代早期土器実測図(20)	78
第23図 その他の遺物実測図	32	第54図 縄文時代早期土器実測図(21)	79
第24図 縄文時代早期遺構分布図	35	第55図 縄文時代早期土器実測図(22)	80
第25図 1号竪穴建物跡実測図	36	第56図 縄文時代早期土器実測図(23)	81
第26図 1号竪穴建物跡出土遺物実測図	37	第57図 縄文時代早期土器実測図(24)	82
第27図 1～6号集石遺構実測図	40	第58図 縄文時代早期土器実測図(25)	83
第28図 7～9号集石遺構実測図	41	第59図 縄文時代早期土器実測図(26)	84
第29図 10～12号集石遺構及び8～10号土坑実測図	42	第60図 縄文時代早期土器実測図(27)	85
		第61図 縄文時代早期土器実測図(28)	86
		第62図 縄文時代早期土器実測図(29)	87
第30図 11～13・7号土坑実測図	43	第63図 縄文時代早期土器実測図(30)	88
第31図 4・5・9・10号集石遺構及び 8・10・11号土坑出土遺物実測図	44	第64図 縄文時代早期土器実測図(31)	89
		第65図 縄文時代早期土器実測図(32)	90

第66図	縄文時代早期土器実測図 (33) .....	91
第67図	縄文時代早期土器実測図 (34) .....	92
第68図	縄文時代早期土器実測図 (35) .....	93
第69図	縄文時代早期土器実測図 (36) .....	94
第70図	縄文時代早期土器実測図 (37) .....	95
第71図	縄文時代早期土器実測図 (38) .....	96
第72図	縄文時代早期土器実測図 (39) .....	97
第73図	縄文時代早期土器・土製品実測図 .....	98
第74図	縄文時代早期石器分布図 .....	101
第75図	ガラス質安山岩分布図 .....	102
第76図	黒曜石(腰岳産・針尾島産)分布図 .....	103
第77図	縄文時代早期石器実測図 (1) .....	105
第78図	縄文時代早期石器実測図 (2) .....	106
第79図	縄文時代早期石器実測図 (3) .....	107
第80図	縄文時代早期石器実測図 (4) .....	108
第81図	縄文時代早期石器実測図 (5) .....	109
第82図	縄文時代早期石器実測図 (6) .....	110
第83図	縄文時代早期石器実測図 (7) .....	111
第84図	縄文時代早期石器実測図 (8) .....	112
第85図	縄文時代早期石器実測図 (9) .....	113
第86図	縄文時代早期石器実測図 (10) .....	114
第87図	縄文時代早期石器実測図 (11) .....	115
第88図	暦年校正結果 (1) .....	130
第89図	暦年校正結果 (2) .....	131
第90図	保木島遺跡の炭化材断面 .....	131
第91図	ガラス質安山岩のSr・Rb分率の散布図 .....	134
第92図	保木島遺跡出土土器の変遷 (第V類土器を中心に) .....	139

## 表 目 次

第1表	調査回数ごとの経過(抄) .....	4
第2表	層位と土器分類との関係 .....	46
第3表	縄文時代早期石器組成表 .....	115
第4表	土器観察表(1) .....	116
第5表	土器観察表(2) .....	117
第6表	土器観察表(3) .....	118
第7表	土器観察表(4) .....	119
第8表	土器観察表(5) .....	120
第9表	土器観察表(6) .....	121
第10表	土器観察表(7) .....	122
第11表	土器観察表(8) .....	123
第12表	土器観察表(9) .....	124
第13表	土器観察表(10) .....	125
第14表	磁器観察表 .....	125
第15表	土製品計測表(1) .....	126
第16表	土製品計測表(2) .....	126
第17表	金属器計測表 .....	126
第18表	石器計測表(1) .....	126
第19表	石器計測表(2) .....	127
第20表	石器計測表(3) .....	128
第21表	放射性炭素年代測定結果 .....	130
第22表	炭化材の樹種同定結果 .....	131
第23表	成分分析の比較 .....	132
第24表	ガラス質安山岩の成分分析結果 .....	133

## 図 版 目 次

<p>図版 1 ..... 143 保木島遺跡より霧島山を望む</p> <p>図版 2 ..... 144 保木島遺跡より金御岳を望む 保木島遺跡より板島を望む</p> <p>図版 3 ..... 145 霧島御池軽石層上位の調査 1号溝状遺構発掘状況 1号土坑発掘状況 2号掘立柱建物跡発掘状況 5号土坑（陥し穴状遺構）発掘状況 遺物出土状況</p> <p>図版 4 ..... 146 鬼界アカホヤ火山灰層下位の調査 1号竪穴建物跡・12・13号土坑発掘状況 1号竪穴建物跡検出状況 1号竪穴建物跡焼土断面 3号集石遺構検出状況 4号集石遺構検出状況</p> <p>図版 5 ..... 147 8・9号集石遺構検出状況 12号土坑発掘状況 7号土坑（陥し穴状遺構）土層堆積断面 7号土坑（陥し穴状遺構）南側土層堆積状況 7号土坑（陥し穴状遺構）発掘状況 遺物出土状況 作業風景</p>	<p>図版 6 ..... 148 古代～中世の遺物 縄文時代晩期の土器（1） 縄文時代晩期の土器（2） 縄文時代後期の土器</p> <p>図版 7 ..... 149 縄文時代早期の土器（1）～（7）</p> <p>図版 8 ..... 150 縄文時代早期の土器（8）～（15）</p> <p>図版 9 ..... 151 縄文時代早期の土器（16）～（21）</p> <p>図版 10 ..... 152 縄文時代早期の土器（22）～（27）</p> <p>図版 11 ..... 153 縄文時代早期の土器（28）～（31） 縄文時代早期の土器外面の赤色顔料 縄文時代早期の土器底部外面の白色物質 土製耳飾（耳栓）</p> <p>図版 12 ..... 154 縄文時代早期の石器（1）～（5）</p>
---	---

## 第I章 はじめに

### 第1節 調査に至る経緯

都城志布志道路は、宮崎県都城市を起点に鹿児島県曾於市を經由して志布志市に至る、総延長約44kmの自動車専用道路である。九州縦貫自動車道宮崎線と中核国際港湾志布志湾及び東九州自動車道を結ぶ路線であり、平成6年12月に計画路線に指定された。この道路が整備されることで、防災対策・経済対策・医療対策としての機能強化が図られることが期待されている。

都城志布志道路のうち、宮崎県側では約22kmが工事施工区間であり、その路線構成は都城IC－五十町IC間（約13.4km）が一般国道10号都城道路（国土交通省事業）、五十町IC－県境（約8.5km）が県道12号都城東環状線および県道109号飯野松山都城線のバイパス（県事業）である。

当該路線内の埋蔵文化財については、25遺跡393,700㎡の存在が把握されており、平成9年度以降宮崎県教育庁文化財課による試掘・確認調査の結果をもとに、工事計画と遺跡の保護に関する協議調整が重ねられている。

今回発掘調査を実施した保木島遺跡は、金御岳IC－県境区間（金御岳工区）内に位置する。同工区では計5箇所の遺跡が把握されており、この他、嫁坂遺跡（平成28～29年度）、上高遺跡（平成29～30年度）、大浦遺跡（平成30年度）、小迫遺跡（平成30年度）の発掘調査が実施済みである。

保木島遺跡では平成26年度実施の確認調査結果をもとに、遺跡の取り扱に関する協議を進めた結果、遺構や遺物の存在する範囲、約12,100㎡については、現状保存が困難であることから、やむを得ず記録保存の措置を講ずることになった。これを受けて、平成27年4月、県道飯野松山都城線（金御岳工区）地域連携推進事業の一環として県都城土木事務所より発掘調査の依頼がなされ、平成27年5月、県埋蔵文化財センターを調査機関とする発掘調査の着手へと至ったものである。

### 第2節 調査の組織

保木島遺跡の発掘調査・整理事業および報告書作成に伴う体制は次の通りである。

調査主体：宮崎県教育委員会

事業調整：宮崎県教育庁文化財課

埋蔵文化財担当リーダー（主幹） 飯田 博之（平成27～令和2年度）

埋蔵文化財担当主査 松本 茂（平成27～30年度）

藤木 聡（平成31年度）

甲斐 貴充（令和2年度）

発掘調査・整理事業及び報告書作成：宮崎県埋蔵文化財センター

（平成27年度 第1次発掘調査）

所長 岩切 隆志 副所長兼調査課長 菅付 和樹 総務課長 上谷 政隆  
総務課総務担当リーダー 安藤 忠洋 調査課調査第一担当リーダー 松林 豊樹  
調査課第一担当主査 二方 和也（調査担当） 第二担当主査 徳原 宏樹（調査担当）

（平成29年度 第2次調査）

所長 菅付 和樹 副所長兼総務課長 甲斐 久志 調査課長 吉本 正典

総務課総務担当リーダー 寺原真由美 調査課調査第一担当リーダー 松林 豊樹  
調査課第一担当主査 宇和田幹彦 (調査担当) 第二担当主査 松浦 朋彦 (調査担当)  
調査課埋蔵文化財調査員 永山鏡太郎 (調査担当)

(平成30年度 第3次調査)

所長 長峯 勝志 副所長兼総務課長 田中 礼子 調査課長 吉本 正典  
総務課総務担当リーダー 寺原真由美 調査課調査第一担当リーダー 松林 豊樹  
調査課第一担当主査 宇和田幹彦 (調査担当) 同主査 今塩屋毅行 (調査担当)  
調査課埋蔵文化財調査員 永山鏡太郎 (調査担当)

(平成31年度 整理作業)

所長 山元 高光 副所長兼総務課長 内野真由美 調査課長 赤崎 広志  
総務課総務担当リーダー 寺原真由美 調査課調査第一担当リーダー 和田 理啓  
調査課第一担当主査 宇和田幹彦 (整理担当) 同主査 今塩屋毅行 (整理担当)

(令和2年度 整理作業・報告書作成)

所長 山元 高光 副所長兼調査課長 赤崎 広志 総務課長 鈴木 勝代  
総務課総務担当リーダー 阿波野ゆかり 調査課調査第一担当リーダー 和田 理啓  
調査課第一担当主査 宇和田幹彦 (整理作業・報告書作成担当)  
同主査 今塩屋毅行 (整理作業・報告書作成担当)

## 第3節 発掘調査の方法と経過

### 1 発掘調査の方法

#### 調査区の設定

保木鳥遺跡の発掘調査は、道路建設工事と現地調査計画の兼ね合いから平成27年度から30年度にかけて3回に分けて実施した(第1次～第3次調査)。第1次調査は、ボックスカルバート建設地を対象とし、作付け中の畑地や排土置き場等の関係で調査区を南北に2分(A・B区)して進めた。第2次調査は、各調査区間にある市道部分にも遺構や遺物の存在が把握されたため、4箇所の調査区(A～D区)を設定し、第3次調査は、それを拡張(C区)、追加(E区)する形で調査区を設定した。

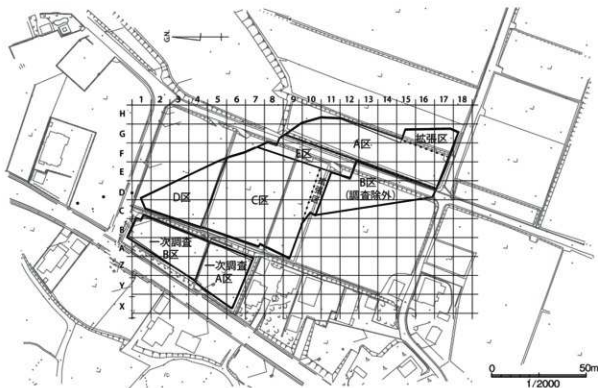
なお、2次調査のB区においては、大規模な削平・天地返しを確認されたため、調査除外とした。

#### グリッドの設定

発掘調査対象地全体に対して、国土座標(世界地系)に基づいた10m×10mのグリッドを設定し、南北方向のグリッド線に数字、東西方向のグリッド線にアルファベットを付与して、グリッドの北西隅の交点を各々のグリッド名とした。先述のように、道路建設工事と発掘調査の工程上、現地調査は調査対象地を1次調査と2～3次調査に分割して実施したが、調査回数ごとにグリッドを設定すると遺物の出土位置などに混乱をきたす恐れがあることから第1図のようなグリッドを設定した。

#### 遺構の掘削

遺構の掘削については、検出状況から個別に任意の主軸を設定し、半截もしくは4分法により埋土の状況を確認しながら掘削することを基本とした。竪穴建物跡や土坑、溝状遺構は先行トレンチを掘削し、床面の認定や埋土の堆積状況を確認したうえで掘削を進めるものもあった。



第1図 調査区及びグリッド配置図

#### 作図記録

遺構配置図や等高線および土坑平面図などについては、(株)CUBIC製の「遺構くん」を用いた三次元測量による作図と記録を行ったが、竪穴建物跡や集石遺構の平面図や断面図については、縮尺1/10もしくは1/20での個別図作成を基本とし、調査員が実測と記録を進めた。

#### 写真記録

全調査区ともに、35mm白黒ネガ・リバーサルフィルムを基本として、一部中判カメラによる白黒ネガ・カラーリバーサルフィルム撮影を行った。また、メモ記録として、デジタルカメラを併用した。また、各調査区のⅦ層、Ⅻ及びⅩⅢ層の垂直写真などは業者委託による空中写真撮影を行った。

## 2 発掘調査の経過

第1次調査は、1,200㎡を対象に平成27年5月20日～平成27年10月7日まで実施した。第2次調査は、10,300㎡を対象に平成29年5月8日～平成30年3月9日まで実施した。第3次調査は、調査区間の市道下を中心とする600㎡を対象に平成30年5月9日～平成30年8月9日まで実施した。

これら発掘調査の概要については別表のとおりである(第1表)。なお、本報告書では、区ごとではなく調査区全体の調査成果として報告する。

## 第4節 整理作業及び報告書作成

出土品及び記録物を宮崎県埋蔵文化財センターへ持ち帰り、整理作業および報告書作成などを平成30年度～令和2年度にかけて実施した。このほか業務委託として、石器の実測と炭化樹種同定・放射性炭素年代測定分析等を行った。

なお、平成30年9月2日の遺跡発掘速報会(於宮崎県立図書館)にて調査報告を行った。

第1表 調査回数ごとの経過(抄)

## 第1次調査 A区

H27.5.22～25	重機による表土除去
6.12～7.3	遺物包含層(Ⅳ・Ⅴ層)掘削
7.7～7.9	遺構検出・掘削及び実測
7.10～14	重機による掘削(Ⅶ～Ⅹ層除去)
7.15～23	遺物包含層(Ⅺ～Ⅻ層)掘削
7.24～29	遺構(縄文早期)を検出・掘削及び実測
7.28～8.2	トレンチ掘削(下層確認)
8.4	空中写真撮影
8.6	埋め戻し、調査終了

## 第1次調査 B区

H27.8.7～17	重機による表土除去
8.12～27	遺構検出・掘削及び実測(古代～中世)
8.27～9・4	遺物包含層掘削(Ⅳ・Ⅴ層)
8.18～9.9	遺構検出・掘削及び実測(縄文後～晩期)
9.10～11	重機による掘削(Ⅶ～Ⅹ層除去)
9.14～15	遺物包含層(Ⅺ～Ⅻ層)掘削
9.17～18	トレンチ掘削(下層確認)
9.25	空中写真撮影
10.1～7	埋め戻し、第1次調査終了

## 第2次調査 A区

H29.5.18～24	重機による表土除去
H6.16～8.21	遺構検出・掘削及び実測(古代～中世)
6.19～8.18	遺物包含層(Ⅳ・Ⅴ層)掘削
8.8～25	遺構検出・掘削及び実測(縄文後～晩期)
8.24	空中写真撮影
8.28～31	重機による掘削(Ⅶ～Ⅹ層除去)
9.5～11.29	遺物包含層(Ⅺ～Ⅻ層)掘削
9.19～11.28	遺構検出・掘削及び実測(縄文早期)
10.24	空中写真撮影
11.28～29	重機による表土除去(南東側拡張区)
12.5～12	遺構検出・掘削及び実測(縄文後～晩期)
12.7	空中写真撮影
12.13～15	重機による掘削(Ⅶ～Ⅹ層除去)
H30.2.7～3.2	遺物包含層(Ⅺ～Ⅻ層)掘削
2.27	空中写真撮影
3.6～7	埋め戻し、調査終了

## 第2・3次調査 C区

H29.11.21～28	重機による表土除去
12.4～12	遺構検出・掘削及び実測(縄文後～晩期)
12.7	空中写真撮影
12.13～15	重機による掘削(Ⅶ～Ⅹ層除去)(西側)
12.20～25	遺物包含層(Ⅺ～Ⅻ層)掘削
H30.1.24～2.7	遺構検出・掘削及び実測(縄文早期)
2.6	空中写真撮影
2.8～9	重機による掘削(Ⅶ～Ⅹ層除去)(東側)
2.14～3.1	遺物包含層(Ⅺ～Ⅻ層)掘削
2.14～3.7	遺構検出・掘削及び実測(縄文早期)
2.27	空中写真撮影
3.6～3.9	埋め戻し、第2次調査終了
5.9	表土除去(第3次調査)(南東側拡張区)
5.10～14	遺構検出・掘削及び実測(縄文後～晩期)
5.15	空中写真撮影
5.17	重機による掘削(Ⅶ～Ⅹ層除去)
5.18～5.30	遺物包含層(Ⅺ～Ⅻ層)掘削
5.25～6.26	遺構検出・掘削及び実測(縄文早期)
6.13	空中写真撮影
8.1～2	埋め戻し、調査終了

## 第2次調査 B区 調査除外

## 第2次調査 D区

H29.5.29～31	重機による表土除去
6.19～7.14	遺物包含層(Ⅱ・Ⅲ層)掘削、遺構検出・掘削及び実測(古代～中世)
6.19～8.8	遺物包含層(Ⅳ・Ⅴ層)掘削
8.9～23	遺構検出・掘削及び実測(縄文後～晩期)
8.24	空中写真撮影
8.29	重機による掘削(Ⅶ～Ⅹ層除去)
8.31～11.2	遺物包含層(Ⅺ～Ⅻ層)掘削
11.2～7	トレンチ掘削(下層確認)
10.24	空中写真撮影
11.16～20	埋め戻し、調査終了

## 第3次調査 E区

H30.6.6	重機による表土除去
6.7～6.14	遺構検出・掘削及び実測(古代～中世)
6.13	空中写真撮影
6.21～23	重機による掘削(Ⅶ～Ⅹ層除去)
6.27～8.6	遺物包含層(Ⅺ～Ⅻ層)掘削
6.27～8.9	遺構検出・掘削及び実測(縄文早期)
8.9	第3次調査終了



## 第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

### 第1節 地理的環境

都城市は、宮崎県南西部の都城盆地の中央部に位置し、面積は約650km<sup>2</sup>である。宮崎市、日南市、串間市、三股町、高原町、鹿児島県曾於市・霧島市の5市2町に隣接している。人口は約17万人で県内第2の都市である。都城盆地は、南東部の鱈塚山系、北西部の霧島山系に囲まれ、南北約33km、東西約13km、面積約760km<sup>2</sup>、北東から南西を長軸にした楕円形をなしている。周辺には、多くの火山が存在し、年代指標となる広域テフラとして、桜島3(文明)軽石(SZ-3、AD1471年)、霧島御池軽石(Kr-M、約4,600年前)、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah、約7,300年前)、桜島11テフラ(Sz-11、約8,000年前)、桜島薩摩テフラ(Sz-S、約12,800年前)などの堆積層などが確認できる。

今回調査の対象となった保木島遺跡は、都城市の中心部から南に約8kmの梅北町に位置し、都城市の南東部にある金御岳(標高472m)から派生する丘陵裾部に形成されたシラス台地上位面に立地する。

### 第2節 歴史的環境

#### 旧石器時代

保木島遺跡が所在する都城盆地一帯では、シラスをはじめとする火砕流や火山灰堆積が厚いことから、存在が確認されている遺跡数は少ない。本遺跡周辺では、小迫遺跡において細石刃石器群の存在が確認されている。また、大年遺跡や中床丸遺跡においては桜島薩摩テフラ下位より剥片が出土している。

#### 縄文時代

草創期の遺跡としては、竪穴状遺構・炉穴・集石遺構等や隆帯土器が検出された王子原遺跡がある。また、軍人原遺跡では、県内最古級の土器片と細石刃が出土している。本遺跡周辺には、隆帯土器が出土した川原谷出水遺跡や小迫遺跡、桜島薩摩テフラを含む層の下部から集石遺構が検出された笹ヶ崎遺跡もある。

早期の遺跡としては、笹ヶ崎遺跡、中床丸遺跡、高樋遺跡、嫁坂遺跡、上高遺跡において集石遺構等、小迫遺跡では竪穴建物跡等が検出されている。こうした遺跡では貝殻文円筒形土器や押型土器の他、塞ノ神式土器なども出土している。押型土器に後続する手向山式土器や妙見式土器等の出土事例は少ない。

前期は、鬼界アカホヤ火山灰による影響のためか、遺跡数は少なくなる。加治屋A遺跡では陥し穴遺構が検出されており、王子原遺跡で轟B式と曾畑式、笹ヶ崎遺跡で曾畑式土器が出土している。

中期も前期同様に遺跡数は少なく、伊勢谷第1遺跡、田谷・尻杖遺跡にて陥し穴遺構が検出されている。笹ヶ崎遺跡と高樋遺跡では深溝式土器が出土しており、高樋遺跡では集石遺構と土坑も検出された。前期から中期にかけての遺構としては、梅北佐原遺跡や上高遺跡にて陥し穴状遺構が検出されている。

後期になると遺跡の数が増加し、都城盆地全体、特に丘陵の尾根部や裾部、台地の縁辺さらには扇状地上に立地するようになる。また、竪穴建物跡や土坑といった集落そのものの様相が読みとれる発掘調査事例も多くなる。本遺跡周辺では、嫁坂遺跡にて中岳Ⅱ式土器や宮の迫式土器を伴う竪穴建物跡が検出されている。そのほか、三万田式・御領式・鳥居原式土器も遺物包含層から出土している。上高遺跡では、岩崎式・指宿式・松山式・丸尾式・中岳Ⅱ式土器等が遺物包含層から出土している。

晩期では、本遺跡周辺においては、高樋遺跡、笹ヶ崎遺跡、大年遺跡、嫁坂遺跡、上高遺跡など黒川

式土器の時期を中心とする遺跡が数多く調査されている。また、塚坂遺跡や上高遺跡では、竪穴建物跡や土坑から入佐式・黒川式土器が出土している。

#### 弥生時代

弥生時代の遺跡は、横市川流域の調査事例が多い。肱穴遺跡では、縄文時代晩期から弥生時代前期頃の刻目突帯文土器や石庖丁を伴う松菊里型竪穴建物や水田跡が検出されており、坂元A遺跡では弥生早期・中期後半・中期後半頃の水田跡が検出されている。横市川流域は、都城盆地内でも稲作文化の導入の先駆けがみられた地域であることがわかる。また、黒土遺跡では縄文時代晩期～弥生時代早期頃の擦り切り孔を有する石庖丁や靱圧痕を有する土器片などが出土している。

一方、弥生中期後半、後期後半～古墳時代初頭頃に位置づけられる集落跡の調査例も数多い。本遺跡に近い大浦遺跡では、中期後半頃の竪穴建物跡が検出されている。また、都城志布志道路関連の調査では、平田遺跡D地点・E地点にて後期頃の竪穴建物跡や周溝状遺構が検出されており、松下遺跡では弥生時代終末期～古墳時代初頭頃の竪穴建物跡や周溝状遺構などが調査されている。

#### 古墳時代

古墳時代の遺跡としては、野添遺跡、平峰遺跡、笹ヶ崎遺跡、高樋遺跡、大年遺跡では中期頃の集落跡が確認されている。野添遺跡では土坑墓が検出され、平峰遺跡では多角形建物を含む大規模な集落跡と鉄挺をはじめ多くの鍛冶関連遺物や陶質土器、仕切付角鉢などの特殊な遺物が出土している。

また、大年遺跡、高樋遺跡でも鍛冶関連遺物が多く出土しており、本遺跡の周辺地域では、古墳時代中期以降に盛んな鍛冶作業が行われたことが伺える。

#### 古代～中世

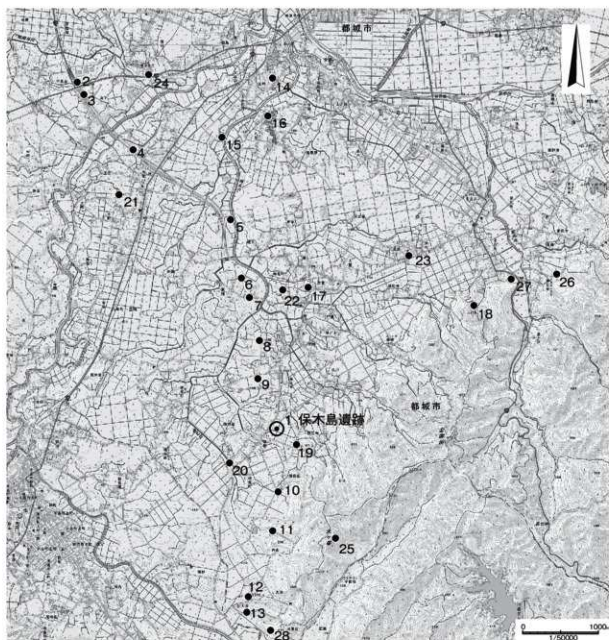
古代～中世の遺跡としては、梅北針谷遺跡では、古代を中心とする掘立柱建物跡と焼土を伴う多数の土坑が検出され、多くの鍛冶関連遺物が出土している。筆無遺跡では、溝状遺構に囲まれた掘立柱建物跡や周溝墓、土坑墓などが確認され、文明年間に降下した桜島起源の白ボラによって埋没、復旧した島跡とみられる畝間状遺構も検出されている。

筆無遺跡にて認められた同様の遺構は、大年遺跡、笹ヶ崎遺跡でも確認されており、笹ヶ崎遺跡では、掘立柱建物跡や溝状遺構とともに犬走状遺構や堀切、土塁といった遺構が検出され、防衛施設を備えた中世居館であった可能性が高い。大浦遺跡では掘立柱建物跡の他に墓塚と周溝で構成される周溝墓が検出され、副葬品と考えられる白磁碗と土師器杯の完形品が出土した。

梅北地区は、島津荘の祖とされる平季基関連の史跡などが多く分布されることも特徴の一つである。平季基は万寿3(1026)年頃に当地に下向し、三侯院の主として益貫に居住したとされている。平季基に関連する遺跡としては、梅北城跡がある。梅北川東岸の丘陵地に立地し、四つの曲輪からなる群郭式城館跡であり、城の中央部を残すのみであるが、その北側と東側には土塁が現存し、空堀もほぼ原形をとどめている。

#### 近世

中世以降の梅北地区周辺には寺院などの宗教施設が存在していたようであるが、廃仏毀釈などの影響により現存するものは少ない。発掘調査された遺跡としては、尾崎第一遺跡(貫船寺跡)において中世末から近世に及ぶ土壘墓が数多く検出されている。また、遺跡の北西には近世の道標である今町一里塚があり、国の史跡に指定されている。



国土地理院地形図

- |              |               |            |               |
|--------------|---------------|------------|---------------|
| 1 保木島遺跡      | 2 平峰遺跡        | 3 働女木遺跡    | 4 筆無遺跡        |
| 5 梅北針谷遺跡     | 6 高極遺跡        | 7 笹ヶ崎遺跡    | 8 大年遺跡        |
| 9 中床丸遺跡      | 10 嫁坂遺跡(2019) | 11 上高遺跡    | 12 大浦遺跡       |
| 13 小迫遺跡      | 14 大岩田前ノ村遺跡   | 15 大岩田上村遺跡 | 16 黒土遺跡       |
| 17 尾崎第一遺跡    | 18 王子原遺跡      | 19 梅北佐土原遺跡 | 20 嫁坂遺跡(2002) |
| 21 上針谷・下針谷遺跡 | 22 梅北城跡       | 23 梅北北原遺跡  | 24 油田遺跡       |
| 25 天ヶ峰陣跡     | 26 野添遺跡       | 27 上安久遺跡   | 28 川原谷出水遺跡    |

[1～13は都城志布志道路建設関連に伴って発掘調査を行った遺跡]

第2図 保木島遺跡周辺の主な遺跡・史跡分布図

## 第三章 調査の成果

### 第1節 基本層序

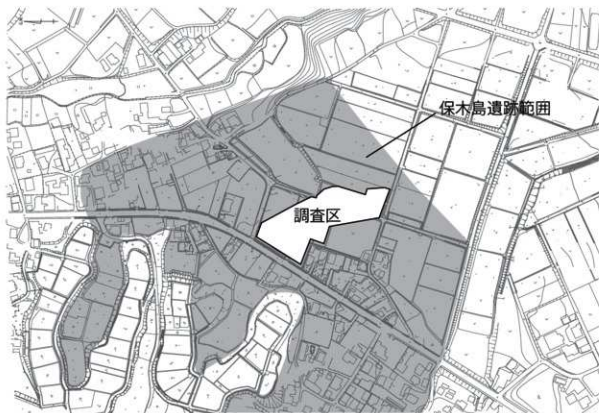
保木島遺跡の基本層序は下記に示すとおりである。調査区は、丘陵裾部に位置するため、旧地形は南東から谷部である北西へ向けて強く傾斜するため、堆積層そのものが流出している箇所がある。近年の圃場整備や市道建設等により、本来の地形はかなり改変されている（第4図）。

I層	表土(現耕作土)	
II層	黒色土(Hue10YR2/1)に桜島3(文明)軽石(SZ-3、AD1471)を30%程度含む	} 古代～中世の 遺物包含層
III層	黒褐色土(Hue10YR2/2)に黄橙色粒を1～2%程度含む	
IV層	暗褐色土(Hue10YR3/4)に黄橙色粒を1～2%程度含む	…縄文時代後～晩期・古代～中世の遺物包含層
V層	黒褐色土(Hue10YR2/3)に黄橙色粒を10%程度含む……………縄文時代後～晩期の遺物包含層	
VI層	褐色土(Hue10YR4/4)に黄橙色粒を30%程度含む	
VII層	霧島御池軽石層(Kr-M、約4,600年前)	
VIII層	褐色土(10YR4/4)に黄橙色粒を30%程度含む	
IX層	褐色土(10YR4/6)に黄橙色粒と黄褐色(10YR5/6)のブロックを含む	
X層	鬼界アカホヤ火山灰層(K-Ah、約7,300年前)	
XI層	黄褐色(10YR4/3)に霧島ウシノスネ火山灰(Kr-US)を含む	} 縄文時代早期 の遺物包含層
XII層	黒褐色土(Hue10YR2/3)に桜島11テフラ(Sz-11、約8,000年前)を含む	
XIII層	黒色土(Hue10YR2/2)	
XIV層	暗褐色土(Hue10YR3/2)に桜島薩摩テフラ(Sz-S、約12,800年前)を含む	
XV層	褐色土(Hue7.5YR4/4)	
XVI層	黒褐色土(Hue10YR2/3)	
XVII層	褐色土(Hue10YR4/4)	
XVIII層a	明黄褐色土(Hue10YR7/6)	
XVIII層b	明赤褐色土(Hue10YR5/6)	
XVIII層c	にぶい黄褐色土(Hue10YR6/3)	

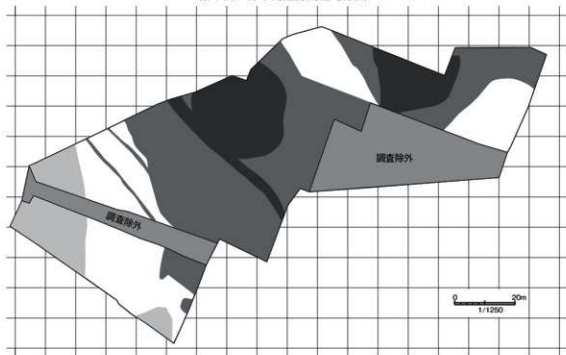
**基本層序の概要** II・III層は古代～中世、IV層は縄文時代後～晩期と古代～中世の遺物を含む包含層である。II層は最大1cm程度の桜島3(文明)軽石を含む。III層は締まりのやや弱い堆積土で少し粘性が有り、 $\phi$ 1mm程度の黄橙色を含む。層としては非常に薄い。IV層は暗褐色土に $\phi$ 1mmの黄橙色粒子を多く含む遺物包含層である。V層の締まりはやや弱く、粘性はほとんどない。 $\phi$ 1mm程度の黄橙色の粒を多く含んでいる。

VII層は霧島御池軽石層で、締まりがあり、やや粘性もある。黄橙色粒を大量に含む。IX層は、堆積状況から鬼界アカホヤ火山灰の二次堆積層と思われる。X層は鬼界アカホヤ火山灰層に相当する。XI層との境付近は $\phi$ 5mm程度の豆石が見られる。

XI～XIII層は、縄文時代早期の遺物包含層である。XI層は $\phi$ 1mm～10mmの橙色粒子を多量に含む非常に硬く締まった層である。XII層は黒褐色で $\phi$ 3mm程度の黄橙色粒と $\phi$ 2mm程度の褐色灰色粒を多く含む。固く締まるが粘性はない。XIII層は、混じりの少ない黒色土で若干粘性がある。XIV層は上部に締まりのかなり強い褐色土ブロックを多く含んでいる。



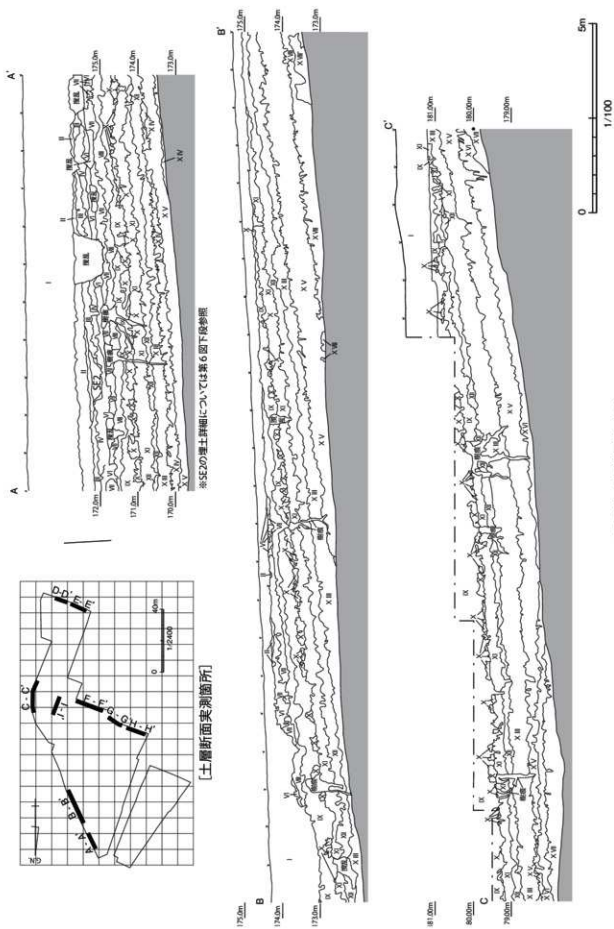
第3図 保木島遺跡周辺地形図



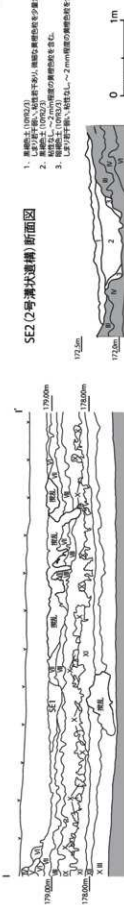
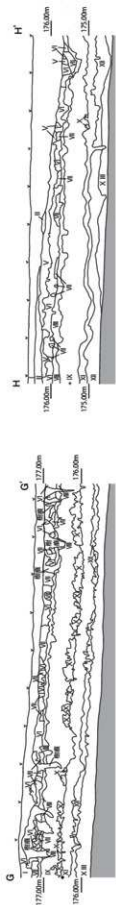
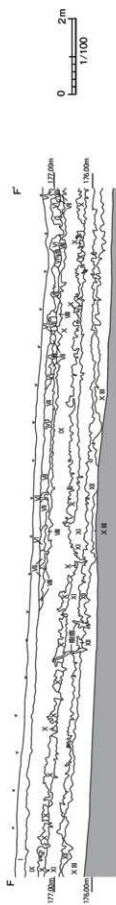
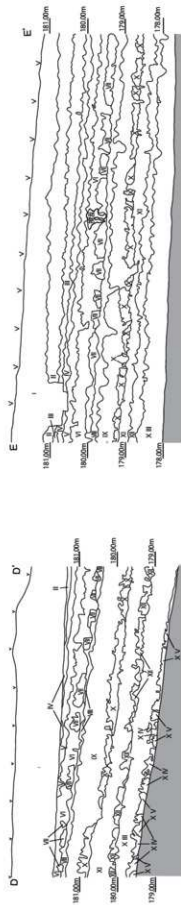
- |               |                       |             |
|---------------|-----------------------|-------------|
| II・III層まで残存   | IV層まで残存               | X層下位の包含層が残存 |
| 遺物包含層が残存していない | 調査除外（畑地造成・市道建設等による削平） |             |

※ II層以下の残存状況を示す

第4図 遺物包含層の残存状況



第5図 土層断面図 (1)



1. 調査地土 (100mE/21)  
 2. 土質の異なる地層が互いに多少重なり、境界が不明瞭な地層構造を示す。  
 3. 地層L1→210m(厚層)の境界線を示す。  
 4. 地層L2→210m(厚層)の境界線を示す。  
 5. 地層L3→210m(厚層)の境界線を示す。

SE(2号溝状遺構)断面図

第6図 土層断面図(2)

※SEの埋土の詳細については第12図参照

## 第2節 霧島御池軽石層上位（Ⅱ～Ⅵ層）の調査

保木島遺跡では、古い順から縄文時代早期・中期～後期・後期～晩期と古代～中世の遺構と遺物が検出されたが、その事実報告にあたっては、発掘調査を進めた層位順に従うものとする。

よって、本節では、霧島御池軽石層より上層で検出された遺構と遺物の調査成果を示すものである。

### 1 古代～中世の遺構と出土遺物（Ⅱ～Ⅳ層）

古代～中世の遺構として、掘立柱建物跡4棟、土坑8基、溝状遺構2条、道路状遺構2条が検出された。遺構検出面は遺物包含層（Ⅲ・Ⅳ層）とⅥ層上面である。遺物は、土師器坏・皿類をはじめ、黒色土器の壺、白磁碗などがⅡ～Ⅳ層（遺物包含層）より出土した。

#### （1）遺構

##### a) 掘立柱建物跡

Ⅲ層・Ⅳ層・Ⅵ層上面で検出された小穴群のうち、掘立柱建物跡として現地復元および図上復元したものは4棟（SB1～SB4）である。これらの掘立柱建物跡は調査区北端部にある緩斜面地の標高170.8m～172.0mの範囲内に位置し、SB1～SB3の建物主軸（桁行方向）は揃っている。掘立柱建物跡の周囲には土坑群があり、背面にあたる南側斜面にはSG1やSE2が等高線に沿った走向で位置している。

SB1～SB4はすべて隅柱建物で、柱間は2間×3間が主体である。身舎面積はSB3・SB4（約27㎡）とSB1（約24㎡）、SB2（約19㎡）と大小差がある。柱穴間の距離は、概ね2.1m±0.3mを基本とするようであるが、SB2の梁行方向の柱穴間距離は1.6mとやや狭い。

柱穴の埋土は、黒褐色土（黒色粘質土混じり）と暗褐色土（霧島御池軽石の少量混入）に大別されるが、桜島文明軽石（Sz-3）は含まない。よって掘立柱建物跡は桜島文明軽石の降下年代よりは古く、15世紀後半以前の時期が推定される。

##### 1号掘立柱建物跡（SB1、第8図）

位置 Y5・Z5グリッド（以下Gr.と表記）にて検出された。主軸方向N-78°-Eをとる。

規模等 後世の削平のため、部分的に柱穴を失うが、柱間は2間×3間と復元され、身舎面積は23.7㎡である。柱穴の配置は、柱穴距離2m前後のほぼ等間隔な配置である。

埋土 黒褐色土（黒色粘質土混じり）

遺物 柱穴のうち、SH4から土師器坏、SH6から縄文土器（後～晩期）の小片が出土した（未掲載）。

##### 2号掘立柱建物跡（SB2、第8図）

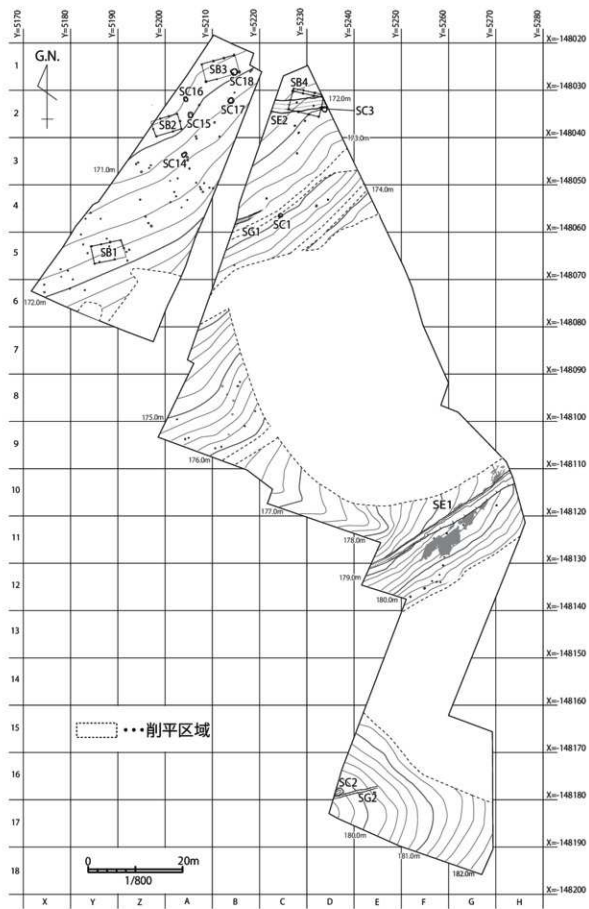
位置 Z2・A2Gr.で検出された。主軸方向はN-78°-Eであり、SB1と同一の主軸方向である。

規模等 2間×3間規模の建物跡であり、身舎面積は18.5㎡である。柱穴配置は梁桁側のSH4、SH8が梁の方向からわずかに振れており、桁行の柱間隔は約1.8m、梁行の柱間隔は約1.6mと等間隔に並ぶ。

埋土 黒褐色土（黒色粘質土混じり）

遺物 SH4から土師器坏と土師器皿の小片が出土した（未掲載）。





第7图 古代~中世遺構分布图

### 3号掘立柱建物跡 (SB3、第9図)

- 位置** A1・A2Gr.で検出された。主軸方向はN-77°-Eで、SB1・SB2とほぼ同一の主軸方向である。
- 規模等** 後世の削平により部分的に柱穴を失うが、2間×3間規模と復元され、身舎面積は27.2㎡である。残存する柱穴は、ほぼ等間隔に配置され均整が取れており、四隅にあたるSH1・SH4・SH5・SH7は他の柱穴よりも深い掘り方である。
- 埋土** 暗褐色土（霧島御池軽石の少量混入）
- 遺物** SH4から土師器坏の小片が出土した（未掲載）。

### 4号掘立柱建物跡 (SB4、第9図)

- 位置** C1・C2・D2Gr.で検出。主軸方向N-77°-W。
- 規模等** 北東部が調査区域外にかかるが、2間×3間と復元され、身舎面積は26.8㎡でSB3と同程度の規模と想定される。全体的には柱穴間距離の等しい配置になっている。SH1～SH3は、SH9～SH11との柱穴間距離が他のものと短く、他の柱穴よりもやや小さいことから庇の可能性はある。
- 埋土** 暗褐色土（霧島御池軽石の少量混入）
- 遺物** SH3から縄文土器（後～晩期）の土器の小片が出土した（未掲載）。

## b) 土坑

土坑はIV層・VI層上面で8基検出された。これらの土坑は、SC2を除いて調査区の北西側に集中する。土坑の平面プランとしては円形・楕円形がある。規模的には、長軸が1.2m±0.3mの大きさである。遺物は8基の土坑のうち4基から出土した。

### 1号土坑 (SC1、第10図)

調査区北側のC4Gr.に位置し、付近には1号道路状遺構 (SG1) がある。平面形は不整な楕円形で、長軸0.91m、短軸0.75m、検出面からの深さは0.16mである。断面形は皿状で立ち上がりは緩やかである。埋土は暗褐色土で、遺物は出土しなかった。

### 2号土坑 (SC2、第10図)

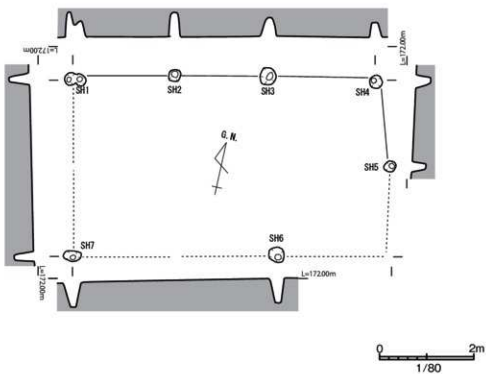
調査区南側のD16Gr.に位置し、付近には2号道路状遺構 (SG2) がある。土坑の一部は調査区域外となる。平面形は不整な楕円形と想定され、短軸0.75m、検出面からの深さは0.17mである。断面形は皿状で立ち上がりは緩やかである。埋土は黒褐色土で、遺構に伴う遺物は出土していない。

なお、埋土中より炭化物が出土しており、これをAMS法による放射性炭素年代測定を行った結果、1380±20年BPの測定値が得られた。おおよそ7世紀前葉～後葉の年代値である。

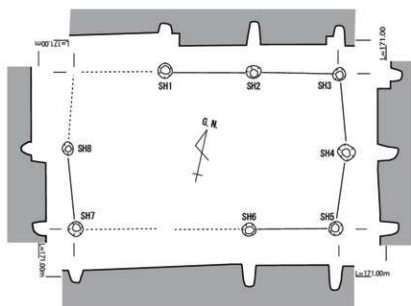
### 3号土坑 (SC3、第11図)

調査区北部のD2Gr.の2号溝状遺構 (SE2) の南辺側にあり、SB4の東側の梁行側に接する。平面形は不整な楕円形で、長軸0.91m、短軸0.75m、検出面からの深さは0.18mである。断面形は皿状で立ち上がりは緩やかである。遺物は埋土中より土師器坏の口縁部片 (10) が出土した。10は体部が直線的に外方へ開く器形をしており、推定口径は14.3cmとなる。薄黒色のススが均一に付着しているが、ミガキな

1号掘立柱建物跡(SB1)

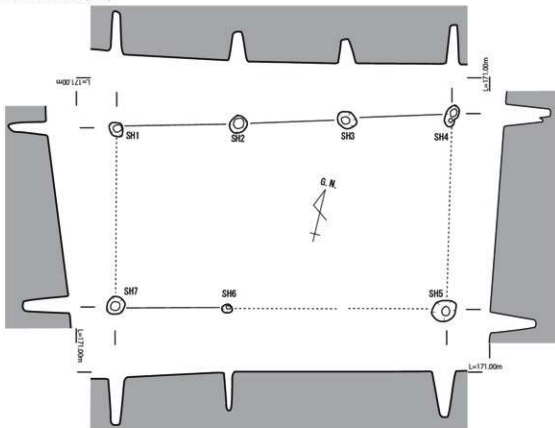


2号掘立柱建物跡(SB2)

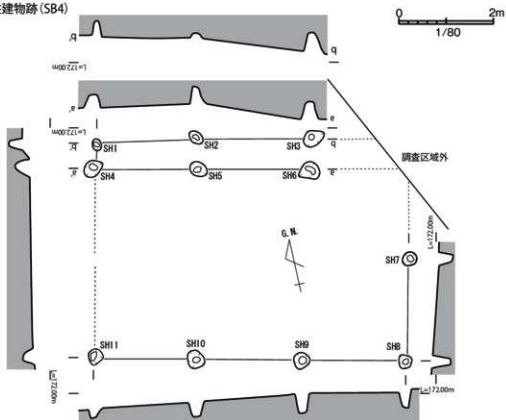


第8図 1・2号掘立柱建物跡実測図

3号掘立柱建物跡(SB3)



4号掘立柱建物跡(SB4)



第9図 第3・4号掘立柱建物跡実測図

どはみられない。そのほか、土坑埋土中からは黒色土器や縄文土器も出土したが、小片のため図化していない。

#### 14号土坑 (SC14、第11図)

調査区北側のA3Gr.に位置している。平面形は不整な楕円形で、長軸1.2m、短軸1.04m、検出面からの深さは0.4mである。断面形は逆台形状で底面に直径0.28m、深さ0.12mの小穴がある。埋土は土質や混入物の含有度の違いで3層に分かれる。

埋土中の遺物には、図化掲載した土師器坏(11)や白磁碗(19)のほか、縄文土器・土師器も出土したが小片である。11は土師器杯の口縁部で、口唇部が玉縁上に肥厚し、やや外に開く器形である。19は中国産白磁で口縁部のみが残存で、玉縁状を呈する。小さな玉縁および内湾する器形から、大宰府編年でいう「白磁碗Ⅱ-1類」(山本信夫編2000)の可能性もあるが、口縁部のみからの判断は難しい。

#### 15号土坑 (SC15、第11図)

調査区北側のA2Gr.に位置し、SB2の東側梁行方向にある。平面形は不整な楕円形で、長軸約1.04m、短軸約0.94m、検出面からの深さは0.32mである。断面形は逆台形状で立ち上がりは急である。埋土は黒色粘質土の単一層であり、埋土中から縄文土器(後～晩期)が出土したが小片のため図化していない。

#### 16号土坑 (SC16、第11図)

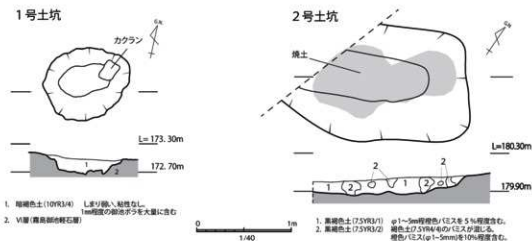
調査区北側のA2Gr.に位置し、SB2とSB3の間にある。平面形は不整な楕円形で、長軸1.02m、短軸0.82m、検出面からの深さは0.3mである。断面形は方形に近く、立ち上がりはほぼ垂直である。埋土は黒色粘質土の単一層であり、遺構に伴う遺物は出土していない。

#### 17号土坑 (SC17、第11図)

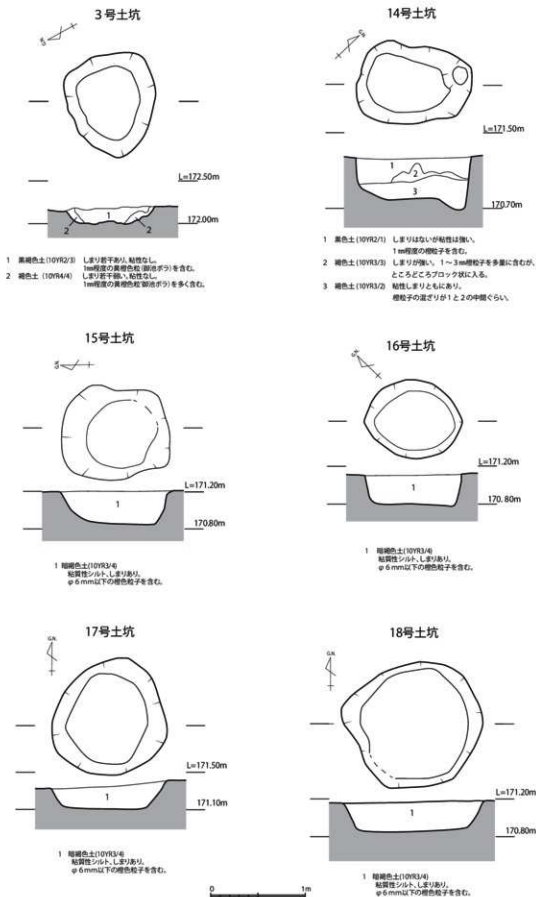
調査区北側のB2Gr.に位置している。平面形は不整な円形で、直径約1.2m、検出面からの深さは0.28mである。断面形は皿状で立ち上がりは緩やかである。埋土は黒色粘質土の単一層で、遺構に伴う遺物は出土していない。

#### 18号土坑 (SC18、第11図)

調査区北側のA2Gr.に位置し、SB3と重複する関係にある。平面形は不整な楕円形で、長軸1.46m、短軸約1.32m、検出面からの深さは0.32mである。断面形は皿状で立ち上がりは緩やかである。埋土は黒色粘質シルト土の単一層で、遺構に伴う遺物は出土していない。



第10図 1・2号土坑実測図



第11図 3・14～18号土坑実測図

### (c) 溝状遺構

調査区中央と北側において、いずれもⅢ層からの掘り込みが確認できる溝状遺構が2条検出された。

#### 1号溝状遺構 (SE1、第12図)

調査区中央に位置する溝状遺構で、Ⅲ・Ⅳ層上面で検出された。規模は全長約36m、幅約2m、底面幅は0.8～1.5m、検出面からの深さは約0.2m～0.8mである。その走向は調査区を北東から南西に斜めに横断し、調査区中程からは等高線に平行気味に緩やかに調査区外へと続いている。

遺構の断面形は、逆台形状であるが、東側はテラス状に底面から一段高く上がっている。遺構の埋土は、上層部は桜高3（文明）軽石、下層部は霧高御池軽石を含む層が幾重にも堆積している。遺構の周囲には、溝状遺構の走向に対して斜交するように、最大幅約4mで厚さ0.2m程度の硬化面の広がりが見られた（トーンにて図示）。この硬化面は、溝状遺構本体までは広がらず、土層断面でも認められなかったことから、硬化面よりも溝状遺構のほうが新しいと考えられる。この硬化面については、何らかの路面であった可能性が考えられる。

溝状遺構の埋土中より、土師器皿や縄文土器（後～晩期）が出土したが小片のため図化していない。ただし、土師器皿はヘラ切り底であり、短く立ち上がる口縁部の形態から、中世前期（12～14世紀）のものと考えられる。

#### 2号溝状遺構 (SE2、第6図)

調査区北側に位置する溝状遺構である。発掘調査工程の関係で、平面的な検出と東西側の土層断面図（第6図下段参照）作成のみを行った。規模は全長約11m、幅約2.4mで、最深部は約0.36mである。調査区の東側の高所から緩やかに西側の調査区外に延びており、等高線に対してやや斜交する。遺構の断面形は、上部は立ち上がりの弱い皿状、下部は逆台形状で底部は概して平坦である。埋土は、黄褐色粒を含む黒褐色土が大半であるが底部側面には黄褐色粒を含む暗褐色土もある。遺構に伴う遺物は確認できていない。

### (d) 道路状遺構

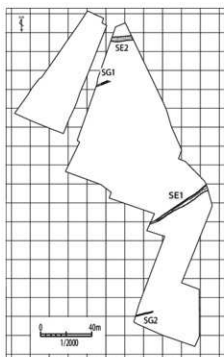
調査区北側と南側において2条検出されたが、畑地造成等による削平により残存状況は良くない。大半は調査区域外に延びるものと考えられる。検出面はいずれもⅣ層上面である。

#### 1号道路状遺構 (SG1)

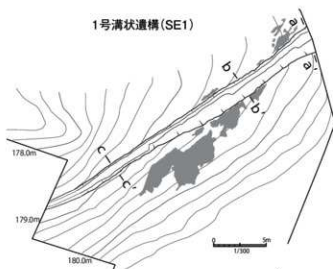
調査区北側のB4・C4Gr.に位置している。現存長約4.8m、幅約0.8mの規模で、検出面からの深さは約0.14mである。その走向は、等高線に沿うように並行に東西を横断している。遺構の断面形は、立ち上がりの緩やかな皿状に近く、底面は概して平面である。埋土は、一部赤褐色化するにふい黄褐色土と褐色土の2層で、いずれも黄褐色粒を大量に含み硬化している。なお、遺構に伴う遺物は出土していない。

#### 2号道路状遺構 (SG2)

調査区南部のD16・E16Gr.に位置している。現存長約9.0m、幅約0.56mの規模で、検出面からの深さは約0.06mと浅くっており底面部分のみ残存と考えられる。その走向は、谷地形の等高線に直交するように東西を横断しているが、東側は後世の削平で消失している。遺構の断面形は、皿状で立ち上がりは弱い。埋土は、黄褐色粒を大量に含むにふい黄褐色土の単一層である。遺構に伴う遺物は出土していない。



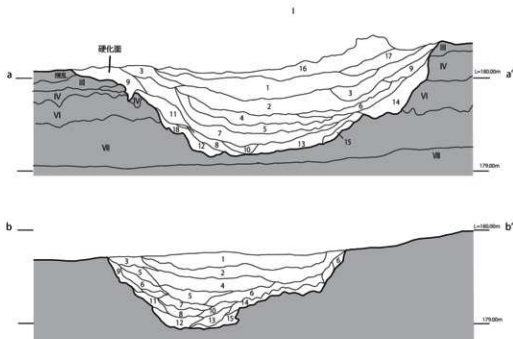
【溝状・道路状遺構分布図】



1号溝状遺構 (SE1)



1. 10YR1.7/1 (黒) しまり多し、粘性若干あり、露島御池軽石を少量含む。
2. 10YR1.7/1 (黒) しまり多し、粘性若干あり、露島御池軽石を多く含む。V字のアップが一定している。



1. 10YR4/1 (褐灰) 白ボラ粒を多く含む
2. 10YR6/5 (明黄褐) 文明的白ボラ
3. 10YR3/2 (黒褐) 白ボラ粒を少量含む
4. 10YR1.7/1 (黒) 非常にキメが細かく、ごくわずかに微細な黄褐色粒を含む
5. 10YR2/1 (黒) わずかに2mm以下の黄褐色粒を含む
6. 10YR3/2 (黒褐) 少量の2mm以下の黄褐色粒を含む
7. 10YR2/2 (黒褐) わずかに2mm以下の黄褐色粒を含む
8. 10YR2/2 (黒褐) 少量の2mm以下の黄褐色粒を含む
9. 10YR3/2 (黒褐) 少量の2mm以下の黄褐色粒を含む
10. 10YR3/1 (黒褐) わずかに2mm以下の黄褐色粒を含む
11. 10YR4/2 (灰黄褐) 多くの露島御池軽石を含む
12. 10YR4/2 (灰黄褐) 少量の露島御池軽石を含む
13. 10YR4/2 (灰黄褐) わずかに露島御池軽石を含む
14. 10YR4/2 (灰黄褐) 多くの露島御池軽石を含む
15. 10YR4/3 (にぶい黄褐) アカホヤブロックを多く含む
16. 10YR2/2 (黒褐) 白ボラ粒を含む
17. 10YR2/1 (黒) 白ボラ粒を含む
18. 10YR4/3 (にぶい黄褐)と10YR4/2 (灰黄褐)の混成土、露島御池軽石を含む



第12図 溝状・道路状遺構分布図及び1号溝状遺構実測図



## (2) 遺物

古代から中世の遺物は、遺構の他に、基本層序におけるⅡ～Ⅳ層（遺物包含層）から出土した。遺物包含層は、地形的に下がっており削平の影響を受けていない調査区北側を中心に堆積していた。

出土遺物の大半は、土師器（杯、碗、皿類）で、黒色土器碗や白磁碗が少量出土した。小破片化が顕著であるが、図化可能な23点について掲載している。

### a) 土師器（第13図）

**高台付碗（1～6）** 1～6は土師器の高台付碗である。1は体部下半を屈曲させ、ほぼ直線的に外上方に立ち上がる。口縁部付近の外面に穿孔を施した痕跡がみられるが、貫通はしていない。胎土に2mm以下の赤色粒を含む。2は底部片である。高台の高さは約1.5cmで、外方に開きハの字状を呈する。3は高台部分で表面は全体的にやや風化気味である。高さ約2cmの高台は外方に開きハの字状を呈する。内面中央部には布目の痕跡がみられる。器面の摩滅が著しいが、高台内部には放射状調整痕が認められる。

4～6は低めの高台のある坏底部片で、いわゆる研磨土師器である。4・6は内外両面、5は内面にヘラミガキが施されている。

**杯（7～13）** 7～13は土師器の坏である。10はSC3、11はSC14出土である。包含層出土遺物の7～9と12・13は底部片である。推定底径は6.2～8.8cmである。いずれもヘラ切りで、底面および底部下端のやや張り出した部分に丁寧なナデを施し、底部下端は丸味のある形状となっている。

9の胎土は橙色で2mm以下の赤色粒を含む。底部下端はわずかに張り出している。7・9は底部の形状から円盤状高台碗的である。

**皿（14～17）** 14～17は土師器の皿である。14～16はヘラ切り、17は糸切りである。15は底面がレンズ状にやや突出するタイプで、14・16・17は平坦である。15～17の推定口径は8.6～9.6cm、底径は7.2～7.6cmである。14は推定口径10.5cm、底径8.4cmと他と比較して大きい。

### b) 黒色土器（第13図）

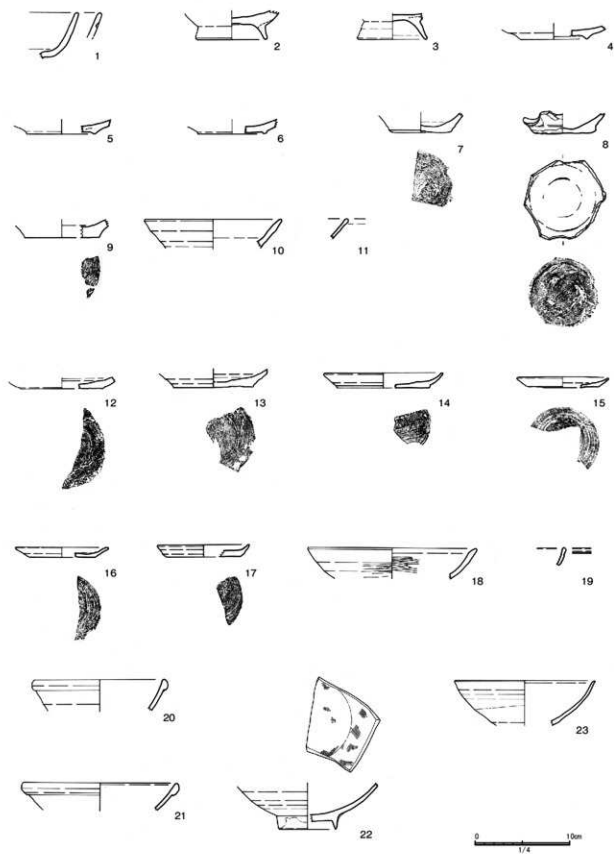
**碗 18**は黒色土器の碗である。内外面共に黒色で、横・斜方向のミガキが施されている。

### c) 白磁（第13図）

**碗 19～23**は中国産白磁の碗である。19～21は口縁部のみが残存で玉縁状を呈している。20・21はその肉厚な玉縁から大宰府編年の「白磁碗Ⅳ類」（山本2000）に該当し、11世紀後葉～12世紀代の製品と考えられる。

22は高台露胎で、内面に櫛目文が施されている。見込には沈線が巡らされ、焼成時の付着物が多く、文様等の判別は困難である。「白磁碗Ⅴ-4 b類」で12世紀中頃以降の製品である。

23は碗の口縁～体部で、胎土は淡黄灰色で焼きが甘く、磁器質というより陶器質の胎土といった印象を受ける。釉薬は灰黄色で薄く施軸されており、全体に細かい貫入が入っている。体部外面下半は無釉である。体部はやや内湾し、口縁端部は外側に向かってやや屈曲する。口縁部は類例に当てはまらないが、胎土や釉薬の状態から「白磁碗Ⅱ類」の範疇に入る大宰府編年C期（山本2000）に位置づけられ、実年代的には11世紀後葉～12世紀前葉頃と考えられる。



第13図 古代~中世出土遺物実測図

## 2 縄文時代後期～晩期の遺構と出土遺物 (Ⅳ・Ⅴ層)

縄文時代後期～晩期に位置づけられる遺構は、土坑1基である。遺構検出面はⅤ層上面である。遺物包含層はⅣ・Ⅴ層であるが、調査区北側にはⅤ層は存在しない。遺物は調査区北側、南側の地形が下がっている区域から多く出土する傾向がみられ、特にE17Gr.においては、土器が集中して出土した。

### (1) 遺構

#### 4号土坑 (SC4、第15団)

調査区北側のB4Gr.に位置している。発掘調査の深度の関係で、調査区の壁面が土坑の西側を覆うため、約半分は未掘である。平面形は不整な楕円形と想定され、長軸1.3m、最深部は0.2mである。断面形は逆台形状で立ち上がりは急である。埋土は、暗褐色土およびぶい黄褐色土が主体で1～2mm程度の黄橙色粒を含んでいる。遺物は、縄文時代後期～晩期の粗製深鉢片が1点出土したが、小片のため未図化とした。

### (2) 遺物

#### a) 縄文土器 (第16団～第19団)

遺物包含層 (Ⅳ・Ⅴ層) から出土した縄文時代後期～晩期の土器については、既存の土器型式との対比関係に基づいて、時期ごと・型式ごとに配列して掲載した。

**後期の土器** 24～31は、縄文時代後期に属する縄文土器の深鉢・浅鉢である。

24は口縁部がやや内傾気味に直立し、口縁端部外面には沈線間に刺突文が施文される。頸部～胴部にかけては靴形状の沈線文が施文されると考えられる。25は緩やかな波状口縁を呈し、その端部に沈線を施す。口縁部から頸部にかけては、直線的な渦巻き紋が施文される。胎土には金雲母を含む。

26は大きく外反する口縁部で、その端部内面には沈線が1条入る。頸部との境にも沈線が1条入る。28も26と同様に口縁端部内面に沈線を1条巡らせるもので、口縁端部は内傾気味の平坦面をもつ。27は口縁端部が内湾する浅鉢で、その口縁部の外面は3条の沈線の上下に細い羽状文が施される。

29～31は、口縁部が肥厚し、口縁部の外面には、29は3条、30は2条の沈線を施す。31は横位2条の沈線文の間に円弧上の沈線文が施文される。

24～31は、その形態的特徴から、24・25は指宿式 (成川K式) 土器 (金丸2006) に、26～28は黒色磨研土器のうち、鳥居原式ないし御領式土器 (宮地2008)、29～31は中岳Ⅱ式土器 (柴畑1989) に相当するものと考えられる。

**晩期の土器** 32～57は、縄文時代晩期に属する縄文土器の深鉢・浅鉢である。

32は波状口縁を呈し、頸部から口縁部にかけて外反する。33は厚く肥厚する幅広い口縁部でやや外に開く。34は口縁部の端部付近の屈曲が弱くなり、肥厚気味となる。受け口状の段が退化したものと考えられる。35は口縁部が外反し、肥厚部が幅狭となる。口径23.3cm、器高25.7cm、底部径は6.1cmで、底部はやや上げ底状となる。36・37は口縁部が大きく外反し、口径が胴部最大径を上回る。胴部の屈曲は緩い器形をなす。32～34は入佐式土器の古段階に、35～37は入佐式土器の新段階 (堂込1997・宮地2008) と考えられる。

38は口径と胴部最大径が近似しており、頸部内面にしっかりと稜を形成する。入佐式ないし黒川式土器に位置づけられる。39は頸部に胴部の屈曲部が近接し、頸部内面には明確な段がつく。口縁部は直立気味に外反する。形態の特徴から黒川式土器の古段階（堂込1997・宮地2008）と考えられる。

40～45は胴部～底部である。40～42は、底面は幅狭い形状で、底部からそのまま胴部に移行している。43・44は底部が広めで分厚い円盤状である。44は底部の端部が外方へ張り出す。45は底部の厚みのない薄形状である。

46～49は深鉢の頸部～胴部付近であり、一括して掲載した。46は胴部上位に明確な稜をなす。47・48は胴部中位よりもやや上位で屈曲する。49は内外面ともに貝殻条痕文後粗くナア消している。外面にスス、内面にオコゲ様の炭化物が付着している。50の体部は球形胴を呈し、胴部最大径は31.8cmである。

51～56は浅鉢（精製・粗製品）である。51～54は精製浅鉢で、51・52の口縁部は長く直立している。52の口縁部の内外面には沈線を描き、頸部の内側には凹線文が1条入る。53は口縁端部が玉縁状を呈し、口縁部が短く胴部が張り出している。54は胴部下位のもので、内外面ともに横方向のヘラミガキ調整がされ外面にススが付着する。55・56は粗製浅鉢で、その器形は直線的に外方へ開き、口縁部は直立気味である。

51～56のうち、器形の特徴から51・52は入佐式の古～新段階、53は黒川式の中段階、55・56は黒川式の新段階（堂込1997・宮地2008）に相当すると考えられる。

57は内湾しながら立ち上がるボール状の器形で、口縁部外面に貫通の連続刺突を施すものである。晩期末頃の孔列文土器の一種と考えられる。

#### b) 土製品（第19図）

58は縄文土器深鉢片を円盤状に加工した円盤状土製品である。破断面の周縁をていねいに研ぎだして面取りする。胎土や色調などから縄文後期～晩期のものと位置づけられる。

#### c) 石器（第20図）

IV・V層（遺物包含層）と遺構（SE1）から出土した石器は28点である。共伴して出土した縄文土器の型式から縄文時代後期～晩期にあたる。器種ごとの内訳は、石鏃3点、石錐1点、剥片・砕片13点、スクレイパー1点、石核1点、石斧4点、磨石1点、磨石3点、台石1点である。そのうち7点について図化した。

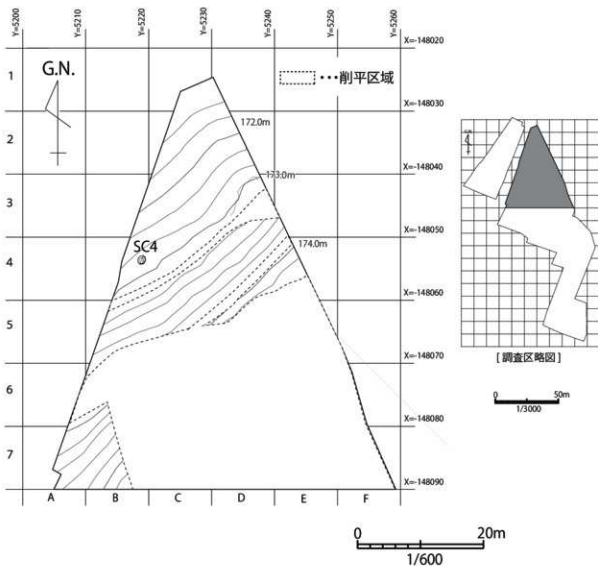
59はガラス質安山岩製の石鏃である。平面形は二等辺三角形に近い形状で、側縁の先端部近くに屈曲点をもつ。凹基でU字型の抉りを作り出している。この石鏃はSE1上面から出土したが、他所からの流れ込みと考えられ、縄文時代後期～晩期に属する同形態、同石材の類似する石鏃が今回の調査で出土していることから、縄文時代後期～晩期の石器として掲載した。

60はホルンフェルス製の石錐である。素材剥片の一部を加工することにより、錐部を作り出す。

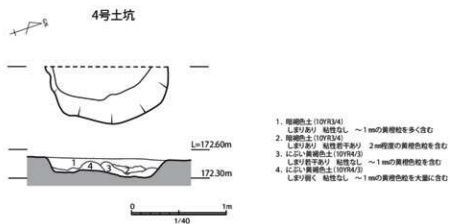
61・62は打製石斧である。61は刃部が欠損しており基部のみの資料で、母材はホルンフェルスである。62は砂岩製で、基部と刃部がほぼ同じ幅で短冊形に近い平面形を呈する。背面にはほとんど手を加えず腹面を加工し刃部を形成する。63はホルンフェルス製の磨製石斧である。比較的扁平で基部が欠損しているが本来的には台形状を呈すと考えられる。

64は、花崗岩製の磨石である。平面形態は楕円形で表裏両面に磨痕が明瞭に残っている。

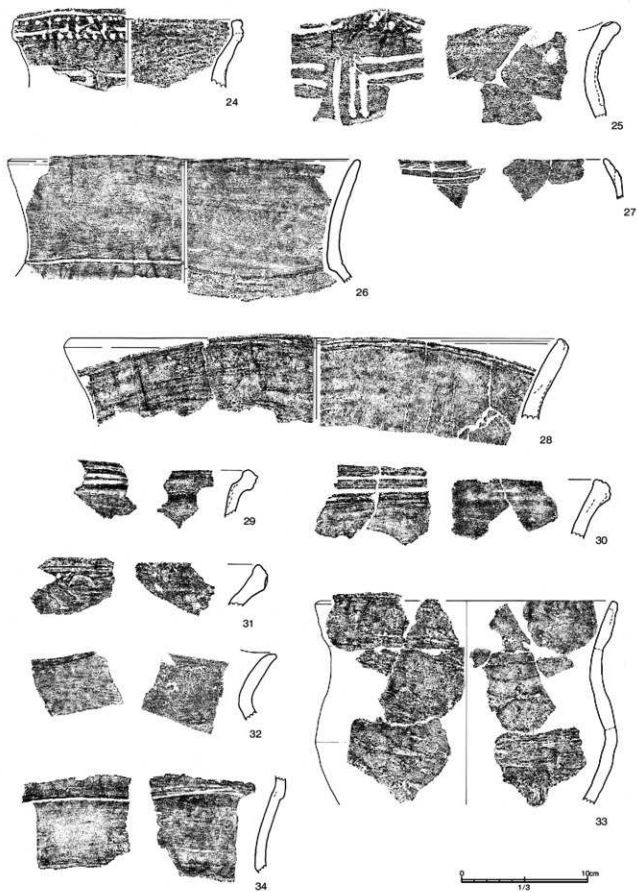
65は、砂岩製の台石である。大型の礫を素材とし、使用面には磨痕や潰痕が残る。



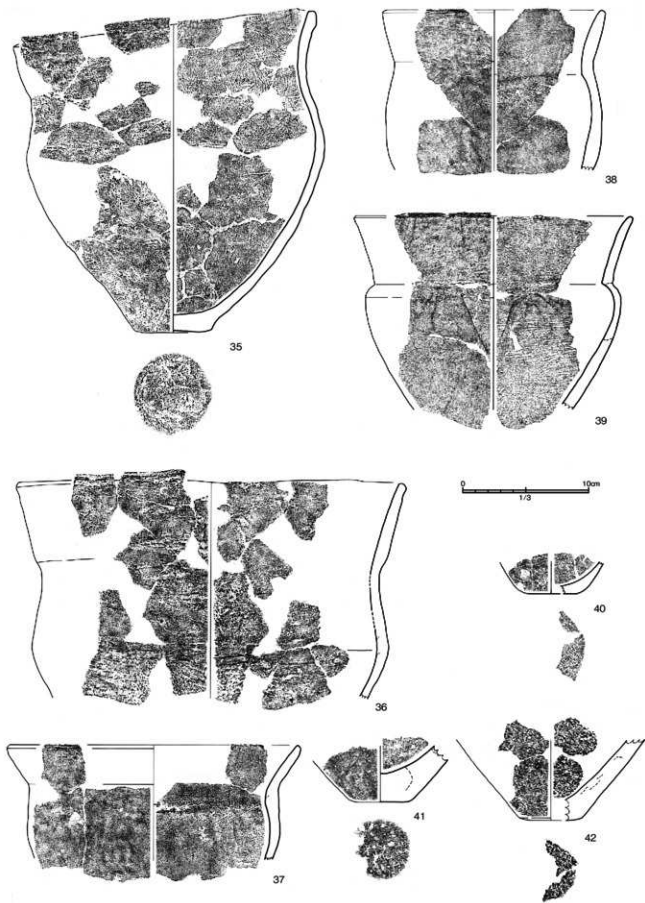
第14図 縄文時代後期～晩期遺構分布図



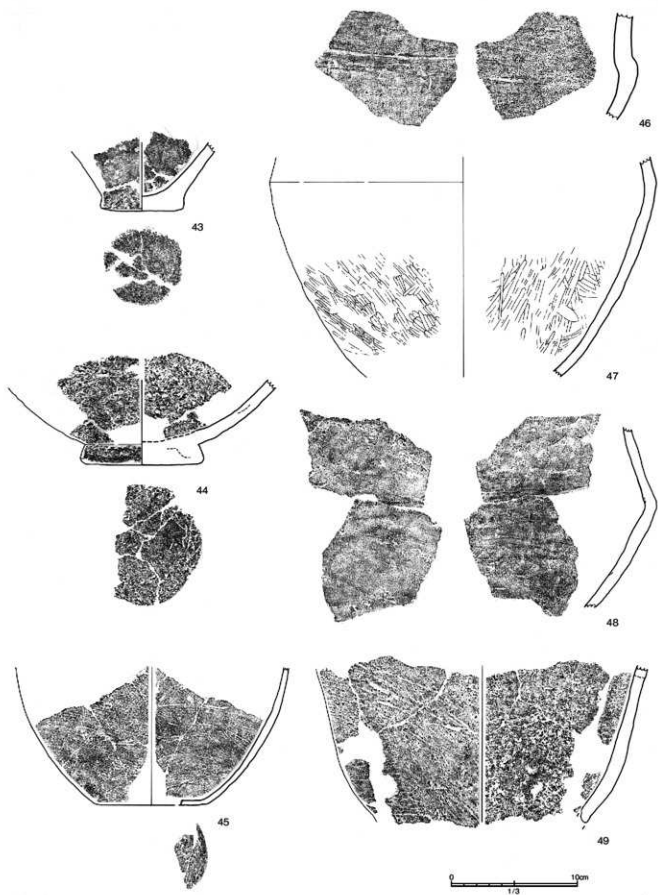
第15図 4号土坑実測図



第16図 縄文時代後期～晩期土器実測図(1)

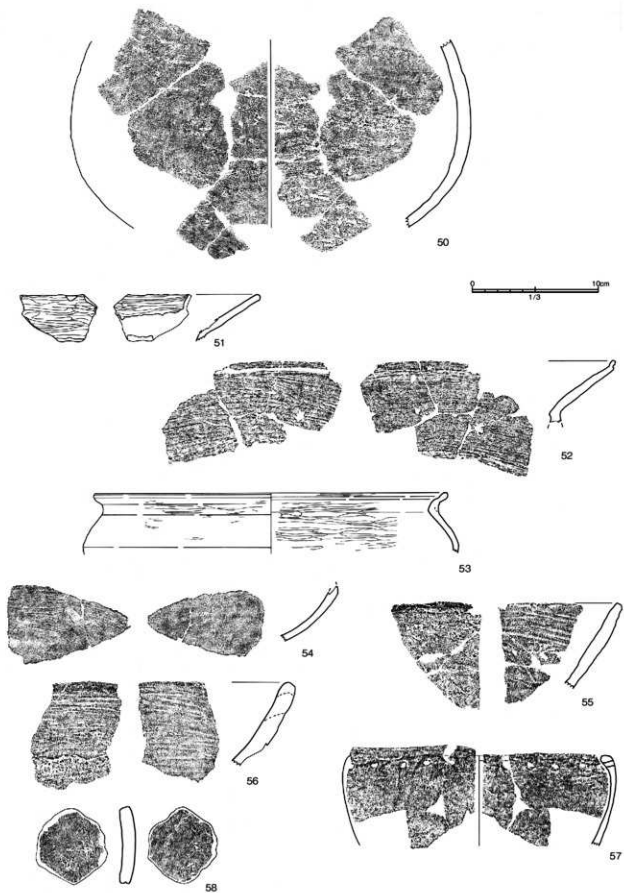


第17図 縄文時代後期～晩期土器実測図(2)

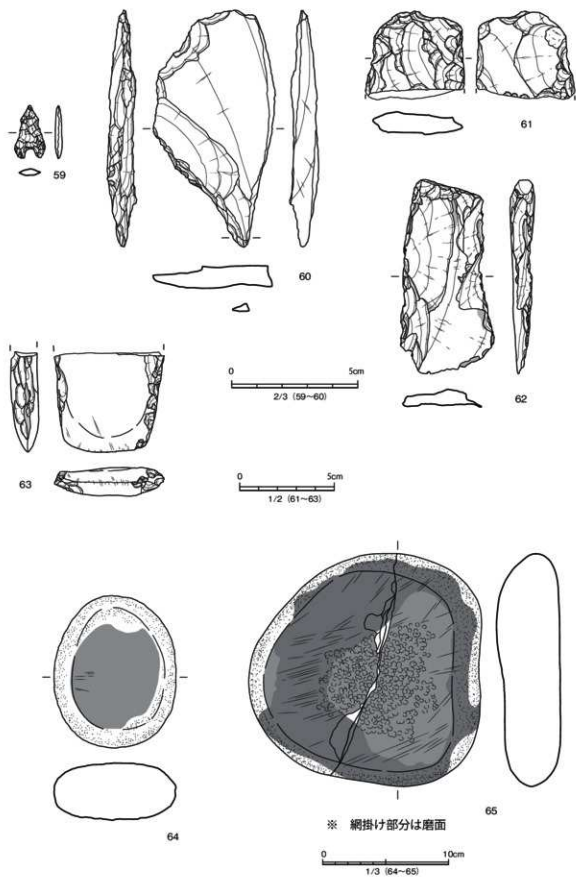


第18図 縄文時代後期～晩期土器実測図(3)





第19図 縄文時代後期～晩期土器・土製品実測図



第20図 縄文時代後期～晩期石器実測図

### 3 縄文時代中期～後期の遺構 (VI層)

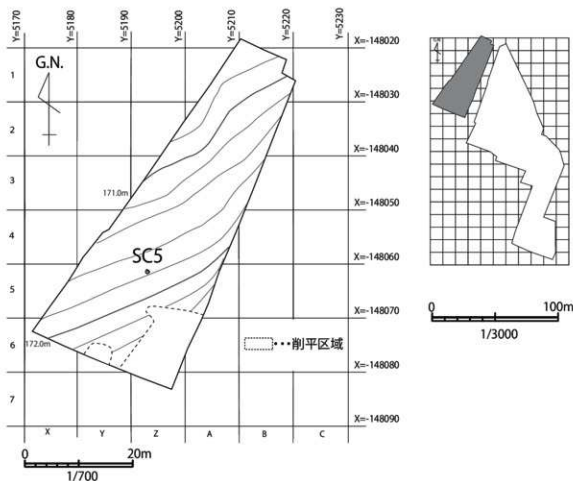
縄文時代中期～後期の遺構として陥し穴状遺構(SC5) 1基が検出された。遺物の出土は確認されなかった。

#### 5号土坑 (SC5…陥し穴状遺構、第22図)

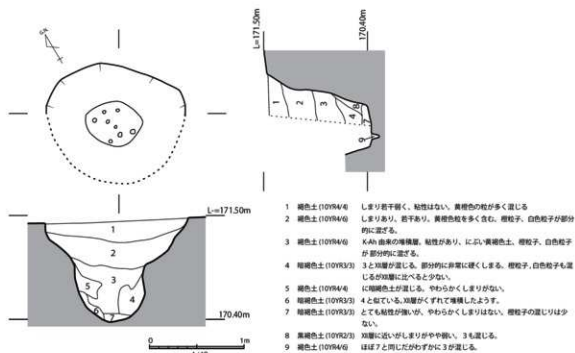
Z5Gr付近にて無遺物層の除去作業時に、土層堆積状況を確認する際、土坑状の遺構1基がその一部を半截されたような状態で検出された。遺構の検出面はⅦ層面である。一部は掘削のために欠失しているが、平面形は不整な円形を呈すると考えられる。規模は推定径1.47×1.24m、深さは1.05mを測る。

断面形は、埋土の第2層より上位側は大きく開く、逆Ω形の断面形で、底面には小穴が8箇所に認められた。これを逆茂木痕と捉えて、この土坑状遺構を陥し穴状遺構と判断した。なお、検出当初は5号土坑として調査したため、混乱を避けるために遺構名はそのまま踏襲する。

本来の掘り込み面と、深さ等の規模については不明であるが、埋土には霧島御池軽石がわずかに含まれ、Ⅱ～Ⅴ層由来の黒色/黒褐色/暗褐色系統の土は含まれていないことから、掘り込み面は、Ⅶ層ないしⅦ層より上層のⅥ層と考えられる。したがって、霧島御池軽石降下後から縄文時代後期～晩期の遺物包含層(Ⅴ層)の堆積前までに掘削されたものと考えられる。遺物を伴っていないため、正確な時期比定は困難であるが、層位からみて縄文時代中期後葉～後期前葉の間とみられる。



第21図 縄文時代中期～後期遺構分布図



第22図 5号土坑実測図

#### 4 その他の遺物

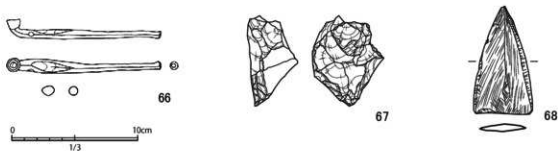
今回の発掘調査では、表土中や攪乱出土といった原位置を保っていない遺物のうち、遺跡の性格とその形成史を把握するために特に必要なものについて、この項にて一括して取り上げた。(第23図)

66は煙管である。雁首の部分と羅字の部分为一体化して小口部分は見られない。小型の火皿を呈し、上面に接合痕が確認される。小口にあたる部分には火種を振り落とした際に生じた打撃痕が残る。概ね17世紀後半から18世紀前半代(古泉1983)にあたると思われる。

67は赤色チャート製の火打ち石である。縄文時代の石器と同質の石材が全く見られない点や使用痕(サビを伴う稜の潰れ、微細剥離)の特徴から判断した。なお、類品に都城市松原地区遺跡(第7次)出土例(都城市教委2018)があり、时期的には中世の可能性がある。

68は磨製石鏃である。無茎鏃で側縁部がやや内湾する二等辺三角形を呈す。断面形は薄い菱形である。鏃身の中央部は薄い稜が入り、側縁部から中央の稜に向かって研磨が施される。石材は緑色凝灰岩である。

他にも近世後半～近代の肥前焼、薩摩焼、備前焼、瓦などが表土中から出土しているが、小破片のため図化していない。



第23図 その他の遺物実測図

### 第3節 鬼界アカホヤ火山灰層下位 (XI～XIII層) の調査

#### 1 縄文時代早期の遺構と出土遺物 (XI～XIII層)

縄文時代早期の遺構は竪穴建物跡1軒、集石遺構12基、土坑8基であり、遺物包含層 (XI～XIII層) 中ないしXII・XIII層の上面にて検出された。これらの遺構群は、調査区中央部よりやや南寄りの谷部周辺に集中しており、II～V層にて検出された遺構群とは大きく場所を違えている。具体的には竪穴建物跡と土坑は谷部中央を走る地形変換線より南側の斜面地に位置し、土坑は竪穴建物跡を取り囲むように分布する一方で、集石遺構は地形変換線より北側にあり、E8Gr/F14Grを中心とする大きな削平区域の周囲を取り巻くように分布している。

遺物は、遺構および遺物包含層 (XI～XIII層) から出土し、縄文土器と石器類がある。遺物包含層は、高低差が約10m以上ある傾斜地にて層厚約1m前後と厚く堆積しており、調査区の北西部と削平区域を除く全域で出土した。縄文土器には深鉢形と壺形があり、大きくI～X類に区分される。取り上げ点数3532点、最小個体数(底部数)368個である。時間的には縄文時代早期前葉～後葉にあたり、その分類については、第3節の第2項にて詳述する。また、石器類には、打製石鏃をはじめ、打製石斧やスクレイパー、磨石や敲石などがあり、砂岩や頁岩といった遺跡周辺で産出するもののほか、腰岳産黒曜石や多久産とみられるガラス質安山岩を石器石材とする。取り上げ点数は1532点、総重量は38.77kgである。

#### (1) 遺構

##### a) 竪穴建物跡

##### 1号竪穴建物跡 (SA1、第25図)

1号竪穴建物跡は、E11・F11Gr.に位置し、XIII層中で検出された。平面形は隅丸方形を基調とし、南西側の辺はやや円形に膨らむ。長軸約2.72m、短軸約2.28m、検出面から床面までの深さは約0.32mを測る。床面積は約3.75㎡である。床面の南西側に寄った位置では、長軸約1.47m、短軸約0.57m、深さ約0.1mの土坑が掘削されており、焼土の広がり確認された。柱穴等の存在は不明である。

なお、埋土中よりサクラ属の炭化材①、床面付近からクスノキ科の炭化材②が出土し、放射性炭素年代測定の結果、①は8075±30年BP (サクラ属)、②8360±30年14BP (クスノキ科)の測定値が得られている。

遺物は、縄文土器・石器合わせて約40点が遺構検出面から竪穴内にかけて出土した。特に竪穴建物跡の中央部分の床面から約0.3m高い部分 (1層) 付近に遺物が集中しており、53個を数える円礫も含まれる。出土遺物のうち、埋土中出土の土器8点、石器3点について図化掲載した (第26図)。

69～75は縄文土器の深鉢片である。69～71は口縁部片で、縄文を地文とし横位数条の突帯 (刻目) を持つ。突帯間は無文となる。69 (V-1類) の口縁端部には刻目、70 (V-1類) では縄文が施文され、71 (V-6a類) の波頂部に瘤状突起が付く。71の胴部は2条1組の突帯がX字形に貼り付けられる。

72～74 (V類) は胴部片である。外面は縄文施文、内面は粗いケズリやナデ調整である。縄文の原体はそれぞれ異なる。75 (V-10類) は上げ底の底部片であり、底部の立ち上がり付近はやや丸みを帯びる。

76は砂岩製の磨敲石である。扁平な楕円形で表裏を磨面、側面を敲打面として使用している。77は砂岩製の敲石である。扁平な円形に近い形状で表裏の中央に凹み、周縁には潰打痕がめぐる。78は上部が欠損しているが、下部に敲打痕、両面に磨痕が確認できる。

## b) 集石遺構 (SI)

集石遺構は12基確認された (SII~12)。そのうち10基 (SII~5・6・8~10) は調査区中央部より南寄りの谷地形の周辺に分布している。SI6・SI7はそれぞれ離れたところに点在している。

構成礫の密集度及び掘り込みの有無により、礫が密集するもの (SI6・10・12)、礫が密集し掘り込みを持つもの (SI2~4)、礫がやや散在しているもの (SII・5・7~9・11) の3つに区別される。

### 1号集石遺構 (SII、第27図)

SI1は調査区中央西よりのG10Gr.に位置する。0.70m×0.48mの範囲に礫が広がり、掘り込みは持たない。全て砂岩礫で形成され、火を受け赤化している。縄文土器が出土したが、小片のため図化していない。

### 2号集石遺構 (SI2、第27図)

SI2は調査区中央西よりのG10Gr.に位置する。0.78m×0.79mの範囲に礫が広がり、浅い皿状の掘り込みを有する。掘り込みは0.6m×0.51mの円形で、検出面からの深さは0.04mとごく浅い。構成礫はすべて砂岩で、赤く比熱してもろく割れやすい礫が多い。遺構に伴う遺物は出土していない。

### 3号集石遺構 (SI3、第27図)

SI3は調査区中央西よりG10Gr.に位置する。0.70m×0.81mの範囲に礫が集中し、下部には掘り込みと配石を有する。構成礫は砂岩が大半で、軽石も一部含まれる。中央部に近い礫ほど小さく赤化して破砕している。掘り込みは0.70×0.81mの不整な楕円形で、検出面からの深さは0.31mである。底面付近では大きめの石の平らな面を内側にに向けて配置される。縄文土器が2点出土したが、小片のため図化に堪えない。

### 4号集石遺構 (SI4、第27図)

SI4は調査区中央西よりのG10・11Gr.に位置する。0.62m×0.66mの範囲に礫が集中し、下部には掘り込みを有する。平面形が0.70×0.73mの不整な円形プランで検出面からの深さは0.22mである。表面の礫は赤化が確認できる。遺構に伴う遺物のうち、図化可能な縄文土器1点を掲載した(第31図)。79(V-6 a類)は縄文土器の深鉢口縁部で、波頂部には瘤状突起が貼り付けられ縄文が施文される。横位の突帯もある。

### 5号集石遺構 (SI5、第27図)

SI5は調査区中央西よりのF11Gr.に位置する。0.96m×1.34mの範囲に礫が広がっており、掘り込みはない。構成礫の約半数に赤化が見られた。出土遺物に縄文土器深鉢(V-6c類)がある(第31図)。82は、直線的な胴部から大きく開く口縁部をもち、縄文を地文とする。口縁部には横位4条の刻目突帯を波頂部の瘤状突起に取東させるように貼り付ける。この瘤状突起から胴部には縦位1条の刻目突帯が短く付く。

### 6号集石遺構 (SI6、第27図)

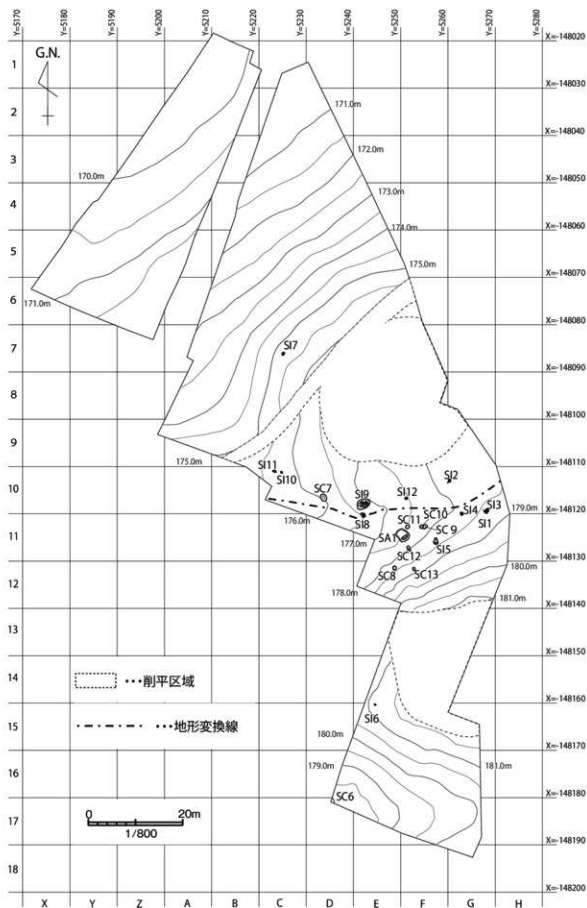
SI6は調査区南よりのE15Gr.に位置する。0.23m×0.38mの範囲に礫の集中が認められる。構成礫はすべて砂岩でその数は少ない。表面の礫にのみ赤化が見られた。掘り込みは持たず、遺物も出土していない。

### 7号集石遺構 (SI7、第28図)

SI7は調査区やや北よりのC7Gr.に位置する。0.54m×0.60mの範囲に礫が広がっている。掘り込みは持たず、赤化した礫は5個程度であった。縄文土器が1点出土したが、小片のため図化していない。

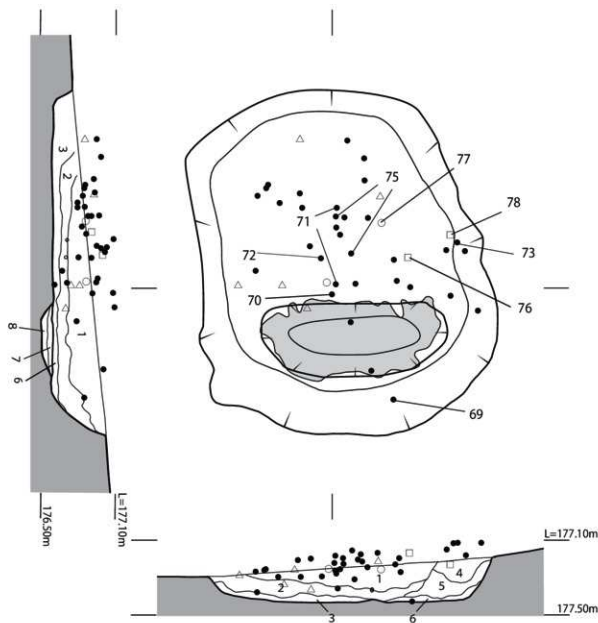
### 8号集石遺構 (SI8、第28図)

SI8は調査区中央やや西よりのE11Gr.に位置する。0.70×1.13mの範囲に礫が広がっており南側は調査区外まで続いている。約半数の礫は赤化がみられ、掘り込みはなく、遺構に伴う遺物もない。



第24図 縄文時代早期遺構分布図

1号竪穴建物跡



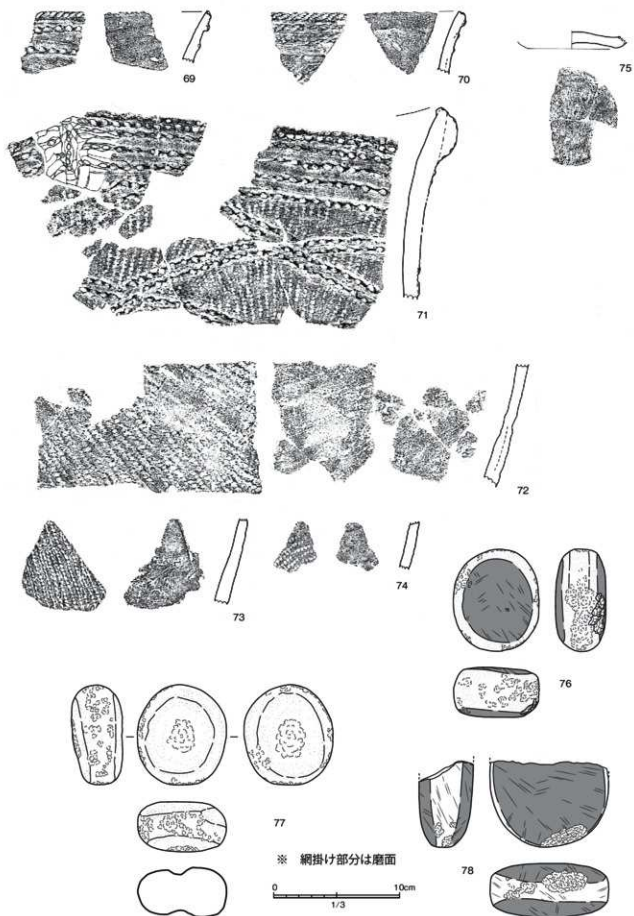
●…縄文土器 ○…敲石 □磨敲石  
 △…剥片(ガラス質安山岩・黒曜石)



1. 黒褐色土(10YR1/3) φ8mm以下の褐色、φ3以下白色軽石を少量、φ1mm程度の炭化物、焼土物をわずかに含む。
2. 黒褐色土(10YR3/5) φ10mm以下のX V層アロックス、φ8mm以下の焼土粒を少量含む。
3. 褐色土(10YR4/6) φ50mm以下のX V層アロックスを多く含む。
4. 黒褐色土(10YR3/2) φ1mm以下の白色軽石粒を少量、φ1mm以下の炭化物粒・焼土粒をわずかに含む。
5. 灰黄色土(10YR6/2) φ10mm程度以下の焼土粒を少量含む、φ10mm以下の炭化物粒、φ2mm以下の炭化物粒をわずかに含む。
6. にごい黒褐色土(10YR5/4) φ8mm以下の焼土粒、φ2mm以下の炭化物粒を少量含む。
7. 黒赤褐色土(5YR5/6) 焼土層を大量に含む。
8. 赤褐色土(5YR4/6) φ8mm以下の焼土粒を含む。

第25図 1号竪穴建物跡実測図





第26図 1号竪穴建物跡出土遺物実測図

#### 9号集石遺構 (SI9、第28図)

SI9は調査区中央やや西よりのE10Gr.に位置する。303m×198mの広範囲に礫がまばらに広がっている。構成礫は、砂岩がほとんどで251個を数える。小さな礫が多く、赤化しているものもみられた。南西部には最も礫が集中し重なりがみられた個所があったが、掘り込みは確認できなかった。遺構に伴う遺物のうち、図化可能な縄文土器1点を掲載した(第31図)。80は、縄文土器の壺(V類)で肩部付近の破片である。縄文を地文とし、ミミズばれ状の突帯を2条付す。内面は粗いケズリ状のナデ調整である。

#### 10号集石遺構 (SI10、第29図)

SI10は調査区中央のC11Gr.に位置する。0.33m×0.42mの狭い範囲に礫の集中が見られる。構成礫はすべて砂岩で掘り込みはない。遺構に伴う遺物は縄文土器胴部片がある(第31図)。81(V類)は縄文地文が施されている。

#### 11号集石遺構 (SI11、第29図)

SI11は調査区中央のC11Gr.にあり、SI10の西約1mに位置する。0.73m×0.54mの範囲にまばらに広がっている。掘り込みは持たず、遺構に伴う遺物も出土していない。

#### 12号集石遺構 (SI12、第29図)

SI12は調査区中央西よりのF10Gr.に位置する。0.44×0.51mの範囲に礫の集中がみられ、掘り込みは持たない。砂岩系の焼礫が大半でよく破砕されている。遺構に伴う遺物は出土していない。

#### c) 土坑

土坑は7基(SC6・8～13)の存在が確認された。遺構平面形は円形・楕円形を主としている。大きさは長軸が1.2m±0.3mと、さほど大きさにばらつきはないが、検出面からの深さには深浅がある。断面形には逆台形状やすり鉢状のほか、袋状のもの(SC10・11)がある。これら土坑は、調査区内を走る地形変換線の南側に集中して分布している

#### 6号土坑 (SC6)

SC6はD17Gr.に位置する。調査区の隅部の壁面付近にて検出されたため、遺構の大半は調査区外となり、全体形や規模などは不明である。XI層から掘り込まれて、XI層上面からの深さは0.4mである。埋土は、にぶい黄褐色土と暗褐色土が主体で、黄橙色粒、微細な白色粒を含んでいる。遺物は確認されていない。

#### 8号土坑 (SC8、第29図)

SC8はE12Gr.に位置している。平面形は不整な楕円形で、長軸0.89m、短軸0.8m、検出面からの深さは0.78mである。断面形は方形に近く、立ち上がりは急である。埋土は、黒褐色土で、黄橙色粒、白色粒の混入度合いから3層に区分された。遺構に伴う遺物は縄文土器深鉢の底部(第31図)がある。83(V-10類)は上げ底で、底器形の立ち上がり際は小さな高台状となる。底面の外面側は粗いナデ調整である。

#### 9・10号土坑 (SC9・10、第29図)

SC9・10はF11Gr.に位置しており、切り合い関係(重なりあい)にある。SC10→SC9の掘削順序となる。

SC9の平面形は不整な楕円形で、長軸1.11m、短軸0.78m、検出面からの深さ0.23mである。断面形は立ち上がりが緩やかな逆台形状で底面の西側は一段下がっている。埋土は暗褐色土で、X層とXI層由来の土が混じる。遺構に伴う遺物はない。

SC10の平面形の一部はSC9によって失われているが、本来は不整な楕円形と考えられる。長軸0.92m、短軸0.68m、検出面からの深さ0.71mである。断面形は袋状に近い。埋土は、Ⅱ層由来の暗褐色土と黒褐色土が主体で、黄褐色粒や白色粒を含む。遺構に伴う遺物は縄文土器片、腰岳産・針尾島産黒曜石製の剥片などがあり、このうち縄文土器1点を図化掲載した(第31図)。

84(V類)は、縄文土器深鉢の底部に近い胴部片と考えられる。縄文を地文とする。

#### 11号土坑(SC11、第30図)

SC11はF11Gr.にあり、SA1より約0.5mの位置にある。平面形は不整な円形で、長軸0.9m、短軸0.6m、検出面からの深さ1.05mである。断面形は袋状になっており、底径は約1.1mである。埋土は、黒褐色土が主体である。なお、埋土中出土の炭化物について放射性炭素年代測定を実施した結果、7960±30年BPの測定値が得られた。遺構に伴う遺物は縄文土器片、腰岳産黒曜石の剥片やチップなどがあり、このうち縄文土器1点を図化掲載した(第31図)。

85(V-6c類)は深鉢の口縁部片である。波頂部に円形の瘤状突起が付き、そこから2条の突帯が縦位に延びる。横位の突帯も1条貼り付けられ、突帯上には縄文が施文される。口縁端部にも縄文が施文される。内面は丁寧なケズリやナデ調整である。

#### 12号土坑(SC12、第30図)

SC12はF11Gr.にあり、SA1より約1.1mの位置にある。平面形は不整な瓢箪形で、長軸1.22m、短軸0.58m、検出面からの深さ0.3mである。底面をさらに掘り込んだ面では焼土が広がる。また、埋土中出土の炭化物(カヤ)は7960±30年BPという放射性炭素年代の測定値が得られている。

縄文土器2点を図化掲載した(第32図)。86(V-9c類)は波状口縁の深鉢で底部と胴部下半を失う。口径は38.1cmと特大品である。胴部はやや脹らみ、大きく外反する口縁部がつく。上面観は四辺が張り出し気味の方形となる。口縁端部には刻目が施される。器面外面は縄文が地文であり、口縁部から頸部には横位5条の刻目突帯が波頂部の瘤状突起と頸部の縦位突帯(突起)に取束するように貼付される。口縁部中位にある突帯の間隔はやや広めである。胴部は2条一組の沈線文内に刺突列点文を組み入れたものを施文上の単位とし、大きく円形状(円形文)に4面描いたあと、その内部を麻手状に施文して満たす。円形文どうしの間隙はV字形の文様2段で充填する。87は深鉢か壺(深鉢V類または壺V類)の胴部下半部にあたる。

#### 13号土坑(SC13、第30図)

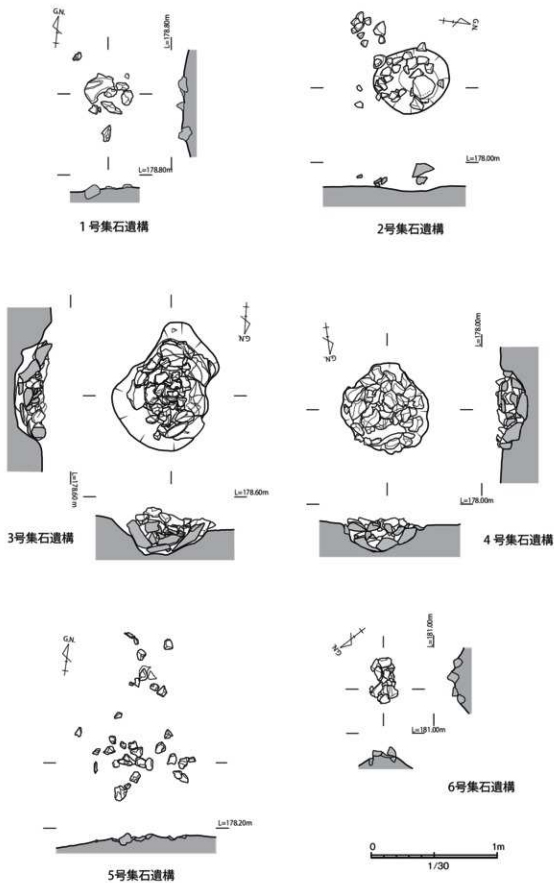
SC13はF12Gr.に位置し、北西に位置するSC12との距離は約3.5mである。平面形は不整な楕円形で、長軸0.78m、短軸0.54m、検出面からの深さは0.3mである。断面形はすり鉢状で、一部に焼土が確認できる。遺構に伴う遺物は出土していない。

### d) 陥し穴状遺構

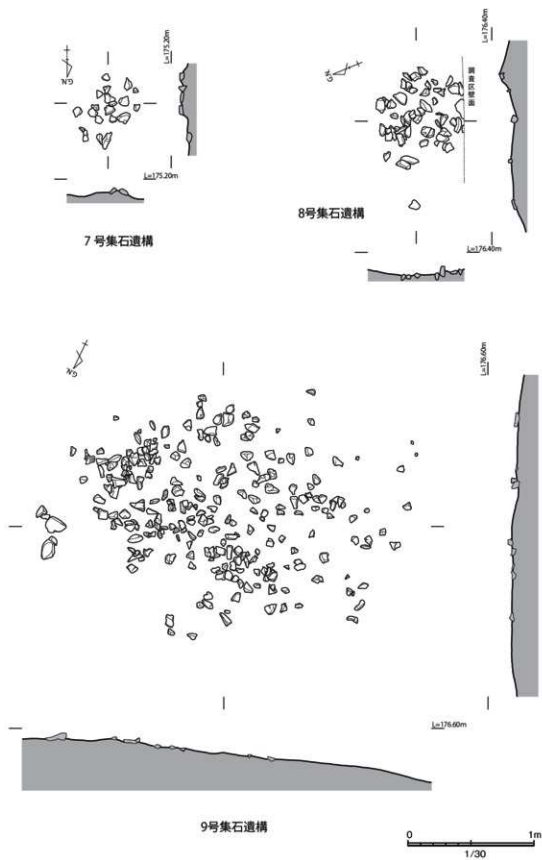
土坑のうち、床面に小穴を複数確認できた7号土坑(SC7)を陥し穴状遺構として報告する。

#### 7号土坑(SC7、第30図)

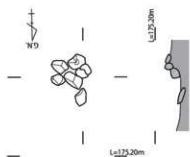
SC7はD10Gr.に位置している。平面形は楕円形で、長軸1.56m、短軸1.15m、検出面からの深さは1.63mである。断面形は方形に近く、立ち上がりは急である。底面には、直径約0.07～0.14m程度の小穴(杭状の痕跡)が5箇所確認でき、いずれも逆茂木痕と捉えられる。埋土の上部(1～4層)はⅢ層由来の黒褐色土、下部(5～8層)はⅣ層由来の土が混入する。遺構に伴う遺物は出土していない。



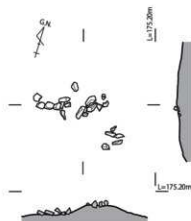
第27図 1～6号集石遺構実測図



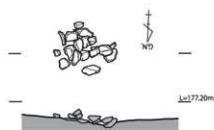
第28図 7～9号集石遺構実測図



10号集石遺構



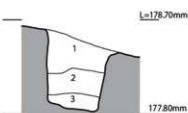
11号集石遺構



12号集石遺構



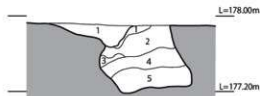
8号土坑



1. 黄褐色土 (10YR2/3)  
しまり若干あり、一部、白色粒などが時に多く含まれる箇所は稀い。粘性なし。  
1~2mm程の白色粒、2~5mm程の黄褐色ゴロを多く含む。
2. 黄褐色土 (10YR2/3)  
しまり若干あり、粘性なし。1~2mm程の白色粒、2~5mm程の黄褐色ゴロを少し含む。
3. 黄褐色土 (10YR2/3)  
しまり若干あり、粘性なし。濃褐色 (XIV層) の土の一部含む。粒やゴロは含まない。



9・10号土坑



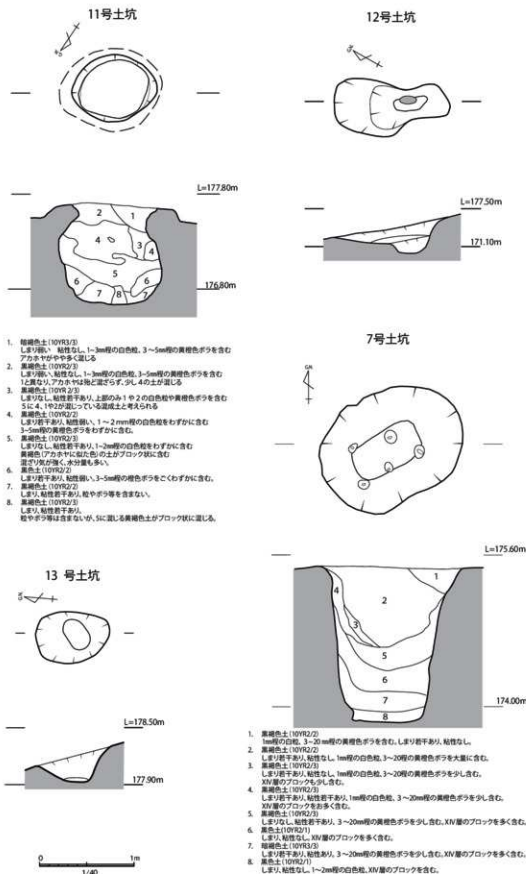
(5C9)

1. 黄褐色土 (10YR2/3)  
しまり弱く、粘性なし。1~2mm程の白色粒、3~5mm程の黄褐色ゴロを含む。  
平のヌネ (XIV層) を含む。アカヤが多少混入する。

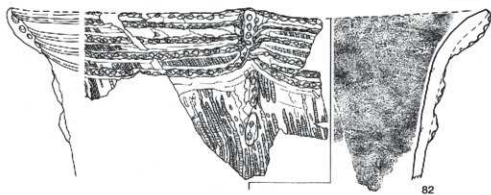
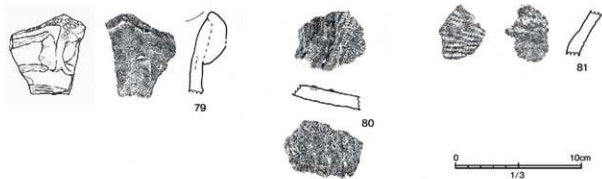
(5C10)

1. 黄褐色土 (10YR3/3)  
しまり弱く、粘性なし。1~2mm程の白色粒、3~5mm程の黄褐色ゴロを含む。  
平のヌネ (XIV層) を含む。
2. 黄褐色土 (10YR2/3)  
しまり若干あり、粘性なし。1~2mm程の白色粒を多く含む。3~5mm程の黄褐色ゴロを含む。  
一部黄褐色土 (10YR2/3) が混入している (ホコ土ではない)。
3. 黄褐色土 (10YR 2/3)  
しまり若干あり、粘性なし。1~2mm程の白色粒、3~5mm程の黄褐色ゴロを少し含む。
4. 黄褐色土 (10YR2/2)  
しまり、粘性若干あり。1~2mm程の白色粒と5mm程の黄褐色ゴロをわずかに含む。  
黄褐色土 (10YR2/3) も混入するため、3.2.5の混成土と考えられる。
5. 黄褐色土 (10YR2/2)  
しまり、粘性若干あり。1~2mm程の白色粒、5mm程の黄褐色ゴロをわずかに含む。

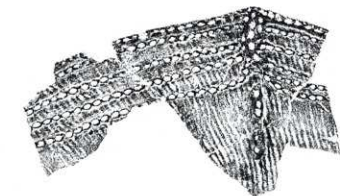
第29図 10~12号集石遺構及び8~10号土坑実測図



第30図 11~13・7号土坑実測図

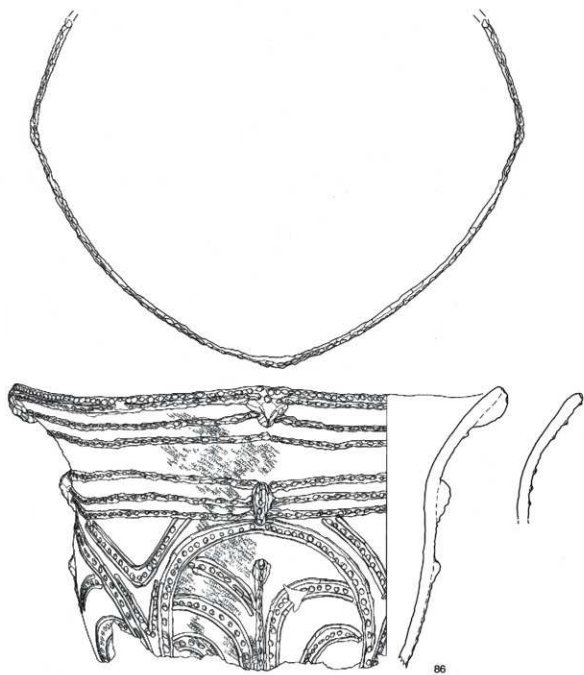


- 79 : S14
- 80 : S19
- 81 : S110
- 82 : S15
- 83 : SC8
- 84 : SC10
- 85 : SC11



第31図 4・5・9・10号集石遺構及び8・10・11号土坑出土遺物実測図





第32图 12号土坑出土遗物实测图

## (2) 遺物包含層出土の遺物

### a) 縄文土器

縄文時代早期と考えられる縄文土器は、基本層序におけるXI～XIII層から出土した。取り上げ点数では3532点である。

本来ならば、層位ごとに出土した土器の提示を行うべきであるが、記述や実測図掲載などの煩雑さを避けるために、一括して分類し報告する。分類にあたっては、現行の縄文土器型式の分類基準や諸属性等を参考に、第I類～第X類に区分したが、既存の土器型式における分類基準とは必ずしも合致しない。

各分類の層位別にみた点数（破片数）については、第2表に掲げた。なお、第IV～VII類土器は、地文や文様が類似するので、破片の段階では区別が困難なものがあるので一括した。第IV～VII類土器、特に第V類土器が各層で主体的であり、XII層（桜島11火山灰を含む層）で最も多い傾向がある。

なお、破片の接合作業を進めた結果、複数の層位間で接合する土器が多いことが判明した。これは、調査区の大部分が傾斜地であることや自然擾乱による遺物の浮き上がり等が顕著であったためと考えられる。それを加味しても、XI～XIII層出土土器では第IV～VII類、特に第V類土器が主体であると読み取れる。

第2表 層位と土器分類との関係

分類	Ⅺ層	Ⅻ層	XIII層	点数
I類	0	0	1	1
II類	0	4	1	5
III類	4	9	2	15
IV-V類	951	1516	955	3422
Ⅵ-X類	15	43	18	76
X類	7	6	0	13
点数	977	1578	977	3532

### 第I類土器 (88)

円筒形貝殻条痕文土器の一つで、鋸歯状の口縁部を持つ深鉢である。

88は、鋸歯状の口縁部を持ち、口縁端部の外側は縦位の貝殻復縁刺突文、内側は内傾気味に面取りするものである。口縁部の内外面は横方向の貝殻条痕文である。

### 第II類土器 (89～91)

円筒形貝殻条痕文土器の一つである。図化掲載の可能な資料は深鉢の底部のみである。

89～91は、底部で立ち上がりの外面側が貝殻条痕文である。貝殻条痕文は肋の幅が広く深い二枚貝にて施文される。89・91は、ケズリ調整などにより上げ底気味となる。

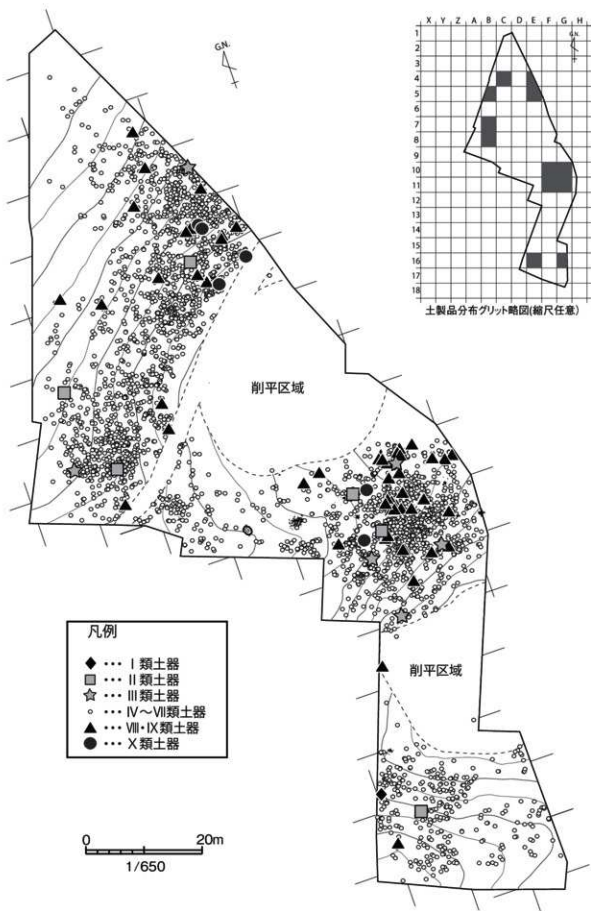
### 第III類土器 (92～95)

軸棒に楕円形や山形を彫り込んで、器面に回転施文する深鉢形土器を一括した。92～95は、器面の外面に押型文が施文されるものである。92は、口縁部片で内外面に粒の細かい楕円押型文が施される。93・94は胴部片で92と類似した楕円押型文である。95も胴部片で山形の押型文である。

### 第IV類土器 (96～107)

縄文地文で、後述の第V類土器とは異なり、横位や縦位の貼付突帯や沈線文等が施文されない深鉢である。96～99は平口縁（単口縁）で、頸部の縮まりが強く、口縁部は短く「く」の字状に屈曲するもの（96・97）と立ち上がり気味に屈曲するもの（98・99）がある。99は綾杉状（羽状）に縄文が施文される。104はボタン状突起が2段四方に配置される。

100～103は波状口縁である。101の口縁端部の内面側は内傾して面取りされており、102の口縁端部



第33図 縄文時代早期土器分布図

は丸くまとまる。100は口径が10.8cm、103の口径は17.4cmと小型の深鉢である。

105～107は胴部資料で、突帯その他の施文状況の有無が判別できないが、便宜的に第Ⅳ類とした。106は綾杉状の縄文施文である。105も同様に綾杉状を呈すが、縄文の間隔は広い。

#### 第Ⅴ類土器（108～294）

縄文施文で突帯や沈線文といった加飾が施されるもの。各部位の文様帯構成からさらに細分した

【深鉢】 深鉢は、深鉢Ⅴ-1～10類に細分し、それぞれのまとまりごとに図化掲載している。

深鉢の特徴（共通的な要素）は下記のとおり。

- ・口縁部…平口縁（単口縁）と波状口縁がある。単口縁よりも波状口縁の深鉢が多い傾向にある。  
口縁部は直立気味に外方へ開くものが多い。「く」の字状に屈曲するものは、頸部の締まりが強いものである。  
口縁端部は肥厚せず、内傾した面取り、丸くまとまる、先細りといった形態がある。  
口縁端部の外面側は刻目の施文が多用される。  
波状口縁の場合、波頂部に瘤状突起やボタン状突起が貼付されるものが多い。
- ・頸部…頸部の締まりは緩いものが大半で、締まりの強いものは、口縁部が「く」の字に屈曲する。
- ・胴部…直線的なもの、張り出し気味、外形気味なものがあり、外形気味な胴部からは大きく外反する長めの口縁部がつくものが多い。
- ・底部…全体形の判明した器形に乏しいが、平底と上げ底タイプがあり、上げ底が多い。後述のように胴部の立ち上がりとの境には幅狭な接地面（退化した高台状）が付くものが多い。
- ・外面調整…縄文を地文とする。単節斜縄文（撚りを加えた繊維束2本をさらに左撚りや右撚りで撚り合わせた縄文の圧痕:2段L/R/L）が多く、無節斜縄文（米粒状の節がない）もある。  
撚り合わせの手法による文様の違いもある。  
綾杉状（羽状）の縄文も認められるが、この場合は左撚りと右撚りの縄を交互に施文または、結束した縄文本体が使用されたものと考えられる。
- ・内面調整…ナデ調整を基本とし、胴部はケズリまたはケズリ状のナデ調整が多用される。
- ・突帯…横方向の突帯（横位突帯）が数条貼り付けられる。縦方向の突帯（縦位突帯）とセットとなるものも多い。横位突帯は2～4条が基本で、最多では7条がある。縦位突帯は1条と2条が基本である。横位・縦位突帯は幅0.5cm前後で細く薄いものが多い。  
突帯上には縄文、刻目、円形刺突文が施文される場合が多い。
- ・沈線文…口縁部～頸部には横位の沈線文、縦縞状の短沈線文や条線文（簾状文）、頸部～胴部では沈線で円形・ひし形・三角文・蕨手状文・幾何学文等を描くものがある。施文手法は単沈線のほかに、平行沈線間に短沈線を組み合わせたものを単位とするものがある。
- ・法量…口径から、超大型品（50cm以上）、大型品（30～40cm）、中型品（20～30cm）、小型品（15～20cm）、極小型品（10cm前後）の区別があり、中型品が最も多い。
- ・胎土…白色鉱物（長石）や有色鉱物（角閃石や輝石など）のほかに、火山ガラス質や金雲母を含むものがある。
- ・その他…口縁部～胴部に赤色顔料（ベンガラ）の塗彩、底部の底面に白色物質が付着するものがある。

#### a) 深鉢V-1類 (108~132)

縄文地文で、横方向（横位）の突帯が数条貼り付けられる一群で、口縁部端部の外側にも縄文、刻目、突帯にも縄文、刻目、刺突文が施文される場合が多い。突帯間は縄文地のままと無文となる場合がある。

108~120は平口縁である。108は5条の突帯を持つが、隆起線文状である。109も隆起線文状の突帯を持ち、放射性炭素年代測定の結果では8055±30BPという結果が出た。110の突帯上には縄文、112は刻目、119は中空な竹管による円形刺突列点文が施文される。116は多段の突帯があり、少なくとも7条の横位突帯を持つ。108・116は外方へ長く開く口縁部を持つが、118は短く開く口縁部で突帯間の間隔が狭い。118は放射性炭素年代測定にて7420±100BPという結果が得られている。119・120は立ち上がり気味に開く口縁部を持ち、119は羽状の縄文施文である。108・109・119には補修孔が伴う。

121~130は波状口縁である。口径上の大きさでは、15.6cm (123)、19.95cm (125)、23.2~24.7cm (124・126・127)、29.3~31.8cm (122・130) といった区別がある。122~124・126の胴部は直線的であるが、125・127などは頸部の締まりがやや強くなり、胴部も張り出し気味となる。125・127・129・130は波頂部に瘤状突起を持ち、128の波頂部は棒状の粘土紐を2列貼り付ける。口縁部~頸部の突帯は、口縁部直下と頸部のみに貼り付けるもの（123・125・127など）と、口縁部直下と頸部の間にも均等に突帯を付すもの（122・124・126など）がある。121・122の突帯は108と同様に隆起線文状である。

131・132は口縁部を失う口縁部で、平口縁か波状口縁のいずれかは不明である。131の胴部はやや張り出して丸みを帯びる。

#### b) 深鉢V-2類 (133~136)

縄文地文で、横方向（横位）の突帯が数条貼り付けられる一群で、口縁部~頸部の最下段突帯より下位（胴部付近）に沈線文が施されるものとした。

133は口径14.6cmで、平口縁である。頸部~胴部上半部にかけては回線状の沈線文が施文される。

134~136は波状口縁である。頸部の突帯から下位は縦縞状のヘラ描き条線文が比較的密に施される。

#### c) 深鉢V-3類 (137~142)

縄文地文で、横方向（横位）の突帯が数条貼り付けられる一群で、口縁部~頸部の突帯間にも沈線文が施されるものとした。

137・138は平口縁である。137は頸部の突帯間の1段のみを縦位沈線文にて充填される。胴部側の突帯間は横位の短沈線文が施文される。138は口径37.7cmで口縁部~頸部の突帯間の1段のみを縦位沈線文にて満たす。口縁部内面には縄文が施文される。胴部の文様はひし形の沈線文を交互に配して市松文様のようなモチーフとする。

139~142は波状口縁である。139は頸部以下を失うが、文様構成上の観点からV-3類とした。139の放射性炭素年代測定では7975±30BPという結果が得られている。

140は、口径41.2cmで、頸部~胴部の突帯間に三角文（沈線文）を鋸歯状に配置し、その間を横位の沈線文と短沈線文の組み合わせにて充填する。

141は口径26.4cmである。胴部はやや丸みを帯びる。突帯間の1段のみを斜位の沈線文で満たし、口縁部直下の突帯は波頂部の瘤状突起で区切られた区間内を輪状に巡らせる。

142は口縁部の突帯間全てを縦縞状のヘラ描き条線文にて施文する。胴部内面は、やや粗いケズリないしケズリ状のナデ調整で、口縁部内面は丁寧なナデ調整である。

#### d) 深鉢V-4類 (143)

縄文地文で、横方向(横位)の突帯が数条貼り付けられ、口縁部~頸部の突帯間に沈線文が施される一群である。特に、口縁部外面の文様帯が発達しているものとして、深鉢V-3類とは区別した。

143は波状口縁である。口径は25.2cmで、直線的な胴部に直立気味に開く口縁部を持つ。口縁部外面は、短沈線による鋸歯状の文様帯が構成されており、頸部付近の突帯間は縦位の短沈線にて充填される。胴部は138に近いモチーフのひし形沈線文が施文される。

#### e) 深鉢V-5類 (144~149)

縄文地文で、縦方向(縦位)の突帯のみが貼り付けられる一群とした。口縁部の形態や施文は、深鉢V-1~4と同様である。1条のものと多条のものがある。

144~149は波状口縁である。144・145は縦位突帯が1条のみで、波頂部から垂下させる。144は口径10.4cm、145は口径23.8cm。146は縦位突帯が2条で口径23.1cm、147・148は3条、149は5条の縦位突帯が付される。

#### f) 深鉢V-6類

縄文地文で、突帯構成が横位と縦位の組み合わせとなる一群で、沈線文や刺突文の加飾がないもの。縦位突帯の貼り付け位置から、V-6a類(口縁部端部から垂下する縦位突帯)とV-6b類(口縁部の横位突帯がそのまま縦位突帯へ移行するもの)、V-6c類(頸部から垂下する縦位突帯)、V-6d(横位・縦位突帯+半円形の突帯)に細分した。

##### V-6a類 (150~163)

150は平口縁である。直線的に立ち上がる口縁部を持ち、横位・縦位突帯ともに細い。

151~163は波状口縁である。151は口径40.8cmで、突帯は隆起線文状であり、108・122と類似している。口縁部中位の突帯間隔は広い。153~155は、縦位突帯に対して横位突帯は段違いまたは斜交する。156は底径4.4cmで、口縁部の形状は不明であるが波状口縁の可能性が高い。

158~161は縦位突帯が2条のものである。157・158は突帯間の間隔が広く、159・160は狭い。158の口縁部外面には斜位の刻目が施される。160の突帯は、一見して刻目突帯を呈するが、工具による押圧刻目ではなく、指頭にて刻目を表現したものである。

161の横位突帯は瘤状突起で区切られた区間内を輪状に巡らせている。横位突帯からは2条の縦位突帯を垂下させている。162は縦位突帯が3条のものである。頸部付近では段違いの横位突帯が貼り付けられる。163は破片資料であるが、残存状態から判断してこの分類に組み入れた。横位突帯間は無文となる。

##### V-6b類 (164~166)

164~166は、波状口縁で、口縁部の横位突帯がそのまま縦位突帯へ移行するものである。165・166の瘤状突起には刺突文がランダムに施文される。

##### V-6c類 (167~181)

167~176は、頸部の横位突帯から胴部にかけて縦位突帯を貼り付けるものである。167・168は平口縁であり、167の口径は21.2cmである。口縁部は短く反り、横位突帯は口縁部端部に集約されている。168は胴部最大径部分に横位2条の貼付突帯が付加され、頸部から垂下する縦位2条の貼付突帯と交差する。

169~176は波状口縁、もしくは波状口縁と考えられる一群である。169~171は上方に開き気味の胴部からそのまま大きく開く口縁部を持つ。169の縦位突帯は1条と2条が交互に配される。170の横位突

帯の端部は波頂部の瘤状突起へ収束させるように貼り付ける。

171・172の縦位突帯の頸部側端部は横位突帯と結合せず、輪状となる。173・174は頸部最下段の横位突帯から2条の縦位突帯を垂下させている。この174の横位突帯は口縁端部側に集約されており、その突帯の間隔は狭い。放射性炭素年代測定の結果、7965±30BPという結果が得られている。

175・176は頸部の締めりが強いタイプで、胴部も大きく張り出す。175は、胴部上半部分に短い縦位突帯（突起）を16個貼付する。176は口径22.9cmで、頸部の横位突帯にボタン状突起を付し、そこから2条の縦位突帯を貼付する。胴部最大径付近にも横位突帯を巡らす。

177～181は胴部資料である。2～4条の縦位突帯を貼付するもので、便宜上この分類に入れた。

#### V-6d類（182～187）

胴部資料であるが、横位・縦位突帯と半円形の突帯の組み合わせが読み取れるものを一括した。

182～184はボタン状突起とそこから派生する縦位突帯を基軸として、半円形ないし蕨手状の突帯が左右対称的に配される。185～187も同様な文様構成で、187の縦位突帯の端部は輪状となる。

#### g) 深鉢V-7類

縄文地文で、口縁部～頸部が横位突帯、胴部は鋸歯状（三角形・逆三角形）・不規則・同心円状の刻目突帯が貼り付けられる一群で、沈線文や刺突文の加飾がないもの。胴部突帯のあり方から、V-7a類（鋸歯状突帯）とV-7b類（紐状突帯）、V-7c類（円形突帯）に細分した。

#### V-7a類（188～191）

188は平口縁、189・191は波状口縁である。190は胴部資料である。胴部には2条一組の刻目突帯で鋸歯状（三角形・逆三角形）の文様を作り出す。188の口径は38.2cmで、綾杉状に施された縄文を地文とする。口縁部中位の突帯間隔は広い。頸部は締めりがあり、胴部は緩く張り出す。頸部の横位突帯を起点として、三角形のモチーフを突帯で作る。突帯で三角形に区画された内部にも突帯を貼付する。

189は頸部付近にボタン状突起を配置して、そこを起点に三角形に突帯を貼り付けるものである。190は逆三角形に突帯を貼付するが、ひし形のモチーフである可能性もある。

191は188と同様な文様構成であるが、突帯は160と同様に指頭により蛇行（ジグザグ）させて刻目突帯状に表現している。

#### V-7b類（192・193）

胴部資料で、突帯は不規則に貼りつけられるもの。192は紐状に見える。

#### V-7c類（194～197）

縄文地文で、沈線文や刺突列点文による加飾はないが、同心円状の突帯が貼り付けられるもの。

194は平口縁で口縁部に横位突帯、頸部下半に同心円状の突帯がすき間なく配置される。195は波状口縁で、口縁部の文様は横位突帯と同心円状の突帯が融合している。口縁端部内面側は縄文施文である。

196・197は頸部付近や胴部資料である。196の沈線内には赤色顔料が残存している。

#### h) 深鉢V-8類（198～200）

縄文地文で、口縁部は横位突帯、胴部は放物線状の突帯に沈線文が伴うものである。縦位突帯はない。198は平口縁で、口径58.3cmの特大型である。放物線状の突帯で区画された内部には、V-2類の133と類似した沈線文や短沈線が施される。199は緩やかな波状口縁で、口径は21.8cm。2条一組の突帯を放物線状に4面貼り付け、その内外に生じた余白を縦位・横位や斜位の沈線で埋める。波頂部の瘤状突

起は、外方へ突出させている。200は口縁部を失っているが、胴部の文様構成からこの分類に入れた。

#### i) 深鉢V-9類

縄文地文で、文様帯構成が横位突帯+縦位突帯+沈線文の組み合わせで、頸部付近の横位突帯から下部の胴部に沈線文が施文される一群である。文様や施文方法から、V-9a類～V-9d類に細分した。

##### V-9a類 (201～209)

平行沈線間に刺突列点文や短沈線文を組み入れたものを文様構成上の単位として多用するもので、胴部の縦位突帯を軸として左右対称の位置に円形や半円形・蕨手状の文様を施文する一群である。縦位突帯は胴部の文様帯構成上、沈線文施文における区画線の意味合いを持つ。

201～204は、胴部突帯の左右に半円形の沈線文を施すものである。201は平口縁で、口径は32.0cm。202・203は胴部資料で、202は横位突帯がそのまま縦位突帯に移行するものである。

205～209は、蕨手状や同心円の沈線文を縦位突帯（胴部）の左右に描くものである。205は平口縁で口径は39.9cm。頸部の締まりは強く、口縁部は「く」の字状に屈曲する。胴部上半部に蕨手状、下半部に扇形（1/4円周分）の沈線文が施文されるが、縦位突帯に対して左右対称的ではなく、蕨手状+扇形の構成文様をそのまま転写していくような文様帯である。

206～209は波状口縁で、206の口径は37.6cm。207は円形の刻目突帯で区画された内部を同心円状の沈線文で満たすものである。円形の刻目突帯は部分的に退化して、平行沈線と短沈線文に置き換わっている箇所がある。口縁端部外面は縄文施文であり、その端部はやや垂下気味である。補修孔もある。208は橋状把手をもつ破片資料である。209は円形刺突文を多用するもので、頸部の横位突帯は平行沈線文間に刺突列点文を組み入れたモチーフに置き換わっている。縦位突帯は2条である。

##### V-9b類 (210～214)

IV-10a類に類似するが、平行沈線間に短沈線を組み合わせる文様単位ではなく、沈線文にて文様表現するものとした。

210は波状口縁で、口径は17.9cm。頸部の横位突帯以下の胴部に同心円文（杏仁形）を配置し、その間をV字形文で充填する。211～214は胴部資料で、同心円文や杏仁形の文様を施文する。

##### V-9c類 (215～225)

縄文地文で、頸部付近の横位突帯から下部に沈線文が施文されるものとした。縦位や斜位方向の短沈線でひし形をモチーフとした幾何学的文様を表現している。

215は平口縁である。口縁部の横位突帯間は無文化が進む。頸部の横位突帯以下は、ひし形状に沈線文で描いたあと、その空隙を縦位の短沈線で充填する。220は波状口縁で口径26.0cm。219も波状口縁で口径35.5cm。波頂部の瘤状突起の正面を刺突文が覆う。221は口縁部付近の資料、216～218・222・223・225は胴部資料である。沈線文で構成されるひし形や逆三角形文というモチーフから便宜的にこの分類に入れた。なお、224は縦位突帯間を短沈線で埋める胴部片である。縦位の沈線文であるため、この分類に含めた。

##### V-9d類 (226～233)

縄文地文で、文様帯構成はV-9a類やV-9c類と類似するが、口縁部の横位突帯間にも縦線状といった沈線文が施文されるものとした。口縁部の施文部分では、突帯の間隔が広いことも特徴である。

226～233は波状口縁である。226は口径33.2cmで、波頂部は橋状把手がつき、刺突文が施される。口縁端部の外面は、やや幅広となり、刺突列点文が3段施文される。縦位突帯は3条で、蕨手状の突帯（2



条1組)を対向してハート形に組み合わせたものを4対配置している。この突帯の両側辺には沈線を付加している。外面に赤色顔料の塗布が認められる。228の口径は33.6cm。緩い波状口縁である。波頂部と頸部、胴部に瘤状突起が付される。口縁端部より2段目までの横位突帯間は縄文地文のままである。229は口縁部の突帯間を横位の短沈線にて充填するものである。230はボタン状突起が波頂部に付き、沈線文は縦位と斜位も加わる。横位突帯は口縁端部側に偏在させて、施文面を確保している。232の口縁部は、斜位の沈線文で全て満たされる。

231は、略完形に近い資料である。口径24.3cm、器高22.4cmで、大きく開く口縁部を持つ。縄文地文であるが、粗いナデ調整が器面全体に施されて、縄文がナデ消されている部分が多い。口縁部の施文は、横位突帯によって3段目に区分され、口縁部全体に沈線文が施文される。口縁端部側から数えて1・2段目は2～3重の鋸歯文(沈線文)、頸部付近の3段目は斜位の沈線文が施される。3段目より下位は、3重の横位沈線文となる。縦位突帯は2条である。底部は上げ底である。

233の口径は38.2cmで、口縁部中ほどから頸部付近にある横位突帯の間隔を広げて無文地とし、そこに斜位の沈線文を施文し、沈線文間には短沈線を施す。ただし、一部の施文であることから、施文の途中である可能性がある。口縁部突帯間の施文部位をナデ消して、あらかじめ無文地とするのは、228・229・231などに共通した施文手法である。

#### j) 深鉢V-10類(234～259)

概ね深鉢V類に伴うと考えられる底部を一括して、底部形態別の底径順に図化掲載した(234～259)。底径はおよそ4.1cm～12.4cmの幅にあり、口径の大小と運動しているものと考えられる。

234～237・240・242は平底と見られる。234や237のように底面(接地面)は比較的丁寧なナデ調整のものが多い。234・240の底面には白色物質が付着している。250の底面に近い外面はナデ調整が入り、240の縄文は綾杉状である。

243～259は上げ底と見られる。平底のものと同じく、底面は比較的丁寧なナデ仕上げである。249・250・252～254・256・257・259は、底部の立ち上がりとの境に幅狭い接地面が形成されており、退化した高台状となっている。246・248・251の底部外面の底面よりは、ナデ調整が一部施されている。245・248・250・252・257の底面には白色物質の付着がある。

**【壺】** 縄文地文の壺は、深鉢V類と対応させて、壺V-1～5類に細分した。それぞれの細分ごとに図化掲載した。

#### a) 壺V-1類(260～269)

縄文を地文とし、突帯や沈線その他の施文による加飾が一切ないものとした。

260～266は縄文のみが施文されたもので、平口縁とみられる。260は大きく開く口縁部で口径は6.5cm。261・262は内傾してすぼまるもので、口径は9.5cmと8.3cmである。263・264・266は直立する口縁部でその端部はわずかに外方へ開くものである。口径は9.2cm、8.7cm、8.4cmを測る。262・266の肩部は口縁部の付け根との境が不明瞭な「なで肩」状で緩やかに胴部へ移行するもので、264の肩部は水平に張り出す「いかり肩」状である。

266の外面は変形した綾杉状の縄文が施文、内面の胴部付近は横方向へ丁寧なナデやケズリ状のナデ、胴部付近は指頭痕が明瞭に残る。口縁部内面は主に縦方向のナデで、口縁端部付近は丁寧なナデ調整となる。

267～269は胴部資料である。縄文地文のみであるため、便宜的にこの分類とした。

また、260～263は後述する壺V-2類である可能性もある。

b) 壺V-2類 (270～278)

縄文を地文とし、口縁部は縄文地文のみで、肩部～胴部に突帯があるものとした。

270～278は、肩部である。基本的には肩部に2条の横位突帯が貼り付けられるもので、277は円弧状、274・275は縦位突帯が胴部に付される。

c) 壺V-3類 (279～284)

縄文を地文とし、口縁部に突帯やボタン状突起などを貼り付けるものとした。

279は平口縁で口径は13.6cmである。口縁端部と中位、肩部には横位突帯を、横位突帯を連結するように縦位突帯を1条貼り付ける。この縦位突帯からは円弧状の横位突帯を派生させている。頭部の締めまりが強く、肩部は張り出す「いかり肩」の器形とみられる。

280～283は波状口縁である。280の口径は13.4cmで、279と同じ施文手法をとる。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部は大きく外反する。頭部から肩部へは緩やかに移行する「なで肩」とみられる。281の口径は11.0cmで、波頂部にボタン状突起を配し、そこから2条の縦位突帯を垂下させる。口縁部付け根の横位突帯は頭部付近と考えられる。突帯内に赤色顔料が一部残存している。

282の口径は15.9cmで、器形は280に類似する。横位突帯より下部に2条1組の突帯を放物線状に貼り付ける。波頂部には粘土紐を2個並列させて貼付する。283の口径は15.3cmで、頭部の締めまりは強いが、口縁部の長さは短い。2条1組の突帯を放物線状に貼り付ける。

284は頭部付近の破片資料であり、縦位突帯が認められる。

d) 壺V-4類 (285～291)

縄文を地文とし、口縁部～胴部には突帯と沈線文が施文されるものとした。

285は波状口縁で、口径は12.8cmである。突帯の貼付手法は279に近いが、横位突帯間を縦線状の沈線文で満たす点で異なる。

286～288は肩部付近である。286・287は広めの横位突帯間を縦線状の沈線文、幅狭な突帯間は横位の短沈線文で空隙を埋める。288は口縁部の立ち上がり部分に三角文(沈線文)を幾重にも重ねた文様が施される。290は頭部から胴部にかけての資料である。横位突帯より下位の部分で連弧文(半円状の沈線文)を胴部最大径付近で上下のシメトリーとなるように施文する。縦位突帯が一部残存している。

e) 壺V-5類 (292～294)

縄文を地文とし、口縁部～頭部付近に沈線文のみが施文されるものとした。

292・293は頭部付近、294は胴部の資料である。沈線文や短沈線文を用いて幾何学的な施文を施す。292はひし形をモチーフにしており293も同様と考えられる。293の沈線内に赤色顔料が残存している。

291は平行沈線間に短沈線を組み合わせたものを2条の横位突帯に見立て、その間を横位の短沈線にて充填している。294は頭部付近に3条の平行沈線文が入る。胴部最大径よりも下半部の外面側はナデ調整にて縄文が消されている。

第VI類土器 (295～297)

無文のみで突帯や沈線文といった加飾のない深鉢とした。

295～297は平口縁である。296の口径は8.6cm、297は11.0cmと小さい。295は頭部の縮まりが強い「く」の字口縁、296・297は直立気味に立ち上がる口縁部を持つ。

#### 第Ⅶ類土器（298～350）

器面の外面は無文で、突帯や沈線文といった加飾のある深鉢や壺である。第Ⅴ類土器における分類と同様の観点から、無文+突帯、無文+突帯+沈線のものに大別し、横位突帯や縦位突帯の有無や沈線文のモチーフなどから第Ⅶ-1～5類に細分した。器形や施文方法など、無文地以外は第Ⅴ類土器と類似する。

##### a) 深鉢Ⅶ-1類（298～305）

無文地で横位突帯と縦位突帯が貼付されるものである。口縁部破片のみで、全体形は不明である。

298～300は平口縁である。298の口径は21.9cmで、口縁部は立ち上がり気味に外反する。口縁端部と突帯上には縄文が施文される。299は縦位2条の突帯が貼付されるが、横位突帯も含めて施文は施されない。胴部はやや張り出し気味と思われる。300も299と同じ突帯構成であるが、胴部は垂直気味とみられる。

301～305は波状口縁である。301・302の縦位突帯は複数条で波頂部には瘤状突起が付く。303の波頂部にはボタン状突起が付く、縦位突帯に相当する箇所は2列の沈線文に置き換わっている。

304は橋状把手（突起）に近い平面形、305は橋状把手が付く。口縁部でも一部分の破片資料であるが、横位突帯を有するため、この分類に入れた。

##### b) 深鉢Ⅶ-2類（306～317）

深鉢Ⅶ-1類としたものに、さらに沈線文が付加される一群とした。

306・307は平口縁である。306は口径15.2cm、器高17.4cm、底径5.1cmで底部は平底である。口縁部は頭部から直線的に立ち上がり端部がわずかに外へ開くもので、横位突帯より下位は縦縞状の沈線文や、平行沈線文間に刺突列点文を組み合わせたものを斜交するように施文する。沈線文の施文前は縄文地文であり、施文部位は丁寧にナデ消されているが施文の及ばない底部付近は縄文地のままである。内面調整は、底部から胴部下半部はケズリないしケズリ状のナデ、胴部上半部から口縁部は丁寧な横方向のナデである。

308～311・313・316・317は波状口縁、312・314・315は平口縁または波状口縁である。308は口径12.9cmで、平行沈線文間に刺突列点文を組み合わせたものを施文単位とし、縞状に縦位に施文したのち、鋸歯状（山形状）の施文を加え、さらに縦位突帯が付く。310は縦位突帯が付されるが、それに交差するように平行沈線文間に短沈線文を組み合わせたものを施文する。

313の口径は22.8cmで、胴部は220・223などに類似した文様帯構成で、平行沈線文間に短沈線文を組み合わせたものを放射状に施文し、その間を沈線文でひし形状に充填している。365と同じく、縦位突帯に相当する部分は平行沈線文間に短沈線文を組み合わせたものに置き換わっている。

316の口径は23.9cmで、頭部から胴部の文様は、胴部中位に付された瘤状突起を起点に4～5条の沈線文を放射状に施文したのち、その間を埋めるように縦位の沈線文で満たすものである。胴部の瘤状突起は縦位突帯も派生していることから、波頂部から垂下する縦位突帯も含めて文様構成上の割付け線となっている。

317の口径は28.6cmで、横位突帯より下位の文様帯は、頭部付近と胴部下半部は縦縞状の沈線文、その間は鋸歯状（山形状）の沈線文6～8段にて構成される。312の外面には赤色顔料の塗布が認められる。

c) 深鉢Ⅶ-3類 (318～323)

深鉢Ⅶ-2類としたものに、さらに横位突帯間まで沈線文が付加されるものとした。

318～323は波状口縁である。横位突帯と縦位突帯を持ち、口縁部全体を沈線文にて覆う。318の口径は10.3cm、319は10.2cmと極めて小さい。319には橋状把手（突起）が付く。320と321は頭部の締まりが強く「く」の字状口縁部をもつ。お互いに類似した施文手法である。322と323も2段の文様帯で構成されるものである。

d) 深鉢Ⅶ-4類 (324～328)

深鉢Ⅶ-2類ないしⅦ-3類の頭部や胴部資料を一括した。

324～328は頭部や胴部資料である。縦位突帯を持つもの(325・326・328)、縦位突帯の相当部分が平行沈線文間に短沈線文を組み合わせたものに置き換わるものがある(327)。327は外面に赤色顔料が付着している。324は縦位突帯が脱落している。沈線文や短沈線文、刺突列点文を組み合わせで幾何学的文様となす。

e) 深鉢Ⅶ-5類 (329～336)

概ね深鉢Ⅶ類に伴うと考えられる底部を一括して、底部形態別の底径順に図化掲載した。深鉢Ⅶ-11類と同じく、上げ底のものが多い。335・336は極端な上げ底である。底径はおよそ4.8cm～6.2cmの幅にある。329・331～334・336のように退化的な高台状を呈するものがある。

332の底面には白色物質が付着する。

【壺】 無文地の壺を分類した。深鉢Ⅶ類と対応させて、文様帯の構成の観点から、壺Ⅶ-1～3類に細分し、それぞれのまとまりごとに図化掲載している。

a) 壺Ⅶ-1類 (337～339)

無文地のみで、突帯や沈線文などの加飾のないもの。

337～339は、口縁部や胴部資料で、全て無文地のままである。337は平口縁で口径は11.0cmである。やや内湾気味の口縁部である。338も平口縁で口径は8.6cmである。すばまり気味の口縁部形態である。

339は胴部で球形に近い。

b) 壺Ⅶ-2類 (340～342)

無文地に突帯を付加したもの。

340～342は、無文地に刻目突帯を貼り付けたものである。340・341は口縁部、342は頭部である。

341と342は同一個体である可能性が高い。

c) 壺Ⅶ-3類 (343～350)

無文地に突帯と沈線文を付加したもの。

343～350は無文地に突帯や沈線文を付加したものである。343は波状口縁で口径は14.6cmであり、波頂部は短く突出させている。口縁端部側に横位の刻目突帯を2条、波頂部からは輪状の縦位突帯を垂下させる。縦位突帯内は斜位の沈線文で充填している。縦位突帯間は、半円形やV字形の刻目突帯を幾重にも貼り付けている。

344～346は横位突帯間にも沈線文を施文する口縁部である。344は平口縁で口径11.0cmである。ボタン状突起を有し、横位突帯間を斜位の沈線文で満たす。外面には赤色顔料の塗布がある。346は波状口縁で、ボタン状突起を有し、沈線文や平行沈線文間に短沈線文の組み合わせを単位として、ひし形状の

モチーフを表現している。

347は器面の摩耗が顕著であるが、横位突帯と縦位突帯が貼付され、その間を刺突列点文や沈線文にて施文している。沈線内には赤色顔料が残存している。

348は頭部で縦位突帯が付され、それを内包するように沈線文や平行沈線文間に短沈線文を組み合わせたものを単位としてひし形のモチーフを施文する。349・350は横位の沈線文が数条施文される。

#### 第Ⅷ類土器 (351～367)

第Ⅴ類と第Ⅶ類土器のうち、口縁端部の形状や端部への施文のあり方などが、後述する第Ⅸ類土器に近似している深鉢や壺を一括した。口縁端部が肥厚して、三角形状や外方に突出するもの、立ち上がり気味に内傾するものなどがあり、口縁端部外面には羽状の刺突文が施文されるもの、などがある。

##### 【深鉢】

351～365は深鉢である。352・353は口縁端部に粘土帯の貼付、354～356は、口縁端部に内傾気味に粘土を貼付したもので、端部外面は縄文施文である。横位突帯や縦位突帯が貼付される。

357は口縁端部を肥厚させて、羽状の刺突文を施文する。358は口縁端部を逆台形状に肥厚させるもので、波頂部には棒状の突起を横並びに2列貼り付けている。地文は羽状縄文である。

359～362は、縄文地や無文地に幾何学的な沈線文を施文するものである。359の口縁端部外側ははや肥厚気味で面取り面には、斜方向の刻目が入る。360の口縁端部は丸く突き出す。361・362の肥厚した口縁端部が明確となり、外方へ短く突出する。361の口縁端部外面には羽状の刺突文が施文される。また、362の外面には赤色顔料が塗布される。

363～365は大きく開く口縁部で、その口縁端部は肥厚する一群である。363の口径は21.0cmで、外面全体に施文される。口縁部～胴部は縦縞状の条線文で、口縁部と頭部直下は二重の鋸歯文（沈線文）が施文される。地文は縄文である。364の口径は21.0cmで、外面全体に施文される。口縁部～頭部付近は縦縞状のヘラ描き条線文、頭部～胴部は円弧や斜線の沈線文が施文される。地文は縄文である。この364の放射性炭素年代測定では7985±30BPという結果が得られている。363・364とも横位突帯は頭部のみの1条で、縦位突帯は2条である。

365の口径は24.6cmで、横位突帯以下はひし形をモチーフとした沈線文が施され、縦位突帯にあたる部分は平行沈線文間に短沈線文を組み合わせたものを縦位2列に施文している。横位突帯は2条だが、口縁端部側へ集約的となる。

##### 【壺】

366と367は壺の口縁部である。366の口径は8.8cmで、刺突列点文や波状文が施される。口縁端部は肥厚しないが、文様は第Ⅴ・Ⅶ類土器の壺とは異なり第Ⅷ類土器に近い。367の口径は9.0cmで、縦縞状の沈線文が施文される。口縁端部は丸く肥厚している。

#### 第Ⅸ類土器 (368～389)

深鉢や壺の口縁端部が肥厚し、沈線文による文様帯が発達するもので、断面形は三角形や板状となるもの。縄文地や無文地に沈線文や刺突列点文などが施文される。

深鉢の口縁端部には羽状ないし波状の沈線文も施され、胴部には円弧状や斜線、平行線の沈線文に沿うようにし刺突列点文を施文するという文様構成上の特徴がある。

a) 深鉢Ⅸ-1類 (368～380)

口縁端部外面が文様帯となり、その断面形は三角形状となるもの、肥厚気味の口縁部も含めた。文様は、沈線文に沿って円形の刺突列点文が並ぶものが多い。

368～370・372～375は平口縁である。368の口縁端部は丸く肥厚気味で、その端部には羽状の刺突文が施される。口縁部外面は縄文地文で、横位の沈線文の上下段に円形の刺突列点文が一例施文される。369の口径は22.8cm、口縁部は大きく外反し、その端部は直立気味に面取りされる。370は371と同じく口縁端部は水平に突出させている。

372は短く屈曲する口縁部で、その端部は370よりも下垂気味である。端部外面には波状文が施文される。373は橋状把手を有するもので口径は17.7cmである。口縁端部は直立気味に面取りされ、縄文施文である。外面の文様構成の類似性からこの分類に入れた。

374は短く屈曲する口縁部で胴部は膨らむ。口縁端部は372よりも下垂する。375は口径14.3cmで、短く屈曲する口縁部に丸く膨らむ胴部が接続する。縦位突帯もある。口縁端部は374よりもさらに肥厚する。

371・376は波状口縁である。371は口径17.0cmで、口縁端部は丸みを帯び、太く肥厚して外方へ突出する。横位突帯と縦位突帯を区画線とし、その内部を斜位・円弧状の沈線文で施文する。胎土自体が赤く発色しており、器表面は発泡による小孔が多く認められる。376は大きく開く口縁部である。口縁端部は三角形であるが、375よりも下方に突出させている。口縁端部外面は波状文と刺突列点文が施文される。

377～380は胴部や底部資料である。沈線文と刺突列点文による文様構成が369～376と酷似していることから、この分類に入れた。

b) 深鉢Ⅸ-2類 (381～384)

Ⅸ-1類よりも口縁部の肥厚が拡大し、板状の粘土帯を貼り付けたような形状のものとした。口縁端部外面は刻目の直下に波状文 (381・382) や羽状文 (383・384) が施文される。

【壺】 深鉢Ⅸ類と型式的に近縁性の高い壺を一括した。

a) 壺Ⅸ類 (385～389)

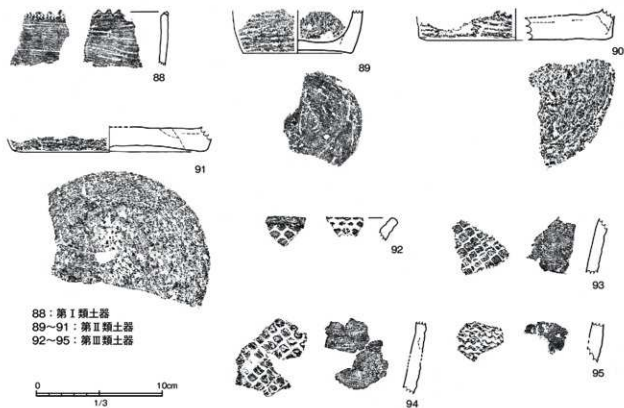
深鉢Ⅸ-1類の口縁端部形態と類似したものを取り上げた。口縁端部は肥厚するもの、断面三角形となるもので、口縁部外面は沈線文の施文や刻目突帯を貼り付けた文様である。

385～388は壺の口縁部である。385の口径は10.5cmで、口縁端部は三角形状となる。386の口径は11.0cmで、断面三角形状の口縁端部は下垂気味となる。387は大きく外反する口縁部で口径は9.7cm、刻目突帯が縦位に数条貼り付けられている。口縁端部は内傾気味に面取りされる。388は口径10.2cmの細頸状に開く口縁部である。口縁端部は断面三角形で、水平に突出する。

389は頸部付近である。頸部外面には横位の沈線文、その上下は鋸歯状(三角形)の沈線文が施文される。

第Ⅹ類土器 (390～392)

器面の外面に網目状の熱糸文が施文される深鉢である。390・391は口縁部付近、392は胴部付近の破片である。



88：第Ⅰ類土器  
89～91：第Ⅱ類土器  
92～95：第Ⅲ類土器

第34図 縄文時代早期土器実測図(1)

#### b) 土製品

土製品としては、土製耳飾（耳栓）と土製円盤および土器片加工品が出土した。

##### 土製耳飾（第73図 393～399）

土製耳飾（耳栓）は7点出土し、全て図化掲載した。滑車状耳栓（内山ら2012）とされるもので内部が中空なもの（393～398）と内部が充実したもの（399）がある。施文のある面を表面とした。

393～398は滑車状耳栓で内部が中空なものである。破片のものも含めて内面2箇所に稜を持つものと考えられる。393は、外面に抉りを持つ。表面には沈線文を細かく施文して鋸歯状の文様となる。394は表面径8.65cm（復元径）、裏面径8.5cm（復元径）で、表面には鍵手状文と沈線文の組み合わせが施文される。395は表面径9.3cm（復元径）、裏面径8.6cm（復元径）で、393や394と類似した鋸歯状文（山形文）が施文される。396・397は細片化が顕著であるが、別個体とみられる。398は内側に突出部を持つものである。

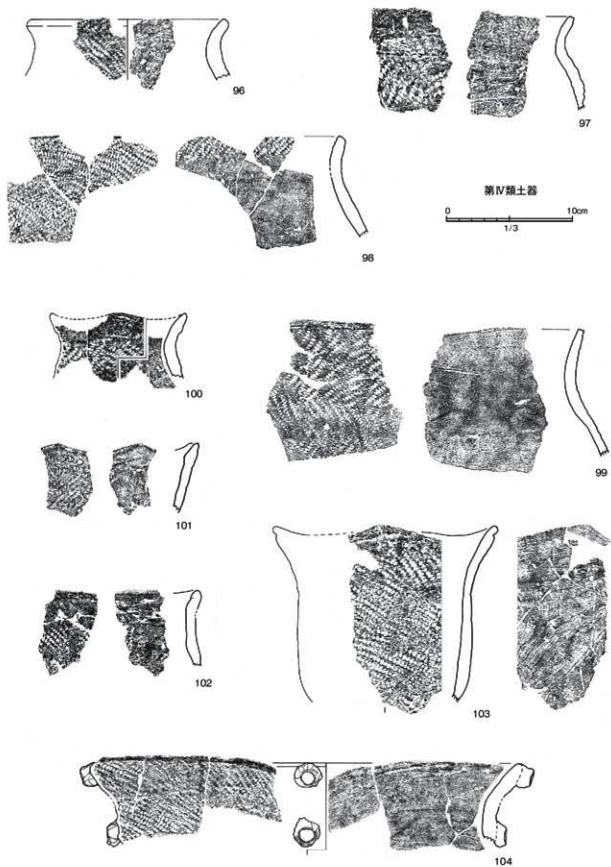
399も滑車状耳栓であるが、内部は充実しているものとした。内部には抉りが1箇所入る。表面は長めの沈線文を重ねた文様がある。

##### 土製円盤（第73図 400・401）

土製円盤は土器の破片を円盤状に再加工したもので、破断面を面取りするといった明らかな再加工の痕跡を確認できたものは2点である。400・401ともに縄文土器深鉢の胴部片を用い、周縁を研磨している。

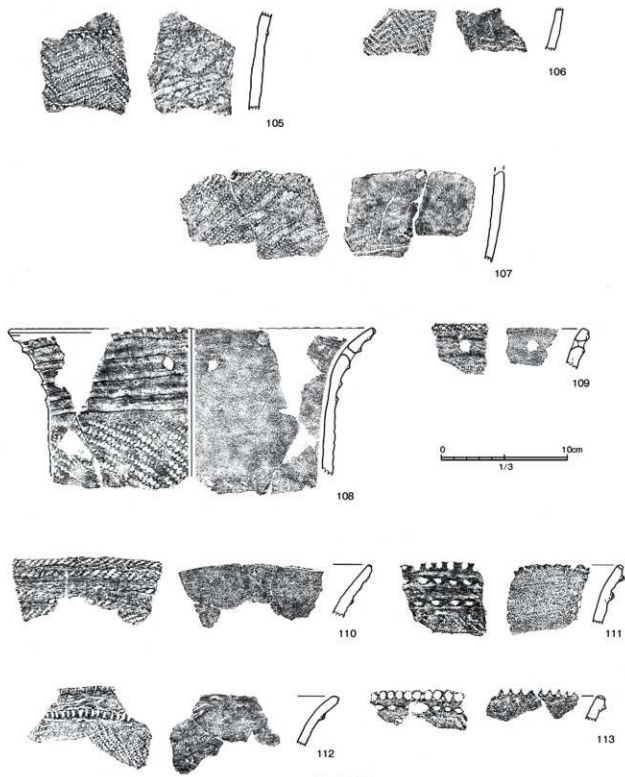
##### 土器片加工品（第73図 402）

402は縄文土器深鉢底部の一端に円孔を1箇所穿ったものである。破断面には加工痕は認められない。補修孔とも考えられるが、垂飾品の可能性もある。



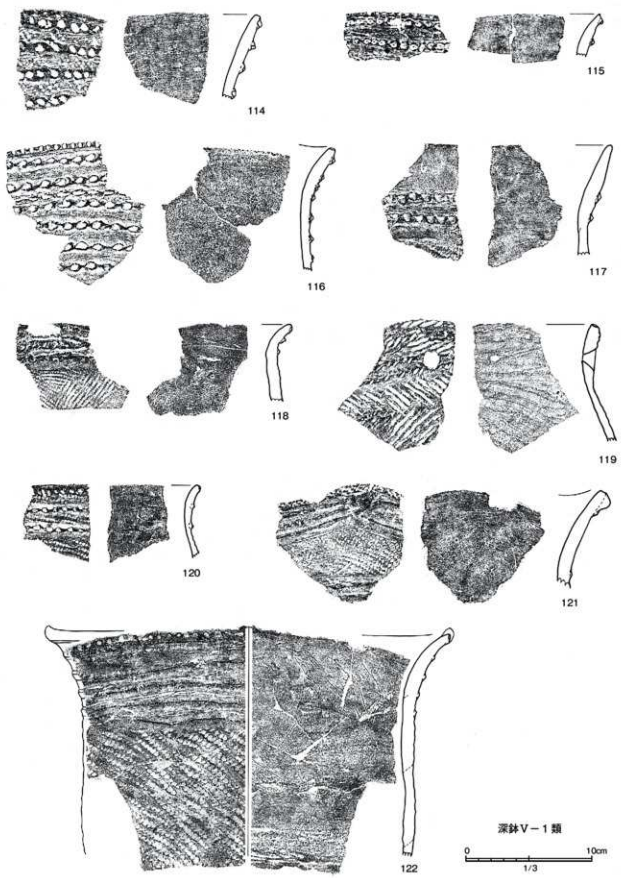
第35図 縄文時代早期土器実測図(2)



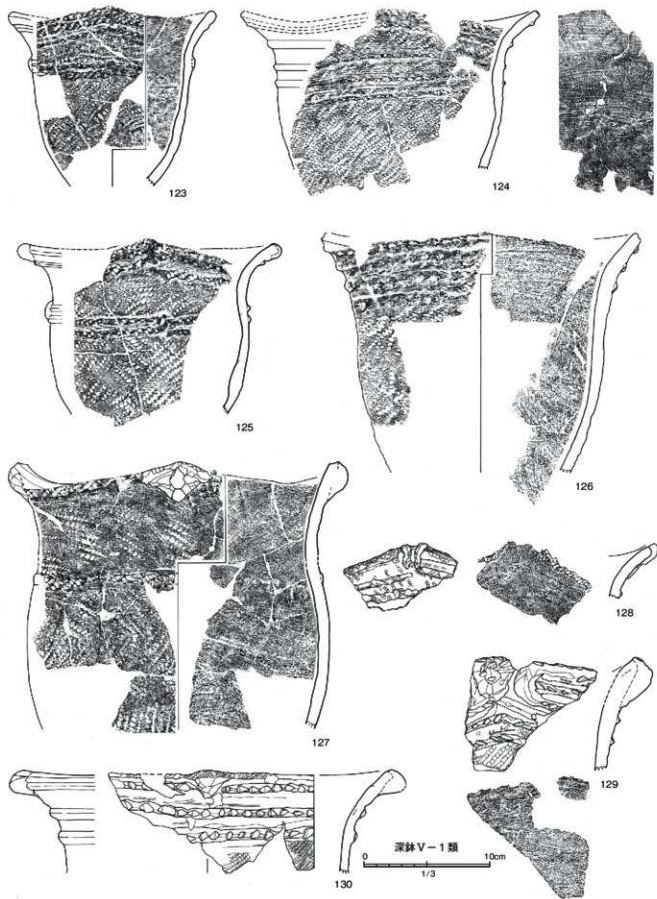


105~107 : 第Ⅳ類土器  
 108~113 : 深鉢Ⅴ-1類

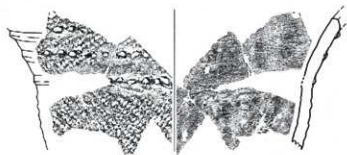
第36圖 縄文時代早期土器実測図(3)



第37図 縄文時代早期土器実測図(4)



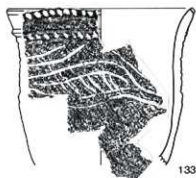
第38圖 縄文時代早期土器実測図（5）



131



132



133

131・132：深鉢V-1類  
133～136：深鉢V-2類



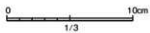
134



135



136

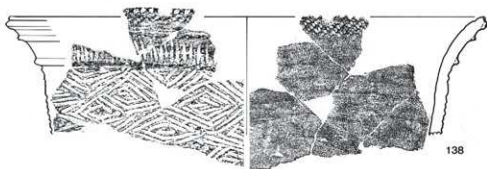


第39図 縄文時代早期土器実測図(6)



深鉢V-3類

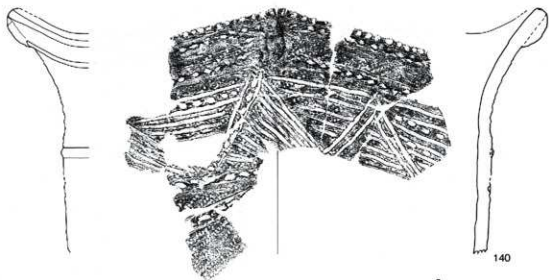
137



138



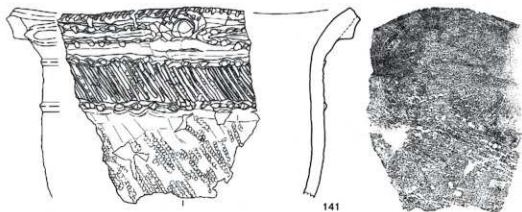
139



140

0 10cm  
1/3

第40圖 縄文時代早期土器実測図(7)



141

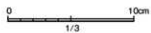


142

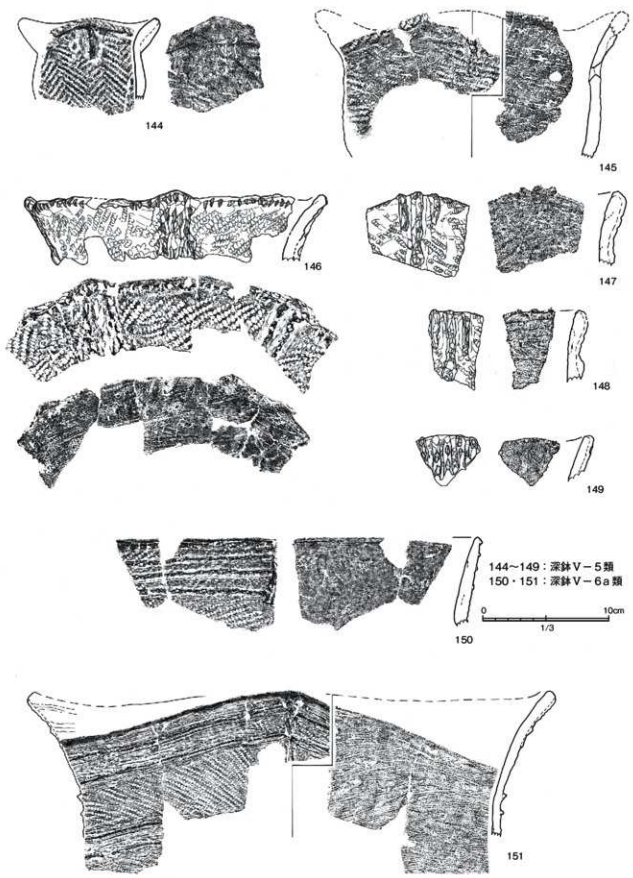


143

141・142：深鉢V-3類  
143：深鉢V-4類

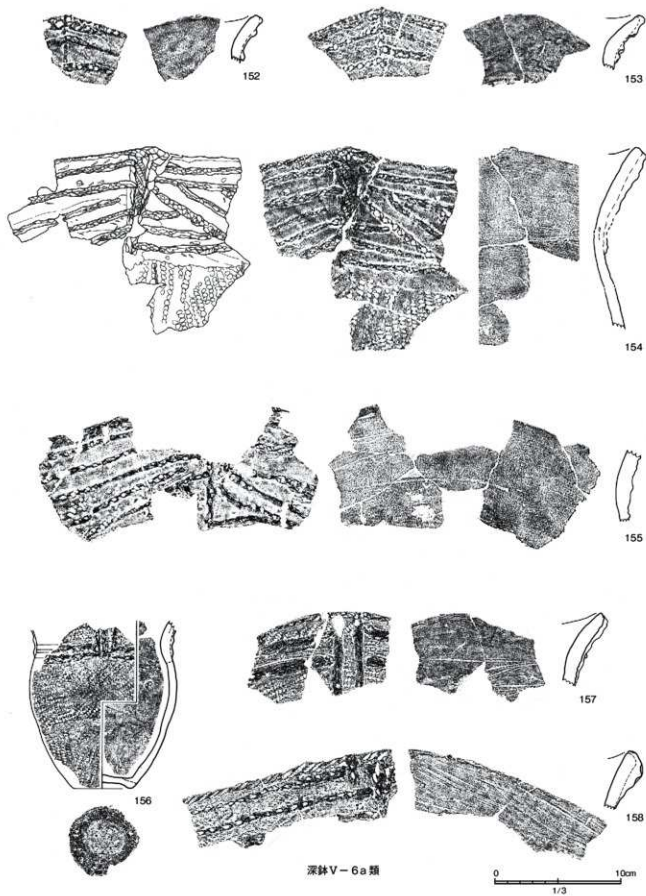


第41図 縄文時代早期土器実測図(8)



第42図 縄文時代早期土器実測図(9)





深鉢V-6a類

第43図 縄文時代早期土器実測図 (10)

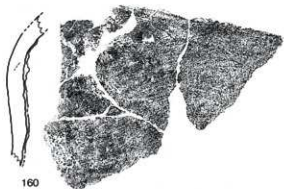
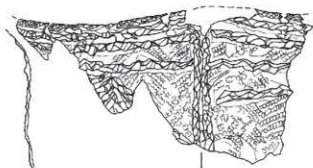




V-6a類



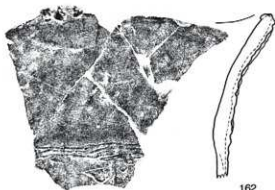
159



160

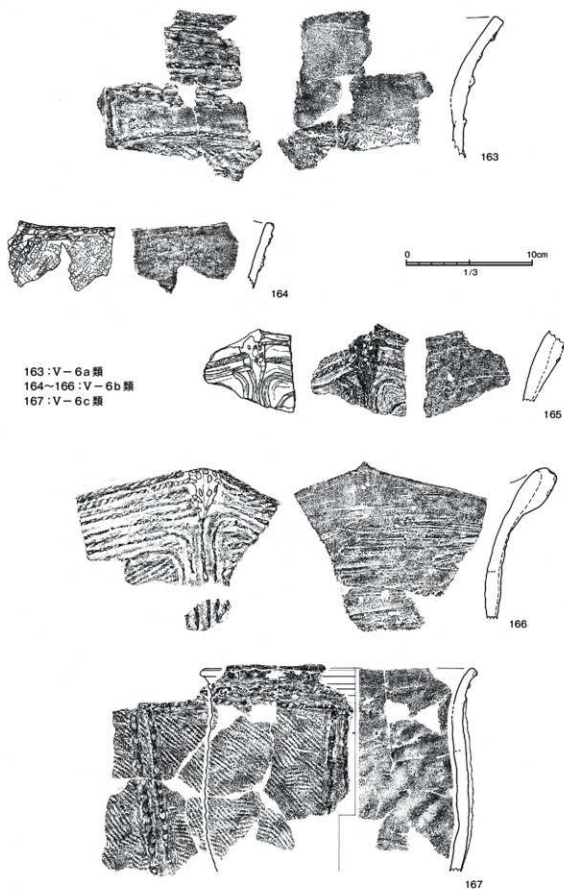


161

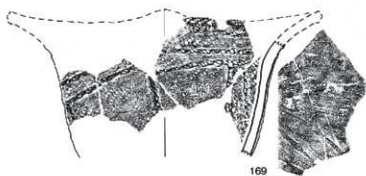
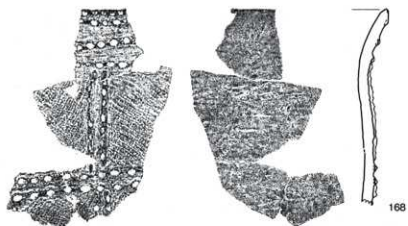


162

第44圖 縄文時代早期土器実測図 (11)

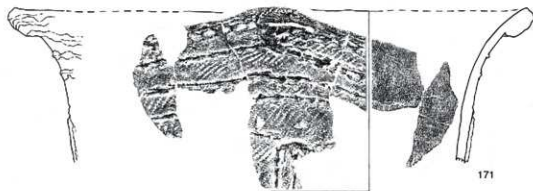
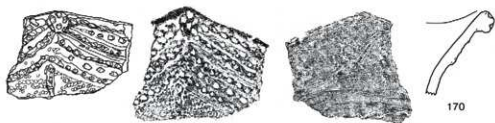


第45図 縄文時代早期土器実測図 (12)

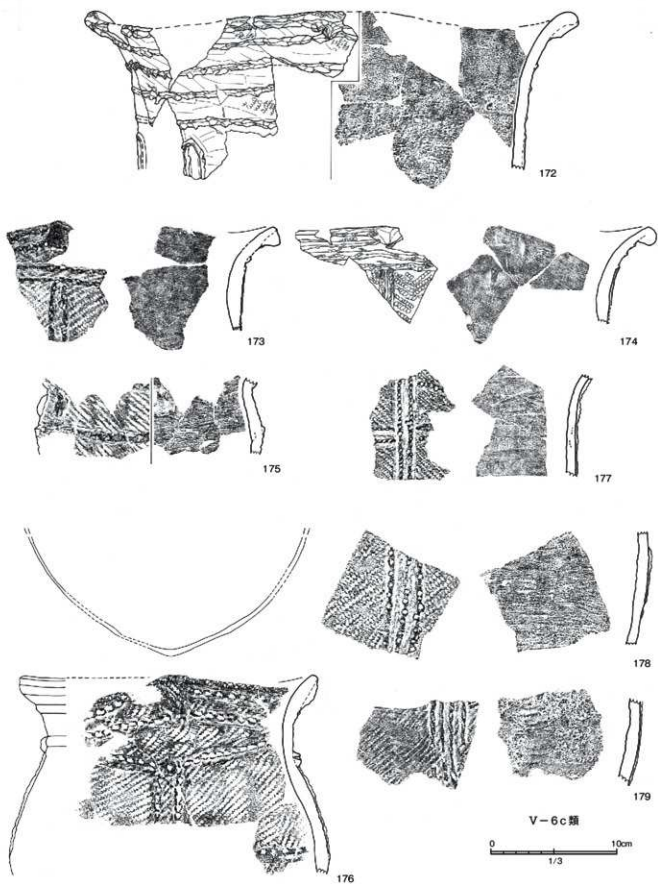


V-6c 類

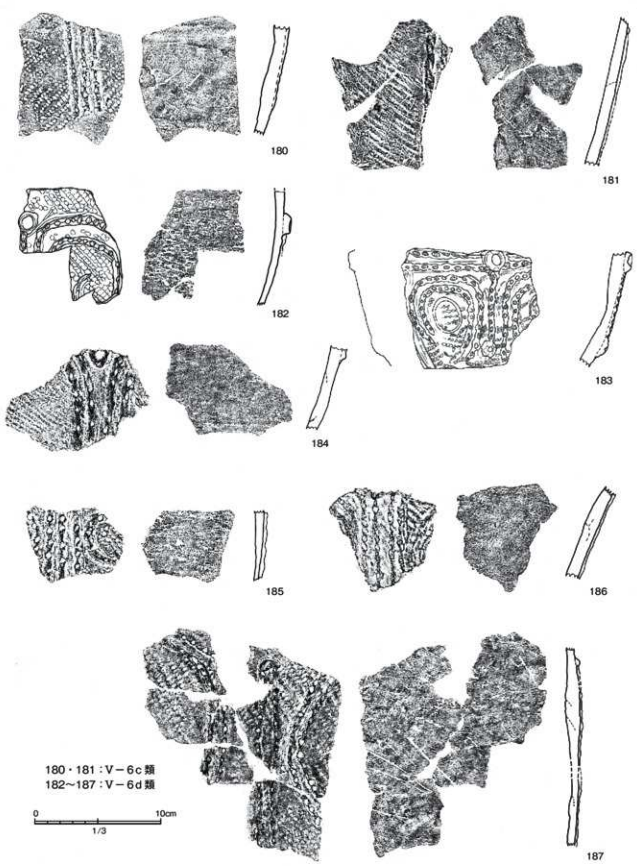
0 10cm  
1/3



第46圖 縄文時代早期土器実測図 (13)



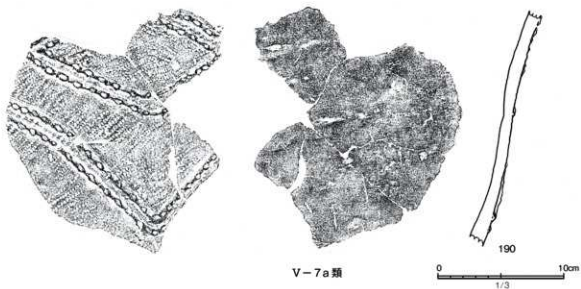
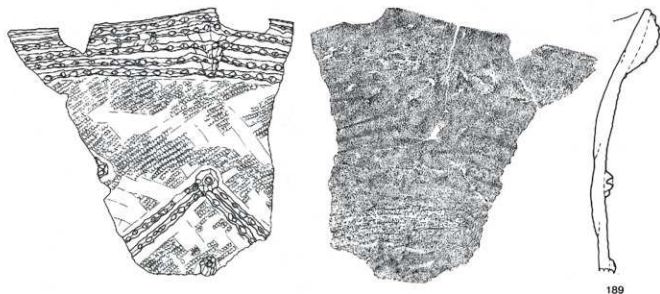
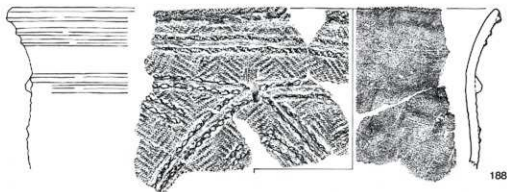
第47図 縄文時代早期土器実測図 (14)



180・181：V-6c類  
 182～187：V-6d類

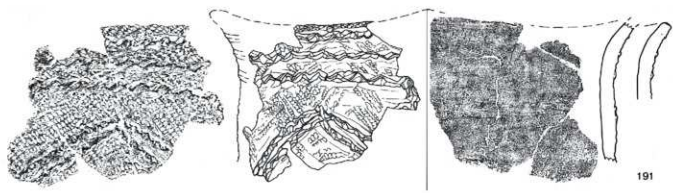
0 10cm  
 1/3

第48圖 縄文時代早期土器実測図 (15)



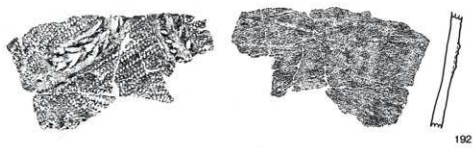
V-7a類

第49図 縄文時代早期土器実測図 (16)



191

191 : V-7a 類  
 192・193 : V-7b 類  
 194~197 : V-7c 類



192



193



194



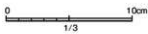
195



196

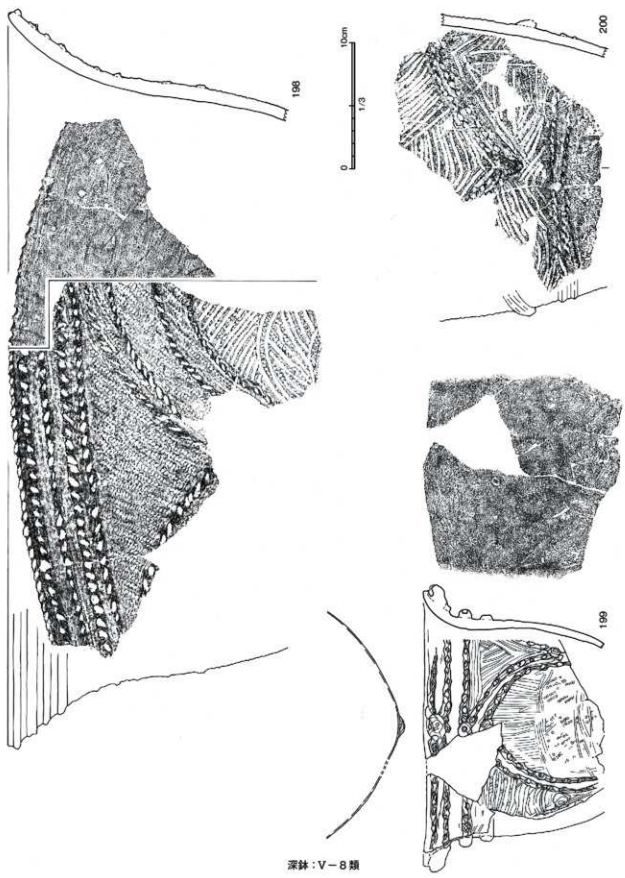


197



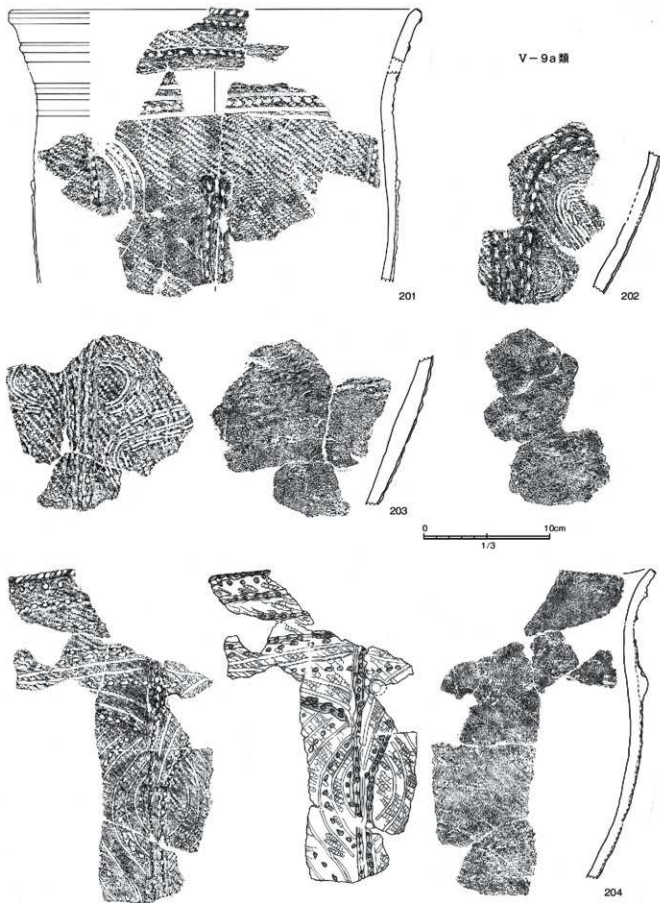
第50図 縄文時代早期土器実測図 (17)



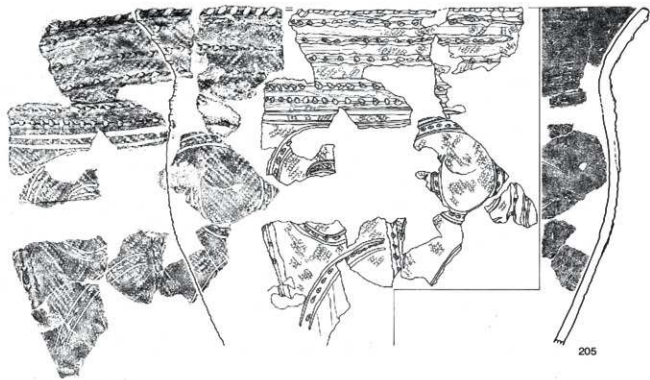


第51図 縄文時代早期土器実測図 (18)

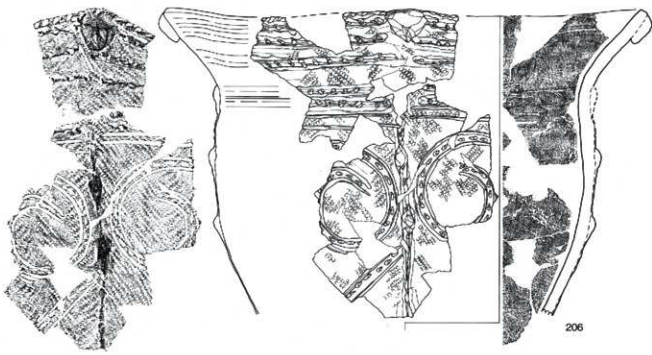




第52図 縄文時代早期土器実測図 (19)

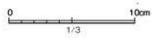


205

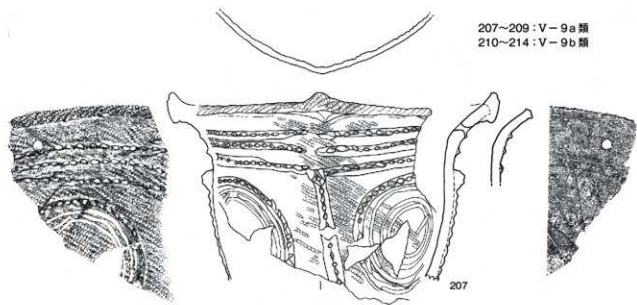


206

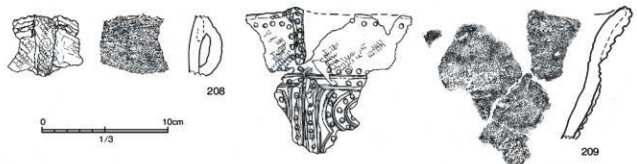
V-9a類



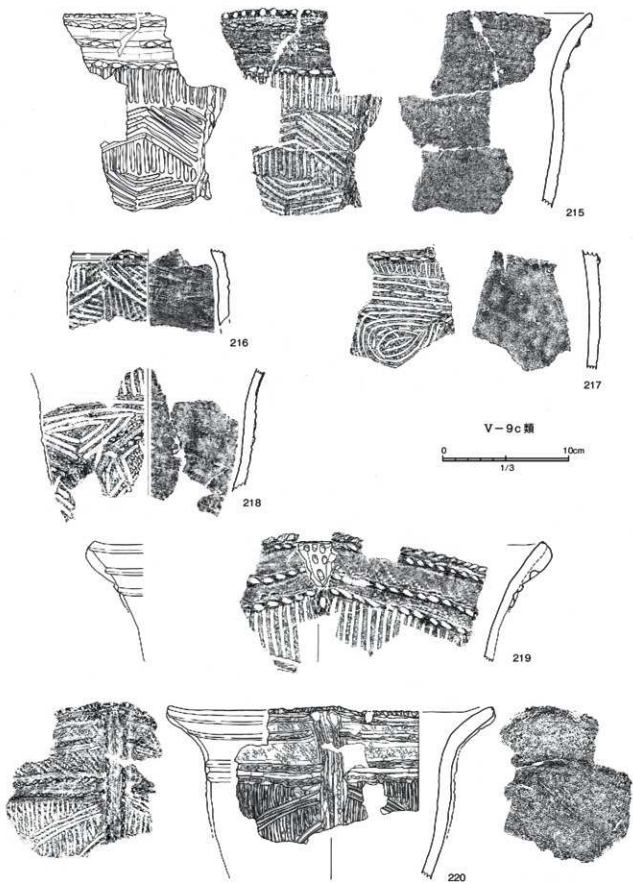
第53図 縄文時代早期土器実測図 (20)



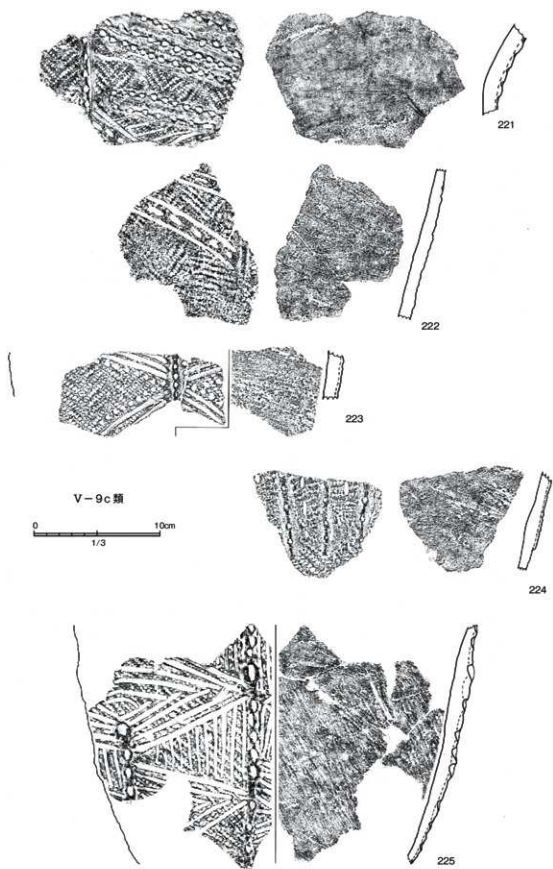
207~209 : V-9a類  
210~214 : V-9b類



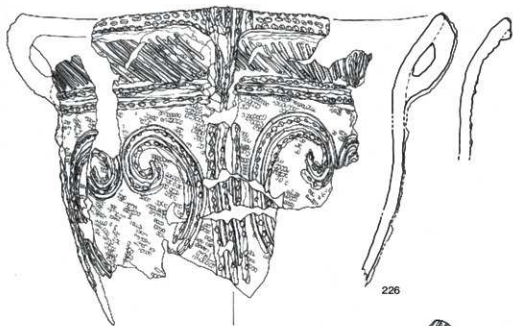
第54圖 縄文時代早期土器実測図 (21)



第55図 縄文時代早期土器実測図 (22)



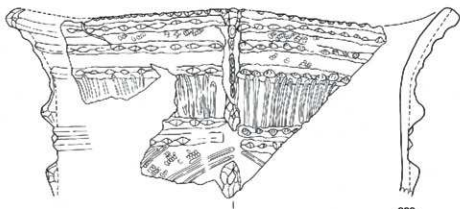
第56図 縄文時代早期土器実測図 (23)



226



227

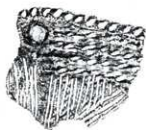


228

V-9d類



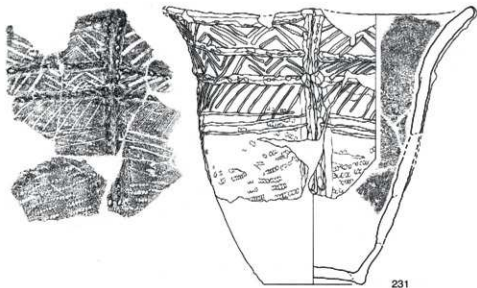
229



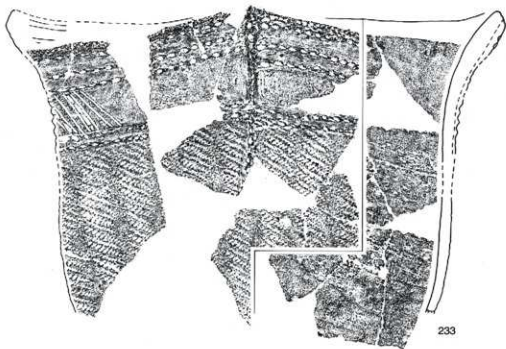
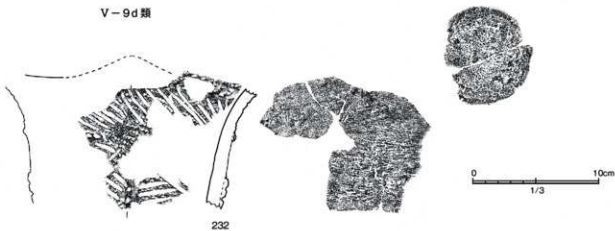
230



第57図 縄文時代早期土器実測図 (24)

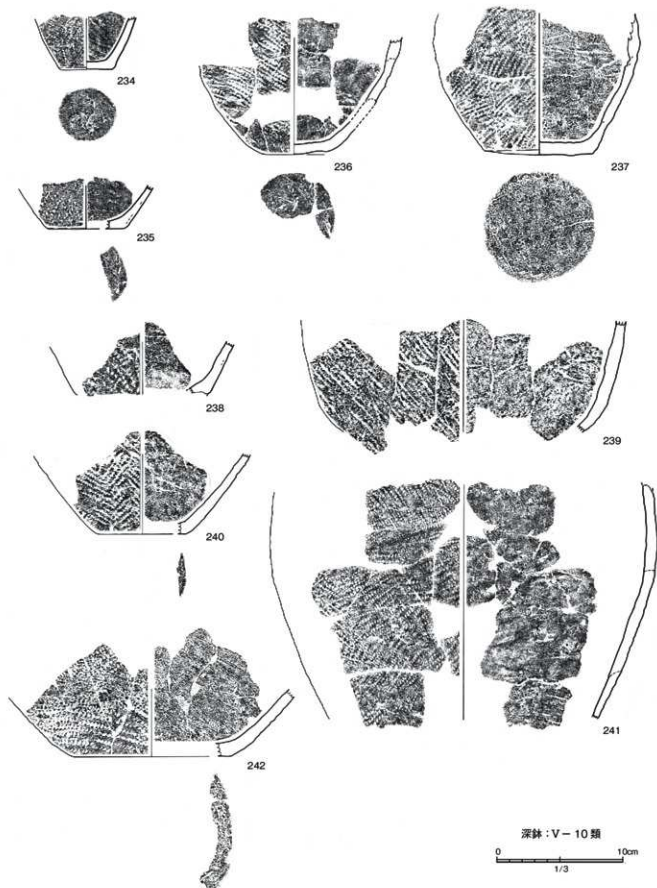


V-9d期



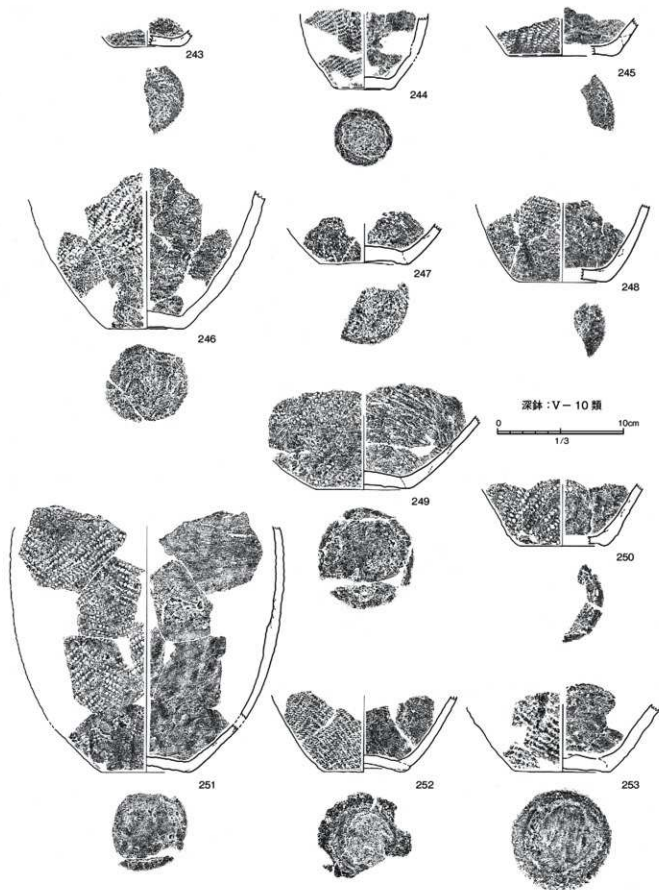
第58図 縄文時代早期土器実測図 (25)



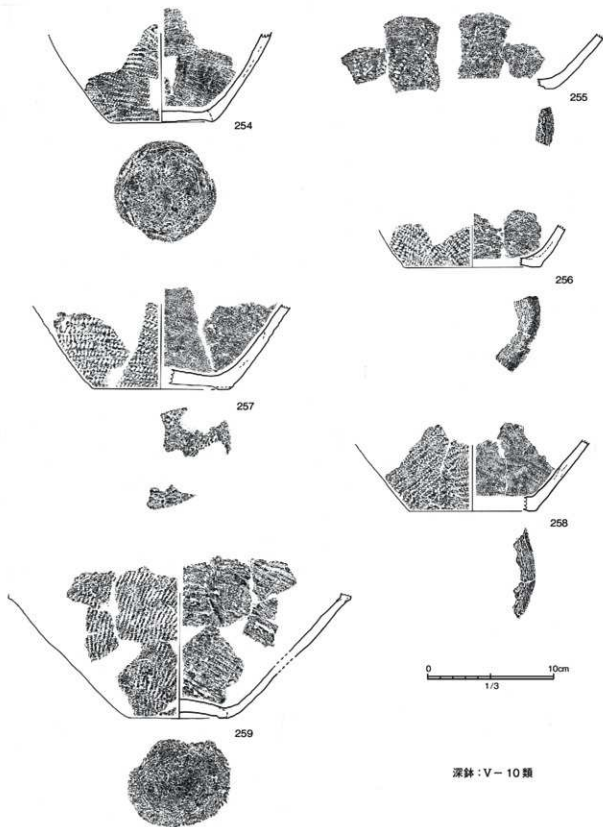


第59図 縄文時代早期土器実測図 (26)

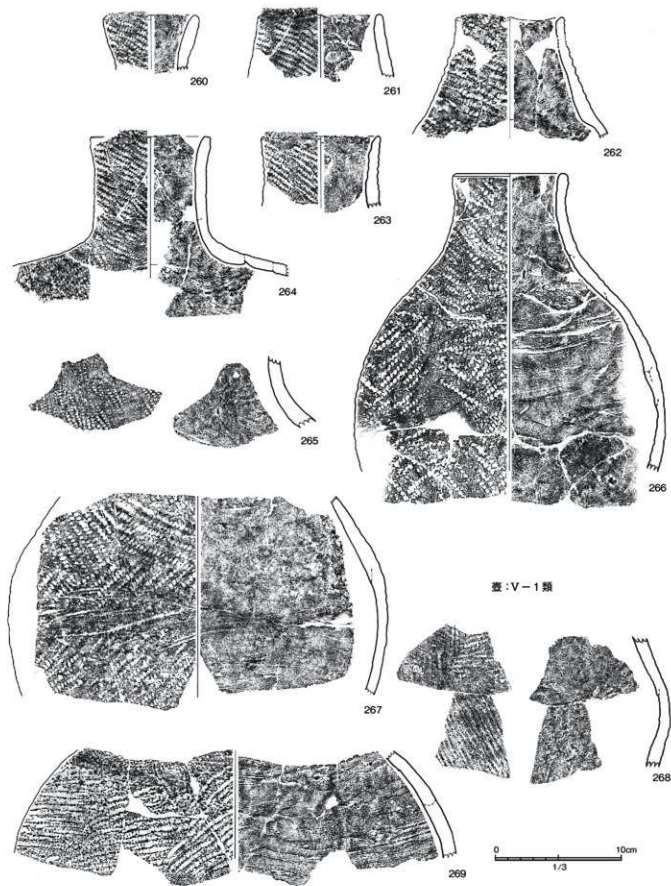




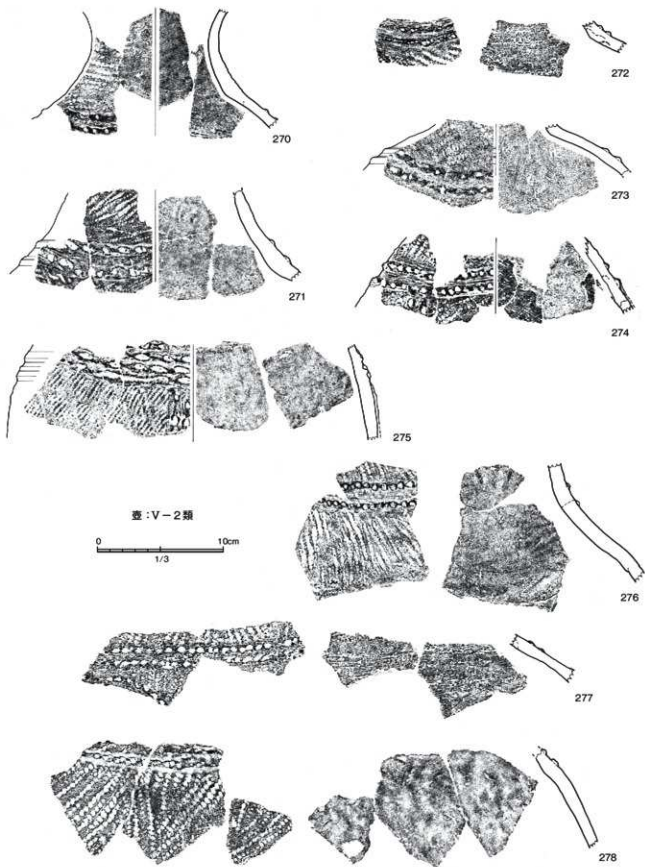
第60圖 縄文時代早期土器実測図 (27)



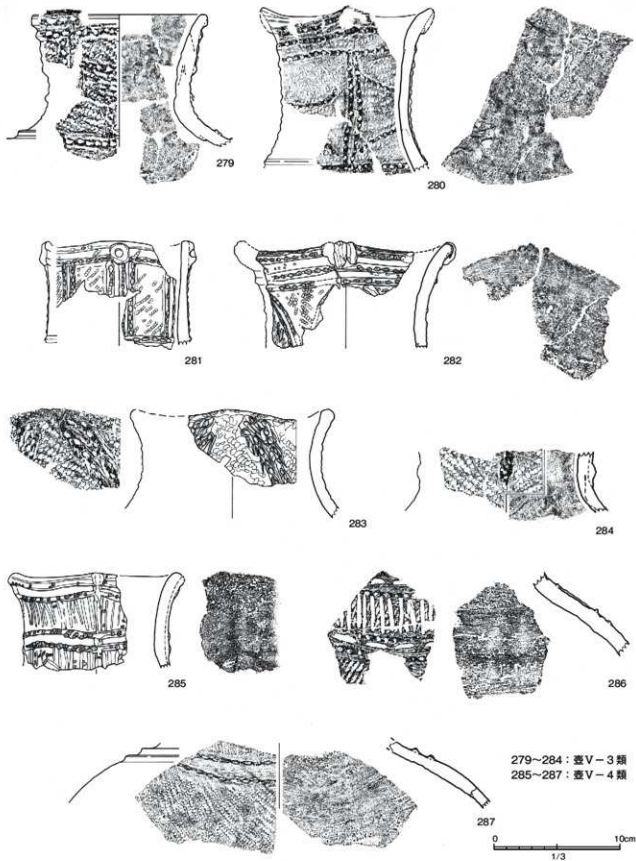
第61図 縄文時代早期土器実測図 (28)



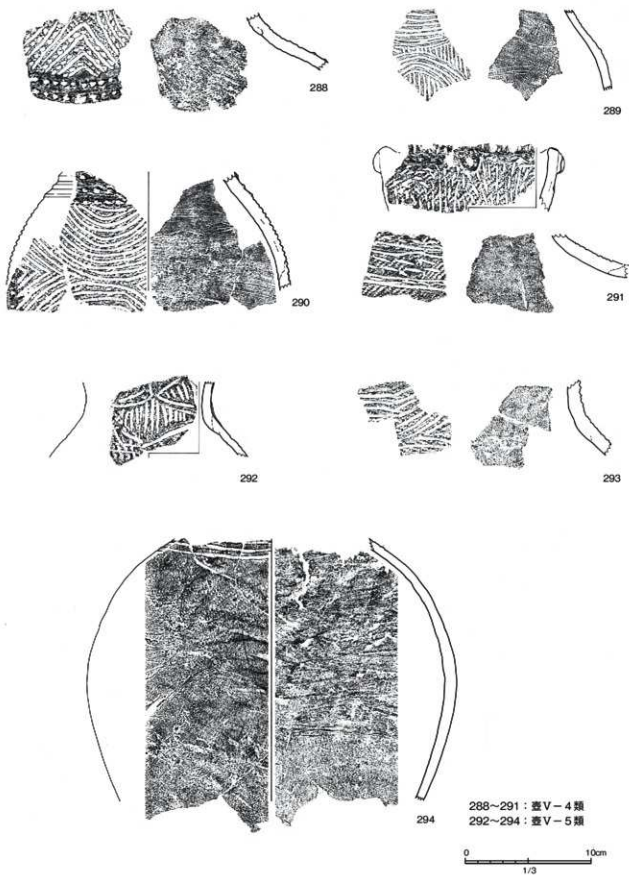
第62図 縄文時代早期土器実測図 (29)



第63図 縄文時代早期土器実測図 (30)

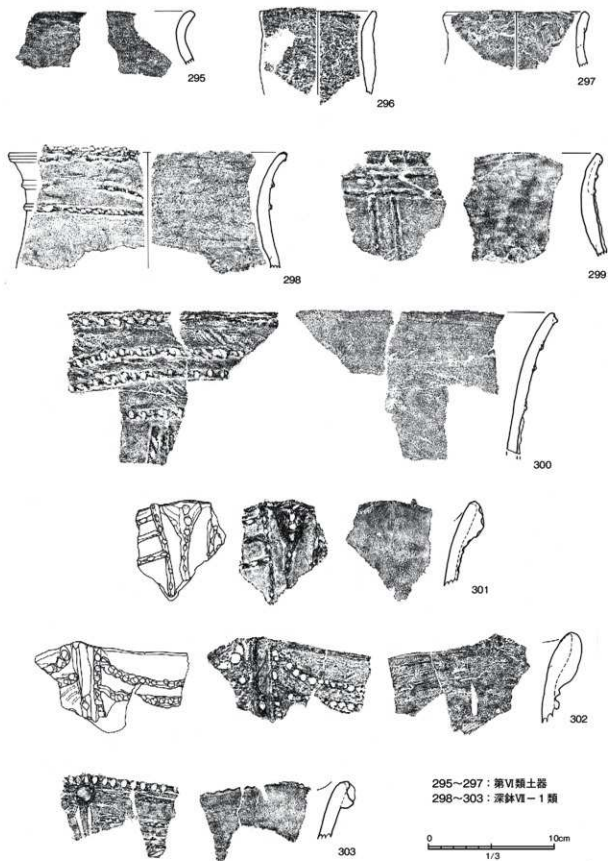


第64圖 縄文時代早期土器実測図 (31)



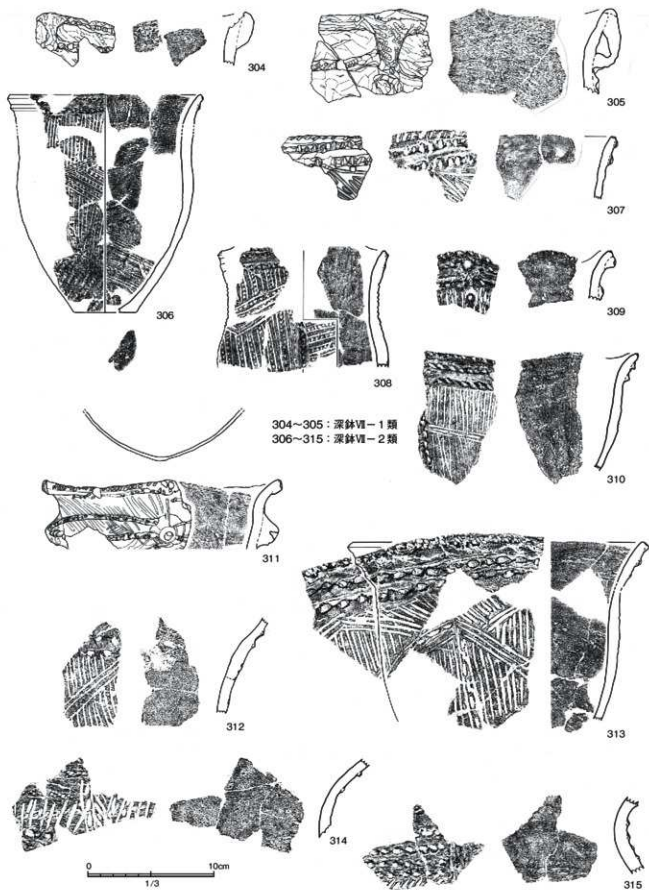
288~291 : 壺V-4類  
292~294 : 壺V-5類

第65図 縄文時代早期土器実測図 (32)



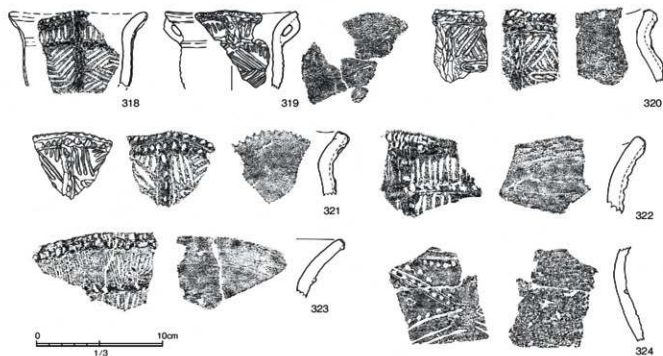
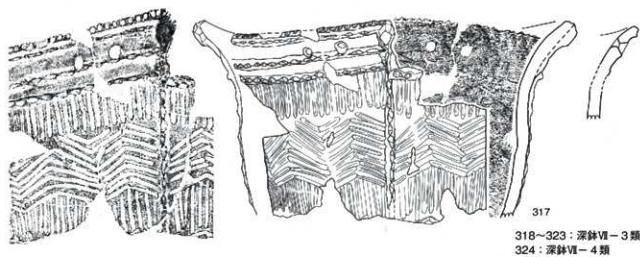
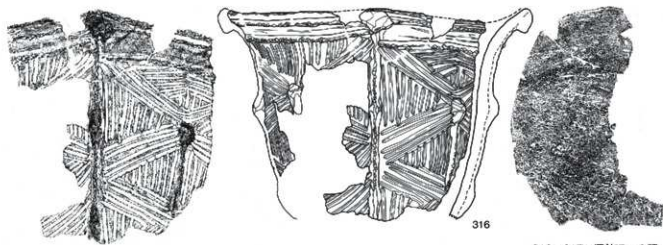
第66圖 縄文時代早期土器実測図 (33)



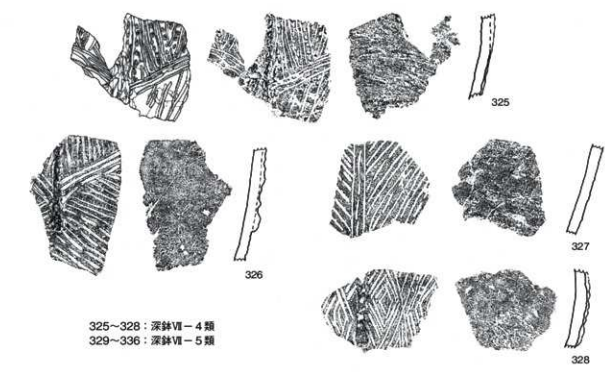


第67図 縄文時代早期土器実測図 (34)

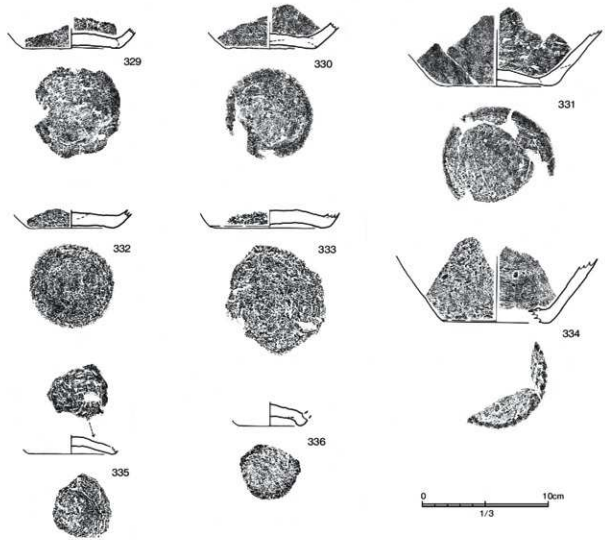




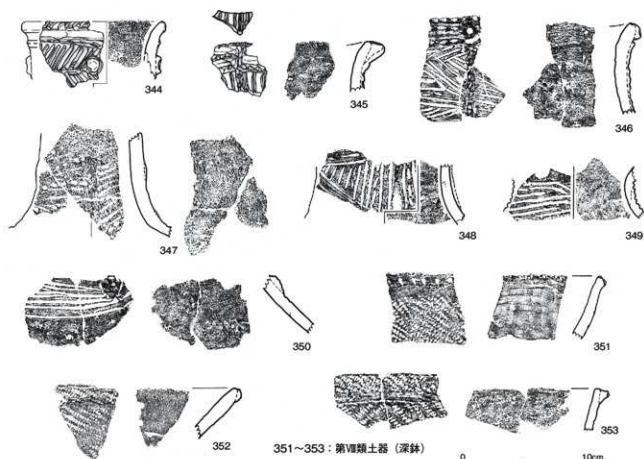
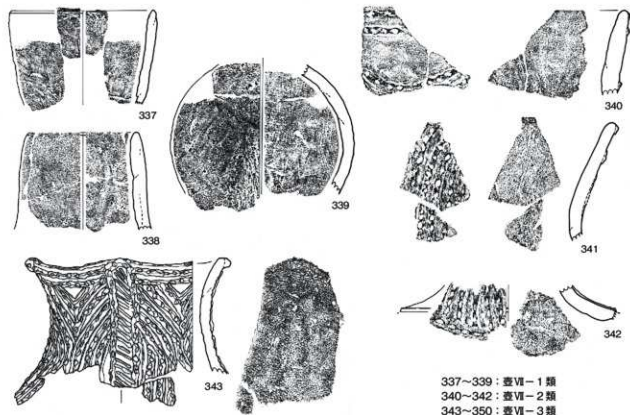
第68圖 縄文時代早期土器実測図 (35)



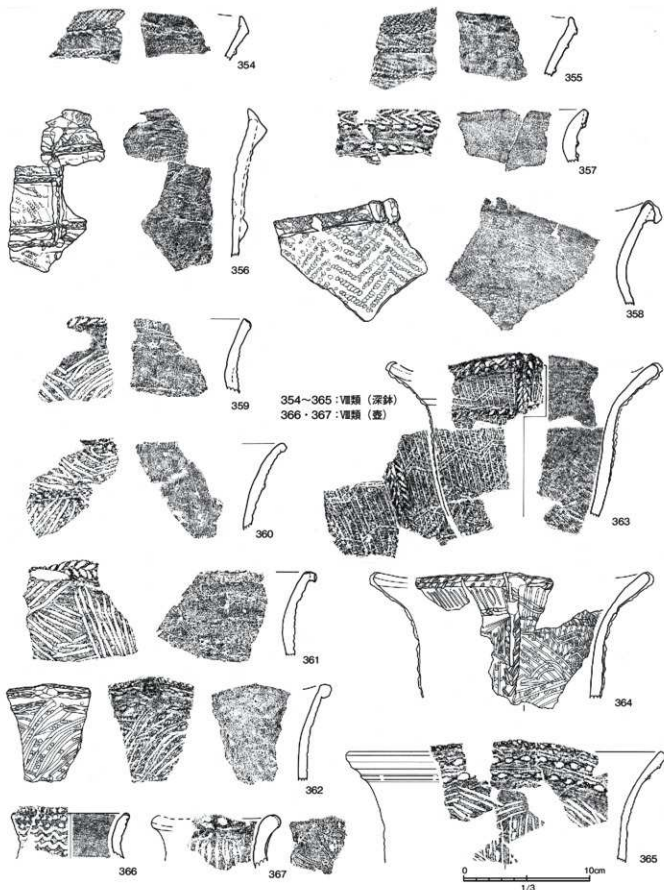
325~328 : 深鉢Ⅶ-4類  
 329~336 : 深鉢Ⅶ-5類



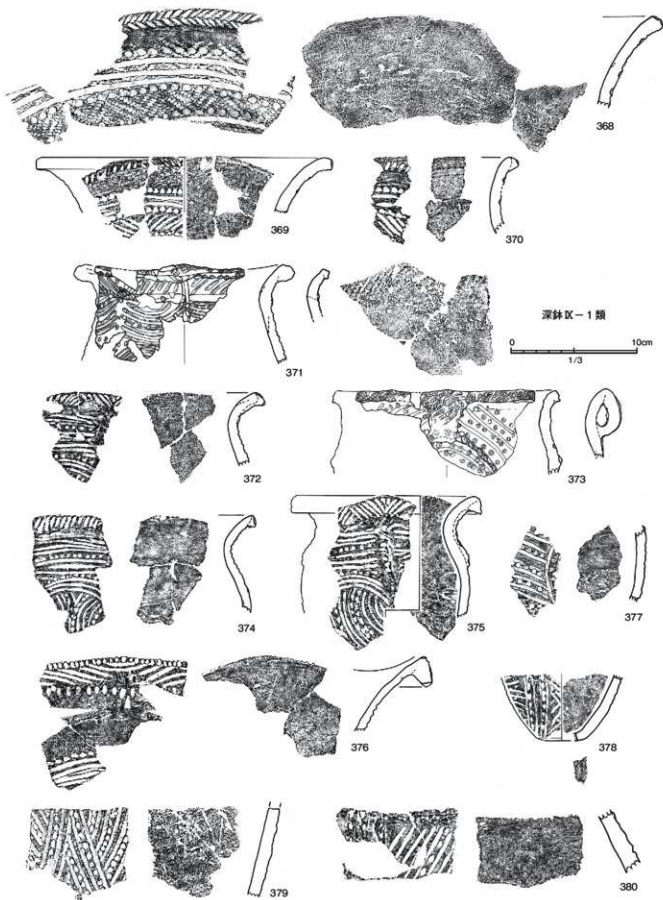
第69図 縄文時代早期土器実測図 (36)



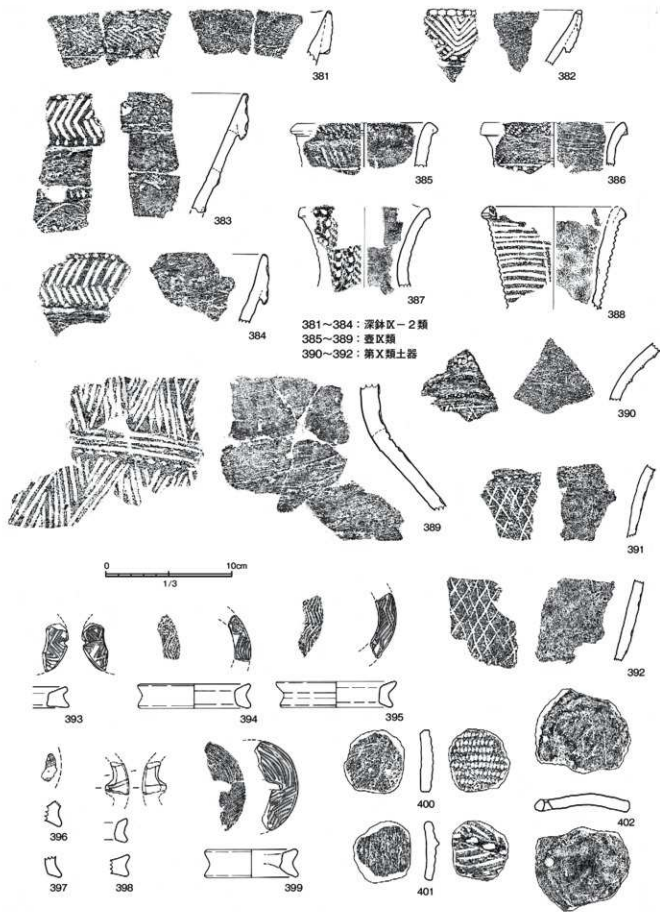
第70圖 縄文時代早期土器実測図 (37)



第71図 縄文時代早期土器実測図 (38)



第72図 縄文時代早期土器実測図 (39)



第73図 縄文時代早期土器・土製品実測図

## b) 石器

XI～XIII層から出土した石器の総数は1530点であり、XII層（626点）を挟むように前後の層からも数多く出土した。分布状況は、土器と同様の傾向があり特に大きな違いはみられない。利用石材で最も多いのはガラス質安山岩（多久産）である。石鏃、石匙、スクレイパーをはじめ様々な器種として利用されており、剥片を含めると出土数は737点を数える。ほかに黒曜石が649点出土したが、特に腰岳産（423点）、針尾島産（176点）が多い傾向がみられた。

ここでは142点を図化し、従来使用されている分類基準に対応して、器種ごとに分類し報告する。

### 石鏃（第77図 403～442）

打製石鏃が57点出土し、そのうち41点を図化した。石鏃については、既存の分類形式をもとに本遺跡から出土した石鏃の特徴から以下のように分類を行った。

I類（403～413）は特徴的な挟り・脚部を有する鋸形鏃に分類されるものの一群である。利用石材は、403～407はガラス質安山岩、408～412黒曜石（408～410は腰岳産、411・412は針尾島産）、413はチャートである。

II類（414～421）は形状を整えるための片面・両面の加工が周辺部にとどまっているために、素材剥片の形状を残しているものの一群である。利用石材は、414・415はガラス質安山岩、416～420は黒曜石（416・417は腰岳産、418～420は針尾島産）、421はチャートである。

III類（422～424）は鋸歯状の側縁部を持ち、基部の挟りが深いものの一群である。利用石材は、422・423は黒曜石（422は姫島産、423は腰岳産）、424はガラス質安山岩である。

IV類（425～427）は鋸歯状の側縁部を持ち、基部の挟りが浅いものの一群である。利用石材は黒曜石で425・426は腰岳産、427は桑木津留産である。

V類（428～430）は上記の分類にあてはまらない挟りのないものや浅いものの一群である。利用石材は、428はガラス質安山岩、429・430は黒曜石（429は腰岳産、430は姫島産）である。

VI類（431～442）は上記の分類にあてはまらない挟りの深いものの一群である。利用石材は、431～438はガラス質安山岩、439～441は黒曜石（439・440は腰岳産、441は桑木津留産）、442はチャートである。

### 石鏃未製品（第78図 443～454）

13点出土し、そのうち12点を図化した。石鏃と同規模で平面形が概ね三角形状であるが、先端部が鈍いものや無いもの（443～447）、加工が不十分な上、脚部が欠損しているもの（448～450）、全体的に加工が未熟なもの（451～454）がある。利用石材は443・447・451～453はガラス質安山岩、それ以外の7点は黒曜石（444・448～450は腰岳産・446・454は針尾島産・445は上牛鼻産）である。

### 尖頭状石器（第78図 455～460）

出土した6点すべてを図化した。石鏃に似るが、断面が石鏃と比べて分厚く概ね大きい。445は二等辺三角形平基タイプである。456は基部に挟りがあることから元は石匙であった可能性がある。457・458は基部が欠損しているが二等辺三角形平基タイプである。459は正三角形に近い平基タイプで側縁及び先端部を鋭く加工している。460は先端部が欠損しているが二等辺三角形平基タイプである。利用石材は、455～457はガラス質安山岩、458・459は黒曜石（458は上牛鼻産・459は腰岳産）460はホルンフェルスである。

### 石匙（第78図 461～465）

出土した5点すべてを図化した。概ね三角形状だが461は横長型、462～464は縦長形、465は台形に近く、



その大きさも28cm～6.7cmと大小がある。すべてガラス質安山岩製で、いずれもつまみ部は一端に両側縁から挟入状に剥離調整にて作り出す。両面ともに加工が及び左右対称形になるよう刃部を作り出す。

#### 石錐（第78・79図 466～468）

4点出土し、そのうち3点を図化した。466・467は幅広の剥片を素材とし、一端に丁寧な調整を加えて錐部を作り出している。468は分厚い剥片を一部に調整を施し尖らせているが、先端稜線は摩擦している。

利用石材はすべてガラス質安山岩である。

#### スクレイパー（第79・80図 469～482）

17点出土し、そのうち14点を図化した。469～475・482は厚みのある剥片を用いて縁周加工を施し弧状の刃部を形成したものである。482は加工が未熟で未製品の可能性がある。476・481は厚みのある剥片を用いて直線的な刃部を形成したものである。476・477は一部欠損が見られるが、同様に直線的な刃部を有していたと推測される。479・480は縦長の剥片を素材とし側縁に直線または円弧状を呈する刃部を形成したものである。479は両側縁に、480は1側縁に刃部をもつ。

利用石材は、469～480はガラス質安山岩、481・482はチャートである。

#### 楔形石器（第80図 483～490）

出土した8点すべてを図化した。剥離調整の在り方から縦長方形のもの（483～487）と不定形のもの（488～490）がある。横断面は概ねレンズ状をなしている。利用石材は483～485はガラス質安山岩、486～490は黒曜石（486・487・489は針尾島産、488は上牛鼻産、490は腰岳産）である。

#### 二次加工剥片（第80・81図 491～496）

19点出土し、そのうち6点を図化した。いずれも剥片の側縁の一部に未連続の加工を施したものである。下側縁両面に加工痕が見られるもの（491・495・496）と片側縁片側に加工痕が見られるもの（492・493・494）がある。利用石材は、491～493はガラス質安山岩、494・495は黒曜石（494は腰岳産、495は針尾島産）、496は石英である。

#### 使用痕剥片（第81図 497・498）

出土した2点すべてを図化した。497はガラス質安山岩製の不定形剥片で側縁部に刃こぼれのような使用痕がみられる。498は黒曜石製（腰岳産）の不定形剥片で下部及び側縁部に使用の痕跡が見られる。

#### 石核・剥片（第81～84図 499～512）

石核が18点、剥片が1243点出土し、そのうち石核12点、剥片2点を図化した。石核は形態を整えるとはみながたい剥離面をもつ。

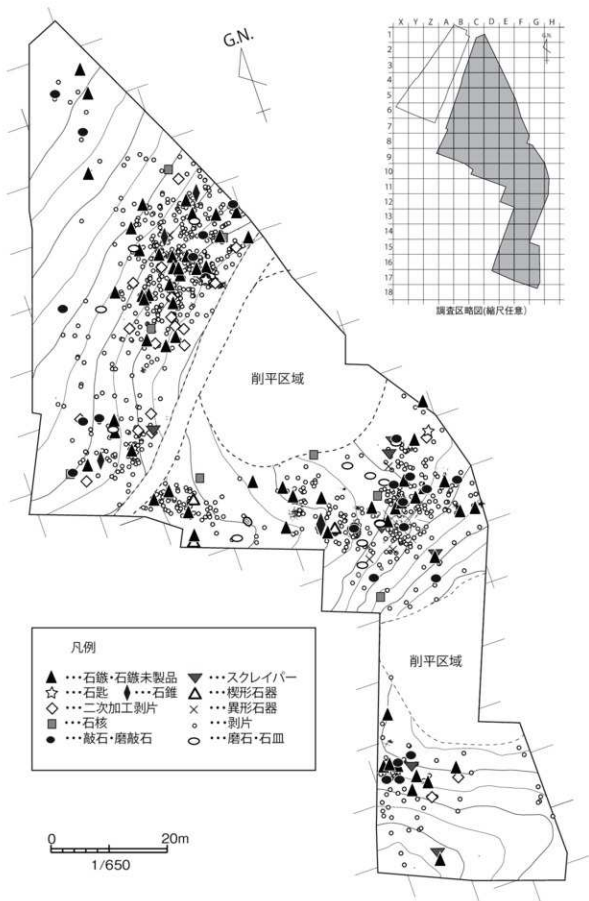
石材はガラス質安山岩が5点、黒曜石が7点（腰岳産2点・針尾島産3点・上牛鼻産1点・三船産1点）、剥片はガラス質安山岩が2点である。これらは製品、未製品の石材と概ね対応している。三船産に関しては、製品・未製品は見られないが、石核・剥片が出土しているため製品を作っていたと考えられる。

接合資料Ⅰ（503+504）は、ガラス質安山岩の石核と剥片から構成されている。ガラス質安山岩に関しては石核が8点、剥片が645点と最も多く出土している。

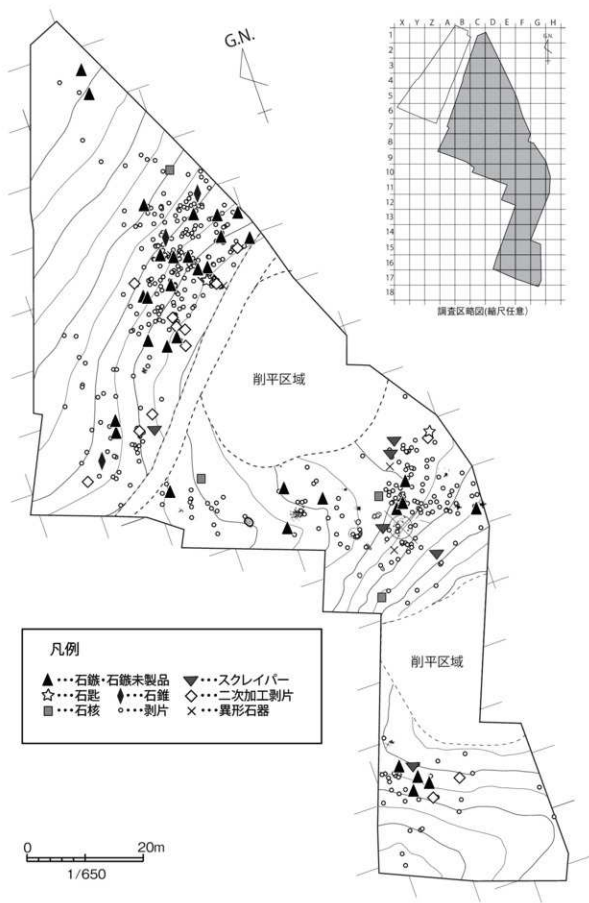
#### 異形石器（第84図 513～519）

定型的な石器とは異なる形状を呈して機能を類推することはできないもので、出土した7点すべてを図化した。513は縦長の台形状で上下左右側縁の両面に加工痕が見られる。514～517は両側縁に挟りをもつものである。514はX字形の平面形でいわゆるトロトロ石器だと考えられる。515は上部に加工を施

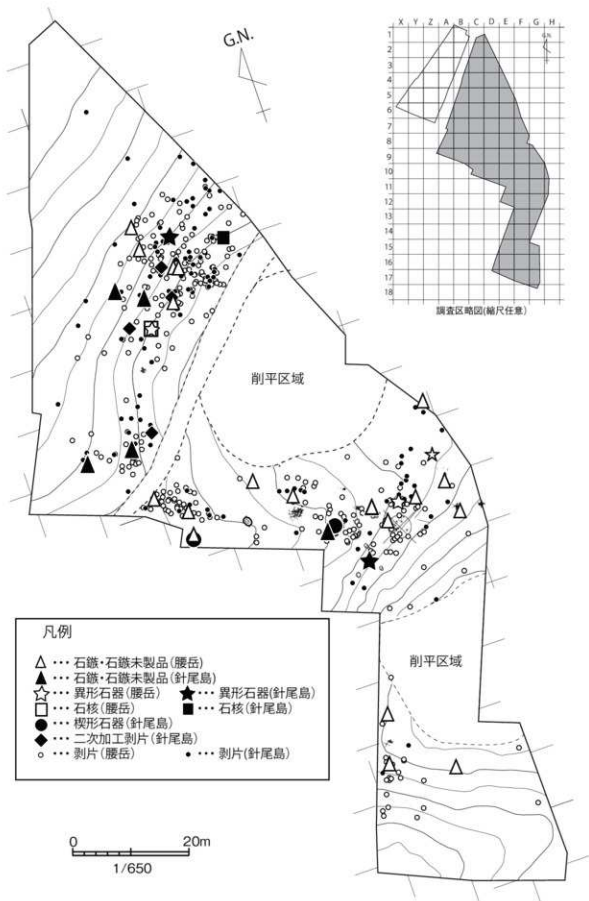




第74図 縄文時代早期石器分布図



第75図 ガラス質安山岩分布図



第76図 黒曜石(腰岳産・針尾島産)分布図

し刃部を形成する。516は琴柱形に近い平面形で鋸歯状の側縁部をもつ。517は両側縁から挟入状に剥離調整しつまみ部のようなものが形成されている。518・519は下部が欠損しているが、上部からややくびれながら扇状に広がる形状だと思われる。

利用石材はガラス質安山岩（513～516）と針尾島産の黒曜石（517～519）である。

#### 礫器（第84図 520）

34点出土したが、そのうち1点を図化した。520の利用石材は砂岩で、長軸上の下側縁面に加工を施し刃部を作り出している。刃部に潰れや摩耗が確認できる。

#### 打製石斧（第84図 521・522）

出土した2点すべてを図化した。521は基部と刃部がほぼ同じ幅で短冊形に近い平面形を呈する。両側縁部を加工し刃部を形成する。522は刃部が欠損しており基部のみの資料であるが、本来的には短冊形を呈すと考えられる。利用石材はいずれもホルンフェルスである。

#### 磨石（第85図 523・524）

14点出土したが、そのうち2点を図化した。523・524はともに欠損品であるが、平面形態は丸みのある形状から円形または楕円形だと推測され、いずれも表裏両面に磨痕が確認できる。

利用石材は両輝石安山岩（523）と溶結凝灰岩（524）である。

#### 敲石（第85図 525～529）

16点出土したが、そのうち5点を図化した。525は小型で球状に近く下部に敲打痕がみられる。526は扁平な隅丸方形で被熱による赤化とススの付着がみられる。敲打痕が周縁をめぐる。527は扁平で円形に近く、間接打法によるくぼみとススの付着が確認される。長軸端部に敲打痕がみられる。528は卵形に近い球状で、両端部と表裏面の一部に敲打痕がみられる。529は小型で、平面形は円形で表面は球状であるが裏面は磨減させている。周縁部に敲打痕が見られる。

利用石材は砂岩（525～527）と両輝石安山岩（528・529）である。

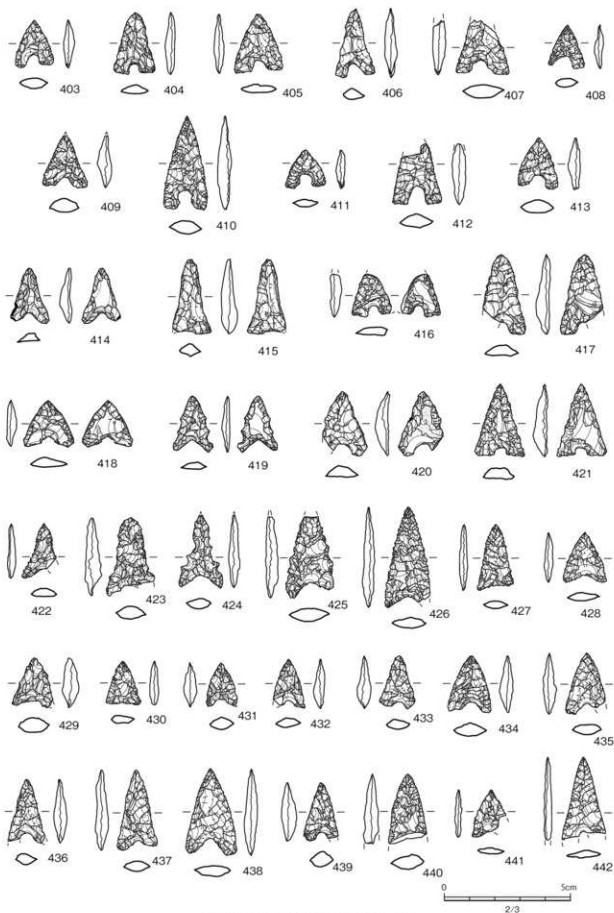
#### 磨敲石（第85～86図 530～541）

20点出土したが、そのうち12点を図化した。いずれも敲打痕と磨痕の両方をもつものである。丸みを帯びた扁平な円礫と棒状のものがあり、平面形態から円形（Ⅰ類）・隅丸方形（Ⅱ類）・楕円形（Ⅲ類）・棒状（Ⅳ類）に分けられる。Ⅰ類（536・541）は、いずれも両面、縁周に使用痕が観察される。Ⅱ類（531～535）は5点で、531は表裏・両側面を磨石として使用し、532は裏面に割れがあるが割れた後も使用を継続した痕跡が残る。533・534は表裏を主に磨面とし、側面を敲打面として使用している。535は全体に敲打痕、上面と上部側面に磨痕が確認できる。Ⅲ類（537～540）は4点で、537～539は表裏面が磨られ周縁に敲打痕が認められる。540の側面には集中的な敲打によって生じた剥離痕がみられる。Ⅳ類（530）は1点のみの出土で、上部が欠損しているが上面と下部に敲打痕、右側面に磨痕がみられる。

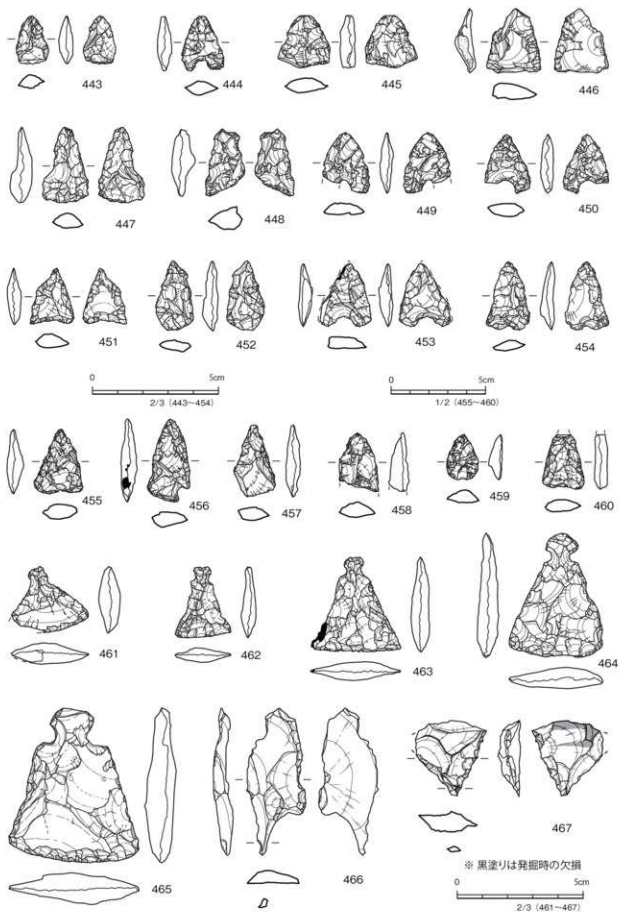
利用石材は、砂岩（530～537）、花崗岩（538）、両輝石安山岩（539・540）、溶結凝灰岩（541）である。

#### 石皿（第87図 542～544）

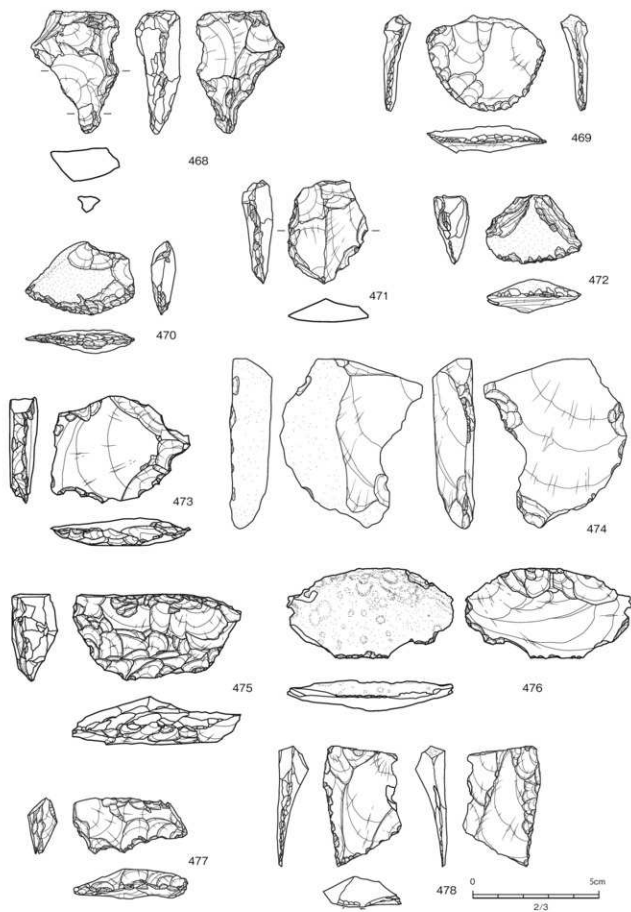
6点出土したが、そのうち3点を図化した。利用石材はすべて砂岩である。542は使用面にくぼみを持ち、磨痕や潰打痕が残る。右側の欠損部は割れた後にも使用を継続した痕跡が認められる。543は欠損により形態は不明だが、使用面に凹み、磨痕や潰打痕がみられる。544は平滑な面をもつ。破損後に再加工し、形を整え使用したと考えられる。



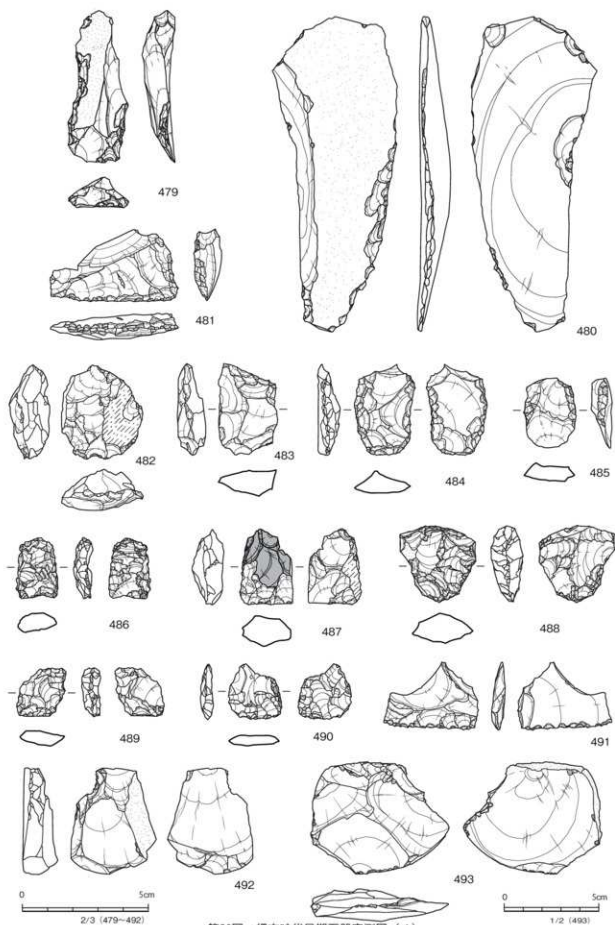
第77図 縄文時代早期石器実測図(1)



第78図 縄文時代早期石器実測図(2)

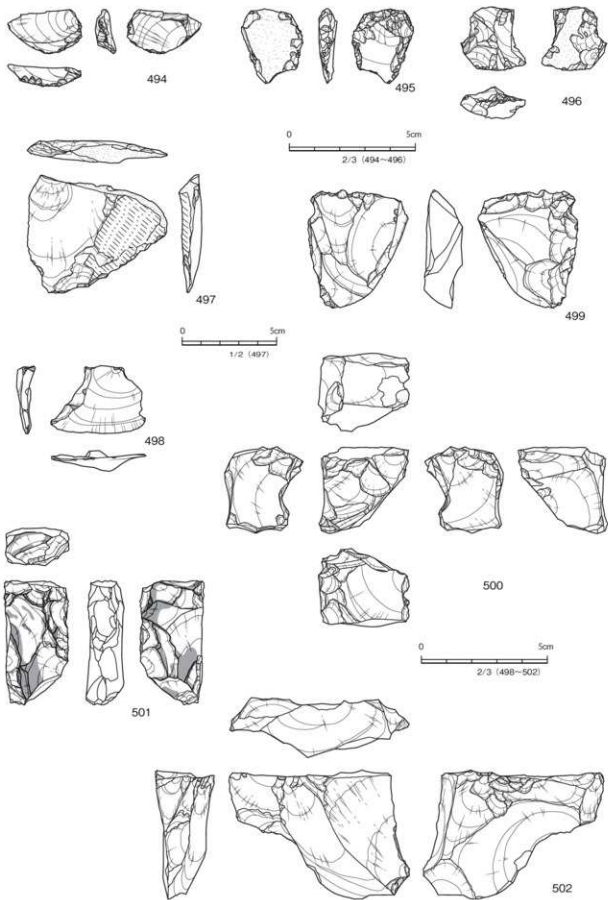


第79図 縄文時代早期石器実測図(3)

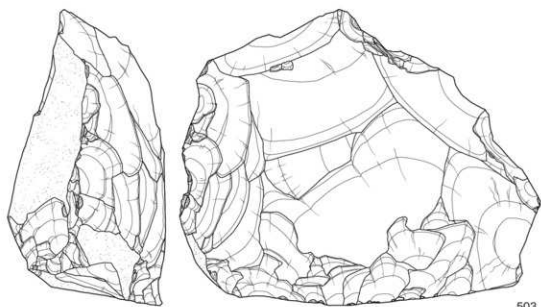


第80图 縄文時代早期石器実測图(4)

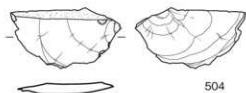




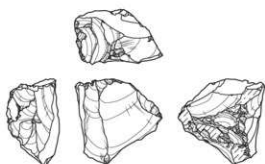
第81圖 縄文時代早期石器実測図(5)



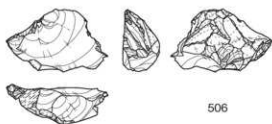
503



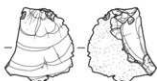
504



505



506



508



507



509

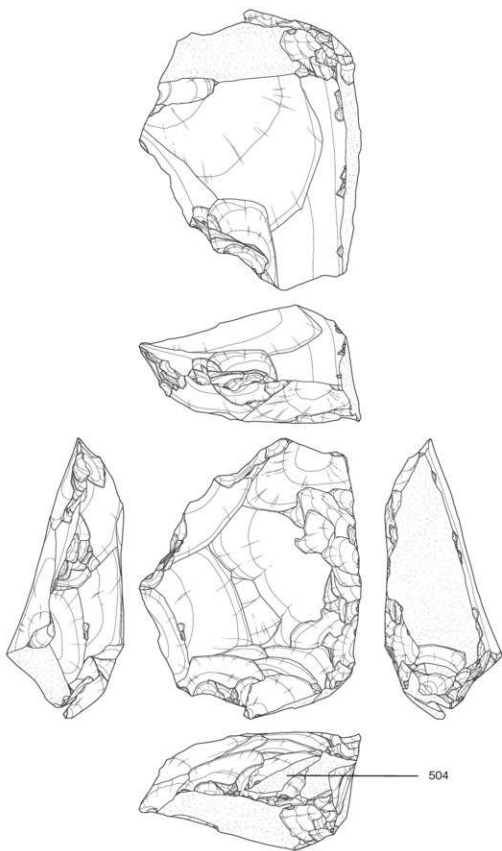


510

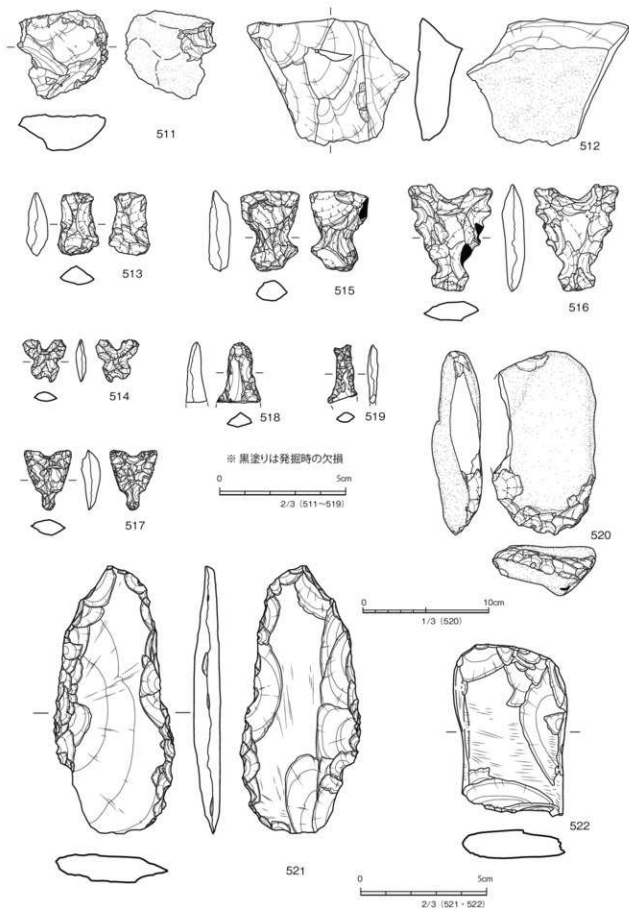


第82図 縄文時代早期石器実測図(6)

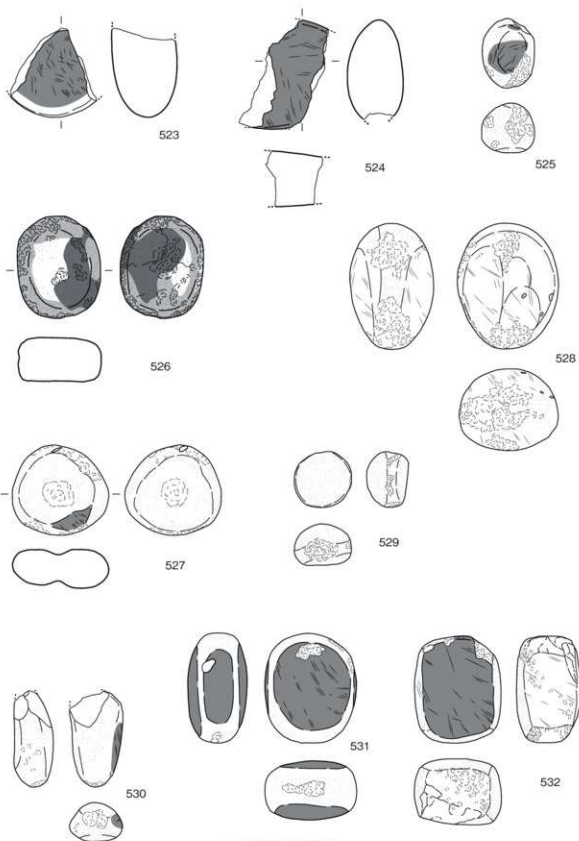
接合資料 I (503+504)



第83圖 縄文時代早期石器実測図(7)



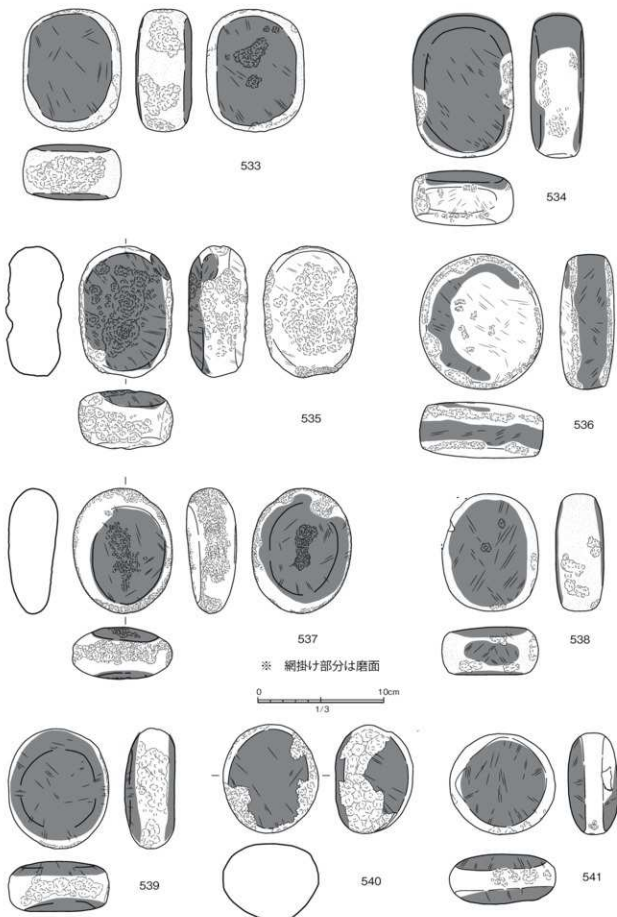
第84図 縄文時代早期石器実測図(8)



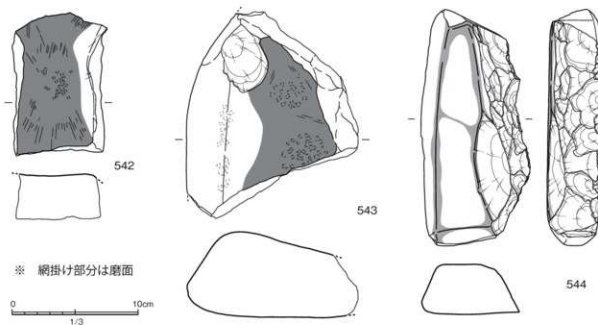
※ 網掛け部分は磨面



第85図 縄文時代早期石器実測図(9)



第86図 縄文時代早期石器実測図 (10)



第87図 縄文時代早期石器実測図 (11)

第3表 縄文時代早期石器組成表

器種	石鏃	石鏃 未製品	尖頭状石器	石鏃	石鏃 （磨器・透器）	燧形石器 スレイバー	二次加工 削片	使用痕削片	石核	異形石器	打製石片	削片 （砕片）	チャップ （砕片）	磨石	敲石	磨盤石	石皿	磯・磯石器	各計	重量(g)	
																					石英
砂岩											10		6	13	14	6	29	78	26,556.8		
頁岩					1	1					8						2	12	79.0		
花崗岩															1				1	436.1	
チャート	3				1	1	1				17	1							24	105.2	
溶結凝灰岩											2		3						5	794.6	
緑色凝灰岩	1																		1	3.0	
ホルンフェルス			1								1								2	90.6	
流紋岩											4								4	14.8	
軽石																		1	1	164.6	
石英											1								1	6.8	
安山岩											1								1	40.0	
ガラス質安山岩	25	4	3	5	4	14	4	13	1	8	4	645	6					1	737	3,408.4	
再輝石安山岩					1							3		4	3	5		1	17	5,776.9	
黒曜石（腰島）	16	5	1					1	2			370	28						423	671.7	
黒曜石（針尾島）	6	3				3	2		4	3	151	4							176	384.6	
黒曜石（上牛鼻）	1	1				1	2		2		10								17	130.5	
黒曜石（森木津留）	4										7								11	10.6	
黒曜石（三船）									2		15	2							19	90.3	
黒曜石（船島）	2																		2	1.0	
各計	57	13	6	5	4	17	8	19	3	18	7	2	1243	41	13	16	20	6	34	1532	38,765.4

第4表 土器観察表(1)

編年番号	種別	器種	部位	出土位置 グリッド 層・遺跡	器面調整・文様ほか		色澤	胎土(胎粒)の 特徴(種類)		備考
					外 面	内 面		外 面	内 面	
1	土師器	高台付 体部	D2	IV	糸貫通の穿孔	回転模ナデ	赤黒	赤黒, 無色透明 光沢		
2	土師器	高台付 体部	A 区	-	回転模ナデ	ナデ	赤黒	赤黒, 無色透明 光沢	胎底径18.3cm 外面に黒染	
3	土師器	高台付 体部	D2	IV	回転模ナデ	回転模ナデ	赤黒	赤黒, 無色透明 光沢	胎底径17.2cm 外面に黒染	
4	土師器	高台付 体部	D2	IV	横方向のヘラミガキ	回転模ナデ	赤黒	赤黒	胎底径19.7cm 内外面に黒色付着物	
5	土師器	高台付 体部	D2	IV	回転模ナデ	ヘラミガキ	赤黒	赤黒, 黒	胎底径17.2cm 内面に黒色の炭化物付着	
6	土師器	高台付 体部	D2	IV	ヘラミガキ 回転模ナデ 円歯	縦・斜方向のヘラミガキ	赤黒	赤黒, 無色透明 光沢	胎底径18.7cm	
7	土師器	杯	一次 底部	IV	回転模ナデ	回転模ナデ	赤黒	赤黒, 無色透明 光沢	胎底径16.4cm	
8	土師器	杯	一次 底部	IV	回転模ナデ	回転模ナデ後一部ナデ	赤黒	赤黒	胎底径(外径2.3m 長径6.6cm) 胎底は胎内面内面に炭化物	
9	土師器	杯	一次 底部	D2	IV	回転模ナデ	回転模ナデ	赤黒, 黒	外面にスス付着内面に炭化 物付着	
10	土師器	杯	一次 底部	SC3	IV	回転模ナデ	炭化物少量付着	赤黒	胎底径14.3cm 外面にスス付着	
11	土師器	杯	一次 底部	SC14	IV	回転模ナデ	外面に円歯痕	赤黒	胎底径14.3cm 内面に黒染	
12	土師器	杯	一次 底部	D2	IV	回転模ナデ 風化	風化	赤黒, 赤黒	胎底径18.8cm	
13	土師器	杯	一次 底部	V5	IV	回転模ナデ	回転模ナデ	赤黒	胎底径18.5cm 円歯痕	
14	土師器	皿	一次 底部	D2	IV	ヘラ切り	回転模ナデ	赤黒, 灰白	胎底径18.5cm 胎底径18.6cm	
15	土師器	皿	一次 底部	D2	IV	回転模ナデ	回転模ナデ	赤黒	胎底径19.4cm 胎底径19.6cm	
16	土師器	皿	一次 底部	D2	IV	回転模ナデ	風化	赤黒, 灰白	胎底径19.6cm 胎底径19.7cm	
17	土師器	皿	一次 底部	D2	II	回転模ナデ	風化	赤黒	胎底径19.6cm 胎底径19.7cm	
18	黒色土師	皿	一次 底部	D2	IV	横方向のミガキ	縦・斜方向のミガキ	赤黒, 灰白	胎底径17.7cm 胎底径17.8cm	
19	縄文土師	深鉢	口縁 - 胎底	C3	IV	縦線文(縦方向・縦型文) 横方向のナデ 斜目割変文 斜付変文上・斜変文	横方向のナデ 風化	赤黒	胎底径17.7cm 外面に多量のスス付着	
20	縄文土師	深鉢	口縁 - 胎底	一次 底部	IV	縦線文 横方向の縦線文 斜方向のミガキ	横方向のナデ	赤黒	胎底径17.7cm 外面にスス付着 内面に黒染	
21	縄文土師	深鉢	口縁 - 胎底	C3	IV	横方向のヘラミガキ 横方向のナデ	横方向のヘラミガキ 横方向のナデ 一部工具痕	赤黒	胎底径17.7cm 外面にスス付着 内面に黒染	
22	縄文土師	深鉢	口縁 - 胎底	C4/D4	-	斜方向の縦線文 横方向の縦線文	横方向のヘラミガキ	赤黒	胎底径17.7cm 外面にスス付着 内面に黒染	
23	縄文土師	深鉢	口縁 - 胎底	G11	V	横方向のヘラミガキ	横方向のナデ	赤黒	胎底径18.9cm 外面にスス付着, 凸凹面に黒染	
24	縄文土師	深鉢	口縁 - 胎底	一次 底部	IV	縦2条の縦線文 横方向のナデ	横方向のナデ	赤黒	胎底径18.9cm 胎底径19.0cm	
25	縄文土師	深鉢	口縁 - 胎底	一次 底部	IV	縦2条の縦線文 横方向のナデ	横方向のナデ	赤黒	胎底径18.9cm 胎底径19.0cm	
26	縄文土師	深鉢	口縁 - 胎底	一次 底部	IV	縦2条の縦線文 横方向のナデ	横方向のナデ	赤黒	胎底径18.9cm 胎底径19.0cm	
27	縄文土師	深鉢	口縁 - 胎底	一次 底部	IV	縦2条の縦線文 横方向のナデ	横方向のナデ	赤黒	胎底径18.9cm 胎底径19.0cm	
28	縄文土師	深鉢	口縁 - 胎底	E17	V	一部胎底直 横状工具による横ナデ 横方向のナデ	横方向のナデ 横状工具による横ナデ 横方向のナデ	赤黒	胎底径18.9cm 胎底径19.0cm	
29	縄文土師	深鉢	口縁 - 胎底	一次 底部	-	横方向の丁字ナデ ミガキのような工具痕	横方向の丁字ナデ ミガキのような工具痕	赤黒	胎底径18.9cm 胎底径19.0cm	
30	縄文土師	深鉢	口縁 - 胎底	E16-17	N-V	ナデ 胎底直 一部工具痕	ナデ 胎底直 一部工具痕	赤黒, 赤黒 赤黒, 赤黒	胎底径23.3cm 胎底径23.75cm 胎底径24.1cm 胎高25.7cm	
31	縄文土師	深鉢	口縁 - 胎底	E17	N-V	組み合わせた 一部縦合痕, 工具痕 内面にスス付着 横ナデ	縦・斜方向のナデ 一部工具痕 風化	赤黒	胎底径23.3cm 胎底径23.75cm 胎底径24.1cm	
32	縄文土師	深鉢	口縁 - 胎底	D2-3	IV	ナデ 胎底直	横方向のヘラミガキ 横方向のナデ 一部工具痕	赤黒	胎底径22.2cm 胎底径22.6cm 胎底径23.1cm	
33	縄文土師	深鉢	口縁 - 胎底	C2	IV	多方向のヘラミガキ	横方向のヘラミガキ 風化	赤黒	胎底径22.2cm 胎底径22.6cm 胎底径23.1cm	
34	縄文土師	深鉢	口縁 - 胎底	G10	V	横ナデ後口唇部に斜にヒ文多方向へのナ デ横方向の縦線	横方向のナデ	赤黒	胎底径22.2cm 胎底径22.6cm 胎底径23.1cm	
35	縄文土師	深鉢	口縁 - 胎底	E16-17	IV	ナデ	ナデ	赤黒	胎底径22.2cm 胎底径22.6cm 胎底径23.1cm	
36	縄文土師	深鉢	口縁 - 胎底	D4/C3	IV	横状工具による縦・斜方向のナデ ナデ 胎底直	ナデ ナデ	赤黒	胎底径22.2cm 胎底径22.6cm 胎底径23.1cm	
37	縄文土師	深鉢	口縁 - 胎底	G17	V	ナデ	ナデ	赤黒	胎底径22.2cm 胎底径22.6cm 胎底径23.1cm	
38	縄文土師	深鉢	口縁 - 胎底	E5-6	XII	斜方向の横ナデ	縦・斜方向のナデ	赤黒	胎底径22.2cm 胎底径22.6cm 胎底径23.1cm	
39	縄文土師	深鉢	口縁 - 胎底	F16	V	縦・斜方向のヘラミガキ風化	横方向のナデ	赤黒	胎底径22.2cm 胎底径22.6cm 胎底径23.1cm	
40	縄文土師	深鉢	口縁 - 胎底	F12	V	斜方向のミガキ	斜方向のミガキ	赤黒	胎底径22.2cm 胎底径22.6cm 胎底径23.1cm	
41	縄文土師	深鉢	口縁 - 胎底	F12	V	斜方向のミガキ	斜方向のミガキ	赤黒	胎底径22.2cm 胎底径22.6cm 胎底径23.1cm	
42	縄文土師	深鉢	口縁 - 胎底	F12	V	斜方向のミガキ	斜方向のミガキ	赤黒	胎底径22.2cm 胎底径22.6cm 胎底径23.1cm	



第5表 土器観察表(2)

観測 番号	種類	器種	部位	粘土位置 ドリッド 層・透層	器面調査・文様ほか			色調		粘土(砂粒)の 特徴(種類)	備 考
					外 面	内 面	外面	内面			
49	縄文土器	深鉢	胴部	E17/F12	V	斜め方向のケズリ状ナデ 横方向	横ナデ	靑	にぶい 黄	黒色光沢/透明光 沢/灰白/赤褐色 にぶい黄	内面にスス付着
50	縄文土器	深鉢	胴部	試掘	-	ナデ	横方向のヘラミガキ 横方向の粗いケズリ状ナ デ	浅黄	明赤黄	灰白/無色透明 光沢	特定製器最大径5.8cm 内面に黒染
51	縄文土器	浅鉢	口縁一 部	E17	B/V	横・斜方向のヘラミガキ	横方向のヘラミガキ	浅黄	黄灰	灰白/無色透明 /黒色透明 光沢	内面にスス付着 内面に黒染
52	縄文土器	浅鉢	口縁一 部	E17	V	横方向の沈線文 横・斜方向のヘラミガキ	横方向のヘラミガキ風化 凹溝	浅黄	浅黄	透明光沢/赤褐色 光沢	内外面に黒染
53	縄文土器	浅鉢	口縁一 部	E16	V	横方向のヘラミガキ	横方向のヘラミガキ	浅黄	浅黄	光沢	特定口径27.7cm 内外面に黒染
54	縄文土器	浅鉢	胴部	E17	V	横方向のヘラミガキ	横方向のヘラミガキ	にぶい 黄	にぶい 黄	灰白/無色透明 光沢	内面にスス付着、黒染 内面に炭化物付着
55	縄文土器	浅鉢	胴部	一次調査 表土	B	横方向のナデ	横・斜方向の貝殻状沈文 横方向のナデ	黒黄	靑	灰白/無色透明 /黒色透明 光沢	内面に黒染
56	縄文土器	浅鉢	口縁部	二次調査	-	板状工具による横方向ナデ 横方向のナデ	横方向のナデ	靑	靑	灰白/無色透明 /白色透明	外面にスス付着
57	縄文土器	口縁一 部	胴部	D6	XI XII	孔文 横方向のナデ	横方向の丁寧なナデ	浅黄	浅黄 黄	無色透明/黄褐色 赤褐色	特定口径20.0cm 内外面に黒染
69	縄文土器	深鉢	口縁部	E11	SA1 XII	横方向の胎付変形(刺突列点文) 無文地 横ナデ	丁寧な横ナデ	暗灰黄	靑	灰白/無色透明 光沢	外面にスス付着
70	縄文土器	深鉢	口縁部	F11	SA1 XII	縄文地文(斜方向) 横方向の胎付変形(刺突列点文)	横ナデ	靑	にぶい 黄	灰白/無色透明 光沢/赤褐色	
71	縄文土器	深鉢	口縁一 部	E10-11/ 12/F11- 12	XI- XII	縄文地文 コフ状突起 横方向の胎付変形(刺突列点文) 凹溝状の2条の胎付変形(刺突列点文)	ナデ	靑	靑	金/灰白/光沢	金雲母を含む 外面にスス
72	縄文土器	深鉢	胴部	E11	SA1 XII	縄文地文(斜方向)	斜方向の粗いナデ	暗灰黄	にぶい 黄	金/黄褐色/赤褐色	金雲母を含む 外面に一部スス付着、黒染 外内面ともに黒染
73	縄文土器	深鉢	胴部	F11	SA1 XII	縄文地文(斜方向)	不定方向へのナデ	黄褐色	浅黄	灰白/半透明 光沢	外面に黒染
74	縄文土器	深鉢	胴部	E11/F11	SA1 XII	縄文地文(斜方向)	横方向のナデ	明赤黄	明赤黄	金/黒/赤褐色/無 色透明	金雲母を含む 外面にスス付着
75	縄文土器	深鉢	底部	E4-11	SA1 XII XIII	粗いナデ	ナデ	浅黄	暗灰黄	灰白/半透明 光沢	特定口径27.1cm 内面に黒染、内面に黒染
79	縄文土器	深鉢	口縁部	G11	SI4	口縁部に斜方向の縄文 コフ状突起 口縁に沿って胎付変形(大径) 横方向の胎付変形(縄文地文)	横ナデ一部 斜方向のナデ	にぶい 黄	にぶい 黄	灰白/無色光沢 /無色透明 光沢	
80	縄文土器	壺	胴部	E10	SE9	横方向の胎付変形(刺突列点文) 斜方向の縄文 風化凹溝	横・斜方向の粗いナデ	明赤黄	明赤黄	赤褐色/無色透明 光沢/黒色	外面に黒染
81	縄文土器	深鉢	胴部	C10	SI10	縄文地文(横・斜方向)	ナデ	明赤黄	明赤黄	灰白/赤褐色/白 色透明	外面にスス付着
82	縄文土器	深鉢	口縁一 部	C9/F10/ G10	SE5 XII	縄文地文(無筋縄文) コフ状突起 刺突列点文(口縁部) 横方向の胎付変形(刺突列点文) 胎付変形(コフ状突起)	横方向のナデ	浅黄	にぶい 黄	金/灰白/黒色 無色透明	特定口径27.6cm 金雲母を含む 内面にスス、黒染
83	縄文土器	深鉢	胴部	E12	SC8	横・斜方向のナデ 粗いナデ	横方向の粗いナデ	靑	にぶい 黄	金/黄褐色/無色 透明光沢	特定口径28cm 金雲母を含む内面に黒染
84	縄文土器	深鉢	胴部	F11	SC10	縄文地文(斜方向) 横方向の胎付変形(刺突列点文) 横方向の胎付変形(刺突列点文)	ナデ 横方向のケズリ	靑	明赤黄	赤褐色/灰白/黒 色透明	
85	縄文土器	深鉢	口縁部	D8/ F10-F11	SC11 XII	縄文地文(口縁部) 横方向の胎付変形(刺突列点文) 胎付変形(コフ状突起) 胎付変形(刺突列点文)	横方向のナデ	にぶい 黄	にぶい 黄	金/灰白/靑	金雲母を多量に含む
86	縄文土器	深鉢	口縁一 部	F11	SC12 XII	縄文地文 コフ状突起 横方向の胎付変形(刺突列点文) 胎付変形(刺突列点文) 凹溝状、斜方向への沈線文 2条1組の沈線文面に刺突列点文	指ナデ板状工具による ナデ 指痕	浅黄	にぶい 黄	明黄褐色/灰白/ 白色透明	特定口径28.1cm 特定製器最大径28.7cm 外面に一部黒染、炭化物付着 内面にスス付着一部黒染
87	縄文土器	深鉢	胴部	F11	SC12	縄文地文(横・斜方向)	横方向のナデ	靑	黄褐色	灰白/金/白色 半透明	金雲母を含む
88	縄文土器	深鉢	口縁部	E15	XII	横方向の胎付変形 横方向の貝殻縁状刺突文	斜方向の貝殻縁状	にぶい 黄	明赤黄	白色/無色光沢	外面にスス付着
89	縄文土器	深鉢	底部	E16	XII	横方向の貝殻縁状刺突文 粗いケズリ状ナデ	丁寧なナデ	明赤黄 灰黄	明赤黄 灰黄	透明/無色光沢 /灰白	特定口径8.6cm 内面にスス付着
90	縄文土器	深鉢	底部	F11	XII	横方向の貝殻縁状刺突文 ナデ	放射状に貝殻縁状	暗褐色	暗褐色	透明/灰白/赤 褐色	特定口径14.3cm 内外面にスス付着
91	縄文土器	深鉢	底部	C9	XII	横方向のナデ ナデ	ナデ	にぶい 黄	にぶい 黄	灰白/無色光沢 /赤褐色	特定口径14.3cm 内面に黒染
92	縄文土器	深鉢	口縁部	G11	XI	横ナデ 胎付押型文	胎付押型文	明赤黄	明赤黄	灰白/黒色 光沢	
93	縄文土器	深鉢	胴部	G10	XII	胎付押型文	横方向のナデ	明褐色	にぶい 黄	白色/赤褐色/ 黒色	
94	縄文土器	深鉢	胴部	F11-12	XII	胎付押型文	横・斜方向のナデ	明赤黄	にぶい 黄	灰白/灰/黒色 光沢	
95	縄文土器	深鉢	胴部	E11	XII	横方向の山形押型文	ナデ	にぶい 黄	にぶい 黄	赤褐色/無色光沢 黄褐色 /灰白/金	内面に黒染 金雲母を含む
96	縄文土器	深鉢	口縁部	D6	XI XII	縄文地文 口縁1部の凹溝状の胎付変形(刺突列点文) 縄文地文(口縁部)	横方向のナデ	黒黄 灰黄	にぶい 黄	暗赤/灰白/透 明光沢/黒色光 沢/赤褐色	特定口径15.4cm 内面に黒染
97	縄文土器	深鉢	口縁一 部	C4/F 10	B	ナデ 横方向の縄文(口縁部) 斜方向の縄文	ケズリ状ナデ	灰 黒黄	暗赤黄 黒黄	光沢/灰白/透 明光沢/赤褐色	外面にスス付着 内面に黒染
98	縄文土器	深鉢	口縁一 部	B8/E5	XII	縄文地文	口縁部に縄文地文 横ナデ	にぶい 黄	浅黄	無色光沢/無色透 明光沢	外面に黒染
99	縄文土器	深鉢	口縁一 部	D10	XII	岩状縄文 縄文地文 粘土接合部を境に口縁にかけて肥厚	横方向のナデ	靑	靑	金/黒褐色/靑 褐色	外面に黒染 内面に炭化物 付着
100	縄文土器	深鉢	口縁一 部	E15	XII	ナデ 斜方向の縄文	ナデ	靑	靑	光沢/無色透明 灰白/灰黄	特定口径10.8cm 内面一部と外周全面に黒染
101	縄文土器	深鉢	口縁一 部	C9	XI XII	縄文地文(ラジラのヒケ)	横方向のナデ	にぶい 黄	にぶい 黄	無色透明光沢 /黒色透明	
102	縄文土器	深鉢	口縁一 部	E6	XII	横ナデ 岩状縄文横いナデ	ナデ	にぶい 赤	にぶい 黄	透明光沢/無色透 明光沢/赤褐色	



第7表 土器観察表(4)

調査年	種別	器種	部位	出土位置 グリッド 層・遺構	表面図相・文様ほか		色調		胎土(砂粒)の 特徴(種類)	備考
					外面	内面	外面	内面		
141	縄文土器	深鉢	口縁一部	G11	Ⅻ	押止・斜目(口縁部) ボタン状突起 模紋(4条の貼付変形(斜交列点文) 斜方向への流線(流紋)	丁寧な横ナデ 粗い横ナデ	に高い 黄褐色	明褐色/灰白/ 赤褐色	指定口径26.4cm 素面銅線最大径22.5cm 金雲母を含む 外側にスス付着、黒炭 内面に炭化物付着、黒炭
142	縄文土器	深鉢	口縁一部	C8/E6	Ⅻ	縄文文土 縄文土(口縁部) 模紋(2条の貼付変形(斜交列点文) 斜方向への流線(流紋)	斜方向のケズリ状のナデ	に高い 黄褐色	灰/白色透明/ 赤褐色	内面に黒炭
143	縄文土器	口縁一部	29-E11- 12/F12	XI- Ⅻ	Ⅻ	押止・斜目(口縁部) 扇状文の流紋(流紋) コブ状突起 模紋(2条の貼付変形(押止斜目) 扇状文の流紋 扇形文の流紋 縄文文土	横ナデ	に高い 黄褐色	黄褐色/黒色透明/ 白色透明/赤褐色 /白色	指定口径25.2cm 素面銅線最大径21.0cm 金雲母を含む 指定口径10cm 素面銅線最大径9.0cm 内外面に黒炭
144	縄文土器	深鉢	口縁一部	D10	Ⅻ	縄文文土 貼付変形 斜交列点文	ナデ	に高い 黄褐色	暗灰青 黒色光沢/無色 光沢/灰白	指定口径23cm 内外面にスス付着、内面に黒炭
145	縄文土器	深鉢	口縁一部	E11	Ⅻ	口縁部縄文文土 縄文文土(斜交列点文) 模紋(2条の貼付変形(斜交列点文) 斜方向への流線(流紋)	ケズリ上の粗いナデ	に高い 黄褐色	透明光沢/無色 光沢/灰白	指定口径23cm 補修孔 外側にスス付着、内面に黒炭
146	縄文土器	深鉢	口縁一部	F10-11/ G10	XI- Ⅻ	縄文文土 押止・斜目(口縁部) 模紋(2条の貼付変形(縄文・押止斜目))	工具による横方向の粗い ナデ	に高い 黄褐色	灰白/無色透明/ 灰白	指定口径23cm 内面に黒炭
147	縄文土器	深鉢	口縁一部	E11	Ⅻ	縄文文土 模紋(3条の貼付変形(斜交列点文))	板状工具によるナデ 一定ケズリ状ナデ	に高い 黄褐色	灰白/白色透明/ 明黄褐色	内面に黒炭 外側にスス付着、黒炭
148	縄文土器	深鉢	口縁一部	E11	XI	縄文文土 模紋(3条の貼付変形(斜交列点文))	指頭痕 斜方向の縄文 指頭 痕 横・斜方向のナデ	に高い 黄褐色	灰白/白色透明/ 黄褐色	内面に炭化物付着、黒炭 外側にスス付着、黒炭
149	縄文土器	深鉢	口縁部	E11	XI	縄文文土 模紋(5条の貼付変形(縄文文土))	丁寧なナデ	に高い 黄褐色	微細な光沢/灰 白/黒色光沢	
150	縄文土器	深鉢	口縁一部	B9-C9	Ⅻ	縄文文土 扇状1条の貼付変形(押止斜目) 模紋(2条の貼付変形(斜交列点文))	横方向のナデ	に高い 黄褐色	灰白/赤褐色 無色透明	外面にわずかにスス付着
151	縄文土器	深鉢	口縁一部	E5-F10	XI Ⅻ	縄文文土 模紋(4条の貼付変形 扇状1条の貼付変形)	ケズリ状ナデ	に高い 黄褐色	に高い 黄褐色	内面に黒炭
152	縄文土器	深鉢	口縁一部	C7	XI	模紋(3条の貼付変形(縄文・斜交列点文)) 模紋(2条の貼付変形 縄文文土)	横方向のナデ	に高い 黄褐色	黒色光沢/無色 透明/赤褐色	
153	縄文土器	深鉢	口縁一部	E4	Ⅻ	押止・斜目(口縁部) 模紋(3条の貼付変形(押止斜目)) 縄文文土	横方向のナデ	に高い 黄褐色	灰白/赤黄褐色/ 無色透明	内面に黒炭
154	縄文土器	深鉢	口縁一部	E16/ F15-16	Ⅻ	縄文文土 扇状1条の貼付変形(無色透明) 模紋(1条の貼付変形(縄文文土))	板状工具による横・斜方 向のナデ 指頭痕	に高い 黄褐色	金/灰白/明黄 褐色	金雲母を含む 内面に黒炭
155	縄文土器	深鉢	口縁一部	D16/ E17-G16	Ⅻ	縄文文土 縄文文土(口縁部) 模紋(6条の貼付変形(縄文文土)) 模紋(1条の貼付変形(縄文文土))	横方向のナデ 工具痕	に高い 黄褐色	灰白/白色半 明/金	金雲母を含む 内面に炭化物付着
156	縄文土器	深鉢	胴部一 部	F11/ G14	XI	縄文文土 押止・斜目(貼付変形(押止斜目))	ナデ 指頭痕 斜方向のナデ	に高い 黄褐色	灰白/黒色光 沢/金	指定銅線最大径17.2cm 最大径4cm 金雲母を含む 外側にスス付着、内面に黒炭
157	縄文土器	深鉢	口縁部	B8-C8	Ⅻ	縄文文土(口縁部) 扇状2条の貼付変形 模紋(2条の貼付変形 縄文文土)	丁寧なナデ	に高い 黄褐色	明黄 透明/白色透明/ 灰白/赤褐色	内外面に黒炭
158	縄文土器	深鉢	口縁部	C7	Ⅻ	縄文文土 押止・斜目(口縁部) コブ状突起 模紋(3条の貼付変形(斜交列点文)) 模紋(1条の貼付変形(斜交列点文))	斜方向の板状工具による ナデ	に高い 黄褐色	灰白/白色透明/ 灰白	内面に黒炭
159	縄文土器	深鉢	口縁一部	F10-11	Ⅻ	押止・斜目(口縁部) 斜交列点文 模紋(3条の貼付変形(押止斜目)) 縄文文土	口縁上(口縁部)の縄文 模紋ナデ 板状工具の工具 痕ナデ	に高い 黄褐色	明褐色/白色 黒色透明/透明	内面に黒炭
160	縄文土器	深鉢	口縁一部	C6-7/ D6	Ⅻ	縄文文土 縄文文土(口縁部) 模紋(2条の貼付変形(斜交列点文)) 模紋(2条の貼付変形(斜交列点文)) 三角形の2条線(貼付変形(押止斜目))	工具による丁寧な横方向 のナデ	に高い 赤褐色	黒色光沢/無色 透明/灰白/灰 白/赤褐色	
161	縄文土器	深鉢	口縁一部	F10-11	Ⅻ	縄文文土(口縁部) 縄文文土 コブ状突起 模紋(2条の貼付変形(縄文文土)) 模紋(2条の貼付変形(縄文文土))	丁寧なナデ 指頭痕 ケズリ状ナデ	に高い 黄褐色	透明光沢/無色 光沢/灰白	外側にスス付着
162	縄文土器	深鉢	口縁一部	G11-12	Ⅻ	縄文文土(口縁部) 模紋(4条の貼付変形(押止斜目)) 縄文文土	横方向の丁寧なナデ 横方向のケズリ状ナデ	に高い 黄褐色	黒色光沢/光 沢/灰白	内外面にスス
163	縄文土器	深鉢	口縁一部	F11	Ⅻ	縄文文土(口縁部) 模紋(5条の貼付変形(縄文文土・押止斜目)) 模紋(1条の貼付変形 縄文文土)	横・斜方向のナデ 指頭痕 横方向のケズリ状ナデ	に高い 黄褐色	金/透明/黒色 透明/灰白	内面に黒炭 外側にスス付着、スス付着
164	縄文土器	深鉢	口縁部	C7/D6	Ⅻ	縄文文土(口縁部) 口縁上の粗い付いた変形(斜交列点文)	ケズリ上のナデ横ナデ	に高い 黄褐色	無色透明/赤 黄褐色/黒色光 沢/無色透明	内面にスス付着、黒炭 外側に炭化物付着、黒炭
165	縄文土器	深鉢	口縁部	F13	Ⅻ	無色透明 模紋(2条の貼付変形(縄文文土)) 扇状1条の貼付変形(縄文文土) コブ状突起	横方向のナデ	に高い 黄褐色	金/灰白/透明 無色透明	外側にスス付着
166	縄文土器	深鉢	口縁一部	G17	Ⅻ	縄文文土(口縁部) 模紋(1条の貼付変形(縄文文土)) コブ状突起 扇形文の流紋(流紋) 縄文文土	板状工具による横・斜方 向のナデ	に高い 黄褐色	金/灰白/灰 白	金雲母を含む 内面に黒炭
167	縄文土器	深鉢	口縁一部	C9-10/ F10	Ⅻ	縄文文土 模紋(3条の貼付変形(押止斜目)) 模紋(2条の貼付変形(縄文文土))	かなり強い凹圧痕	に高い 黄褐色	黒色光沢/赤褐色 透明/赤褐色	指定口径21.2cm 内外面全体にスス付着
168	縄文土器	深鉢	口縁一部	D16/ E15-F10	Ⅻ	斜交列点文(口縁部) 縄文文土 模紋(5条の貼付変形(斜交列点文)) 模紋(2条の貼付変形(斜交列点文))	横ナデ	に高い 黄褐色	透明光沢/無色 透明/赤褐色 /白色	
169	縄文土器	深鉢	口縁一部	C6-7-8	Ⅻ	模紋(1条の貼付変形(口縁部) 模紋(1条の貼付変形(胴部)) 縄文文土	横方向のナデ 工具による斜方向のナデ	に高い 黄褐色	暗灰/黄褐色/赤 褐色	指定口径24.4cm 内外面にスス付着 内面に黒炭
170	縄文土器	深鉢	口縁一部	D10	Ⅻ	縄文文土 コブ状突起 模紋(4条の貼付変形(斜交列点文)) 模紋(1条の貼付変形(斜交列点文))	横ナデ 多方向のナデ 横方向の丁寧なナデナデ のナデ	に高い 黄褐色	透明光沢/無色 透明/黒色光 沢	
171	縄文土器	深鉢	口縁一部	E10-12/ F10-11	Ⅻ	縄文文土 コブ状突起 縄文文土(口縁部) 模紋(5条の貼付変形(指頭痕・押止斜目)を表現 した2条の貼付変形)	横方向の丁寧なナデ 横方向のケズリ状ナデ	に高い 黄褐色	金/黒色/灰白/ 灰黄褐色	指定口径40.6cm 金雲母を含む 内面に黒炭
172	縄文土器	深鉢	口縁一部	E6/F11- 12/G11	XI- Ⅻ	模紋(2条の貼付変形(口縁部) 模紋(2条の貼付変形(口縁部))	横方向の丁寧なナデ 横方向のケズリ状ナデ	に高い 黄褐色	灰黄 灰白/透明/金	指定口径27.6cm 金雲母を含む 内面に黒炭
173	縄文土器	深鉢	口縁一部	B9-C5	XI	縄文文土(口縁部) 縄文文土 コブ状突起 模紋(2条の貼付変形(縄文文土)) 模紋(2条の貼付変形(縄文文土))	丁寧なナデ	に高い 黄褐色	黒褐色/灰白/無 色透明	
174	縄文土器	深鉢	口縁一部	C8/D7	Ⅻ	縄文文土(斜交列点文) コブ状突起 模紋(1条の貼付変形(縄文文土)) 模紋(2条の貼付変形(斜交列点文))	丁寧なナデ 工具痕	に高い 黄褐色	透明光沢/黄褐 色/無色光沢	内外面に炭化物付着
175	縄文土器	深鉢	胴部	B5/C6/ D1-6-E15	Ⅻ	縄文文土(無色透明) コブ状突起 模紋(2条の貼付変形(押止斜目))	指頭痕 板状工具による横方向のナデ	に高い 黄褐色	明黄褐色/透明 黒色透明	指定銅線最大径18.0cm 内外面に一重黒炭

第8表 土器観察表(5)

館名 番号	種別	器種	部位	出土位置 グロッド 層・遺跡	器型調査・文様ほか	色澤	胎土(釉料)の 特徴(種類)	備考
				外 面	内 面	外 面	内 面	
176	縄文土器	深鉢	口縁一 断面	B8-9 XI-1	縄文土文 縄文土文(口縁部) 横位2条の胎付変形(刺突印点文) 横位2条の胎付変形(刺突印点文)	ナテ	黒い 黄緑 黄	胎定口径22cm 外面にスチ付着 内面に黒線
177	縄文土器	深鉢	胴部一 断面	B8-C8 XI-2	縄文土文 胎付2条の胎付変形(刺突印点文) 横位2条の胎付変形(刺突印点文)	斜方向のナテ 横方向のナテ	黒い 黄緑 黄	胎付・無色透明 /無色透明 /無色透明
178	縄文土器	深鉢	胴部	E5 XII	横位2条の胎付変形(刺突印点文)	ケズリ状の横ナテ	黒い 黄緑	胎付・無色透明 /無色透明
179	縄文土器	深鉢	胴部	F16 XII	横位2条の胎付変形(刺突印点文) 横位2条の胎付変形(刺突印点文)	横方向のナテ 横方向のナテ	黒い 黄緑	胎付・無色透明 /無色透明
180	縄文土器	深鉢	胴部	D6 XII	横位2条の胎付変形(刺突印点文) 胎付の横文・一部ナテなし	横・斜方向のナテ 胎付の横文・一部ナテなし	黒い 黄緑	胎付・無色透明 /無色透明
181	縄文土器	深鉢	胴部	F10 XIII	横位2条の胎付変形(刺突印点文)	ナテ	黒い 黄緑	胎付・無色透明 /無色透明
182	縄文土器	深鉢	胴部	B8-F10 XIII	2条1組の胎付変形(刺突印点文) 横位の胎付変形(刺突印点文) 胎付の横文	横方向のケズリ状ナテ	黒い 黄緑	胎付・無色透明 /無色透明
183	縄文土器	深鉢	胴部	C6 XIII	横位2条の胎付変形(刺突印点文) 横位2条の胎付変形(刺突印点文) 胎付の横文	斜方向のケズリ状ナテ	黒い 黄緑	胎付・無色透明 /無色透明
184	縄文土器	深鉢	胴部	F10 XIII	斜方向の横文(胎付変形) 2条1組の胎付変形(刺突印点文)	横状工具による横・斜方向のナテ	黒い 黄緑	胎付・無色透明 /無色透明
185	縄文土器	深鉢	胴部	C7 XIII	横位2条の胎付変形(刺突印点文) 胎付の横文	横状工具による横・斜方向のナテ ケズリ状ナテ	黒い 黄緑	胎付・無色透明 /無色透明
186	縄文土器	深鉢	胴部	F10 XII	横位1条の胎付変形(刺突印点文) 胎付の横文	横ナテ 斜方向のナテ	黒い 黄緑	胎付・無色透明 /無色透明
187	縄文土器	深鉢	胴部	F11-G11 XII	胎付の横文 胎付2条の胎付変形(刺突印点文) 2条1組の胎付変形(刺突印点文)	胎付の横文 胎付の横文	黒い 黄緑	胎付・無色透明 /無色透明
188	縄文土器	深鉢	口縁一 断面	C3-7 IX	縄文土文(口縁部) 胎付2条の胎付変形(刺突印点文) 胎付の横文	胎付の横文 胎付の横文	黒い 黄緑	胎付・無色透明 /無色透明
189	縄文土器	深鉢	口縁一 断面	E11-G11 XII	縄文土文 胎付2条の胎付変形(刺突印点文) 胎付の横文	胎付の横文 胎付の横文	黒い 黄緑	胎付・無色透明 /無色透明
190	縄文土器	深鉢	胴部	F11-16 XII	2条1組の胎付変形(刺突印点文)による胎付・横文	横方向のナテ	黒い 黄緑	胎付・無色透明 /無色透明
191	縄文土器	深鉢	口縁一 断面	C3-6 IX	縄文土文 胎付2条の胎付変形(刺突印点文)	胎付のナテ ケズリ状ナテ	黒い 黄緑	胎付・無色透明 /無色透明
192	縄文土器	深鉢	胴部	F16 XIII	斜方向の横文 斜方向の胎付変形(刺突印点文)	ナテの後・斜方向のケズリ状ナテ	黒い 黄緑	胎付・無色透明 /無色透明
193	縄文土器	深鉢	胴部	C3-G10 XII	斜方向の横文 胎付2条の胎付変形(刺突印点文) 胎付の横文	横・斜方向のナテ	黒い 黄緑	胎付・無色透明 /無色透明
194	縄文土器	深鉢	口縁一 断面	F15-16 XII	胎付の横文(口縁部) 横位1条の胎付変形(刺突印点文) 胎付の横文	ヘラトギキ	黒い 黄緑	胎付・無色透明 /無色透明
195	縄文土器	深鉢	口縁一 断面	G10 XIII	縄文土文 胎付2条の胎付変形(刺突印点文) 胎付の横文	ナテ	黒い 黄緑	胎付・無色透明 /無色透明
196	縄文土器	深鉢	胴部	B8 XII	縄文土文 胎付の横文 胎付の横文	横ナテ 胎付の横文	黒い 黄緑	胎付・無色透明 /無色透明
197	縄文土器	深鉢	胴部	G12 XII	胎付の横文 胎付の横文	横方向のケズリ	黒い 黄緑	胎付・無色透明 /無色透明
198	縄文土器	深鉢	口縁一 断面	E5-F11 XII	縄文土文 胎付2条の胎付変形(刺突印点文) 胎付の横文	横方向のナテ	黒い 黄緑	胎付・無色透明 /無色透明
199	縄文土器	深鉢	口縁一 断面	F16-17 XII	縄文土文 胎付2条の胎付変形(刺突印点文) 胎付の横文	胎付のケズリ状ナテ	黒い 黄緑	胎付・無色透明 /無色透明
200	縄文土器	深鉢	胴部	D6 XIII	横位2条の胎付変形(刺突印点文) 胎付の横文	胎付のケズリ状ナテ	黒い 黄緑	胎付・無色透明 /無色透明
201	縄文土器	深鉢	口縁一 断面	B7-D6 E5 XII	縄文土文 胎付2条の胎付変形(刺突印点文) 胎付の横文	胎付のナテ	黒い 黄緑	胎付・無色透明 /無色透明
202	縄文土器	深鉢	胴部	F11 G11 XII	胎付の胎付変形(刺突印点文) 胎付の胎付変形(刺突印点文) 胎付の胎付変形(刺突印点文)	ナテ	黒い 黄緑	胎付・無色透明 /無色透明
203	縄文土器	深鉢	胴部	F17 G12-17 XII	胎付の胎付変形(刺突印点文) 胎付の胎付変形(刺突印点文)	ナテ	黒い 黄緑	胎付・無色透明 /無色透明
204	縄文土器	深鉢	口縁一 断面	E15 F15-17 XII	胎付の胎付変形(刺突印点文) 胎付の胎付変形(刺突印点文) 胎付の胎付変形(刺突印点文)	胎付の胎付変形(刺突印点文)	黒い 黄緑	胎付・無色透明 /無色透明
205	縄文土器	深鉢	口縁一 断面	B9-C9 10-F10 G11 XII	縄文土文 胎付2条の胎付変形(刺突印点文) 胎付の胎付変形(刺突印点文) 胎付の胎付変形(刺突印点文)	横状工具によるナテ	黒い 黄緑	胎付・無色透明 /無色透明
206	縄文土器	深鉢	口縁一 断面	B9-C9 10-G11 XII	縄文土文 胎付2条の胎付変形(刺突印点文) 胎付の胎付変形(刺突印点文) 胎付の胎付変形(刺突印点文)	横状工具によるナテ	黒い 黄緑	胎付・無色透明 /無色透明
207	縄文土器	深鉢	口縁一 断面	C6-7-8 D5-E4 F6-11 XII	胎付の胎付変形(刺突印点文) 胎付の胎付変形(刺突印点文) 胎付の胎付変形(刺突印点文)	ナテ	黒い 黄緑	胎付・無色透明 /無色透明
208	縄文土器	深鉢	口縁一 断面	A8 XIII	胎付の胎付変形(刺突印点文) 胎付の胎付変形(刺突印点文)	胎付の胎付変形(刺突印点文)	黒い 黄緑	胎付・無色透明 /無色透明
209	縄文土器	深鉢	口縁一 断面	C8-F12 H12 XIII	胎付の胎付変形(刺突印点文) 胎付の胎付変形(刺突印点文)	胎付の胎付変形(刺突印点文)	黒い 黄緑	胎付・無色透明 /無色透明
210	縄文土器	深鉢	口縁一 断面	B5-C5 6-G13 XII	胎付の胎付変形(刺突印点文) 胎付の胎付変形(刺突印点文) 胎付の胎付変形(刺突印点文)	胎付の胎付変形(刺突印点文)	黒い 黄緑	胎付・無色透明 /無色透明

第9表 土器観察表(6)

調査 番号	種類	器種	部位	出土位置 グリッド	表面調査-文様ほか		色調		胎土(砂粒)の 特徴(白色)	備考	
					外面	内面	外面	内面			
211	縄文土器	深鉢	胴部	B8-C8	XI XII	縄文文様・横位1条の貼付変帯(縄文) 垂状状の沈み溝	横-斜方向のナデ	黄 黄	黄 黒色光沢/白 陶金	金雲母を含む 内外面に黒黒、外面にスス付着	
212	縄文土器	深鉢	胴部	F12	XI XII	横位1条の貼付変帯(押し刷目) 横位2条の沈み溝	丁字なナデ	黄 黄	黒色光沢/灰白 赤黒		
213	縄文土器	深鉢	胴部	E6	XI XII	縄文文様・横位2条の貼付変帯(押し刷目) アーモンド状の多重沈み溝	横いヶズリ状ナデ	黄 黄	黒色光沢/黒色 透明/灰白/赤 赤黒		
214	縄文土器	深鉢	胴部	E11/F11	SAI XII	斜方向の縄文法に黄赤状または同心円 状の沈み溝	丁字なナデ	黄 黄	黒色光沢/灰白 赤黒	金雲母を含む 外面の一部にスス付着	
215	縄文土器	深鉢	胴部	不明	-	XII	押し刷目(口縁部部) 横位2条の貼付変帯(押し刷目) 縦線状の沈み溝・垂状状の沈み溝	横ナデ	黄 黄	灰白/黒色光沢/ 無色透明/黄	
216	縄文土器	深鉢	胴部	G10	XI XII	横位1条の貼付変帯(斜交印点文) 横位2条の沈み溝	横方向のケズリ状ナデ	黄 黄	透明/黒色光沢/ 黒色	外面全体に黒赤、スス付着 内面の一部に黒黒	
217	縄文土器	深鉢	胴部	F10	XII	横位1条の貼付変帯(斜交印点文) 同心円状の沈み溝	丁字な横ナデ	黄 黄	金/灰白/黒色	金雲母を含む	
218	縄文土器	深鉢	胴部	E12/G11	XI XII	縄文文様・横位1条の貼付変帯(押し刷目) 縦位の貼付変帯(斜交印点文) 横位2条の沈み溝 縦線状の沈み溝 水引状の貼付変帯(押し刷目) 沈み溝による逆三角形・同心円状文	横-斜方向のナデ	黄 黄	金/黄/黒色/灰 白	金雲母を含む 内面に黒黒	
219	縄文土器	深鉢	胴部	不明	D11/E5/ F11	XII	押し刷目(口縁部部) 横位2条の貼付変帯(押し刷目) コブ状突起 縄文文様	横-斜方向のケズリ状ナ デ 横ナデ	黄 黄	灰白/白/赤色/ 透明	鑑定口径35.5cm 金雲母を含む
220	縄文土器	深鉢	胴部	不明	B8-9 X1- XII	XII	押し刷目(口縁部部) 横位1条の貼付変帯(縄文文様) 横位2条の貼付変帯(縄文文様) 縦線状の沈み溝 縦線状の沈み溝	多方向のナデ	黄 黄	灰黒 白/赤色/灰 赤黒	鑑定口径26.0cm 金雲母を含む
221	縄文土器	深鉢	胴部	E15	XI XII	縄文文様 縦位の貼付変帯(押し刷目) 横位の貼付変帯(斜交印点文) 水引状の貼付変帯(斜交印点文) 斜方向の沈み溝、縦沈み溝	丁字な縦方向のナデ 横方向のナデ	黄 黄	灰白/黒色/灰 赤黒		
222	縄文土器	深鉢	胴部	E15/F15	XI XII	横位1条の貼付変帯(押し刷目) 逆三角形・逆三角形・逆三角形の沈 み溝	斜方向の工具によるナデ 一部、斜方向の工具痕跡 斜方向のケズリ状ナデ	黄 黄	灰白/黒色/赤 黒	金雲母を含む 内面に黒黒	
223	縄文土器	深鉢	胴部	B8-E11	XI XII	横位の貼付変帯(押し刷目) 放射状の沈み溝・斜交印点文 放射状文	横位工具による横ナデ 斜方向のケズリ状ナデ	黄 黄	灰白/金/黄/黒 赤黒	金雲母を含む 内外面に黒黒	
224	縄文土器	深鉢	胴部	E4	XI XII	斜方向の縄文	斜方向のナデ	黄 黄	金/灰白/赤 赤黒	金雲母を含む 外面にスス付着 内面に炭化物付着、黒黒	
225	縄文土器	深鉢	胴部	C6-7	X1- XII	縄文文様 縦位の貼付変帯(押し刷目) 沈み溝による垂状文 縦線状文	横方向のケズリ状ナデ 斜方向のケズリ状ナデ	黄 黄	灰白/黒色/赤 黒	金雲母を含む	
226	縄文土器	深鉢	胴部	不明	D5-E5/ X1- XII	XII	斜交印点文(口縁部部) 横位1条の貼付変帯(押し刷目) 横位2条の貼付変帯(斜交印点文) 垂状状の沈み溝 縄文文様 十字(逆)の十字印 斜方向の沈み溝	丁字な横ナデ 横-斜方向のナデ 一部ケズリ状ナデ 放射状	黄 黄	赤黒/灰白/赤 黒 透明/白色透明	鑑定口径33.2cm 非定形胴最大径17.3cm 非定形胴19.0cm 内外面に黒黒
227	縄文土器	深鉢	胴部	D5	XII	縄文文様 コブ状突起 放射状の沈み溝 横位1条の貼付変帯(押し刷目)	横位工具による横-斜方 向のナデ	黄 黄	灰白/白色透明/ 黒色	金雲母を含む 内面に黒黒	
228	縄文土器	深鉢	胴部	不明	B5-7/ D5-E5/ D6-E5/ X1- XII	XII	押し刷目(口縁部部) コブ状突起 横位1条の貼付変帯(押し刷目) 縄文文様 縦線状の沈み溝 垂状状の沈み溝	横方向の丁字なナデ	黄 黄	黒色/金/灰白	鑑定口径33.6cm 金雲母を含む
229	縄文土器	深鉢	胴部	不明	E11	XII	横位2条の貼付変帯(押し刷目) 横位1条の貼付変帯(押し刷目) 横位の沈み溝、縦沈み溝	横方向のナデ 放射状	黄 黄	灰白/黄/黒色/ 透明	内外面に黒黒
230	縄文土器	深鉢	胴部	不明	D5	XII	無文文様 押し刷目(口縁部部) ボタナ状突起 縦線状の沈み溝 横位1条の貼付変帯(押し刷目)	横方向の丁字なナデ	黄 黄	灰白/黄/黒色/ 黒色	金雲母を含む
231	縄文土器	深鉢	底部	A8-B8/ C8-9/D8	XI XII	横位2条の貼付変帯(押し刷目) 横位3条の貼付変帯(斜交印点文) 横位2条の貼付変帯(斜交印点文) 山形・斜方向・横位3条の沈み溝	丁字なナデ 横-斜方向のナデ 逆三角形の横方向のナ デ 放射状	黄 黄	灰白/黒色透明/ 白色透明/黄 赤黒	縦位口径21.3cm、底径7.2cm 外面にスス付着、一部黒黒 内面に炭化物付着、一部黒黒 底部に白色付着物	
232	縄文土器	深鉢	胴部	B8-C8	XI XII	横位2条の貼付変帯(押し刷目) 横位1条の貼付変帯(押し刷目)	横方向のケズリ状ナデ	黄 黄	灰白/黄/黒色/ 黒色	金雲母を含む	
233	縄文土器	深鉢	胴部	不明	D6/ F10-11	XII	縄文文様 横方向のナデ 横位2条の貼付変帯(押し刷目) 横位5条の貼付変帯(押し刷目) 横位1条の貼付変帯(押し刷目)	ケズリ状ナデ、ナデ	黄 黄	灰白/黒色光沢/ 無色透明/黄 赤黒	鑑定口径38.5cm 非定形胴最大径31.1cm 金雲母を含む 内面に黒黒
234	縄文土器	深鉢	胴部	C10	XI XII	斜方向の縄文	斜方向のナデ	黄 黄	灰黒 灰白/黒色光沢/ 無色透明	底径1cm 内面に炭化物付着 外面にスス付着、白色付着物	
235	縄文土器	深鉢	胴部	B9	XI XII	斜方向の縄文 丁字なナデ	斜方向のナデ 丁字なナデ	黄 黄	灰白/黒色/ 赤黒	鑑定口径5.8cm 金雲母を含む 外面にスス付着	
236	縄文土器	深鉢	胴部	G10	XI XII	斜方向の縄文 ナデ	斜方向のナデ	黄 黄	黒色透明/ 赤黒	鑑定口径5.6cm	
237	縄文土器	深鉢	胴部	C10	XI XII	斜方向の縄文	斜方向の横いナデ 横方向のナデ	黄 黄	黒色光沢/灰白 赤黒	底径8.6cm 内面に黒黒 非定形胴最大径16.5cm	
238	縄文土器	深鉢	胴部	E5	XI XII	縄文	ナデ	黄 黄	灰白/黒色光沢/ 無色透明/ 黒色	非定形胴最大径16.5cm	
239	縄文土器	深鉢	胴部	G10-11/ 12/H12	XI XII	斜方向の無縄文 風化気味	横いナデ 放射状	黄 黄	灰白/無色透明/ 黒色/黄/赤黒/ 黒色	外面に黒黒	
240	縄文土器	深鉢	胴部	G11	XII	放射状	放射状	黄 黄	灰白/無色透明/ 黒色/無色透明/ 黒色	鑑定口径6.8cm 縦位口径2.5cm、底径2.7cm 外面に炭化物付着、内面に炭化 物多量付着、白色付着物	
241	縄文土器	深鉢	胴部	C8	XI XII	横-斜方向の縄文	横-斜方向の横いナデ 放射状	黄 黄	灰白/黒色/ 黒色	鑑定口径最大径20.8cm 内面に炭化物付着、一部黒黒 外面にスス付着、黒赤	
242	縄文土器	深鉢	胴部	G16-17	XI XII	斜方向の縄文 斜方向の工具痕 跡ナデ 放射状	斜方向のナデ	黄 黄	金/灰白/黄 赤黒	鑑定口径12.4cm 金雲母を含む 内面に黒黒	
243	縄文土器	深鉢	胴部	C10	XI XII	横-斜方向の縄文 ナデ	ナデ	黄 黄	明赤黒/黄 赤黒	鑑定口径5.2cm 金雲母を含む 外面にスス付着	
244	縄文土器	深鉢	胴部	E10/ F10-11	XI XII	一部縦方向の工具痕 跡斜方向の縄文 ナデ	横-斜方向のナデ 丁字が見られる	黄 黄	明赤黒/黄 赤黒	底径12cm 外面に黒黒	
245	縄文土器	深鉢	胴部	F10	XI XII	斜方向の縄文	丁字なナデ	黄 黄	黒色光沢/ 透明	鑑定口径8.0cm 金雲母を含む 外面に白色付着物	
246	縄文土器	深鉢	胴部	B5-6/ C6-F6	XI XII	斜方向の ナデ	横方向のケズリ状ナデ	黄 黄	黒色光沢/白 無色透明/灰 赤黒	底径7.4cm 外面に白色物質付着	

第10表 土器観察表 (7)

館名 番号	種別	器種	部位	出土位置		形制調整・文様ほか		色澤		胎土(粒粒) の特徴(種類)	備考
				グロッド	層・産地	外面	内面	外面	内面		
247	縄文土器	深鉢	胴部- 底面	C9	XII	ナナ 幅広いナテ	斜方向の幅広いナテ 幅広いナテ	靑	黒黒	赤褐色にふいね 灰白・透明・黒色 光沢	器底に2.7cm 断面にスチール付着
248	縄文土器	深鉢	胴部- 底面	G10	XII	斜方向の縄文 ナテ	斜方向の縄文が残る ナテ	靑	黒黒	靑・灰白・透明 ・黄褐色	器底深3.3cm 外面に白色付着物 ・黒鉄
249	縄文土器	深鉢	胴部- 底面	C9	XII	ナテ	斜方向の縄文 ナテ	靑黒	黒黒	灰白・赤褐色/黒 赤黒	底径7.6cm 外面に黒色付着物
250	縄文土器	深鉢	胴部- 底面	F11-G11	XII	斜方向の縄文 ナテ	指張痕 ナテ	靑	黒黒	透明・灰白/明 黄黒	器底深17.0cm 器底断面最大径22.0cm 内外面に黒鉄
251	縄文土器	深鉢	胴部- 底面	F10-11	XII	縦・斜方向の縄文 一部指張痕	縦・横方向のケズリ状ナ テ	靑	黒黒	灰白・赤褐色/透 明	器底深17.0cm 器底断面最大径22.0cm 内外面に黒鉄
252	縄文土器	深鉢	胴部- 底面	B5-C10	XII	指張痕 ナテ	指張痕 ナテ	靑	黒黒	赤褐色/黒赤 黒赤	器底深19.6cm 外面に白色付着物
253	縄文土器	深鉢	胴部- 底面	B6- D5-6	XI	斜方向の屈付変形 丁寧なナテ	斜方向の縄文 ナテ	靑	黒黒	赤褐色	底径2.5cm 断面に 赤褐色
254	縄文土器	深鉢	胴部- 底面	D6	XII	ナテ	斜方向のケズリ状ナ テ	靑	黒黒	灰白・黒色光沢 赤黒	器底深17.0cm 器底断面最大径22.0cm 内外面に黒鉄
255	縄文土器	深鉢	胴部- 底面	F11	XII	斜方向の縄文 ナテ	指張痕 ナテ	靑	黒黒	靑・黒色光沢/金 ・赤黒	金粟母を含む 内面に灰褐色、外面にスチール
256	縄文土器	深鉢	胴部- 底面	E10-G11	XII	指張痕	横方向のナテ	靑	黒黒	靑・黄褐色/赤 黒	器底深10.8cm
257	縄文土器	深鉢	胴部- 底面	F17-G16	XII	斜方向の縄文 底面・指張痕	ケズリ状ナテ	靑	黒黒	靑・黄褐色/灰 白	器底深10.4cm 金粟母を含む 外面に白色付着物
258	縄文土器	深鉢	胴部- 底面	C9-F11	XII	斜方向の縄文 丁寧なナテ	斜方向のナテ	靑	黒黒	灰白/黄褐色/黒 赤黒	器底深10.0cm 金粟母を含む 内面に黒鉄
259	縄文土器	深鉢	胴部- 底面	E11	XII	斜方向のナテ 斜方向のナテ	幅広い斜方向のナテ 斜方向のケズリ状ナテ	靑	黒黒	赤褐色/灰白 ・黒色光沢/灰	外面にスチール、土塊が付着
260	縄文土器	甕	口縁- 胴部	G10	XII	斜方向の卑屈縄文 ナテ(指張痕)	横方向のナテ	靑	黒黒	透明靑・赤黒 赤黒	器底径10.6cm 内外面に黒鉄
261	縄文土器	甕	口縁部	B8	XI	斜方向の縄文 ナテ	幅広いナテ 指張痕	靑	黒黒	灰白・黒色光沢 ・黒色光沢	器底径10.9cm 外面にわずかな黒鉄
262	縄文土器	甕	口縁- 胴部	F11-12	XII	斜方向の縄文 ナテ	幅広いナテ/赤黒、無 色透明	靑	黒黒	灰白/赤黒、無 色透明	器底径10.8cm 外面に黒鉄
263	縄文土器	甕	口縁- 胴部	E14	XII	幅広いナテ 斜方向の縄文	横方向のナテ(指張 痕)斜方向の幅広いナテ(指張 痕)	靑	黒黒	赤褐色/灰白 ・黒色、黒赤	器底径10.9cm
264	縄文土器	甕	口縁- 胴部	AR-/ CR-9	XII	斜方向の縄文	横方向のナテ 指張 痕 斜方向の工具の痕	靑	黒黒	灰白・黒色光沢 ・無色透明	器底径10.7cm 内外面に黒鉄
265	縄文土器	甕	胴部- 底面	E12	XII	縄文底、一部縦方向のナテ	斜方向のナテ	靑	黒黒	明黄黒/透明 赤黒	器底径10.8cm 内面に一部黒鉄
266	縄文土器	甕	口縁- 胴部	C9	XII	ナテ(口縁部) 縄文(一部指張痕)	しはる縦 縦方向のナテ 被合 斜-横方向の粗 いナテ	靑	黒黒	赤褐色 赤色 黒色光沢	器底径10.8cm 器底断面最大径24.8cm 内外面に黒鉄
267	縄文土器	甕	胴部	C10	XIII	斜方向の縄文 斜方向の工具痕	横方向のケズリ状ナテ	靑	黒黒	白色/金色/黒 色透明	器底断面最大径20.2cm 内面に一部黒鉄、金粟母を含む
268	縄文土器	甕	胴部- 底面	G1-F10	XII	変形の指張痕 斜方向の縄文	指張痕 ナテ	靑	黒黒	灰白/明黄黒/ 黒色、赤黒	器底径10.7cm 外面に一部黒鉄、スチール
269	縄文土器	甕	胴部- 底面	IR-/ ES-/ G11	XII	斜方向の縄文 一部ナテ	ナテ 指張 痕 斜方向のケズリ状ナ テ	靑	黒黒	赤褐色/黒色 光沢	外面に黒鉄
270	縄文土器	甕	胴部- 底面	A7-8/ B9	XII	縄文地文(横方向) 指張痕の屈付変形(斜変形点文)	ナテ	靑	黒黒	灰白・赤褐色/黒 赤黒	内外面に黒鉄
271	縄文土器	甕	胴部- 底面	F10-G10	XII	縄文地文(斜方向) 指張痕の屈付変形(押圧痕目)	ナテ 指張痕	靑	黒黒	灰白・黒色 光沢	内外面に黒鉄
272	縄文土器	甕	胴部	D9	XII	縄文地文(斜方向) 指張痕の屈付変形(押圧痕目)	横方向のナテ	靑	黒黒	靑・明黄黒/白 色透明	金粟母を含む
273	縄文土器	甕	胴部- 底面	D6-F10	XII	縄文地文(斜方向) 指張痕の屈付変形(斜変形点文)	斜方向の幅広いナテ	靑	黒黒	灰白/赤褐色/白 色透明	金粟母を含む
274	縄文土器	甕	胴部	IR-/F11/ G11-12	XII	縄文地文(斜方向) 指張痕の屈付変形(斜変形点文) 指張痕の屈付変形(斜変形点文)	横方向のケズリ状ナテ	靑	黒黒	明黄黒 灰白/黒・透明	内外面黒化
275	縄文土器	甕	胴部	E11	XII	縄文地文(斜方向) 指張痕の屈付変形(斜変形点文) 指張痕の屈付変形(斜変形点文)	横方向の幅広いナテ	靑	黒黒	白色/赤褐色/ 黒色	外面にスチール 内面に黒鉄
276	縄文土器	甕	胴部- 底面	D6-E4	XII	縄文地文(斜方向) 指張痕の屈付変形(斜変形点文)	指張痕 横方向のナテ	靑	黒黒	黒色光沢/灰白 ・無色透明	内面にわずかに黒鉄
277	縄文土器	甕	胴部	E11-F11	XII	縄文地文 指張痕の屈付変形(押圧痕目) 指張痕の屈付変形(押圧痕目)	横方向のケズリ状ナテ	靑	黒黒	白色透明/明黄 黒/金	金粟母を含む 内外面に黒鉄、外面にスチール
278	縄文土器	甕	胴部	E16/ F15-16	XII	縄文地文(斜方向) 指張痕の屈付変形(押圧痕目)	ナテ 全体に指張痕	靑	黒黒	灰白/赤褐色/白 色透明	内面に黒鉄 金粟母を含む
279	縄文土器	甕	口縁- 胴部	D6-F11/ G12	XII	縄文地文(斜方向) 指張痕の屈付変形(斜変形点文) 指張痕の屈付変形(押圧痕目)	ナテ 指張 痕 横方向のナテ	靑	黒黒	靑・明黄黒/灰 白	器底径11.16cm 金粟母を含む
280	縄文土器	甕	口縁- 胴部	D6-ES-6	XI	縄文地文 2条の屈付変形(斜変形点文) 指張痕の屈付変形(押圧痕目)	ナテ 粘土の被合を含む 指張痕	靑	黒黒	灰白/金・黒色 光沢	器底径11.43cm 金粟母を含む
281	縄文土器	甕	口縁部	CR-/D4/ E10-F10	XII	縄文地文、ボタナ状突起 指張痕の屈付変形(斜変形点文) 指張痕の屈付変形(斜変形点文)	横・斜方向のナテ 指張痕	靑	黒黒	灰白/無色透明 赤褐色/黒色光沢	器底径11.10cm 赤色黒利庫 金粟母を含む
282	縄文土器	甕	口縁- 胴部	C7-D6	XII	指張痕の屈付変形 指張痕の屈付変形 縄文地文	横方向の丁寧なナテ	靑	黒黒	透明赤黒/黒 い黄鉄/黒色光 沢、黒鉄	器底径15.9cm
283	縄文土器	甕	口縁- 胴部	F10	XII	縄文地文 2条の屈付変形(斜変形点文) 指張痕の屈付変形(斜変形点文)	横方向のナテ	靑	黒黒	白色半透明/灰 白	器底径11.53cm 内面に灰白色付着物、黒鉄 外面にスチール
284	縄文土器	甕	胴部	B9-G12	XII	指張痕 コフ状突起 指張痕の屈付変形(縄文地文)	ナテ 指張痕	靑	黒黒	明黄黒/黒 赤黒	金粟母を含む
285	縄文土器	甕	口縁- 胴部	C9-F10	XII	指張痕の屈付変形(縄文地文) 指張痕の屈付変形(縄文地文)	横方向のナテ ミダナ	靑	黒黒	無色透明/灰白 ・黒色光沢/赤黒	器底径11.28cm 断面のつりが全体に黒
286	縄文土器	甕	胴部- 底面	D5-E6	XII	縄文地文(斜方向) 指張痕の屈付変形(押圧痕目) 斜方向の屈付変形(斜変形点文)	横方向のナテ 指張 痕 斜方向の幅広いケズリ状 ナテ	靑	黒黒	靑/灰白/明黄 黒	金粟母を含む 内外面に黒鉄
287	縄文土器	甕	胴部	B7	XII	縄文地文(斜方向) 指張痕の屈付変形(押圧痕目)	横方向の幅広いケズリ状 ナテ	靑	黒黒	灰白/明黄黒/ 金色	金粟母を含む 内面に一部黒鉄

第11表 土器観察表(8)

編年	種別	器種	部位	出土位置	器面調査-文様ほか		色調		胎土(砂粒)の 特徴/備考
					外 面	内 面	外 面	内 面	
288	縄文土器	甕	胴部- 胴部	E5 XI	横位2条の胎付変帯(押止目) 沈凹による三角形文	ナデ 指痕直 斜方向の粗いナズリ状ナデ	外 面 内 面	金/灰白/透明	金雲母を少量含む
289	縄文土器	甕	胴部- 胴部	E11/F11 XI	横位2条の胎付変帯(押止目) 内凹状の沈凹文	斜-横方向のナデ	外 面 内 面	明褐色 灰黒	黒色光沢/無色 透明/黒色透明
290	縄文土器	甕	胴部	D6/G11 XII	横位3条の胎付変帯(押止目) 横位2条 半月状や菱形状の沈凹文	横方向の粗いナズリ状ナデ 丁寧な横方向のナデ	外 面 内 面	明褐色 黒	黒褐色/無色透明 黒色透明
291	縄文土器	甕	口縁部	F12/G16 XII	縄文土文(斜方向) ボタン状突起 横方向の沈凹文	ナデ	外 面 内 面	黒 黒	黒定口径13.3cm
292	縄文土器	甕	胴部- 胴部	G15 XII	縄文土文 菱形状の沈凹文	ナデ	外 面 内 面	黒 黒	灰白/白色/黒色 透明/黒色透明
293	縄文土器	甕	胴部- 胴部	F11/G12 XII	縄文土文 菱形状の沈凹文	ナデ	外 面 内 面	黒 黒	灰白/黒色/灰白 透明/黒色透明
294	縄文土器	甕	胴部- 胴部	C7/G11 XII	ナデ 横方向の沈凹文 斜方向の縄文 斜方向のナズリ状の粗いナデ	横方向のナデ 指痕直 斜方向の粗いナズリ状ナデ	外 面 内 面	黒 黒	黒色光沢/無色 透明/黒色透明
295	縄文土器	深鉢	口縁部	E10 XII	横ナデ	横ナデ	外 面 内 面	黒 黒	黒色光沢/無色 透明/黒色透明
296	縄文土器	深鉢	口縁部	F11 XII	ナデ	粗いナデ	外 面 内 面	黒 黒	黒定口径16.6cm 内外面に黒塗、外面に黒塗
297	縄文土器	深鉢	口縁部	D6 XII	粗いナデ	粗いナデ	外 面 内 面	灰黒 灰黒	黒定口径11.0cm 内面の広範囲に黒塗
298	縄文土器	深鉢	口縁部	D6 XII	縄文土文(口縁部) 縄文土文 横位2条の胎付変帯 ナデ	横-斜方向のナデ	外 面 内 面	明褐色 黒	黒定口径12.5cm 内面にスエス/内面に黒化物質含む
299	縄文土器	深鉢	口縁部	C9 XII	横位2条の胎付変帯 横位2条の胎付変帯 無文土文	指痕直 横方向のナデ	外 面 内 面	明褐色/透明 黒	内面に黒化物質含む、赤雲 外面にスエス付着
300	縄文土器	深鉢	口縁部- 胴部	C7/F11/ G12 XII	押止目(口縁部) 横位2条の胎付変帯 横位2条の胎付変帯(押止目) 無文土文	ナデ	外 面 内 面	黒/黒 黒	黒定口径15.2cm 外表面に黒塗、外表面に黒塗
301	縄文土器	深鉢	口縁部	C8 XII	横位2条の胎付変帯(斜交点文) 横位2条の胎付変帯(斜交点文)	横方向の丁寧なナデ	外 面 内 面	黒 黒	灰白/白色透明 黒色光沢/黒色透明
302	縄文土器	深鉢	口縁部	F11 XII	無文土文 コブ状突起 横位2条の胎付変帯文(斜交点文) 横位1-2条の胎付変帯文(斜交点文)	横ナデ 横-斜方向の粗いナデ	外 面 内 面	黒 黒	灰白/無色透明 黒
303	縄文土器	深鉢	口縁部	B7-C7 XII	無文土文 押止目(口縁部) 横位2条の胎付変帯(縄文土文)	横方向のナデ	外 面 内 面	明褐色 黒	金雲母を含む
304	縄文土器	深鉢	口縁部	E5 XII	横位2条の胎付変帯(縄文土文) ボタン状突起 横位2条の胎付変帯(押止目)	斜方向のナデ	外 面 内 面	明褐色/透明 黒色透明	
305	縄文土器	深鉢	口縁部	F17/G16 XII	縄文土文 横位2条(縄文土文) ボタン状突起 横位2条の胎付変帯(縄文土文)	粗い横ナデ	外 面 内 面	黒 黒	光沢/黒白/黒 色透明
306	縄文土器	深鉢	口縁部	F10-11 XII	縄文土文(口縁部) 横位2条の胎付変帯(押止目) 横位2条の胎付変帯(押止目)	ナズリ状の横-斜方向のナデ	外 面 内 面	灰黒 黒	黒定口径15.2cm 黒定口径11.0cm 黒高17.4cm 外表面に黒塗
307	縄文土器	深鉢	口縁部	F11 XII	押止目(口縁部) 横位2条の胎付変帯(押止目) 斜方向の沈凹文	横方向のナデ	外 面 内 面	黒 黒	光沢/透明光沢 乾白/黒
308	縄文土器	深鉢	口縁部	F10-11 XII	横位2条の胎付変帯(斜交点文) 縦紋直、横紋直、横紋直の沈凹文(斜交点文) 横位1条の胎付変帯(斜交点文)	横方向のナデ	外 面 内 面	黒 黒	白色/無色透明 光沢
309	縄文土器	深鉢	口縁部	B7 XI	横位2条の胎付変帯(押止目) 横位2条の胎付変帯(押止目)	横方向のナデ	外 面 内 面	黒 黒	灰白/黒色/透明 光沢
310	縄文土器	深鉢	口縁部	F11 XII	押止目(口縁部) 横位1条の胎付変帯(斜交点文) 横位1条の胎付変帯(斜交点文) 横位2条の胎付変帯 横位2条の沈凹文	横方向の丁寧なナデ	外 面 内 面	灰黒 黒	黒色光沢/無色 透明
311	縄文土器	深鉢	口縁部	E10/ F15/G11 XII	押止目(口縁部) コブ状突起 斜方向の沈凹文	ナデ 斜方向の工具痕	外 面 内 面	黒 黒	黒色沈凹/灰白 無色透明/黒
312	縄文土器	深鉢	胴部	B6/D6 XII	無文土文 斜方向、縦紋状の沈凹文 横位2条の胎付変帯(斜交点文)	丁寧なナデ 粗い横ナデ	外 面 内 面	黒 黒	無色透明光沢 黒色光沢/透明
313	縄文土器	深鉢	口縁部	OB-D6-7 XII	横位2条の胎付変帯(押止目) 横位2条の沈凹文(斜交点文) 縦紋状の沈凹文 縄文土文	横ナデ	外 面 内 面	黒 黒	黒色光沢/無色 透明/灰白
314	縄文土器	深鉢	胴部	E15 XI	横位2条の胎付変帯(押止目、縄文) 沈凹文に沈凹文 ナデ	横方向のナデ	外 面 内 面	黒 黒	黒色光沢/無色 透明/黒色透明
315	縄文土器	深鉢	胴部	E15-16 XII	横位2条の胎付変帯(斜交点文) 横位2条の胎付変帯(斜交点文)	丁寧な横ナデ	外 面 内 面	黒 黒	灰白/黒色/黒 色透明
316	縄文土器	深鉢	口縁部	C5-6/D6 XII	縄文土文(口縁部) 無文土文 横位2条の胎付変帯(横位2条) 横位1条の胎付変帯(縄文土文) コブ状突起(縦紋直、横位変帯) 縦紋状の沈凹文 菱形状の沈凹文	多方向の丁寧なナデ	外 面 内 面	明褐色 黒	黒色/黒色透明/黒 赤黒
317	縄文土器	深鉢	口縁部	B8-9/ C3/D1/ E4-5 XII	押止目(口縁部) コブ状突起 横位3条の胎付変帯(斜交点文) 横位1条の胎付変帯(斜交点文) 縦紋状の沈凹文	横方向のナデ	外 面 内 面	黒 黒	黒色光沢/無色 透明/黒色透明
318	縄文土器	深鉢	口縁部	D6 XII	横位2条の胎付変帯(押止目) 縦紋状の沈凹文 菱形状の沈凹文	横ナデ 一部に工具痕	外 面 内 面	明褐色 明褐色	灰白/黒色/透明 黒
319	縄文土器	深鉢	口縁部	D10/F10 XII	横位2条の胎付変帯(斜交点文) 横位2条の胎付変帯(押止目、縄文) 横位2条の胎付変帯(斜交点文)	横方向のナデ	外 面 内 面	明褐色 明褐色	白/黒色透明/ 透明
320	縄文土器	深鉢	口縁部	E15 XII	押止目(口縁部) 横位1条の胎付変帯(斜交点文) 斜方向の沈凹文	丁寧なナデ 斜-横方向のナズリ状ナデ	外 面 内 面	黒 黒	黒色光沢/黒色 透明
321	縄文土器	深鉢	口縁部	E15 XII	押止目(口縁部) 斜方向の沈凹文(斜交点文)	丁寧なナデ	外 面 内 面	黒 黒	黒色光沢/無色 透明
322	縄文土器	深鉢	口縁部	G11 XII	口縁部斜交文(口縁部) コブ状突起 横位2条の胎付変帯(押止目) 縦紋状の沈凹文	斜-横方向のナデ 工具痕	外 面 内 面	黒 黒	灰白/黒色/透明 光沢

第12表 土器観察表(9)

館名 番号	種別	器種	部位	出土位置 アソット層-遺跡	器面調整-文様ほか		色澤	胎土(釉粒の 特徴(種類))	備考
					外面	内面			
323	縄文土器	深鉢	口縁部	B7-8 XI	無文地文 横位2条の胎付変形(押止眉目)縦線状の沈線文	横方向のナデ	こげい 黄緑	透明光沢/灰白 黒色光沢	
324	縄文土器	深鉢	胴部へ -胴底	D6-7 XII	無文地文 2条の沈線部に斜交刺点文 斜方向の沈線文 コフ状突起 横位2条の胎付変形(押止眉目)	ナデ(風化気味) 指面磨	こげい 黄緑	透明光沢/透明 黒色光沢/黄緑/黒 灰白/黒/黄 透明/黒	赤色顔料添付(外面全体か)
325	縄文土器	深鉢	胴底	G10 XII	横位2条の胎付変形(押止眉目) 縦線状の沈線文 沈線部に斜交刺点文	斜方向のナズリ状ナデ	こげい 黄緑	透明/黒	
328	縄文土器	深鉢	胴底	F10 XII	横位2条の胎付変形(斜交刺点文) 斜方向の沈線文 縦線文	ナデ	こげい 黄緑	灰沢/金/灰白 黄緑	金葉母を含む
327	縄文土器	深鉢	胴底	E11 XII	横位2条の胎付変形(縦線文) 斜方向の沈線文	ナデ	こげい 黄緑	透明/灰白/透明 黄緑/黒色光沢	内面に赤色顔料と一面にス ス付着
328	縄文土器	深鉢	胴底	F11 XII	横位2条の胎付変形 菱形状の多重沈線文	斜方向のナデ 一部強いナデ	こげい 黄緑	金/灰白/白色 半透明	外面にスス少量付着
329	縄文土器	深鉢	胴部へ -胴底	F16 XIII	ナデ	横方向のナデ ナデ風化	こげい 黄緑	黄緑/灰白 胎定灰B7.5cm	
330	縄文土器	深鉢	底底	E11 XIII	斜方向のナデ ナデ	ナデ	黄緑	灰/白/白色光 沢/無色透明	底径7.1cm 内外面に一部黒煤
331	縄文土器	深鉢	胴部へ -胴底	D6-7 XII	ナデ	横方向のナズリ状ナデ	こげい 黄緑	灰/白/白色光 沢	金葉母を含む 外面に黒煤
332	縄文土器	深鉢	底底	C8 XIII	ナデ	ナデ	こげい 黄緑	灰白/黒色/黒 色光沢	金葉母を含む 内面に灰化付着 外面に白色付着物
333	縄文土器	深鉢	底底	B8 XIII	ナデ 強いナデ	ナデ	こげい 黄緑	半透明/半 透明/黒色光沢/黒 色光沢	胎定底径6cm 金葉母を含む 外面にスス付着
334	縄文土器	深鉢	胴部へ -胴底	C7/F11 XIII	強いナデ	ナズリ状ナデ(横-斜方向) 強いナデ	こげい 黄緑	胎定底径7.5cm 灰/黒色光沢	内外面にスス付着 外面に黒煤
335	縄文土器	深鉢	底底	C9 XI	ナデ	瓜形	こげい 黄緑	赤黒/灰白/半 透明/黒色光沢	胎定底径6.5cm
336	縄文土器	深鉢	底底	E4 XII	ナデ	ナデ	こげい 黄緑	透明/無色透明 黄緑	胎定底径4.8cm 外面に黒煤
337	縄文土器	壺	口縁へ -胴底	E6/F10 XII	横ナデ(口縁部) 縦-斜方向のナデ 一部強いナデ	縦方向の強いナデ 一部強いナデ	こげい 黄緑	灰白/透明/黒 色光沢	胎定口径10cm 外面に 一部黒煤 スス付着
338	縄文土器	壺	口縁へ -胴底	G10-12/ H10 XII	ナデ	ナデ	こげい 黄緑	胎定口径6cm 金葉母を含む	外面に黒煤
339	縄文土器	壺	胴底	G11/H10 XII	横方向の強いナデ 無文地	横状工具による強いナデ	黄緑	灰白/赤黒/金 葉色	胎定底径14cm 金葉母を含む 内外面に黒煤、外面にスス付着
340	縄文土器	壺	口縁へ -胴底	F11/G10 XII	無文地 横位2条の胎付変形(押止眉目) 縦-斜方向のナデ、工具によるナデ	斜方向のナデ	こげい 黄緑	灰/黒/赤黒	
341	縄文土器	壺	口縁へ -胴底	E11 XII	口縁状の胎付変形(押止眉目) 無文地	横方向のナデ	こげい 黄緑	金/灰白/白半 透明	金葉母を含む 内面に黒煤
342	縄文土器	壺	胴部へ -胴底	E16 XI	横位2条の胎付変形(押止眉目) 横位2条の胎付変形(押止眉目)	横方向のナデ 指面磨	こげい 黄緑	灰白/赤/白 透明/黒色光沢	金葉母を含む 外面に黒煤
343	縄文土器	壺	口縁へ -胴底	E11/F11 XI	横位2条の胎付変形(斜交刺点文) 横位2条の胎付変形(斜交刺点文) 口縁上の胎付変形(斜交刺点文) 器面調整-短沈線文	指面磨 風化気味	黄緑	金/灰白/透明 黒色透明	胎定口径14cm 金葉母7少量含む
344	縄文土器	壺	口縁へ -胴底	F10 XII	口縁状沈線文(口縁部) ボタン状突起 横位2条の胎付変形(斜交刺点文) 横位2条の胎付変形(斜交刺点文) 横位2条の胎付変形(斜交刺点文)	斜方向のナデ 横方向の強いナデ	黄緑	胎定口径10cm 赤黒顔料付着 金葉母を含む	
345	縄文土器	壺	口縁へ -胴底	D6 XII	横ナデ後押止眉目(口縁部) ボ タン状突起 横位2条の胎付変形(押 止眉目) 横位2条の胎付変形(押止眉目) 沈線による多形沈線文 沈線部に短沈線文	横方向のナデ	黄緑	灰/透明/赤黒	外面に黒煤
346	縄文土器	壺	口縁へ -胴底	C9-10 XII	横位2条の胎付変形 コフ状突起 斜方向への沈線文 斜交刺点文 横位2条の胎付変形(斜交刺点文) 横位2条の胎付変形(斜交刺点文)	ナデ	黄緑	金/白色透明/ 透明	金葉母を僅かに含む 内面に黒煤
347	縄文土器	壺	口縁へ -胴底	D8-E12/ F10 XII	横位2条の胎付変形 コフ状突起 横位2条の胎付変形(斜交刺点文) 横位2条の胎付変形(斜交刺点文) 横位2条の胎付変形(斜交刺点文)	横-斜方向の工具磨 指面磨 横方向の強いナデ	黄緑	光沢/灰白/金 葉色透明/白色/黒 色光沢	胎定口径10cm 赤色顔料の塗布(沈線内) 金葉母を含む
348	縄文土器	壺	胴底	C10/E10 XII	無文地 縦位2条の胎付変形(斜交刺点文) 菱形状の沈線文 縦線状の沈線文	斜方向の強いナズリ状ナ デ	こげい 黄緑	金/灰白/白色 透明/赤黒	金葉母を含む
349	縄文土器	壺	胴底	G10 XII	コフ状突起 横方向のナデ後沈線文	横方向のナデ 強いナデ	黄緑	透明/透明/ 黄緑	内面に一部黒煤
350	縄文土器	壺	胴底	E10 XII	コフ状突起 横方向のナデ後沈線文	横方向のナデ	こげい 黄緑	金/灰白/赤黒 透明/赤黒	金葉母を含む
351	縄文土器	深鉢	口縁部	D6 XII	押止眉目(口縁部) 横 位2条の沈線文	横ナデ	こげい 黄緑	透明/無色透明 黄緑	内面に黒煤、灰化付着物 外面にスス付着
352	縄文土器	深鉢	口縁へ -胴底	C2 XI	胎付変形(縄文地文) 横ナデ 斜方向の縄文文	ナズリ状斜方向の縄文文 丁型横方向のナデ	こげい 黄緑	金/黄緑/灰白 内面に黒煤	
353	縄文土器	深鉢	口縁部	B8/E10 XII	縄文地文 無文地文(口縁部)	斜方向のナデ	黄緑	灰白/無色透明 赤黒透明/赤黒光 沢	内面に黒煤、灰化付着物 外面にスス付着
354	縄文土器	深鉢	口縁部	F10 XII	縄文地文(口縁部) 縄文地文 横位2条の胎付変形(縄文地文)	横-斜方向のナデ	こげい 黄緑	灰白/無色透明 透明/赤黒透明	内面に黒煤
355	縄文土器	深鉢	口縁部	C9 XII	縄文地文(口縁部) 横位2条の胎付変形(縄文地文) ナデ	横-斜方向のナデ 指 面磨	こげい 黄緑	灰白/無色透明 赤黒透明/黒色光 沢	外面にスス付着
356	縄文土器	深鉢	口縁へ -胴底	E11/F10 XII	縄文地文 縄文地文(口縁部) コフ状突起 横位2条の胎付変形(縄文地文) 横位2条の胎付変形(斜交刺点文)	横-斜方向のナデ 指 面磨	こげい 黄緑	灰白/透明/明 黄緑	内外面に黒煤 内面に灰化付着物
357	縄文土器	深鉢	口縁へ -胴底	C9/E16 XII	口縁上の胎付変形(口縁部) 無文地文 横位2条の胎付変形(斜交刺点文)	横方向の丁寧ナデ	こげい 黄緑	金/灰白/黄緑	金葉母を含む 内面にくわがら灰化付着
358	縄文土器	深鉢	口縁へ -胴底	F10 XII	横位2条の胎付変形(縄文地文) 口縁部	多方向のナデ	こげい 黄緑	透明 光沢/透明/灰 灰白/黒色光沢	
359	縄文土器	深鉢	口縁へ -胴底	C10 XII	押止眉目(口縁部) 青黒 菱状の沈線文 無文地文	強い横ナデ	こげい 黄緑	透明 灰白/光沢/白 色	金葉母を含む
360	縄文土器	深鉢	口縁へ -胴底	E10 XII	横位2条の胎付変形(押止眉目) 多方向の沈線文	多方向のナデ	黄緑	透明/金/白 色	金葉母を含む
361	縄文土器	深鉢	口縁へ -胴底	E12 XII	口縁上の胎付変形(口縁部) 三角状の沈線文	丁寧なナデ 三角状の工具磨	こげい 黄緑	金/黄緑/赤黒	金葉母を含む 外面にスス付着、内外面に黒煤
362	縄文土器	深鉢	口縁へ -胴底	C7 XI	縄文地文 コフ状突起 斜方向の沈線文 横位2条の胎付変形(斜交刺点文)	指面磨	こげい 黄緑	灰白/金/黒色 光沢	赤黒顔料付着 金葉母を含む
363	縄文土器	深鉢	口縁へ -胴底	E15 XII	無文地文 横位2条の胎付変形(押止眉目) 横位2条の胎付変形(押止眉目) 横位2条の胎付変形(押止眉目) 横位2条の胎付変形(押止眉目) 横位2条の胎付変形(押止眉目) 横位2条の胎付変形(押止眉目)	横方向のナデ 多方向のナデ 横状工具によるナデ	こげい 黄緑	透明/光沢/白 色/透明	胎定底径11cm 外面に黒煤、赤黒 顔料付着



第13表 土器観察表 (10)

調査 番号	種別	器種	部位	出土位置 グリップ 層-遺構	表面調査-文様ほか		色調		胎土(胎粒)の 特徴(種類)	備 考
					外 面	内 面	外面	内面		
364	縄文土器	深鉢	口縁～ 胴部	D16-E15 I7-F11	XX	縄文施文 押止目(口縁部部) 横位2条の胎付突起(押止目) 縦施文,胎付突起,半円状の沈線文	丁寧なナデ	黄 に高い 黄褐色	灰白/赤黒 色光沢/半濁	胎定口径23.0cm 内面に炭化物付着 内面に黒染
365	縄文土器	深鉢	胴部	D6-7	XI-XII	押止目(口縁部部) 横位2条の胎付突起(押止目) 縦施文の沈線文(口縁部) 胎付突起の沈線文 無文施文	丁寧なナデ(黒化灰味)	黄褐色 に高い 赤褐色	灰白/赤黒 色光沢/明赤黒	胎定口径24.6cm
366	縄文土器	壺	口縁～ 胴部	F10	XII	上下2段の刺突列点文 波状沈線文	一段黒染 横方向のナデ	黄 明褐	黄/明黄褐色/白	胎定口径8.8cm
367	縄文土器	壺	口縁～ 胴部	H5	XII	刺突列点文(口縁部部) コフ状突起 縦施文の沈線文 無文施文	指痕等 横-斜方向のナデ 横位の工具痕	に高い 黄褐色	白/灰/赤黒	胎定口径9.0cm 赤色胎粒付着 内面に一部黒染
368	縄文土器	深鉢	口縁～ 胴部	C9-E10	XII	押止の押止目(口縁部部) 縄文施文 横位2条の胎付突起 横位2段の沈線文	横方向のナデ 横位のナデ	に高い 黄褐色	黄/灰/赤黒/灰 光沢	金雲母を含む 内面に黒染
369	縄文土器	深鉢	口縁～ 胴部	F10-G10	XII	押止目(口縁部部) 横位2条の沈線文 横方向の沈線文	丁寧なナデ 横方向のナデ	に高い 黄褐色	灰白/透明光沢 黒色光沢/赤黒	胎定口径22.8cm
370	縄文土器	深鉢	口縁～ 胴部	F11	XI XII	押止目(口縁部部) 刺突列点文 斜方向の沈線文 無文施文	横方向のナデ	に高い 黄褐色	灰白/赤黒 光沢	
371	縄文土器	深鉢	口縁～ 胴部	F12-G12	XII	縄文施文(口縁部部内外) ナデ施文 横位1条,縦位1条の胎付突起 赤褐色沈線文	斜方向の縄文 横方向の深いナデ	明赤黒 明赤黒	白色/光沢	胎定口径17.0cm
372	縄文土器	深鉢	口縁～ 胴部	E11/F11-12	XI-XII	胎付突起の沈線文(口縁部部) 横位1条の胎付突起(押止目) 横位1,内面沈線文-刺突列点文	ナデ	に高い 黄褐色	灰白/黄褐色/黒 光沢/金	金雲母を含む 外面にスス付着 内面に黒染
373	縄文土器	深鉢	口縁部	E5	XII	縄文施文(口縁部部) 輪状把手 内面1条の胎付突起(押止目) 2本の沈線文(半面管)による刺突列点文	ミゾギに近いナデ 工具による横方向の粗い ナデ	に高い 黄褐色	白/赤黒/灰 色	胎定口径17.7cm 外内面に黒染
374	縄文土器	深鉢	口縁部	F11	XII	押止目(口縁部部) 横位の刺突列点文 内面1条の沈線文 横位の刺突列点文	横方向のナデ	に高い 黄褐色	灰白/明赤黒/黒 光沢	金雲母を含む
375	縄文土器	深鉢	口縁部	F11	XII	胎付突起の沈線文(口縁部部) 横位1条の胎付突起(押止目) 横位1,内面沈線文-刺突列点文	横-斜方向のナデ 丁寧なナデ	に高い 黄褐色	黄/灰/赤黒 色 光沢	胎定口径14.3cm 外面にスス付着 内面に黒染
376	縄文土器	深鉢	口縁部	E11-16	XII	押止目,赤褐色沈線文(口縁部部) 無文施文 刺突列点文 横位の沈線文	横方向の丁寧なナデ	に高い 黄褐色	灰白/金/赤黒 色	金雲母を含む
377	縄文土器	深鉢	胴部	F11	XII	内外の沈線文に半面管による刺突列点文	横方向のナデ	に高い 黄褐色	透明光沢/灰白	
378	縄文土器	深鉢	胴部	G16	XII	縦位沈線文間に刺突列点文 内面1条の沈線文 ナデ(底部)	ナデ	に高い 黄褐色	黒色光沢/赤黒 色 透明光沢/灰白	胎定口径33cm 内面に黒染
379	縄文土器	深鉢	胴部	F11-G10	XII	2条1組の沈線文に刺突列点文	ナデ	明赤黒 に高い 黄褐色	光沢/金/白	金雲母を含む
380	縄文土器	深鉢	胴部	F12	XII	横位の胎付突起(押止目) 横位2条の胎付突起(刺突列点文) 斜方向の沈線文 沈線文間に刺突列点文	丁寧な横ナデ	に高い 黄褐色	明赤黒 黒色光沢/灰白 色/赤黒	
381	縄文土器	深鉢	口縁部	D6-E6	XII	胎付突起 波状の沈線文 押止目	ナデ 赤黒	赤黒	灰白/赤黒/赤 褐色	
382	縄文土器	深鉢	口縁部	F10	XII	成状の沈線文(口縁部部) 押止目(口縁部部)	丁寧なナデ	黄褐色	黄/白/白色半濁 明赤	金雲母を含む 内面に黒染
383	縄文土器	深鉢	口縁部	G10-11	XI XII	押止の沈線文(口縁部部) 押止目(口縁部部)	横化 丁寧なナデ	に高い 黄褐色	灰白/赤黒色光沢 黄褐色 赤黒色半濁	
384	縄文土器	深鉢	口縁部	G10	XI	押止の沈線文(口縁部部) 押止目(口縁部部)	横方向の粗いナデ	に高い 黄褐色	灰白/赤黒色半濁 黄褐色 黒色光沢/赤黒	
385	縄文土器	深鉢	口縁部	C8	XII	縄文施文(口縁部部) 斜方向,横位の沈線文	粗いナデ	に高い 黄褐色	赤黒/透明光沢/灰 白/黄褐色 明赤	胎定口径10.5cm
386	縄文土器	壺	口縁部	D6	XII	縄文施文(口縁部部) 沈線文に刺突列点文	横方向の工具ナデ	に高い 黄褐色	黒色光沢/透明 光沢/灰白	胎定口径11.0cm
387	縄文土器	壺	口縁部	F12-G11	XII	縄文施文 横位1条の胎付突起(刺突列点文) 横位2条の胎付突起(刺突列点文)	横方向のナデ 斜方向の粗いナデ	に高い 黄褐色	白/赤黒/赤褐色 透明 光沢	胎定口径9.7cm
388	縄文土器	壺	口縁部	E10	XII	横位1条の胎付突起 無文施文	横方向のナデ 横位の工具痕	に高い 黄褐色	灰白/明赤黒/赤 金	胎定口径10.5cm 金雲母を含む 外表面口縁部は風化のため不明瞭
389	縄文土器	壺	胴部	F10-I11/ G10-I10	XI-XII	横位2条の沈線文 刺突列点文 沈線文による縦線状-三角形状文	横方向の横ナデ	に高い 黄褐色	明赤黒 金/灰白/白色 半濁	金雲母を含む
390	縄文土器	深鉢	胴部	H5	XII	網目状赤染 横位2条の胎付突起(縄文施文)	横ナデ	に高い 黄褐色	明赤黒/光沢/黄褐色 赤黒	内面に炭化物付着,黒染
391	縄文土器	深鉢	胴部	E6	XII	網目状赤染 横位1条の胎付突起(押止目)	多方向の粗いナデ	に高い 黄褐色	黄褐色/透明光沢 灰白	外内面に黒染,外面にスス付着
392	縄文土器	深鉢	胴部	F11	XI	網目状赤染文	ナデ 一段黒染,工具痕	に高い 黄褐色	黄褐色/黒色光沢 灰白	外面に少量のスス付着 内面に黒染

第14表 磁器観察表

調査 番号	種別	器種	部位	出土位置 グリップ 層-遺構	表面調査-文様ほか		色調		胎土(胎粒)の 特徴(種類)	備 考	
					外 面	内 面	外面	内面			
19	白磁	碗	口縁～ 体部	A3	SC14	施釉		灰白	灰白	精良	
20	白磁	碗	口縁～ 体部	C4	E	施釉 輪状 輪だれ		灰白	灰白	精良	胎定口径13.8cm 内外面共に灰染
21	白磁	碗	口縁～ 体部	C2	E	施釉		灰白	灰白	精良	胎定口径16.4cm 内面に灰染
22	白磁	碗	口縁～ 体部	C2	E	施釉 輪だれ	施釉 輪だれ	灰白	灰白	精良	胎定口径19.9cm 内面に赤色灰
23	白磁	碗	口縁部		C2	E-V	施釉 回転ヘラケズリ	黄	黄	精良	胎定口径14.9cm

第15表 土製品計測表(1)

掲載番号	器種	出土位置		大きさほか			重量(g)
		グリッド	層・遺構	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	
58	土製円盤	C4	V	5.9	5.64	1.12	36.3
400	土製円盤	B7	XIII	4.9	4.8	1.05	28.2
401	土製円盤	B5	XII	4.9	4.5	1.1	23
402	土製片加工品	G10	XIII	7.3	6.1	1.04	52.4

第16表 土製品計測表(2)

掲載番号	器種	出土位置		大きさほか			重量(g)
		グリッド	層・遺構	器底表面径(cm)	器口表面径(cm)	厚さ(cm)	
283	土製耳飾(耳栓)	G11	XI			1.7	9.98
394	土製耳飾(耳栓)	E5	XII	8.65	8.5	1.95	8.4
395	土製耳飾(耳栓)	F11	XIII	9.3	8.6	2.1	12.4
396	土製耳飾(耳栓)	E16	XII				7.6
397	土製耳飾(耳栓)	E4	XI				5.9
398	土製耳飾(耳栓)	G16	XIII			1.9	7.3
399	土製耳飾(耳栓)	B8/F10	XI-XIII	6.95	7.05	2.25	32.7

第17表 金属器計測表

掲載番号	器種	部位	出土位置		器面図形・文様ほか			重量(g)
			グリッド	層・遺構	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	
66	銅線管	完存	F11	表土	12.3	1.6	1.2	9

第18表 石器計測表(1)

掲載番号	器種	出土Gr.	石材	遺構・層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
59	石鏃	H10	ガラス質安山岩	SE1	2.1	1.23	0.3	0.6
60	石鏃	G11	砂岩	V	9.4	4.9	1.1	42.3
61	打撃石斧	E17	ホルンフェルス	IV	4.7	5.25	1.3	40.0
62	打撃石斧	E17	砂岩	V	10.2	5.0	1.3	55.3
63	磨製石斧	C2	ホルンフェルス	IV	5.3	5.8	1.5	67.9
64	磨石	C3	花崗岩(大隅)	IV	12.0	9.6	4.5	836.5
65	台石	D2	砂岩	IV	18.35	18.45	5.15	2800.0
67	火打ち石	一次調査区	チャート	-	3.5	2.7	1.8	15.6
68	磨製石鏃	A1c	緑色凝灰岩	-	4.29	2.34	0.28	3
76	磨製石	F11	砂岩	SA1	8.1	6.8	4.0	257.4
77	磨石	F11	砂岩	SA1	7.9	7.05	4.0	318.6
78	磨製石	F11	砂岩	SA1	6.8	9.4	4.3	297.0
403	石鏃	B8	ガラス質安山岩	XII	1.91	1.49	0.45	0.8
404	石鏃	C6	ガラス質安山岩	XII	2.45	1.62	0.4	1.1
405	石鏃	B8	ガラス質安山岩	XI	2.32	1.9	0.38	1.2
406	石鏃	E16	ガラス質安山岩	XI	2.75	1.56	0.5	1.2
407	石鏃	D5	ガラス質安山岩	XI	2.17	2.12	0.51	1.8
408	石鏃	D6	黒曜石(巖倉)	XII	1.76	1.44	0.25	0.5
409	石鏃	D10	黒曜石(巖倉)	XII	2.09	1.76	0.54	1.1
410	石鏃	G10	黒曜石(巖倉)	XII	3.68	1.74	0.54	2.1
411	石鏃	C6	黒曜石(針尾島)	XII	1.52	1.61	0.38	0.5
412	石鏃	B8	黒曜石(針尾島)	XI	2.4	1.95	0.56	1.8
413	石鏃	G10	チャート	XI	2.05	1.56	0.49	1.1
414	石鏃	E10	ガラス質安山岩	XII	2.18	1.52	0.5	0.9
415	石鏃	D7	ガラス質安山岩	XI	2.94	0.15	0.63	1.8
416	石鏃	E14	黒曜石(巖倉)	XI	1.72	1.56	0.43	1
417	石鏃	E15	黒曜石(巖倉)	XII	3.16	1.69	0.56	1.8
418	石鏃	C6	黒曜石(針尾島)	XI	1.85	2.98	0.4	0.9
419	石鏃	B8	黒曜石(針尾島)	XI	2.22	1.57	0.3	0.7
420	石鏃	F11	黒曜石(針尾島)	XII	2.55	1.78	0.48	1.6
421	石鏃	D6	チャート	XII	2.88	1.95	0.55	2.1
422	石鏃	E14	黒曜石(巖倉)	-	2.16	1.36	0.33	0.5
423	石鏃	E6	黒曜石(巖倉)	XII	3.09	1.9	0.64	2
424	石鏃	F11	ガラス質安山岩	XI	2.87	1.76	0.44	1
425	石鏃	C10	黒曜石(巖倉)	XI	3.23	1.9	0.48	2.3

第19表 石器計測表(2)

用器番号	型種	出土Ge.	石材	遺構・層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
426	石鏃	H11	黒曜石 (腰巻)	XI	401	1.8	0.47	2.4
427	石鏃	G11	黒曜石 (桑木津留)	XII	258	1.43	0.33	0.83
428	石鏃	D5	ガラス質安山岩	XI	195	1.7	0.34	0.8
429	石鏃	D6	黒曜石 (腰巻)	XI	2	1.64	0.63	1.4
430	石鏃	C4	黒曜石 (船島)	XII	172	1.37	0.34	0.6
431	石鏃	E5	ガラス質安山岩	XII	176	1.22	0.5	0.7
432	石鏃	E16	ガラス質安山岩	XI	194	1.26	0.44	0.8
433	石鏃	D11	ガラス質安山岩	XI	211	1.4	0.55	1
434	石鏃	C7	ガラス質安山岩	XII	225	1.7	0.57	1.4
435	石鏃	E10	ガラス質安山岩	XII	241	1.58	0.52	1.4
436	石鏃	D6	ガラス質安山岩	XI	253	1.98	0.51	1.1
437	石鏃	D6	ガラス質安山岩	XII	3.2	1.6	0.52	1.7
438	石鏃	D6	ガラス質安山岩	XII	3.66	2	0.52	2.6
439	石鏃	F11	黒曜石 (腰巻)	XIII	2.3	1.36	0.61	1.2
440	石鏃	G11	黒曜石 (腰巻)	XI	277	1.51	0.6	1.7
441	石鏃	G12	黒曜石 (桑木津留)	XII	1.86	1.34	0.27	0.4
442	石鏃	E17	チャート	XI	326	1.74	0.31	1.3
443	石鏃未製品	F11	ガラス質安山岩	XIII	1.91	1.3	0.58	1.2
444	石鏃未製品	G11	黒曜石 (腰巻)	XII	215	1.65	0.6	1.52
445	石鏃未製品	E5	黒曜石 (上牛鼻)	XII	298	2.02	0.59	2.7
446	石鏃未製品	G10	黒曜石 (針尾島)	XI	255	2.15	0.83	3.03
447	石鏃未製品	E5	ガラス質安山岩	XI	298	1.83	0.83	3.4
448	石鏃未製品	E10	黒曜石 (腰巻)	XII	265	1.55	0.9	2.5
449	石鏃未製品	F11	黒曜石 (腰巻)	XIII	2.42	1.87	0.55	1.8
450	石鏃未製品	E11	黒曜石 (腰巻)	XIII	236	1.8	0.5	1.5
451	石鏃未製品	D4	ガラス質安山岩	XI	223	1.72	0.56	1.9
452	石鏃未製品	C9	ガラス質安山岩	XII	273	1.98	0.62	1.9
453	石鏃未製品	E5	ガラス質安山岩	XII	2.5	2.04	0.52	2.2
454	石鏃未製品	F11	黒曜石 (針尾島)	XIII	271	1.72	0.53	1.7
455	矢鏃状石鏃	E6	ガラス質安山岩	XII	3.43	2.6	0.89	5.9
456	矢鏃状石鏃	E6	ガラス質安山岩	XII	4.4	2.25	0.83	6.7
457	矢鏃状石鏃	E5	ガラス質安山岩	XII	3.82	2.19	0.75	4.9
458	矢鏃状石鏃	E11	黒曜石 (上牛鼻)	XII	3.12	2.04	1.05	5.3
459	矢鏃状石鏃	C10	黒曜石 (腰巻)	XII	238	1.7	0.72	2
460	矢鏃状石鏃	F11	ホルンフェルス	XII	2.88	2.22	0.69	5.2
461	石鏃	H11	ガラス質安山岩	XII	261	3.03	0.85	4.7
462	石鏃	G11	ガラス質安山岩	XI	2.8	2.21	0.57	2.2
463	石鏃	G10	ガラス質安山岩	XI	3.75	3.57	0.73	6.8
464	石鏃	D4	ガラス質安山岩	XII	4.92	3.7	0.84	11.8
465	石鏃	E6	ガラス質安山岩	XIII	6.12	5.13	1.27	29
466	石鏃	E5	ガラス質安山岩	XII	5.85	2.35	0.5	5.2
467	石鏃	D5	ガラス質安山岩	XI	3.0	2.8	0.9	5.6
468	石鏃	D7	ガラス質安山岩	XI	4.9	3.5	1.3	23.4
469	スクレイパー	G10	ガラス質安山岩	XI	3.8	4.65	1.05	12.8
470	スクレイパー	B9	ガラス質安山岩	XI	2.9	4.3	0.95	9.7
471	スクレイパー	C9	ガラス質安山岩	XII	4.1	3.1	1.2	13.6
472	スクレイパー	C6	ガラス質安山岩	XIII	2.7	3.75	1.25	10.9
473	スクレイパー	D5	ガラス質安山岩	XII	4.2	5.5	1.1	25.0
474	スクレイパー	G10	ガラス質安山岩	XII	6.7	5.6	1.7	46.9
475	スクレイパー	G10	ガラス質安山岩	XII	3.4	6.65	1.9	41.1
476	スクレイパー	D7	ガラス質安山岩	XI	3.55	6.55	1.2	22.6
477	スクレイパー	E5	ガラス質安山岩	XI	2.2	4.5	1.2	30.1
478	スクレイパー	F11	ガラス質安山岩	XIII	5.0	3.1	1.2	9.5
479	スクレイパー	G11	ガラス質安山岩	XI	6.0	2.2	1.2	12.9
480	スクレイパー	D6	ガラス質安山岩	XI	12.4	5.0	1.3	67.7
481	スクレイパー	F11	チャート	XII	2.8	5.0	1.1	12.7
482	スクレイパー (未製品)	E10	チャート	XII	3.7	3.1	1.6	15.1
483	楔形石鏃	E16	ガラス質安山岩	XI	3.6	2.3	1.1	9.1

第20表 石器計測表(3)

図録番号	器種	出土Gr.	石材	遺構・層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
484	磨石石器	D7	ガラス質安山岩	XII	36	24	0.9	7.6
485	磨石石器	E6	ガラス質安山岩	XII	275	205	0.7	43
486	磨石石器	C10	黒曜石 (針尾島)	XI	24	16	0.7	2.9
487	磨石石器	B9・10	黒曜石 (針尾島)	XII	30	21	1.2	7.2
488	磨石石器	C10	黒曜石 (上牛鼻)	XI	30	30	1.1	9.5
489	磨石石器	E11	黒曜石 (針尾島)	XI	1.9	20	0.7	2.7
490	磨石石器	C10	黒曜石 (慶島)	XII	2.2	21	0.5	2.1
491	二次加工潤片	G10	ガラス質安山岩	XI	2.7	3.8	0.6	4.4
492	二次加工潤片	B7	ガラス質安山岩	XII	4.2	34	1.4	17.3
493	二次加工潤片	D6	ガラス質安山岩	XII	5.9	7.3	1.7	60.1
494	二次加工潤片	F11	黒曜石 (慶島)	XII	1.75	2.9	0.6	3.2
495	二次加工潤片	F13	黒曜石 (針尾島)	XII	3.0	2.5	0.7	4.4
496	二次加工潤片	G16	石英	XI	2.5	2.6	1.3	6.7
497	使用痕潤片	C10	ガラス質安山岩	XII	7.4	6.2	1.2	44.5
498	使用痕潤片	G15	黒曜石 (慶島)	XI	2.7	3.7	0.6	3.4
499	石核	G10	ガラス質安山岩	XII	4.7	4.0	1.5	27.4
500	石核	F10	ガラス質安山岩	XI	3.4	3.5	3.1	38.9
501	石核	E14	ガラス質安山岩	XII	4.9	2.55	1.5	24.1
502	石核	C9	ガラス質安山岩	XII	5.1	7.0	2.4	62.1
503	石核	E4	ガラス質安山岩	XII	11.7	14.2	6.2	910.3
504	潤片	D8	ガラス質安山岩	XII	2.35	4.35	4.5	6.0
505	石核	C7	黒曜石 (慶島)	XI	3.4	3.45	2.0	20.3
506	石核	E11	黒曜石 (慶島)	XI	2.5	4.0	1.4	11.3
507	石核	C8	黒曜石 (針尾島)	XI	2.2	4.2	1.6	10.4
508	石核	G11	黒曜石 (針尾島)	XI	3.0	2.7	1.9	7.7
509	石核	C6	黒曜石 (針尾島)	XI	2.6	2.6	1.05	5.8
510	石核	E10	黒曜石 (上牛鼻)	XII	2.9	4.6	1.4	18.4
511	石核	G12	黒曜石 (三輪)	XII	3.5	3.6	1.4	15.7
512	潤片	D4	ガラス質安山岩	XII	4.9	5.4	1.6	41.2
513	磨石石器	F12	ガラス質安山岩	XI	2.49	1.62	0.82	3.0
514	磨石石器	D5	ガラス質安山岩	XI	1.68	1.7	0.49	0.8
515	磨石石器	D6	ガラス質安山岩	XI	3.19	2.32	0.85	5.6
516	磨石石器	F10	ガラス質安山岩	XI	4.23	3.3	0.9	10.1
517	磨石石器	D5	黒曜石 (針尾島)	XI	2.36	1.85	0.72	2.1
518	磨石石器	F11	黒曜石 (針尾島)	XII	2.38	1.72	0.8	2.1
519	磨石石器	D5	黒曜石 (針尾島)	XII	2.3	1.16	0.42	0.7
520	礫石	C4	砂岩	XII	14.55	8.2	3.99	465.6
521	打撃石片	C14	ホルンフェルス	XII	10.6	4.7	1.0	61.7
522	打撃石片	E15	ホルンフェルス	XII	5.1	3.4	0.85	23.7
523	礫石	F12	両輝石安山岩	XII	7.05	6.8	5.2	294.2
524	礫石	D5	溶結凝灰岩	XII	8.6	4.6	4.4	275.0
525	礫石	G10	砂岩	XII	5.5	4.15	3.9	102.9
526	礫石	F11	砂岩	XII	8.1	6.1	3.4	257.0
527	礫石	C3	砂岩	XI	7.2	7.6	3.05	242.1
528	礫石	E6	両輝石安山岩	XII	10.0	8.0	6.5	266.7
529	礫石	D10	両輝石安山岩	XII	4.4	4.5	3.2	96.1
530	磨礫石	E5	砂岩	XII	7.1	4.2	3.1	131.4
531	磨礫石	G11	砂岩	XII	8.7	7.25	4.7	449.9
532	磨礫石	E5	砂岩	XII	8.4	6.8	5.2	464.8
533	磨礫石	H11	砂岩	XI	9.7	7.7	4.4	563.0
534	磨礫石	E10	砂岩	XII	11.25	7.9	4.15	609.0
535	磨礫石	F12	砂岩	XII	10.4	7.4	4.2	524.1
536	磨礫石	G11	砂岩	XII	10.7	9.8	4.3	666.5
537	磨礫石	H12	砂岩	XII	9.9	7.8	3.9	413.9
538	磨礫石	D6	花崗岩	XI	9.3	7.6	3.8	435.8
539	磨礫石	E6	両輝石安山岩	XII	9.5	8.0	4.0	302.5
540	磨礫石	F11	両輝石安山岩	XII	8.6	7.5	6.1	357.8
541	磨礫石	F12	溶結凝灰岩	XII	8.0	8.4	3.9	405.3
542	石皿	F10	砂岩	XII	11.3	7.4	3.4	544.9
543	石皿	F10	砂岩	XII	15.3	13.6	6.7	1700.0
544	石皿	G10	砂岩	XII	18.75	8.4	3.95	999.7

## 第IV章 自然科学分析の結果

### 第1節 放射性炭素年代測定

**試料と方法** 試料は、炭化材 (No.1～5) と土器付着炭化物 (外面: No.6～10) の計10点である。第21表に試料の詳細と前処理・調整法および測定法を示した。なお、No.6は試料の量が少ないためセメント化による微量測定を行った。

**測定結果** 加速器質量分析法 (AMS) によって得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 (<sup>14</sup>C) 年代および暦年代 (較正年代) を算出した (第21表、第88図、第89図参照)。

**所見** 炭化材 (試料番号: No.1～5) と土器付着炭化物 (No.6～10) の計10点について放射性炭素年代測定を行った。その結果、最も古い年代値を示すのはNo.4の8360±30年BP、新しい年代値を示すのはNo.1の1380±20年BPである。

また、No.2・3・5、No.7～10の7点は、年代値が7960±30年BP、970±30年BP、8075±30年BP、7975±30年BP、7985±30年BP、7965±30年BP、8055±30年BPと比較的近い。なお、No.6の年代値は7420±100年BPである。

### 第2節 樹種同定

**試料と方法** 試料は、炭化材4点 (No.1、No.3～5) である。方法は、試料を洗浄して付着した異物を除去、試料を割折して木材の基本的三断面 (横断面: 木口、放射断面: 柃目、接線断面: 板目) を作成、落射顕微鏡 (40～1000倍) で観察し、木材の解剖学的形質や現生標本との対比により樹種を同定した。

**同定結果** シイ属 (No.1)、カヤ (No.3)、クスノキ科 (No.4)、サクラ属 (No.5) が同定された (第22表・第90図)。

**所見** シイ属は、耐朽・保存性がやや低いが建築材や器具などに用いられ、九州では古くから多用されている。カヤは、耐朽・保存性が高く水湿に耐える材で、加工が容易で割裂し易い。表面の仕上がりが良好で光沢が出ることから、現在では碁盤や将棋盤などに利用される。クスノキ科とサクラ属は、耐朽・保存性が高く、概して堅硬な材である。サクラ属は、縄文時代には比較的多く利用され、鉢などの容器や柱材などの報告例がある。

燃料材 (薪炭材) としての利用では、シイ属は、身近に自生する樹木で伐採しても更新が早く、火力が強い性質からよく利用されている。クスノキ科は、割裂は難しいが火持ちが良くきれいに燃えて灰が少ない特徴を持ち重宝される。サクラ属は、火持ちはブナ科に劣るが比較的早く着火するため中薪に利用される。カヤなどの針葉樹は、火付きの良さと瞬発的な火力の強さから焚き付け材として利用される。

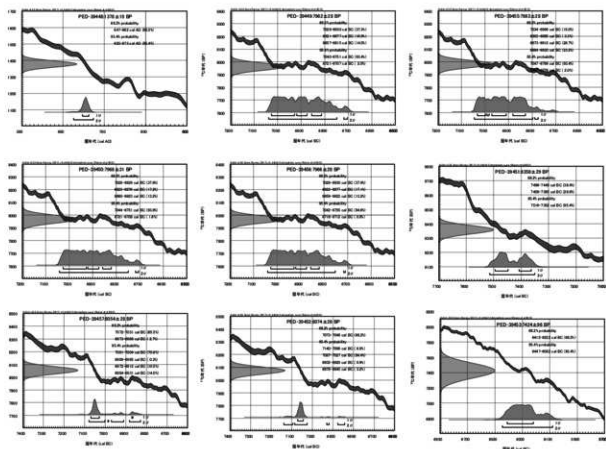
いずれの樹種も、当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能であったと考えられ、これらの多様な樹木が建築材、木製品、燃料材などとして利用されていたと推定される。

### 文献

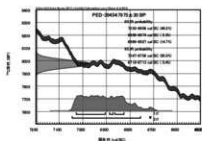
- 島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司 (1985) 木材の構造。文永堂出版、290p。  
中村俊夫 (2003) 放射性炭素年代測定法と暦年代較正。環境考古学マニュアル。同成社、p.301-322。  
Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360. Paula J Reimer et al. (2013) IntCal 13 and Marine 13 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55, p.1869-1887.

第21表 放射性炭素年代測定結果

試料No.	測定番号 PED- (編纂番号)	試料の詳細 (掲載番号)	種類	前処理 測定法	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年校正前 年代 (年BP)	°C年代 (年BP)	暦年代 (校正年代)	
								1 $\sigma$ (68.2%信頼率)	2 $\sigma$ (95.4%信頼率)
								1	39448
2	39449	SC11埋土	炭化物	AAA処理 AMS法	-27.33 ± 0.13	7962 ± 28	7960 ± 30	cal BC 7028 - 6930 (37.3%) cal BC 6921 - 6877 (16.9%) cal BC 6857 - 6815 (14.0%)	cal BC 7060 - 6751 (93.4%) cal BC 6721 - 6707 (2.0%)
3	39450	SC12埋土	炭化物 (玄米)	AAA処理 AMS法	-28.42 ± 0.14	7968 ± 31	7970 ± 30	cal BC 7028 - 6929 (37.8%) cal BC 6923 - 6876 (17.2%) cal BC 6860 - 6823 (13.2%)	cal BC 7044 - 6751 (93.8%) cal BC 6731 - 6718 (1.6%)
4	39451	SA1埋土①	炭化材 (クスノキ科)	AAA処理 AMS法	-24.32 ± 0.18	8308 ± 29	8300 ± 30	cal BC 7196 - 7149 (38.4%) cal BC 7109 - 7365 (29.8%)	cal BC 7516 - 7352 (95.4%)
5	39452	SA1埋土②	炭化材 (サクラ属)	AAA処理 AMS法	-25.26 ± 0.11	8074 ± 28	8075 ± 30	cal BC 7073 - 7046 (68.2%)	cal BC 7140 - 7096 (6.9%) cal BC 7087 - 7027 (84.4%) cal BC 6932 - 6920 (0.9%) cal BC 6878 - 6845 (3.2%)
6	39453	C103Ⅱ-4676 (112)	土器付着炭化物 (外周)	AAA処理 ハニシメント AMS法	-28.20 ± 0.45	7424 ± 96	7420 ± 100	cal BC 6412 - 6222 (68.2%)	cal BC 6447 - 6082 (95.4%)
7	39454	C30Ⅱ-4680 (120)	土器付着炭化物 (外周)	AAA処理 AMS法	-27.36 ± 0.16	7955 ± 30	7975 ± 30	cal BC 7030 - 6906 (48.2%) cal BC 6888 - 6874 (5.3%) cal BC 6866 - 6827 (14.7%)	cal BC 7047 - 6756 (95.0%) cal BC 6738 - 6713 (2.0%)
8	39455	E15Ⅱ-2482 (364)	土器付着炭化物 (外周)	AAA処理 AMS法	-27.11 ± 0.15	7983 ± 28	7985 ± 30	cal BC 7034 - 6999 (15.0%) cal BC 6993 - 6985 (3.3%) cal BC 6973 - 6912 (26.7%) cal BC 6884 - 6830 (23.2%)	cal BC 7047 - 6799 (93.4%) cal BC 6791 - 6776 (2.0%)
9	39456	D7Ⅱ-XII- 2009 (174)	土器付着炭化物 (外周)	AAA処理 AMS法	-25.92 ± 0.15	7966 ± 28	7965 ± 30	cal BC 7028 - 6930 (37.9%) cal BC 6922 - 6877 (17.1%) cal BC 6859 - 6822 (13.2%)	cal BC 7042 - 6755 (94.0%) cal BC 6738 - 6712 (1.8%)
10	39457	F10Ⅱ- (109)	土器付着炭化物 (外周)	AAA処理 AMS法	-25.59 ± 0.18	8054 ± 28	8055 ± 30	cal BC 7072 - 7031 (65.5%) cal BC 6873 - 6868 (2.7%)	cal BC 7081 - 7004 (70.6%) cal BC 6969 - 6955 (3.5%) cal BC 6972 - 6912 (10.5%) cal BC 6884 - 6831 (14.0%)



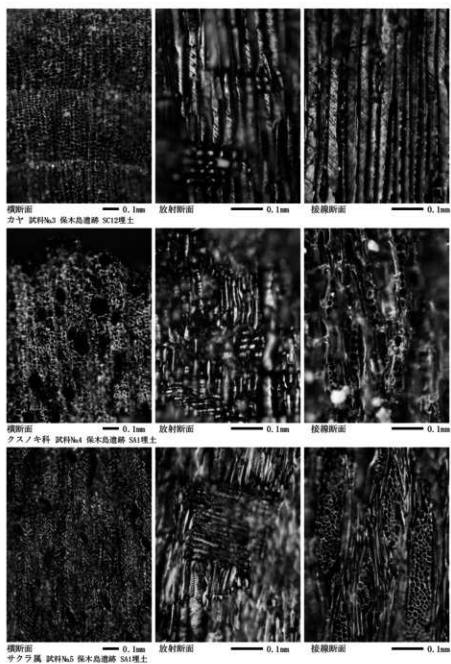
第88図 暦年校正結果 (1)



第89図 暦年較正結果 (2)

第22表 炭化材の樹種同定結果

試料No.	遺跡名	採取箇所	結果(学名/和名)	
1	保木島	SC 2埋土	<i>Castanopsis</i>	シイ属
3	保木島	SC12埋土	<i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.	カヤ
4	保木島	SA 1埋土(床面)	Lauraceae	クスノキ科
5	保木島	SA 1埋土	<i>Prunus</i>	サクラ属



第90図 保木島遺跡の炭化材断面

### 第3節 蛍光X線分析

#### (1) 赤色物質の成分分析

**目的** 保木島遺跡の縄文時代早期の土器には赤色物質の付着するものが複数検出されており、蛍光X線による成分分析を実施した。

縄文時代の考古遺物に付着する赤色顔料は一般に、鉄成分由来のベンガラが知られている。このため、赤色物質に鉄成分が濃集することや鉛や水銀など鉄以外の赤色を呈する元素の有無の確認を行った。

**測定方法** 測定機器は宮崎県工業技術センターのHORIBAのX線分析顕微鏡XGT-7200である。本装置は、土器片を直接試料台に載せて非破壊で分析を行うことが可能であり、ターゲットである赤色物質を100 $\mu$ m(0.1mm)範囲で狙い分析を行った。X線の測定条件はXGT径100 $\mu$ m(0.1mm)、X線管電圧50kV、電流1000mA、プローブ内真空、収集時間100秒である。

**対象試料** 赤色物質の付着が見られる縄文土器深鉢の口縁部(報告書番号281)を測定した。この土器は、本報告書中では第V類土器に分類されており、縄文地文に縦横に刺突列点のある貼付突帯と突帯の縦横交点にボタン状突起のある、いわゆる妙見(天道ヶ尾)式土器である。

赤色物質は、縦横の貼付突帯の間の凹部やボタン状突起の孔内に付着していた。機器の特性上、凹部での測定は困難である。土器破断面にわずかに照射装置を近づけることができる部位があり測定した。

また、比較資料として赤色物質の付着のない第V類土器、いわゆる妙見(天道ヶ尾)式土器の底部(報告書番号252)の胎土部分の成分分析もおこなった。この土器は、直径6.4cmの円形の上げ底部に白色の物質が付着していたものである。

**分析結果** 分析結果を表で示す。表の数値は酸化化物での質量濃度%である。表では比較資料の土器にも鉄成分が含まれることが見て取れるが、赤色物質では、4倍程度の質量濃度%を示し、X線強度では、鉄成分が顕著に強い。鉛、水銀などの成分は検出されなかった。したがって、赤色物質はベンガラと考えられる。

第23表 成分分析の比較  
※数値は質量濃度%

	赤色付着	赤色なし
報告書番号	281	252
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	22.42	27.44
SiO <sub>2</sub>	38.46	58.86
K <sub>2</sub> O	0.58	2.11
CaO	0.73	1.57
TiO <sub>2</sub>	0.62	1.40
MnO <sub>2</sub>	0.33	0.00
<b>Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub></b>	<b>36.65</b>	<b>8.56</b>
SrO	0.07	0.06
ZrO <sub>2</sub>	0.15	0.00

#### (2) ガラス質安山岩の産地推定

**目的** 保木島遺跡の縄文時代早期相当の層準(XI層~XIII層)からは剥片、碎片を含めて総数1532点の石器が出土している。このうち、ガラス質安山岩製の石器は、737点であり、点数割合は48.1%と顕著なボリュームを示している。また、検出した石鏃57点のうち25点がガラス質安山岩である。近隣遺跡の石鏃の石材構成は、黒曜石製主体であり、少数のガラス質安山岩製やチャート製などをふくむことが一般的である。

このほか、保木島遺跡のガラス質安山岩製石器は、多様な器種と剥片、碎片を含んでおり、遺跡内では、この石材を主たる加工材料に選択していたことを示している。九州内のガラス質安山岩産地としては佐賀県多久市と大分県姫島村の2カ所が主要産地として知られている。

保木島遺跡の石器群の破断面や風化面の珪晶等の岩石組織を双眼実体顕微鏡で観察した結果、佐賀県多久市の鬼ノ鼻山から天ヶ瀬ダム一帯に産出するガラス質安山岩の特徴を有する一群ではないかと判断した。



今回は、顕微鏡観察による同定の検証のため、サンプリング的に蛍光X線分析を行い、多久産と姫島産の複数のガラス質安山岩試料と比較することでクロスチェックを実施した。

**測定方法** 測定機器は宮崎県工業技術センターのHORIBAのX線分析顕微鏡XGT-7200である。本装置は、直接試料台上載せて非破壊で分析を行うことが可能である。X線の測定条件はXGT径100μm(0.1mm)、X線管電圧50kV、電流1000mA、プローブ内真空、収集時間100秒である。主要成分のK、Mn、Feおよび微量元素Rb、Sr、Y、Zrについては選択的に測定した。

**対象試料** 遺跡出土のガラス質安山岩には風化面を含んだものがあった。これらは九州各地のガラス質安山岩の特徴を比較する1つのポイントとして活用できた。石継や石匙等の加工製品では風化面は除去されており、表面組織の比較から同じ一群と判断することとなった。

そこで、顕微鏡観察から佐賀県多久産ガラス質安山岩と考えた石匙2点の成分分析を実施した。比較試料として佐賀県多久市と大分県姫島村で採集した複数のガラス質安山岩を測定した。このうち1点は多久市天ヶ瀬ダム付近のガラス質安山岩の白色の風化面を測定し、黒色の岩石組織と風化した岩石組織での成分変化を調べた。

**分析結果** 分析結果を第24表に示す。数値はX線強度(cps/mA)である。測定した元素のうち、K、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zrの7元素のX線強度から下記①～④のパラメーターを算出した。

$$\textcircled{1} \text{Sr分率} = (\text{Sr強度} \times 100) \div (\text{Rb強度} + \text{Sr強度} + \text{Y強度} + \text{Zr強度})$$

$$\textcircled{2} \text{Log}(\text{Fe強度} \div \text{K強度})$$

$$\textcircled{3} \text{Rb分率} = (\text{Rb強度} \times 100) \div (\text{Rb強度} + \text{Sr強度} + \text{Y強度} + \text{Zr強度})$$

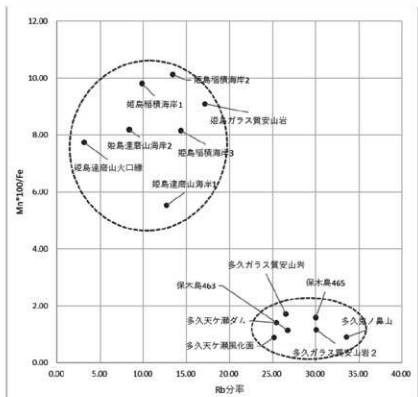
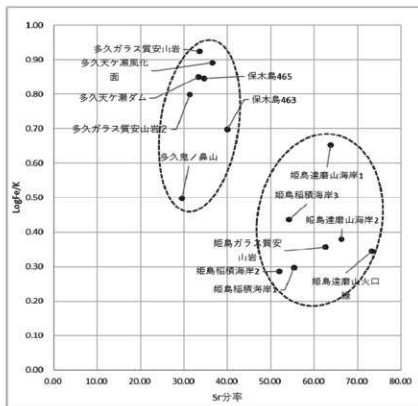
$$\textcircled{4} (\text{Mn強度} \times 100) \div \text{Fe強度}$$

第91図は、それぞれの試料のデータを①、②による散布図(左: Sr分率図)と③、④による散布図(右: Rb分率図)にプロットしたダイアグラムである。このダイアグラムは望月明彦氏の開発した手法に基づいている(望月1997)。

第24表 ガラス質安山岩の成分分析結果

※ 数値はX線強度(cps/mA)

	K	Mn	Fe	Rb	Sr	Y	Zr	Sr分率	LogFe/K	Rb分率	Mn*100/Fe
保木島465	115.42	12.86	808.72	6.74	7.79	0.66	7.28	34.67	0.85	30.00	1.59
保木島463	102.22	5.77	509.47	5.89	8.79	0.52	6.81	39.94	0.70	26.76	1.13
多久ガラス質安山岩	115.24	16.62	968.17	7.36	9.30	0.95	10.12	33.54	0.92	26.54	1.72
多久ガラス質安山岩2	93.34	6.80	587.47	7.14	7.45	0.90	8.28	31.34	0.80	30.04	1.16
多久天ヶ瀬ダム	110.63	11.00	783.38	7.19	9.44	1.43	10.24	33.36	0.85	25.41	1.40
多久鬼ノ鼻山	126.29	3.60	397.12	9.56	8.40	1.07	9.48	29.46	0.50	33.53	0.91
多久天ヶ瀬風化面	85.60	5.93	666.17	7.54	10.94	0.67	10.81	36.52	0.89	25.17	0.89
姫島ガラス質安山岩	80.68	16.69	183.55	3.59	13.12	0.03	4.22	62.60	0.36	17.13	9.09
姫島達磨山海岸1	79.34	19.74	356.76	4.82	24.25	0.50	8.44	63.80	0.65	12.68	5.53
姫島達磨山海岸2	89.56	17.56	214.37	3.38	26.67	1.62	8.60	66.23	0.38	8.39	8.19
姫島達磨山火口縁	63.32	10.84	139.96	1.21	28.24	0.69	8.40	73.27	0.34	3.14	7.75
姫島稲積海岸1	81.15	15.76	160.64	2.91	16.41	1.70	8.62	55.36	0.30	9.82	9.81
姫島稲積海岸2	81.49	15.96	157.55	3.06	11.82	0.95	6.96	51.86	0.29	13.43	10.13
姫島稲積海岸3	61.25	13.68	167.55	3.29	12.44	2.00	5.22	54.20	0.44	14.34	8.16



第91図 ガラス質安山岩のSr・Rb分布率の散布図

ダイアグラムでは、Sr分率図、Rb分率図ともに、佐賀県多久産と大分県姫島村産のガラス質安山岩のデータが一定の数値の中に収まる傾向があり、グループとして示されることが見て取れる。また、多久産ガラス質安山岩で実施した白色の風化部分と黒色の破断面のデータも同一のエリアに収束している。

保木島遺跡の石匙2点（報告書番号463・465）のデータは、いずれも多久産ガラス質安山岩のエリアにプロットされており、顕微鏡観察による肉眼同定の結果を補完する結果となった。

#### 文献

望月明彦1997「蛍光X線分析による中部・関東地方の黒曜石産地の判別」『X線分析の進歩』28 アグネ技術センター

## 第V章 総括

当遺跡では、今回の発掘調査において縄文時代から中世にかけての遺構や遺物が数多く確認された。本章では、調査結果を踏まえ、各時代の遺構や遺物をもとにそれぞれの時代の様相について若干の考察を加えることで総括としたい。

### 第1節 縄文時代早期の遺構と遺物

#### a) 遺構

縄文時代早期の遺構は竪穴建物跡(SA)1軒、集石遺構(SI)12基、土坑(SC)8基(陥し穴状遺構1基を含む)が検出された。SC10・SC11は袋状であることから貯蔵穴の可能性がある。SC12については、その平面形や底部近くに焼土が確認されることなどから炉穴の一部とも考えられる。SC7は陥し穴状遺構として報告した。

整理作業において各遺構間の時期的な関係性を把握するために放射性炭素年代測定を行ったが、その結果は、SC11(7960±BP)、SC12(7960±)、SA1(8075±BP・8360±BP)であった。分布状況が近い位置関係にあることも含めるとそう大きな時期的な隔たりはなさそうである。加えて遺構出土の縄文土器や遺物包含層(XI～XIII層)の主体となる土器も第V類土器である(第2表)。従って、縄文時代早期後葉頃に竪穴建物跡や土坑群などによる集落形成と歩を一にして遺物包含層の堆積も進んだものと考えられる。ただし、検出された遺構群と遺物包含層の土器量とはあまりに不釣り合いであるので、調査区内で削平を受けた高所部分や調査区外の緩やかな傾斜地などにも集落が展開していた可能性は高いと考えられる。

なお、陥し穴状遺構の時期については、埋土にXII層(桜島11テフラ)を含むので、桜島11テフラ降灰後以降と考えられる。

#### b) 遺物

**縄文土器とその位置付け** 遺構および遺物包含層(XI～XIII層)出土の縄文土器について、第三章では第I類～第X類土器に区分した。このうち、第I類土器(88)は岩本式土器(新東2008)、第II類土器(89～91)は前平式土器(新東2008)、第III類土器(92～95)は押型土器、第IX類土器は平楕I式(368～376など)および平楕II式(381～384)土器(高橋1997)、第X類土器(390～392)は、塞ノ神I式古段階(高橋1997)にあたる。第III類土器(押型土器)は、小破片ながらも施文部位(口縁部内面に楕円文)や方向(横方向の山形文)から山下大輔氏の第2～第3段階(山下2014)に位置づけられる。

さて、第IV類土器の深鉢は、縄文地文で緩く屈曲する口縁部を持つのが大きな特徴のひとつである。吉本正典氏は、宮崎市白々野第2・3遺跡における出土土器の整理検討のなかで、「C類」の深鉢(本書の第IV類)が「B類」(本書の第III類)と併行関係にあると論じた(吉本2002)。すなわち、手向山式土器と「C類」の存在が妙見式土器成立の契機となったと理解される。ただし、今回の調査では手向山式土器(横手1998 a・b)そのものが出土していないことから、第IV類土器は第V類土器とは部分的な併行関係にあると考えられる。

第V類土器の深鉢は、横位突帯貼付と縄文地文の一貫性を特徴とするもので、「平楕式前段階」(吉本1994a・b)および「妙見式土器」(岩永1995・吉本1998)を包摂し、「天道ヶ尾・妙見式土器」(八木澤2008)、「II類土器」(立神2018a・b)の一部に相当する。これまでの土器編年研究(吉本1998、八木澤2008、立神2018など)の観点から、第V類土器は手向山式土器と平楕式土器の間にある土器型式の一つとみて、ひとまず大

過ないものと考えられる。

第Ⅵ類土器の深鉢は、無文地で突帯や沈線文等の装飾がないものである。その位置付けは難しいが、ひとまず、同じ無文地である第Ⅶ類土器とパラレルな関係にあるものとしておく。この第Ⅶ類土器の深鉢は、第Ⅴ類土器とは地文の違いのみで、器形や施文方法は共通していることから、連動的な関係と考えられる。

第Ⅷ類土器は、基本的に第Ⅴ・Ⅵ類土器の器形や施文方法を踏襲するものであるが、口縁端部が肥厚し、端部が外方に突出する一群である。これは白ヶ野第2・第3遺跡の「D2類」(吉本2002)や「Ⅲ-2類」(立神2018a)、すわわち「平格式古段階」(立神2018a)の一部に相当する。ただし、その口縁端部は肥厚化するにせよ断面三角形ではないこと、第Ⅸ類土器は、断面三角形や幅広く肥厚する口縁端部を持つ、典型的な平格式土器であることから、第Ⅷ類土器は、平格式土器出現期にあたる土器群としておきたい。

このように、今回の調査区から出土した縄文時代早期の土器群は、現行の編年観から縄文時代早期前葉でも前半段階(第Ⅰ～Ⅱ類土器)、中葉(第Ⅲ類土器)、後葉(第Ⅳ～Ⅹ類土器)に大きく区分される。ただし、これらの土器群は、削平区域を挟み込んだ谷部や斜面地を中心に出土しており(第33図)、遠く離れたグリッド間で接合する場合や、複数の層位間で接合するが多い。さらに、第Ⅰ～Ⅹ類土器は同一層準にて混在して出土するなど、遺物包含層としては極めて不安定な堆積であったといえる。

**第Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ類土器の変遷** 先に検討した第Ⅳ～Ⅶ類土器は、文様や器面調整において類似または共通する部分が多く、特に第Ⅴ類土器は遺構出土土器であり遺物包含層出土土器の大半も占める。そこで、第Ⅴ類土器の変遷の過程を検討を軸にして、今回の調査における縄文時代早期後葉土器の総括としたい。

今回の調査区は傾斜面上の遺物包含層堆積であるため、層位別出土土器にみる型式組列の厳密性や、これら先行研究との比較検討も難しい状況である。ただし、前述のように「妙見式土器」を含む第Ⅴ類土器を、手向山式土器と平格式土器の間に位置づけることは、土器編年研究的には大きな矛盾ではないようである。

そこで、手向山式土器→第Ⅴ類土器(妙見式土器を含む)→平格式土器の型式順とした場合、横位突帯を有し縄文地文とする深鉢や壺の型式的変化の方向性を、①沈線文は頸部～胴部のみ→②口縁部の突帯間に沈線文→③口縁部～胴部全面に沈線文→④沈線文の全面施文+口縁端部の肥厚化・断面三角形状へと仮定したうえで、遺構埋土中の炭化物(材)ならびに土器に付着した炭化物の放射性炭素年代測定結果(SA1・SC11・12、掲載番号109・118・139・174・364)を踏まえて、第Ⅴ類土器を時間軸上に予察的に位置付けた。すなわち、大きく3つの段階(画期)に区分し、1～3段階はa・bの小画期に細分したそのうえで、前後関係も含めて第Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ類土器の変遷を関連づけた(第92図)。

**手向山式土器期**…第Ⅴ類土器の出現直前の土器とした。今回の調査では出土していない。近隣遺跡の参考例として鹿児島県志布志市稲荷追遺跡(鹿児島2012)がある。

**第1段階**…手向山土器最終末の次段階にあたり、保木島遺跡における第Ⅴ類土器の出現期とした。深鉢は、縄文地文で、口縁部には横位数条の(刻目)突帯が均等の間隔で貼付され、頸部以下には縦位の(刻目)突帯や幾何学状の突帯、沈線文にて文様帯が構成されるものである。1-a段階は、隆起線文状の突帯を持つものを含め、1-b段階は横位突帯間が無文化するもの、突帯文の省略形(平行沈線文間に短沈線、刺突列点文)が出始めるものとした。壺は縄文地のままと、突帯にて加飾するものがある。なお、第Ⅳ類・第Ⅶ類土器はこの段階には存在したのと考えられる。SA1・SC11およびその出土遺物や、109(試料番号No10)の時

期にあたる。

**第2段階**…第V類土器の深鉢は、口縁部中位の横位突帯が省略されて、広い文様上の空白帯が生じ、その部分に沈線文が充填されるという、口縁部の文様帯に変化が起きる段階とした。口縁部中位に文様の空白帯が生じるものを2-a段階、口縁部の横位突帯間に沈線文が入り、胴部の文様帯は貼付突帯の施文が少なくなる一群を型式的に後続するものとして2-b段階としたが、2-a段階と2-b段階の深鉢は同時併存である可能性も捨てきれない。2-b段階以降、縄文は粗くナデ消されるものや、縄文そのものが粗い施文が多くなる。SC12およびその出土土器、139(試料番号No7)の時期にあたる。第V類土器と文様構成的に対応する第Ⅶ類土器の存在は不明瞭である。

**第3段階**…第V類土器の深鉢は、口縁部全体にも沈線文が施文される段階とした。口縁部の横位突帯そのものの条数も少なくなり、縦位突帯も貼付されないものが多くなる。横位突帯が口縁部側面に集約されるタイプ(口縁部が短く屈曲する)もこの段階とした。壺は第2・第3段階とも変化の様相は明確には把握できないが、深鉢の文様変化と同調するものとするならば、口縁部の文様帯は、突帯あり→突帯+沈線文という変化が予測される。118・174(試料番号No6・9)の時期にあたる。第V類土器と文様の対応関係にあるとみられる第Ⅶ類土器は量的に多くなるようである。

**平格式土器(古段階)期**…第V類土器から平格式土器(第Ⅷ類土器)への交代期とした。第Ⅶ類土器は第V類土器の第3段階のものに類似しているが、口縁部部の肥厚化という平格式土器に通じる特徴を有することを以って画期とした。壺は、口縁部が肥厚するタイプを位置づけた。364(試料番号No8)の時期にあたる。

さて、第V類土器について、これまで提唱されてきた土器型式との対応関係を改めて整理するならば、第1～第2-a段階は「妙見式土器」全面縄文、口縁部～頸部に突帯、頸部以下に沈線文や列点文を施すもの(吉本1998)、第2-b～第3段階は、「天道ヶ尾・妙見式土器」(八木澤2008)や「Ⅱ類土器」(立神1998a)の一部にあたる。すなわち、第V類土器は前半期の「妙見段階」(第1～2-a段階)と後半期の「保木島段階」(第2-b～第3段階)に大きく二分されるものと読み替えることもできよう。

**耳栓(耳栓状土製品)** 遺物包含層中より、耳栓が7個体分出土した。輪状または滑車状耳栓と呼称されるものである。縄文時代早期の耳栓は、過去の集成データ(藤木2005・南の縄文調査室2016)に保木島遺跡例を含めると、宮崎県側(8遺跡24点)・鹿児島県側(16遺跡43点)となる。直径に対して器高の低いタイプであり、宮崎平野部(宮崎市上猪ノ原遺跡第1地区、下猪ノ原遺跡第2地区など)の出土品と比べて扁平なものが多く、直径は7cm台に加えて大きめの9cm台があることも特徴的である。こうした耳栓は、縄文早期後半、土器型式上では平格式～塞ノ神式土器に伴うとされている。本遺跡の場合は、第V類土器・第Ⅶ・Ⅷ類土器(平格式土器)・第Ⅸ類土器(塞ノ神式土器)などの分布域や出土層と重なっているが、386・390・391は第V類土器のみが平面的に分布する遺物包含層からの出土であること、縄文時代早期土器の主体は第V類土器であることから、本遺跡出土の耳栓の多くは第V類土器に伴うものと考えておきたい。

耳栓の存在は、喜界カルデラの大爆発以前に成熟した文化の存在を示す(新東2009)とされており、本遺跡出土の耳栓も花咲く縄文文化の一端を示しているものと考えられるが、縄文時代早期の遺跡数に比べてその出土遺跡数や出土量点数は決して多くなく、遺跡ごとの出土点数にも多寡がある。装着方法(使用形態)も含め、今後とも検討を深めていく必要がある。

**石器とその組成** 遺構および遺物包含層(XI～XIII層)出土の石器の器種や組成についての概要は第3章、第3節の第3表に掲載した。これら石器の時期は出土量の最も多い第V類土器(第2表)とするならば縄文時代早期後葉と考えられる。

これら石器石材に着目すると、ガラス質安山岩を石材とした石器が総数1532点の中で約半数近くの737点出土していることが特筆される(第75図)。石鏃をはじめ多種多様の器種に加工されているが、X線分析の結果、佐賀県の多久産由来のものであることが判明している(第IV章第3節参照)。このことから、保木島遺跡と多久を結ぶルートが構築されていたと考えられる。その他にも腰岳産、針尾島産の黒曜石の利用が多いことが特徴として挙げられる(第76図・第3表)。多久、腰岳、針尾島は隣接した地域であり、縄文時代早期に保木島遺跡と西北九州(多久・腰岳・針尾島)との石材の流通があったことが確かめられた。

早期後半段階の都城盆地周辺の遺跡に目を向けると、鹿児島県国分市の上野原遺跡(早期後半)において、ガラス質安山岩(黒色安山岩)の出土割合が高いことや、それらが佐賀県多久産、長崎県針尾島産であることが報告されている(八木澤2004)。他に鹿児島県志布志市高吉B遺跡や曾於郡大崎町の天神段遺跡などでも西北九州産の石材が多用されている。加えて、石材利用に着目している馬籠亮道氏によると、早期前半に南九州系黒曜石を初めとする在地系の石材利用から、早期後半に西北九州系黒曜石や安山岩の比率が高まることを指摘している。その背景には土器文化圏の拡大があるとされている(馬籠1999)。そうした動きに連動して、保木島遺跡の形成が進んだものと考えられる。

## 第2節 縄文時代中期～後期の遺構

縄文時代中期～後期の遺構として陥し穴状遺構が1基検出された。埋土の状況から掘り込み面はⅥ層ないしⅦ層であり、霧島御池軽石降灰後の比較的新しい時期と考えられる。遺物を伴っていないため、正確な時期確定は困難なため、層位から見て縄文時代中期～後期前葉とした。一方で、遺跡周辺近隣の梅北佐土原遺跡や上高遺跡では、円形プランの陥し穴状遺構が縄文時代前期～中期の所産として報告されている例もあり、本遺跡で出土が確認された指宿式土器よりも古い時代である縄文時代中期後半に遡る可能性も否定できない。

## 第3節 縄文時代後期～晩期の遺構と遺物

縄文時代の後期～晩期の遺構としては、土坑が1基検出されたのみであるが、遺物は、指宿式・鳥居原～御領式・中岳Ⅱ式・入佐式・黒川式などの土器や石器などの出土が確認された。遺物の出土状況から考えると、検出されなかった竪穴住居跡などは、調査区内の削平範囲もしくは周辺調査区外に存在した可能性が高いと推測される。

保木島遺跡近隣の周辺の遺跡に目を向けると、嫁坂遺跡(中岳Ⅱ式・入佐式・鳥居原式・御領式・黒川式)、上高遺跡(指宿式・中岳Ⅱ式・入佐式・黒川式)、大浦遺跡(中岳Ⅱ式・黒川式)においても同様の形式の土器が出土していることから、何らかの関係性があったことが垣間見える。都城盆地全体を見渡してみると、霧島御池軽石降灰以降、活動の範囲が都城盆地全体へと一気に広がるとされている(都城市教委2015)。都城盆地南縁部にあたる保木島遺跡においても、同様の活動の広がりが認められたことが大きな成果である。



## 第4節 古代～中世の遺構と遺物

### a) 遺構

古代～中世の遺構としては、掘立柱建物跡(SB)4棟、土坑(SC)8基、道路状遺構(SG)2条が検出された。掘立柱建物跡の時期は、その推定に必要な遺物に乏しいが、柱穴埋土に桜島3(文明)軽石(Sz-3)を含まず、柱穴を掘り込む遺物包含層(Ⅲ・Ⅳ層)の出土遺物は、後述のように概ね9～13世紀中葉頃までの時期幅に収まり、特に白磁碗は11世紀後葉～12世紀代中葉前後であることから、ひとまず12世紀～13世紀代としておきたい。仮に、中世期の掘立柱建物跡とするならば、都城盆地における中世期掘立柱建物跡としては、一般的な規模となる(外山・原田2004)。また、これらの掘立柱建物跡は、現在の県道109号線に面した位置で検出されたが、この県道は近世期における都城と志布志を結ぶ「梅北往還」(黒田2012)に沿う路線であることから、幹線路に面した集落という性格を想定することも可能である。

土坑については、その埋土は主に黒褐色土と暗褐色土であり、掘立柱建物跡柱穴の埋土と類似していること、SC14の出土遺物から鑑みると、掘立柱建物跡と同時または近接した時期の関係にあると推定される。ただし、2号土坑(SC2)については、埋土中出土の炭化物の放射性炭素年代測定結果から、古墳時代終末期に遡る可能性がある。溝状遺構や道路状遺構についても、その検出状況や埋土の堆積状況から桜島文明軽石(Sz-3)降下以前に掘削されたものであるが、より詳細な時期推定は難しい。

### b) 遺物

遺物包含層(Ⅲ・Ⅳ層)からは、土師器壺・坏や黒色土器壺、白磁碗類などが出土した。このうち、掲載番号1～13は、9～10世紀代(近沢2020)、14～16は12世紀前葉頃(近沢2020)、17は12世紀末～13世紀中葉頃(柴畑2004)、18・19は9世紀後葉～10世紀代(近沢2020)に位置づけられる。20～23は、第三章第2節にて触れたように11世紀後葉～12世紀代にあたる。

なお、火打石(67)は原位置を保っていないが、中世期と考えられる遺物である。仮に遺物包含層出土の遺物と伴うものとするならば、その時期は12～13世紀代となる。

## 第5節 結語

今回の発掘調査において、縄文時代早期から中世までの人々の生活の痕跡を断続的に確認することができた。特に、押型土器の最終末の手向山式土器と平椀式土器とを編年的に結びわゆる「妙見式土器」がまとまって出土した例は少なく、この時期の都城地域の様相を考える上で、意義深いと考える。

今後、周辺地域の発掘調査や研究が進められる中で、人々の暮らしの実相や交流等が明らかになることを期待したい。

最後に、今回の発掘調査から報告書作成にあたり、多くの方々に御協力いただいたことに深く感謝の意を表し結びとする。

## 引用・参考文献

### 論文など

- 赤崎 宏志2020「縄文土器の底部に付着する白色物質」『宮崎県埋蔵文化財センター 研究紀要』5 宮崎県埋蔵文化財センター  
岩永哲夫1995「宮崎県の早期土器」『旧石器から縄文へ』鹿児島県考古学会・宮崎考古学会 合同研究大会資料 鹿児島県考古学会・宮崎考古学会



- 金丸武司2006「第三章 土器型式の設定」『本野原遺跡』3宮崎市文化財調査報告書(田野町文化財調査報告書53)宮崎市教育委員会
- 金丸武司2018「宮崎県内の平格式・塞ノ神式土器の様相」『九州の縄文時代早期後葉の文化－平格式・塞ノ神式併行の土器を中心に－』発表要旨 九州縄文研究会
- 川口雅之 黒木梨絵 立神倫史2020「鹿児島県における縄文土器の年代・土器付着炭化物放射性炭素年代測定値から」『縄文の森から』12 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 九州縄文研究会2000「九州の縄文住居」第10回九州縄文研究会福岡大会資料集
- 九州縄文研究会2008「九州の縄文住居Ⅱ」第18回九州縄文研究会熊本大会資料集
- 柴畑光博1989「中岳Ⅱ式土器の再検討－東南部九州におけるある縄文土器の型式組列－」『鹿児島考古』23 鹿児島県考古学会
- 柴畑光博2004「都城盆地における中世土器の編年に関する研究」(1)『宮崎考古』19 宮崎考古学会
- 柴畑光博2015「貝殻円筒形土器群のC14年代と較正暦年代」『貝殻文と押型文』宮崎考古学会県南例会実行委員会
- 古泉弘1983「江戸を掘る」
- 新東晃一2008「早期南九州貝殻文系土器」『総覧 縄文土器』株式会社アム・プロモーション
- 新東晃一2009「南九州の初期縄文時代を考える」『鹿児島県の縄文時代早期土器』南九州縄文通信第20号刊行記念講演
- 高橋信武1997「平格式と塞ノ神式土器の編年」『先史学・考古学論究』Ⅱ 竜田考古会
- 立神倫史2018 a「平格式・塞ノ神式土器研究の現状と課題－九州南部の事例を中心に－」『九州の縄文時代早期後葉の文化－平格式・塞ノ神式併行の土器を中心に－』発表要旨 九州縄文研究会
- 立神倫史2018 b「大隅地方中部における縄文時代早期後葉の土器様相に関する一考察-天神段遺跡出土資料を中心に-」『鹿児島考古』48 鹿児島県考古学会
- 近沢恒典2020「都城盆地における古代土器編年について」『大正大学考古学論集』大正大学考古学論集刊行会
- 堂込秀人1997「南九州縄文晩期土器の再検討－入佐式と黒川式の細分－」『鹿児島考古』31 鹿児島県考古学会
- 外山隆之・原田重紀子2004「都城市における中世掘立柱建物跡の類型化」『宮崎考古』19 宮崎考古学会
- 日高広人・柳田裕三2003「宮崎県の集石遺構と竇穴」『九州縄文時代の集石遺構と竇穴』第13回九州縄文研究会 宮崎大会資料集
- 藤木品子2005「宮崎県の縄文時代装身具」『九州の縄文時代装身具』第15回九州縄文研究会沖繩大会発表要旨 九州縄文研究会
- 松尾有年2004「宮崎県のおとし穴状遺構について」『九州における縄文時代のおとし穴状遺構』発表要旨 九州縄文研究会
- 馬鹿島達1999「南九州縄文時代早期の土器文化圏と石礫石材の選択傾向」『南九州縄文通信』13
- 南の縄文研究室2016「鹿児島県内の耳栓状土製品集成」『縄文の森から』9 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 宮地総一郎2008「黒色磨研土器」『総覧 縄文土器』株式会社アム・プロモーション
- 八木澤一郎1998「平格式土器様式の再検討」『九州縄文土器編年の諸問題－早期後半土器編年の現状と課題－』九州縄文研究会
- 八木澤一郎2001「第Ⅳ章第8節②小結」『上野原遺跡』第10地点(鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書)28 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 八木澤一郎2004「上野原遺跡第10地点における石材選択について」『縄文の森から』2 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 八木澤一郎2008「平格式・塞ノ神式土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
- 山下大輔2012「都城盆地の奈良・平安時代の遺跡概観」『国指定10周年記念シンポジウム 大島島田遺跡の時代を語る－島津庄成立以前の都城盆地の動向－』都城市教育委員会
- 山下大輔2014「宮崎の押型土器」『宮崎県央地域の考古資料に関する編年の研究』平成26年度宮崎考古学会研究会資料 宮崎考古学会
- 山本信夫編2000「大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－」『太宰府市の文化財』49 太宰府市教育委員会
- 横澤志2018「平格式・塞ノ神式土器一系統編年の現状」『九州の縄文時代早期後葉の文化－平格式・塞ノ神式併行の土器を中心に－』発表要旨 九州縄文研究会
- 横手浩二郎1998 a「押型土器様式最末期の様相－九州手向山式土器の再検討－」『古文化誌』41 古文化研究会
- 横手浩二郎1998 b「手向山式土器の細分と編年試案－」『九州の押型土器－論攷編－』九州縄文研究会
- 吉本正典1994 a「第6節 まとめ」『妙見遺跡』(九州縦貫自動車道(人吉～えびの間)建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書)2 宮崎県教育委員会

吉本正典1994b「宮崎県えびの市妙見遺跡において認識された縄文時代早期の一土器型式について」『考古学ジャーナル』378 ニューサイエンス社

吉本正典1998「妙見式土器の検討」『九州縄文土器編年の諸問題－早期後半土器編年の現状と課題－』発表要旨 九州縄文研究会  
吉本正典2002「第Ⅲ章 第2節 土器」『白々野第2・第3遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター 発掘調査報告書52 宮崎県埋蔵文化財センター

## 発掘調査報告書など

- 鹿児島県立埋蔵文化財センター2012「稲荷迫遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』169  
鹿児島県立埋蔵文化財センター2014「高吉B遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』180  
熊本県教育委員会1990「天道ヶ尾遺跡（Ⅱ）」『熊本県文化財調査報告』111  
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財センター2018「天神段遺跡3」『公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財センター発掘調査報告書』18  
田野町教育委員会2001「元野河内遺跡」『田野町文化財調査報告書』39  
都城市史編さん委員会2006「都城市史」資料編 考古 都城市  
都城市教育委員会2007「梅北佐土原遺跡」『都城市文化財調査報告書』76  
都城市教育委員会2015「おどろくべき！九州の縄文文化」  
都城市教育委員会2018「松原地区遺跡（第7次調査）」『都城市文化財調査報告書』133  
宮崎県教育委員会1994「妙見遺跡」『九州縦貫自動車道（人吉～えびの間）建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』2  
宮崎県埋蔵文化財センター2000「石葛ヶ追遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』21  
宮崎県埋蔵文化財センター2011「梅北針谷遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』204  
宮崎県埋蔵文化財センター2016「中床丸遺跡（第一次・二次）」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』239  
宮崎県埋蔵文化財センター2016「笹ヶ崎遺跡第一次～第三次調査」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』240  
宮崎県埋蔵文化財センター2018「高橋遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』243  
宮崎県埋蔵文化財センター2019「塚坂遺跡Ⅱ」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』249  
宮崎県埋蔵文化財センター2020「大浦遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』253  
宮崎県埋蔵文化財センター2020「上高遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』254  
宮崎県教育委員会2018「清武上猪ノ原遺跡第5地区」『宮崎県埋蔵文化財調査報告書』111